HOLY QNIGHT

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HOLY QNIGHT

【Nコード】

N1454J

【作者名】

AKIRA

【あらすじ】

とある街で探偵事務所を営む『退魔士』水華月 夏美。そこに助手として雇われた『退魔士』成瀬 湧樹。そして『一般人』の桜井 凜と『妖精』シャルル・リシエ。
四人は出会い、そして物語が紡がれていく…。

この小説はMercurius先生の作品から私が生んだ『A + share world』です。

SILENT NIGHT - シズカナハジマリ - (前書き)

この小説はMercurius先生の『A++』のファンフィクション
ヨン(二次創作)です。

先生の様には書けないと思いますが、遅いながらしっかりと書いてい
こうと思います。

SILENT NIGHT - シズカナハジマリ -

何度この夢を見ただろうか。

雪の降る中、私は一人立っていた。

目の前を降る雪はスローモーションのように見え、生き物のようにフワフワと空中を漂い、ただただ地面に積もっていく。

その積もっていく先には、目を瞑り微笑んでいる女性が倒れていた。

女性の頭から流れる血が、積もった白い雪を深い赤に染めていく。

夥おびただしい血が流れる頭のそばに私は膝を着き、顔を見つめた。

「…お姉、…ちゃん？」

私の頬を流れ落ちる涙が重力に従い、私が姉と呼ぶ女性に降り注ぐ。

だが、顔に落ちてくる水滴に姉は何も反応を示さない。

それは12月の悲しき『SILENT NIGHT』。

SILENT NIGHT - シズカナハジマリ - (後書き)

短!

そんな声が聞こえてくる気がします…。

次は頑張るよ?…きつと。

序曲『理由』 1 (前書き)

動き始める物語。

なんてね。

「ツミさん、夏美さん。起きてください」

ドアの向こうから聞こえる声。その声に私は眠りから覚める。ベッドから体を起こし、伸びをしてドアに向かい開く。

「おはようございます。と言ってももう昼つすけどね」

声の主、私の探偵事務所です。助手として雇った成瀬が立っていた。女性では高い方の私と同じくらいの背で、髪は背の辺りまであり首の辺りで結んである。服装はエプロンをしている事以外は、いかにも若者らしい服装をしている。

「ごめんなさいね、成瀬君。私朝は弱くて」

「いや、いいつすよ。それよりごはん食べますか？」

成瀬の後についていくと、寝室を出た辺りからいい香りがしていた元がテーブルにあった。テーブルに置いてあるのはハムエッグに味噌汁、そして白いごはん。

簡単な朝ごはんではあるが、男である成瀬が用意してもらったのにはいつも驚かされる。

テーブルに着き二人は手を合わせ、ご飯を食べ始めた。

「成瀬君、ホントすごいね。お味噌汁もおいしいし。いいお嫁さんになるよ」

「仕事柄一人暮らしとか多いですから。ってお嫁さんっすか。貰い

手はつかないぞうつすけど」

「フフフ。そうね」

他愛も無い会話をしながらご飯を済ませ、成瀬は後片づけを。私は自室に戻り、スーツに着替え、ご飯を食べていた部屋を抜けて階段に向かい下に降りていく。

そこは事務所になっていて、私の仕事場となっている。いつもの窓に背を向けた自分の席に着き、机においてあるいくつもの新聞に目を通した。一面を飾るのはニュースでもやるようなありふれた事件や政治情勢。だが私にはそれらには関心は無い。

一つをとり、中を開きある記事に目を着ける。それはニュースでは取り上げないような『ベタ記事』なんて言われるモノ。そこにはあまり世間的に関心を持たれないような事件なんかが多い。

『若者三人 車の下敷きに』

そんな小さな見出しと少ない文章。普通の人なら見逃すような記事だが読んでみると不思議でしょうがない。

「車にカギは無かった…」

本来動くはずの無いその車が、人を『轢く』わけでもなく、上に『乗っかる』なんてありえない。こんなに不思議な事件なのに人目を避けるようにこんなベタ記事となっているなんて。

「…」

しばらく思案していると、上から成瀬が降りてきた。かけていたエプロンは外され、ごく普通の若者の姿になっている。成瀬は新聞を見つめる私の方に寄ってきた。

「何か気になるものでもありましたか？」

「ん？ ええ、コレ」

新聞を成瀬に向けて記事を指差す。新聞を受け取った成瀬は記事を見つめ、全文を読み終えると私に顔を向けた。

「コレってもしかして俺たち向けの事件っすかね？」

「多分ね。いくらかの目星が付いてれば、『事件』とか『事故』なんて言葉がついてるはずだし」

新聞を綴じ、背もたれに寄りかかり天井を見上げる。この手の職業の者はここでタバコでも銜えて一服するような所だが、私は元来タバコなんて吸わない。

それを見た成瀬は、すぐに部屋の隅に置いてあるコーヒーマーカ―を使い、二杯作ったコーヒ―を持って私の机に片方を置いていく。どうぞ、という言葉と共に。

「あ、そうだ。案件が出てないか見ときますね。その現場近いですし、その手の事件だったらこの辺に依頼が出てるでしょうし」

「うん。お願いね」

わかりました、と言つと早速自分の机に座り、自分のミニPCを
使いはじめた。

「あとは理由、か」

物事にはちゃんとした理由がある。

食べることにはお腹がすいたから。

飲むことは喉が渴くから。

笑うのは楽しいから。

泣くのは悲しいから。

そして、

「人を殺すのには…」

その時調べていた成瀬がこちらに声をかける。

「あ、夏見さん、やっぱりありましたよ。あんな風にベタ記事にし
たのは事件を事件として取り扱ってるっていうカモフラージュみた
いっすね。まあ近くでそんな事が起こった事を知ってる人だってい
るでしょうし」

「やっぱり。何事にも理由はある」

脈絡も無い返事に成瀬はキョトンとする。しばらくなんで成瀬が
そんな顔をしているのか分からなかったが、自分の返事がおかしか
った事に気付く。一つ咳をして成瀬に向き直った。

「ごめんね。考え事してたから。じゃあその案件受けましようか？」

了解です、と言って成瀬は承諾の文書を作成し始めた。それを見て私は自分のノートPCを取り出す。

「私も調べ物調べ物」

淹れてくれたコーヒーを口に含み、立上がった画面と向かい合った。

序曲『理由』 1 (後書き)

バトルの気配はまだまだか。

序曲『理由』 2

俺はこの二ヶ月この事務所で世話になっている。きっかけは案件の案内で見つけた一つ。

『事務所開設に付き助手急募 報酬金要相談 住み込み可』

簡潔でありにも危険性を感じさせない案件であった。調べてみるとその地区は比較的重要案件は少なく、ランク的に自分に楽な案件でもあった。しかも、

「住み込み可、か」

いろんな地区に行ったりして何日も滞在する案件もあったりする。その所々でホテルに泊まり金をかけてしまい、割に合わなかったりする。そんな中で雇ってもらい、その上住み込みもオツケーなんてこちらとしては至れり尽くせりだ。

それに…

俺は迷いもせず承諾のメールを送った。

夏美さんの運転する車に乗って、俺は窓の外を眺めていた。流れていく街の景色はどこか幻想的で、自分がこの世界にいるのかと思

うと不思議でしようがない。

東京に近く、比較的拓けているこの街は、夜になっても暗くならない。ファーストフード店やファミレスなどと言った遅くまでやっているお店が多いため、そこらじゅうに光が溢れていた。

「夜だつて言うのになんでこんなに明るいんすかね？」

隣の運転席でハンドルを握る夏美さんに話しかけた。運転するその夏美さんはスーツを着こなし、髪はショートカット。女性にしては高身長、おまけにモデル並みの体系とあつて、見る人が見れば大企業の社長秘書と言つた所で、凛々しく格好いい。

話しかけられた夏美さんは、んゝそうねゝ、と言つてメガネを直しながら応えた。

「きつと怖いよ。夜、まあ闇と言つた方が良いかな。暗い闇つて人にとっては絶望や恐怖を連想させるの。だから人は火や電気を使つて光を得ていたんだと思うわ。例えば、小さいころつて夜トイレに行くのが怖かつたりしなかつた？」

確かに。

幼稚園の頃だつたか、夜中にトイレに行きたくなつて起きた時、静かな暗闇の中を歩いていくのが怖かつた。

この廊下の角に何かいるんじゃないか、後ろから何か追ってくるんじゃないかつて不安だつた。

今でもあまり暗い所は好きじゃない。いや、好きになるなんて無いと思うが。

「そうつすね。そして人は光を得て安心を得た。でもそれが悪い方にもつながつた」

「…そうね。光が強くなれば闇も濃くなる。闇が濃くなればまた光を求める。きつとその繰り返し」

「闇は魔を呼び、光の強さと比例して力を増す。結局強い魔を作り上げるのは俺たち人間なんすね」

うん、と頷く夏美さんはどこか寂しげな表情をしていた。

「ま、その始末をつける為に俺たち『退魔士』がいるんすよね」

少し雰囲気が悪くなりそうな気がしてなんとなく言った言葉だった。夏美さんは表情を変えた。

「フフ。『正義の味方』って所かしら？」

夏美さんは微笑を浮かべながらそんな事を言うものだから、笑ってしまった。夏美さんは柄にも無いことを言ったせいか、俺に笑われたせいか、少し顔を赤くしていた。

「も、もうすぐ着くわ。準備できてる？」

「じゃあ頑張りますか。正義の味方として」

そんな俺の言葉に夏美さんは、もう、と言って頬が膨らむ。

視線をフロントガラスの方に向ける。目的地まではもうすぐだ。

「あなたが助手希望の？」

ソファーに腰掛け向かい合う私の前には、笑顔の少年がいた。前に出した私の依頼を見てやってきたそうだ。

この街に事務所を設立する際、一応探偵という名目で出そうとしたら、テナントのオーナーに、

『探偵事務所って言うのにアンタ一人かい？ 普通一人二人事務員がいるもんじゃないか。ましてや女性一人なんて』

確かに。

事務所というのに私一人というのは言われてみれば変かもしれない。それにもしも普通に探偵の依頼なんか来た時、私一人で対応できないかもしれない。

『一応募集して決まり次第本営業なんで大丈夫だと思います』

とっさにそう言ってしまう、一応テナントのOKは貰えたが、あまり気乗りはしなかった。

だが言ってしまった以上誰も雇わずいるのも変に思われるので募集かけたのだが…。

そして来たのは学生の格好をした少年。なんだかなめきっている様にも見える。

私は渡された書類に目を向ける。目の前の少年の履歴書のような

ものだ。

~~~~~  
氏名 成瀬 湧樹（男性）

年齢 15歳

退魔士歴 実戦経験4年（6歳からの修行を含め10年）

退魔士ランク B

~~~~~

私は感心した。

修行を6歳からやっていて、しかもこの歳で記号なしのBランクまでいくなんて。外見を見る限りじゃそんな柄にも見えないが、視線を少年の手に向けると、それを物語る傷跡がみえる。

資料をテーブルに置いて顔に視線を向け、私は成瀬と言う少年に話しかけた。

「今年の春に高校生なの？」

「はい。なんで本格的に働けるのはもう少し先っすね」

変な若者言葉を使い、返答してくる成瀬。少年は出しておいた缶のコーヒーに口を付ける。

私も本格的に始めるとしたら寒い冬に始めるより、区切りのいい四月あたりを予定していた。

「じゃああと聞いておくけど、この案件を受けた理由は？」

「案件内容に『住み込み可』って書いてあったじゃないっすか。それっすかね。ホテル代とか馬鹿にならないし」

頭を掻きながら応える成瀬。でも腑に落ちない。

案件によつては宿泊代やその他諸々出してくれるものもある。彼は記号なしのBランク。彼のランクならば探せば見つかるだろう。メガネを直しながら成瀬を見つめる。

「他に理由あるんじゃないの？ 住み込みにこだわるのに」

「それは…」

今まで見せていた笑顔が曇る。言つべきか困っているのだろうか。

「まあいいわ。それは追々話してもらつことにして」

「すみません」

私は成瀬に、いいのよ、と言う。そして顎に手を添えて成瀬に問う。

「でもあと一っ」

「はい？」

不思議そうな顔をして私を見る成瀬。私は微笑む。

「成瀬君、コーヒーは入れられる？」

序曲『理由』 2 (後書き)

一応戦いに持っていきたいのですが…。

きつと次話あたりで…。

車を止め、外に出ると初春で冷える空気が肌にはりつくようだった。

「もう寒いのも終わって欲しいっすよね。暦じゃ春だっていうのに
テーピングを巻いた両手を息で暖める成瀬。私も、そうね、と言
いながらトランクから銀のアタッシユケースを二つ取り出す。成瀬
も自分の武器である鞭を持つ。

「じゃ、行きましょうか？」

「うっす」

私たちは準備を整えると、依頼の場所に向かう。
夜の闇も濃くなってきた人の気配のしないビルの谷間。
二人の退魔士が歩いていく。

そろそろ面接も終わりに差し掛かり、滞りなく終われそうなので
俺も安心した。

「そっだ。あなたの実力も見たいからちよっと付き合って？」

不意に依頼主の水華月みかづき 夏美なつみがそんな事を言ってきた。
俺を見る彼女の態度は微笑を浮かべながら挑発しているようだった。

「別に良いですよ。俺もランクだけで判断して欲しくないし」

俺は舐められるのは好きじゃない。

自分でも判っているが、自分は少し世間を知らない。この職業には恵まれた家庭に生まれ、力をつけるのにも苦労をしなかった。

だが努力をしなかった訳じゃない。俺の家系は名を知られるような名家ではないが、一応俺でも家督として『成瀬』の名を背負っている。柄じゃないが恥じないようにやってきたつもりだ。それを舐められたらいい気分じゃない。

俺はグイッと体を前に出して受けて立つ姿勢をとった。

「そう？ それじゃあ早速やってみる？ このテナント屋上もあるの。そこでね」

そう言っただけで彼女は立ち上がると、こっちよ、と俺を上を招く。後に続いて階段を上って行くと、そこは腰より少し高い手すりに囲まれている、広さとしてはボクシングのリングよりいくらか広い感じの広さだった。手合わせをするくらいなら十分だろう。

彼女は案内した後、一度中に戻っていった。見送ると俺は手荷物から自分の武器である鞭を取り出した。縄状の鞭で、所謂『牛追い鞭』という物。手で持つ所は鋼鉄で出来ていて、縄は実家の神社で結われている処女の髪の毛や耐刃繊維が編み込まれて出来ている。

彼女は、良い武器ね、なんて言いながら戻って来て、足元に二つアタッシュケースを置く。

「？ 早く準備してくださいよ」

「あ、いいわよ。あなたがそれ程の相手であれば、武器を使うわ」

こちらを見つめ微笑む彼女は、アタツシユケースから武器を取り出す様子が無い。少しイラツとして鞭を叩きつける。

俺にもプライドはある。それを踏みにじられたようだった。それでも彼女は余裕だと言うように立っている。

「…じゃあ、行きますよ」

不意打ちに近いような初撃。開始の合図もなく繰り出した上から降りかかるような鞭での打撃だったが、そこに彼女の姿は無く、アタツシユケースの間に鞭を打ちつけただけだった。

角の方に彼女を見つめる。彼女は腕を組んで立っていた。かなり余裕そうな顔をしている。

「もう。いきなり攻撃してくるなんて。びっくりしたじゃない」

「む。言いますね。難無く避けたくせに」

と言いながら連続で攻撃を仕掛けていく。横薙ぎに放つ鞭を飛びかわされる。それを見て鞭をすばやく引き戻し、彼女に向け突くような直線的な一撃を放つ。

その一撃は、空中で『死に体』になっている彼女に向かっていく。これなら避けられないと思った。

だが、それも不発に終わった。彼女は体を強引に捻り、足でその攻撃を蹴り払う。そのまま床に両手両足を着き着地する。

「ふう。危ない危ない。油断はしてなかったんだけどね」

なんて笑って言いながらこちらを見る。その仕草は、

「…猫」

予想がつかないかわされ方。普通の人間ならきつとあんなかわし方は出来ないだろう。

だが今相手にしているのは……

「やっぱりA+は違うんすね」

目の前にいるのは今の自分よりずっと上の存在。ランクA+、水華月夏美。

彼女は立ち上がり、すばやく元居た場所に戻るとアタツシユケ―スを手取る。

「じゃあそろそろコッチの番ね」

メガネの奥の彼女の眼が怪しく微笑む。俺は迎え撃つため態勢を整えた。

しばらく歩いていくと標識に寄りかかって鼻歌を歌っている制服姿の少女がいた。

その歌声を聞こえる者は私たち以外に居ない。こちらに気付いた少女は標識から体を離すと、こちらに話しかけてきた。

「こんばんは。わたしが、ワカルの？」

それは簡潔な問い。私はその問いに問い返す。

「それはどういう意味？ あなたの存在が？ それともあなたが『善』か、『悪』か？」

「さあ？ 私にもわからない。何が良くて、何が悪いかも…」

少女は私の問いに答える。

でも問いに対しての答えがおかしい。私自身問いに対して問いで答えるというテストでバツになる事をしたのだ。人の事を言えた立場ではない。

少女はブツブツと独り言を喋っている。

「…結構重症ね。成瀬君」

「…そうっすね」

私たちは少女を見ながら話す。

そしてしばらくすると異変が現れてきた。それを見て私たちは戦闘態勢をとる。

少女の周りにある物が空中に浮かび上がり、少女の上空を旋回している。

「そつだ。あなた達を殺せば何かわかるかな？」

こちらを見る少女の眼は狂気に染まる。私はそんな少女を見つめていた。

少女は、いけ、と言って人差し指をこちらに向けると、空中を旋回するゴミ箱やコンクリートのブロックが私たちめがけて向かって

きた。

序曲『理由』 3 (後書き)

やっところさバトる。

きつとチヨイてんぱる。俺。

序曲『理由』 4

私と成瀬は降り注ぐ攻撃をよける。成瀬は一步早くだが。

「やっぱり成瀬君は早いわね」

「夏美さんだつて十分よけきれてるじゃないっすか」

私自身もしつかり攻撃をよけはしたが、成瀬のように戦いにおいても相手の攻撃をいち早くよけ、すぐに戦闘態勢に入れる者は、いつでも戦いにおいて有利な状況に回れる利点がありいいと思う。

攻撃が止み、二人並んだ私たちは自分たちの武器を握りなおし少女を見つめた。

「じゃあコッチの番ね？」

成瀬に言つと、彼は頷く。

私と成瀬は少女に向かい駆けていく。

俺の攻撃を回避した彼女は反撃をしてきた。

「それ！」

迫ってくる彼女は手に持ったアタッシュケースを地にこすり付ける。

火花が上がり、直後アタツシユケースが炎を纏い、下から俺に襲い掛かってくる。

「んな、無茶苦茶な」

後ろに飛びのき回避する。だが彼女はもう一歩踏み込み、もう一つのアタツシユケースを上から振り下ろしてくる。

俺は鞭の持ち手の両端を両手で持ち受け止める。ガン、と言う音と共に受け止めたそれは、女性とは思えないような重い一撃。手が痺れる。

「意外に丈夫ね。今の受け止められるなんて」

「様子見の攻撃なんて朝飯前つすよ」

頼もしいわね、なんて言う彼女。俺も強がって言うてみせたが、結構いっぱいっばいだ。このままこの先何度も攻撃を回避するのは不可能だ。

そう、このままじゃ・・・

「じゃあ・・・」

一気に彼女との間合いを取り、集中する。

「先読ひなみよみ」

そう言っただけ俺は彼女を見据える。

彼女は俺に向かい攻撃を仕掛けてくる。横薙ぎに襲い掛かってきた攻撃を紙一重でかわす。

もう一撃来たが、それもギリギリでかわし、がら空きになった体

へ回し蹴りを繰り出す。だがそれは彼女にしゃがんでかわされた。彼女はアタツシユケースを置き、俺に殴りかかる。だが――

「わかってますよ。それも」

そんな事を言いながら、それも難なくかわし、素早く後ろに間合いをとった。

それを見て彼女は置いたアタツシユケースを持ち、俺を見つめる。

「中々厄介な能力を持っているのね。相手の攻撃の手が見えるなんて」

「ありがとうございます」

「でもあんなに無駄なくよけられるなんて。成瀬君の戦法はギリギリでよけて反撃の機会を窺^{うかが}う、みたいな所かしら」

ドンピシャで戦闘スタイルを読む彼女。そしてアタツシユケースを握りなおし構えた。

「でもそれなのに一旦距離を取ったって事は……」

そこまで言うとな彼女は俺に向かってきた。俺もすぐに構えなおし向かってくる彼女を見据える。

アタツシユケースで殴りかかって来たが、それをスウエーでよける。次のバックブロー気味にきた攻撃をしゃがんでよける。そしてその回転のままアタツシユケースで足払いを狙ってきたので、ジャンプして避ける。

だが、そこまで来てやっと彼女の狙いがわかった。初めに俺が仕掛けた攻撃と同じ、相手を死に体にする事が目的だったのだ。

「やっぱり。その能力には制限があるのね」

彼女の声で我に返り、前を見ると目の前いっぱい銀の壁。

アタツシケースが俺の顔面に打ち込まれたのだ。さすがに彼女のようなよけ方は俺には出来ない。殴られた俺は勢いのまま床を転がる。

加減してくれたのだろう。痛かったが、気を失うまでは行かなかった。

「やられたらやり返さなくちゃ気が済まない性質たちなの。ごめんなさい。痛かった？」

俺は、大丈夫です、と言うと、治癒を開始し、顔の腫れがひいていく。

水行が長けていて、男のイメージとしては合わないが治癒は得意だ。自分では気に入ってるが…。

「攻撃の手が見えるのは良い事だわ。でも見える事で何も考えないのはいけない事。

攻撃一手一手に意図があるんだから。理由無く手なんか出さないでしょ？」

ましてすべての手が見えるならいいけど、あなたは3手ぐらいしか見えない。尚更そこは気を付けないと。あと……」

手合わせが終わり、彼女は早速俺の戦い方の注意をし始めた。俺は自然と正座になり俯いていた。

しばらく話し続けると、ふと気付いたのか、一つ咳をし苦笑いを浮かべた。

「あ、ごめんなさい。つい話し込んでしまって」

「いえ。上のランクの方直々に教えていただけて嬉しいです。はい」

それなりに自信はあっただけに少し悔しい。

俺が落ち込んでると、彼女は微笑みながら近づいてきて、頭を撫でてきた。

その撫でる手は暖かく、励ましてくれているようだった。

「落ち込めるって事は良い事だね。また上を目指せるんだから。何も無いまま上にいったって何も得られない、私はそう思うの。」

それにあなたはきつともっと強くなる。保証するわ」

「…ありがとうございます」

撫でられたのが恥ずかしいのか、強くなるなんて言われたのが嬉しいのか、やけに顔が熱くなる。

そして彼女は手を引きしやがみ、手を差し出す。

「腕も気構えも申し分無し。これからよろしくね？ 成瀬君」

「はい。よろしく願います。えっと…」

差し出された手を握ろうと思ったが、彼女をどう呼べばいいか判らず手を止める。

思案していた俺を見て、彼女が俺の手を取る。

「夏美でいいわ。苗字は慣れないし、言いつらいと思うから」

「あ、はい。えっと、夏美さん。よろしく願います」

握手をする俺と夏美さん。

冬の寒空の下、俺のこの事務所での仕事が始まった。

「じゃ、中でコーヒー飲もうか？」

「そうですね。俺が入れますよ」

お願いね、と言って中に入っていく夏美さん。後に続き俺も入っていく。

まずはコーヒーを入れることからか。

少女に向かっていくと、成瀬は鞭を繰り出す。

「先手必勝！」

「え、きゃー！」

その攻撃は彼女に一直線に向かっていくが、避けられてしまう。いや、避けられたのではなく、反射的にしゃがんで難を逃れられただけだった。

うづくまる少女は手で顔を覆い、指の間からこちらを見た。その眼は狂気に染まり、私たちを殺したいと言っているようだ。

「ナンデ？私はナニもマチガッタ事なんてシテナイ」

「…そうね。あなたはただ仕返しただけですものね」

少女は私の返事に反応する。成瀬もその言葉に驚きを隠せない。私は少女に歩み寄っていく。少女は身構えているが様子を見ている。成瀬もその様子を鞭を構えながら見守っていた。

「椎名 莢、ちゃんでしょ？ あなた」

名前を呼ばれ、少女はピクリと体を硬直させていた。私は近づきながら続ける。

「あなたは事件の被害者の中の一人、琴浦 霧緒の彼女だった」

「……て…」

私の言葉を聞いて下を向きつばやく少女。私はまた近づいていく。

「事件のあった前日、あなたは自殺した」

「…めて…」

私の言葉に肩を震わせ、言葉を切ろうとする少女。表情は下を向いていて読み取れない

私は尚も続け、近づいていく。

「その前日あなたは彼に呼び出される。そして…」

「やめて…」

怒気を含むつぶやき。近づいていた私は足を止めた。

少女との距離は2m弱。

私はメガネを直しながら最後の言葉を言う。

「彼を含む3人に……」

「やめてって言うてるでしょ!」

その怒声と共に、少女の近くにあった多数の石が、銃弾のように私に襲い掛かってきた。

序曲『理由』 4 (後書き)

時間軸が行ったり来たりすいません。

次あたり序曲終了です。

私がパソコンで調べ物をしていると、一つの記事に眼が止まった。

『行方不明の女子高生 自殺遺体で発見』

事件のあった日に出た記事だった。死亡推定日は事件のあった前日で、投身による自殺だったという。

遺体には性的暴行と肉体的暴行両方の痕があり、遺書などは無かったがそれらを理由に自殺したのではないか、と書かれていた。読み進めていくと、その女子高生は死亡推定日の前の日の夕方から行方不明だったらしく、捜索していた警察が遺体で発見したらしい。

「事件の被害者とその少女。繋がりがあれば…」

私は早速知り合いの情報屋に頼み、この女子高生と被害者の三人を調べてもらうことにした。

二時間も掛からずに資料がメールで送られてきた。調べてもらった結果は……

「当たりか…」

送られてきた資料を見ると、被害者三人と少女の名前や年齢はもちろん、家族構成や出身校、そして交遊関係までも書かれていた。その交遊関係を見ると、被害者の一人と少女は付き合っていた、との事だ。

偶然にしては出来すぎている。きっとこの案件にこの少女が絡んでいる。

私はパソコンの画面から眼を離し、天井を見上げ、呟く。

「これはこの子の仕返し…。理由は正当かもしれない…」

暴行を受け、捨て去られ、恨みに満ちた少女は悪霊となり、案件の被害者二人に報復。

私の推測ではあるが、きつとこの線で合っているだろう。

私は悲しかった。

一番の理由、それは被害者三人が暴行を行っおこなたという事じゃなく、少女が悪霊となったことでもない。

それは……

飛んできた多数の石を、夏美さんは両手に持ったアタツシユケースで振り払った。何度も鈍い金属音がして、すべての石が払われた。

「成瀬君、今回は私に任せてくれる？」

そう言つと俺の返事も聞かず、少女に向かっていく。

「こないで…」

少女はすぐに夏美さんに次の攻撃を開始した。

コンクリートのブロックや看板が夏美さんに襲い掛かるが、それを難なく避けたり、アタツシユケースで振り払ったりして攻撃を回

避した。

そして夏美さんは少女に徐々に近づいていき、攻撃が一旦止んだのを見計らって一気に距離を詰めた。

「じゅめん…」

小さく言った言葉と同時に手に持ったアタツシユケースで、少女のお腹を殴りつけた。少女は悲鳴を上げ、地面を転がっていく。

少女は地面に手を付きながら苦しそうに咳き込む。そんな少女を見て、夏美さんはアタツシユケースを置き、いまだ禍々しい気を放つ少女に近づいていく。

その行動に驚き、俺は近寄ろうとしたが、夏美さんに手で制される。仕方なく事の成行きを見守ることにした。

夏美さんは少女の前に立ち話しかけた。

「なんでこんな事したの？」

「何よ！ あの人許せなかった！ ただそれだけよ！ わるい…」

言い終わる前に少女の頬に平手打ちをする夏美さん。

俺は突然の行動に啞然とする。少女は叩かれた頬を手で覆い、ピツクリした顔で夏美さんを見た。

「そうじゃない！ 仕返しなんて人間なら誰でもしてしまっわ。そんな事に私は何も言わない。でも…」

夏美さんの少女を叩いた手が小さく震えていた。

さっきまでの怒気が無くなり、声に悲しみの色が含まれていった。

「辛かったら誰かに助けたって言えば良かったじゃない。自分で死ぬ事なんて無かったじゃない」

「…」

何も言わない少女。すると少女に満ちていた禍々（まがまが）しい気が薄れていく。

夏美さんは続けた。

「生きていればなんだって出来たのに…」

夏美さんは真っ直ぐな眼差しで少女を見つめる。

少女の目から涙がこぼれる。

そして少しずつ涙の量が増えていき、彼女は顔を手で覆い泣き出した。

「でも、辛かったわよね？」

やさしく夏美さんは少女に語りかける。少女は泣きながら応えるように頷いた。

まだしっかりと泣き止まない少女だったが、ゆっくりと話し始めた。

「私、霧緒さんが好きだった。彼は内気な私を好きになってくれた。一緒に居てくれるだけで嬉しかった。

でも彼は違った。彼は私に体を要求してきたけど、それはイヤと断ると何も言わずに私を連れ出して…」

そして仲間と落ち合い、少女を無理やり…。

それはどんなに辛かっただろう。自分を好いてくれた、自分が信

じていた相手からの酷い仕打ち。

助けを求めても止まない暴行は、体より精神を傷つけると聞いたことがある。きっと俺なんかには分からないかもしれない傷を負ったのだろう。

「気付いたら私は屋上に居た。心が空っぽになったようで、そこから飛び降りる事が当たり前のように感じて……」

そこまで言うともた泣き出した。静かな夜に小さな嗚咽が響く。堰を切ったように止め処なく流れる涙は地面を濡らすように落ちていく。だが霊となった彼女の涙は、地面を濡らすことは出来ない。その事実が、見てる俺としては胸が苦しい。

「……ごめんね。無責任なこと言っちゃって」

悲しい顔をする夏美さん。自分の言葉が正論だとしても、少女の話聞き、胸が痛んだのだろう。

だがその言葉に少女は首を振る。

「……いえ、私こそ。人を殺してしまうなんて……。同じような……。ものですよね……」

「うつん。あなたのした事は間違ってたかもしれない。でもあなたの起こした事に私たちには何も言う権利はないわ」

その言葉を聞き、少女は夏美さんに抱きつき泣いた。それを夏美さんは優しく受け止め頭を撫でる。

すると少女は少しづつ足の方から実体を無くしていく。滅すると言うより成仏と言う方が正しいだろう。

上半身だけとなった少女は体を離し、涙を浮かべながら笑った。

「…一つ、…伝えてください」

「何？」

少女の願いを夏美さんは聞く。少女が消えるまで胸まで迫っていた。

「お父さんとお母さんに、ごめんなさいと…。あと、ありがとうと…」

「わかった」

夏美さんの返事を聞くと顔だけになった少女は、夏美さんと俺に涙で笑顔を送り、光の粒となって消えていく。

俺たちは光の粒が空に向かって行くのを、ただ黙って見守っていた。

帰りの車中、俺と夏美さんは無言だった。

見送った後の夏美さんの顔は、ただ無言でいる夏美さんは、とても悲しそうな顔をしていた。なぜあんな顔をしていたのかわからないが、話しかける雰囲気ではなかった。

だがしばらく走っていると、沈黙を破ったのは夏美さんだった。

「ごめんなさい。私、つい感情的になっちゃって」

「あ、いえ。でも良かったじゃないですか。仕事はちゃんとしたんですから」

すぐに車内は静かな空間に戻った。
でもその沈黙も夏美さんが破った。

「成瀬君。退魔の仕事って相手を倒すっただけじゃないと、私は思うの」

「…」

夏美さんの言葉に黙ってしまふ。

俺は仕事でいつも何も考えずに対象の相手を倒してきた。その中には今日の少女のように悪霊となった霊もいた。

その時、俺は夏美さんのように相手の事を思った事など一度もなかった。

何の理由も無く悪霊になる訳ないのに…。

「私のやり方を押し付けるわけじゃないけど、こんなやり方もある。それを憶えておいて」

「…ありがとうございます」

それを聞くと夏美さんは笑顔になった。

俺は窓の外に眼を向けた。

外には街路樹の桜が。桜の枝には今にも咲きそうなつぼみが。

「…ら、か…」

この時、外を見ていた俺は夏美さんの呟きに気付かなかった。

三月も終わりに差し掛かった夜だった。

私は少女のつぶやきを思い出していた。

「気付いたら、か…」

考えすぎなら良いと思いながら、もしかしたらっという思いが強くなる。

もうすぐ春なのにやけに寒い。

三月も終わりに差し掛かった夜だった。

序曲『理由』了

序曲『理由』 5 (後書き)

序曲で5話って…。

まあ文少ない分許してください(笑

感想の方お待ちしてます。

今後もよろしく願います。

く間奏曲く

春の陽気のいい陽射しが差し込む日。何事もなくただ事務所でのんびりと過ごす俺と夏美さん。

夏美さんは案件の提出資料の作成、俺はすることもなく、持っていた小説を読んでいた。本来、そういう仕事は一応雇われた助手である俺の仕事なのだが、やりましようか？、と俺が言つと夏美さんはそれを断り、居てくれればいい、と言つ。

しばらくして一息ついた夏美さんが俺の方を見て不思議そうな顔をする。

「あれ？ そついえば成瀬君…」

「はい？」

お気に入りの小説を読んでいた俺は、しおりを挟み視線を本から夏美さんに向けた。

「…学校は？」

確かに夏美さんの疑問は的を得てる。もう四月というのに俺は学校にも行かず、事務所でのんびりしている。普通の人が見ればおかしい。

俺は手を口に置きプツと嘔いてしまった。別段おかしい所がなかったはずなのに、笑っている俺を見て夏美さんは頭に『？』を浮かべるばかり。

「すみません。えーっと、俺学校行かないんすよ」

「え！」

俺の言葉に驚く夏美さん。そのはずだ。

一応ここに入る時、俺は学校に行くと言ってあったのだから。

「いいの？ この仕事のせいなら気にしないで行きなさい。やめてもいいんだから……」

本気で心配そうな顔をして言ってきた。

その顔を見てまた笑ってしまう俺。夏美さんはもう訳がわからない様子だ。

俺は立ち上がり自室に戻っていく。住み込み可というだけあって俺の部屋まである。なんともありがたい事だ。

そして2・3枚資料を持っていく。その一枚を夏美さんに見せた。それは……

「通信科？」

それは高校の入学案内。それには『通信科』と書かれている。

「今は家に居ながら高校に入学できるんすよ。家庭の事情とか個人の事情とかに対応できるようにするってのが目的みたいですけど」

まあ根底には入学者を一人でも多く取り上げたいってのがあるんだろう。学校も金儲けの時代。不況だからしょうがなくもあるんだが。

夏美さんはやっと納得したようでホッと一息つく。

「もう。早く言ってくれば良いのに」

「すみません」

拗ねたように言ってくる夏美さん。俺も微笑みながら謝る。お詫びの印に俺は夏美さんにコーヒーを入れることにした。

「まあ、母にはしつこく反対されたんすけどね。この案件もですけど俺が家を離れること自体、中々許してくれなくて。こっちも負けずに力押しでなんとか許しは貰えたんすけど」

言い終わり、作ったコーヒーを夏美さんの机に置く。夏美さんは、ありがと、と言ってコーヒーに口を付けた。

一口飲むとカップを置きこちらに視線を向ける。

「なんか悪いわね。そんな大事にしてる成瀬君をこんな風に使ってるなんて」

「いえ、自分で好きでやってるんすから、気にすることないですよ」

俺自身こういう風に出てるのは、少なからず悪いとは思いつてもやっぱり家を出て自分のことは自分で出来るようにしたいとそんな思いで出てきたんだ。悪いなんてことはない。

俺は自分の机に戻り、小説を読もうとする。いつもいるんな小説を見ているのだが、今度の小説は上下巻あつて読むのに一苦労するのだ。案件が入ったりする前に読み終えなければならぬ。机に置いた小説に手を伸ばした。

「そつえば」

夏美さんが突然何か思い出したように声を上げる。俺はビクッと

なりながら夏美さんに向き直った。

「あのね、ちょっとこれから携帯を変えようと思ってるの。付き合っってくれるかしら？」

話によると今の携帯を長年使ってたのだが、そろそろ買い換えたかったのだそうだ。

別に一人で行って変えてくれればいいと思うのだが、なんか心細いし店員が言ってる事が良くわからない、と言う。

言われてみれば自分も携帯を買いに行った時、店員がマシガンのようにいろいろ説明したり、良くわからない変なプランを進められたりと、ちょっと大変だった気がする。

俺は別段予定なんてないので承諾した。そしてちょっと気になることを聞いてみた。

「夏美さん。見た感じかなり古そうなんですけど、携帯何年くらい使ってたんですか？」

所々傷も見られ、サイズも少し俺のに比べデカイ。

前から気になっていたのだが、そんなに聞くことじゃないと思いついてなかったのだが。

「うーん、二〇になる前だから…、五年くらい？」

結構長いな…。

夏美さんの資料作りも終わり、街に出る。

比較的拓けている街で、いろんな店が通りに面して並んでいる。少し歩くと目的の携帯ショップに着き、二人で入っていく。

中に入ると店員の爽やかな挨拶。精一杯の作り笑顔もだ。

「…この対応は俺あまり好きじゃないんすよね」

「…私も。これもあるから余計に付いて来て欲しかったの」

店員を横目にサンプル品を見始めた俺たち。今は機能性とデザイン両方が求められ、いろんな種類がある。気を付けないと買った後に後悔、なんてのもある。

しっかり見定める。それが肝心だ。

「うっん。いろいろあつて決められないわね」

「そんな時は自分の判断基準を考えてみるんですよ。色はこの色がいい、とか」

腕を組み考える夏美さん。

携帯でこんなに悩んで買う人はいないだろう。携帯の製造会社の人が見たら泣いてしまうのではないだろうか。

「持ちやすいやつで丈夫なのがいいわね。仕事の仕事だから」

そう言われ俺が何個か絞り、夏美さんに見せてみる。

防水加工がしてあるものや衝撃に強いもの。薄いものまである。

夏美さんはその中から思案して一つ選んだ。

それは衝撃に強く、それにしても比較的薄くて持ち運びやすいもの。確かに最適かもしれない。

「じゃあこれにするわ。あとは色だけど…」

「色ですか？」

「うん。私オレンジか赤がいいのよね」

カラーバリエーションを見ると赤があった。
そしてその機種を確かめてそれに機種変更をすることにした。

「でも、ここからが本番なのよね…」

「そうですよ。俺も付いてきますから」

お願いね、と言う夏美さん。

俺は作り笑顔で待つ店員の元へ向かう夏美さんの後に続いていった。

「ありがとうございました」

店員の明るい声に送り出される俺と夏美さん。手には新しい携帯が。

「疲れた〜。だからイヤなのよね。携帯って」

「そうつすね。もう少し気楽に機種変とか出来れば良いんですけど」

二人そろって疲労の色を隠せない。

店員のしつこい説明やクレジットカードの勧誘などで、ただ携帯を変えに来ただけなのに疲れてしまうなんて。もう少し対応を考えたくないと思っただけなら、もう少し早く帰りたい。

「でもありがとうね。付き合ってもらっちゃって。帰りどこか食べたいところか」

「いいっすね」

「じゃあ決まりね。行きましょ」

はい、と言いつつ俺は夏美さんの横に並び歩いていく。歩き出すと、ふと思いついた事があった。

「そういえば、この前の案件での『アレ』、どうなりましたか？」

先日の少女の霊の言っていた伝言の事。

あの後、夏美さんは一人、少女の家族にその伝言を伝えに行ったのだ。

「うん……。やっぱりすぐには信じてもらえない感じかな。無理もないけどね。いきなりやって来て『あなたの娘さんの伝言です』なんて言われても信じられないし」

「そうですね。でもきつと届くはずですよ。実の娘の言葉なんすから」

うん、と夏美さんも笑顔で答える。

その時、暖かい風が吹く。俺と夏美さんの髪をなびき、吹き抜けていった。

街は少しずつ暗い闇に包まれていき、所々明かりが灯^{とも}っていく。何も無い、四月のある日の出来事だった。

〜間奏曲〜（後書き）

一休みの何も無い日。

ちょっと読み返すと序曲が尻すぼみな気が…。

考えすぎるといつもおかしくなる。悪い癖です。

そういえば多分気付いていると思いますが、序曲の琴浦と椎名の名前について。

二人の名前、実は並べ変えると

『しいなさや』 『やさしいな』

『ことうらきりお』 『うらぎりおとこ』（都合で）『ぎ』を『き』
にしてしまいました（が）

これも何でもない事です。

春も本格的に始まり、外に行く人たちの服装も様変わりしてきた。助手である成瀬も少し薄着になっていた。

私は相変わらずスーツを着ている。四季のあるこの国で一年を通して着られるものがスーツだと思ったのだ。夏用のスーツもあるし、冬は何か上に羽織ればいい。

置かれているコーヒーを飲む。事務所設立のため助手として迎え入れた成瀬にコーヒーを入れてもらっている。その成瀬の入れるコーヒーはおいしい。この子を助手にして本当に良かった。

「風、今日も強いっすね」

その成瀬が拭き掃除をしながら窓の外を見てそんな事を言う。

成瀬が言ったとおり、外の電線やこの事務所の窓を揺らすくらいの強い風が吹いていた。

「今日も一日強い風が吹くってテレビでも言ってたからね。いやだわ」

「本当ですか？」

そう言っただけ成瀬はテレビを点けた。

チャンネルを変えていき天気予報をやっているチャンネルで止める。

天気予報士が屋外で風に吹かれながら懸命に天気を教えてくれていた。やはり今日一日風が強く吹くとの事だ。

「風はあまり好きじゃないっすね。外出るのは億劫だし、洗濯物も

干せないし」

なんとも微笑ましい事を言う少年。

私は成瀬にはここで雇う時、いてくれるだけでいい、と言った。私が雇ったんだし助手と言うのは形だけに近いから。

でも成瀬は、代わりに家事はする、と言ってきた。格好や口調の感じだと最近の若者って感じだと思っていたのだが、どうも根は真面目で義理堅いようだ。

せっかくの申し入れだったので承諾はしたが、成瀬は一つ頼みごとをしてきた。

『あの、下着は自分で、お願いします』

そんな事を言うと成瀬は俯いてしまった。

私が、別に気にしないわよ、なんて意地悪く言ったら成瀬は、かわらないください！、なんて怒ってしまった。

退魔士なんてしてても、やはりそこら辺は年相応の少年のようだ。

「なんですか？ 夏美さん」

「え？ いや、なんでもないわ。ちょっとボーっとしちゃって」

そうですか、と言って成瀬は掃除を再開しようとする。

その時ニュースが切り替わった。

テレビに映るキャスターの顔が真剣な表情になりニュースを読み

上げる。内容は殺人事件のようだ。

『昨日の夜、市北区で体をバラバラにされるといふ事件が発生しました。事件のあった時間……』

この地区からそう遠くない場所の事件と言つこともあり、私と成瀬はテレビに注目する。

淡々と読み上げる文章の中で気になることがあった。

『死体の出血量が少ない』

その文は私だけじゃなく成瀬の耳にも残つたようだ。成瀬はあごに手を付き思案していた。

「出血が少ないなんて、普通だつたらありえないですよね」

「そうね。切られて死ぬ要因は大体出血多量のショック死みたいなモノだし、切られて出血がないなんて、もしその場で殺されて出血が少ないのであれば、何らかのトリックか……」

「…血を吸われたか、ですかね」

真剣な顔で成瀬はこちらを見る。

その意見には私も同意だ。いくら人目のない所であろうと普通の人間がトリックを使ってまで人を切りつけたりしないだろう。まして人間一人の血液を抑えるなど到底無理だ。

「多分、成瀬君の言うとおりでしょうね」

だが問題は相手の正体だ。

生き血を啜^する魔物なんて数えたらきりがなし。しかもバラバラにされるなんて。

考え込む私を見て、成瀬はポンと手を叩く。

「ま、どうにかしないといけないっすね」

そう言って私に微笑む成瀬。

そうだ、成瀬の言うとおりどうかしななければ、被害はどんどん広がってしまう。そうなる前にも事件解決が優先だ。

「うん」

短い返事をする私はスツと立ち上がり、自室に向かう。

部屋に入ると壁に掛かったアタッシューケースを持つ。そして両手で抱えた。

「今日もお願いね……」

そう言って二つのアタッシューケースを持ち、部屋を出て行く。

事務所に戻って来ると、成瀬も準備が整っていた。

「じゃ、行きましょうか？」

私が言うと、はい、と返事をする成瀬。

私達は車に乗り込み、仕事に向かうことにした。

辺りも薄暗くなった頃、建物を縫うように少女は逃げていた。

「誰か！」

声を上げるが助けはない。この裏路地に逃げ込んだのが災いした。時折振り返りながら逃げる少女。視線の先は暗い闇だった。だがその中に蠢く何かがあった。

その何かは一定の距離を保ち、彼女を追い詰めていく。それは品定めをするように、あるいは逃げる様子を楽しむかのようだった。

少女はまた振り返るとその姿が見えた。その手は刃物のように鋭い形をし、犬のような息使いをしている。彼女が人生で出会った事などないものである事は確かだった。

その事実を受け入れられないまま彼女は必死に逃げる。

届くかも判らぬ助けの声を上げながら…。

第一楽章『春嵐【シュンラン】』 1 (後書き)

・お知らせ

序曲の4と5を手直ししました。

大幅な変更ではないのですが、よろしかったら見てください。
では。

夏美さんの運転で向かう最中、俺は隣でミニPCを開き事件について調べた。

「うーん、案件は出てますけど、正体は今のところ不明、みたいです」

「そう。やっぱり」

夏美さんも少し浮かぬ表情で返事してきた。

いくら強い退魔士と言えど、相手の出方がわかればそれに越したことはない。少しでも情報が欲しいのだろう。

その時、車が揺れる。ここ最近で一番の風の吹き方だ。

「しかもよりによってこんな時とは」

街路樹も吹いてくる風をまともに受けて、風下に向かい大きく揺れている。

こんな日は少々戦いが辛くなるだろう。いつもと違った状況での戦闘は意外と難しいのだ。

「そうね。でも私達に敵を選んだりは出来ないわ」

「そつっすね」

会話をしながら進む俺達の車。

辺りも暗くなった頃、私たちは案件の依頼があった場所に着いた。

建物に囲まれ、まるで閉じ込められるような錯覚をする。周りが静かなのも一つの要因だろう。

「たしか事件のあった場所はこの先みたいですね。いかにもって感じな所で」

「うん、こんな場所じゃ陰気も溜まりやすいし、妖怪の類たくいにはもってこいの場所ね」

成瀬の言葉に私はアタッシュケースを片方降ろし顎に手をつきながら答えた。

落ち込んでると不幸を呼び込む、なんて誰かが言っていた。まさしくその通りで、今この場所も似たようなもの。こんな人も寄り付かないような暗い場所は、負の力を呼び寄せてしまう。そうなればその類に力を与えてしまう。そんな存在を憎んでいる人間がそんな風にしてしまっているのだ。そんな矛盾に私は呆れと、哀れみを感じてしまう。

私と成瀬は歩き出し、搜索を始めることにした。コツコツと私たちの靴の音が周りの建物でこだまする。

「…ん？」

ふと周りを見ていた私の眼に、道路に転がっている黒い物体が映る。

近づいて見ると、それは変な小さなマスコット人形が付いた学生が持っているような手提げタイプの黒いカバンだった。その人形に見覚えはあったが、今はそれ所ではない。

「…どうしてそんな物が？」

なんとなく分かってはいるのだろうが、成瀬は私に聞いてきた。
私はカバンを拾い上げた。

「もしかしたら誰か……」

『誰か!』

私が言い終わる前に答えが出される。

女の人のものであるう声が聞こえてきた。声のした方に成瀬と共に顔を向けた。

「行くわよ」

私の掛け声と共に二人は全速力で声のする方へ向かう。

私の今日の占いは最悪だった。しかもそれがすっかり当たってしまった。
朝起きて朝食を取ろうとしたら牛乳はこぼすし、それを拭こうと慌てたらそのこぼした牛乳に倒れこんでしまうし……。

しかも今日の強風のおかげで髪はぼさぼさになるし、こけそつにもなるしで良い事なんて一つもない。

「…ラッキーアイテム、つけたのに」

泣きそうになりながら、走りながらあの占いに愚痴を言っていた。占いの中でこれを持てば運勢が良くなると言っていたアイテムを

ちゃんと持っていたのだ。

魚の形をしたアイテムと言っていたので、仕方なく部屋にあった小さな魚の形をし、鯛焼きみたいな格好をした小さな人形をカバンに付けることにした。

それは友達と学校帰りに近くのゲームセンターに遊びに行った時、UFOキャッチャーで取った物。なんでも昔流行った人形で復刻盤だったらしい。私にはそれが何だか分からなかった。

「だ、誰かあ！」

泣き声になりながら助けを呼ぶ。だが答えてくれる人は現れない。時折後ろを振り返ると、見たこともないような化け物がいた。

姿形を見る限り、きつと私なんか簡単に捕まえられるはずなのに、その化け物は距離を置いて追いかけてきている。

それはあたかも楽しむかのよう…。

「はあ、はあ、はあ」

そして私の体力も尽きかけていた。足も重くなってきた。

本来運動が苦手な方の私^がこれだけ走っただけでも立派な方だ。

だが次の瞬間、私は突然バランスを崩し転んだ。

「あれ？」

今の状況に似合わない言葉。でもそれ程に自然にバランスを崩した自分が信じられなかった。

突如痛み出す右足。見ると太腿ふともものあたりが切られている。化け物に切られてしまったようだ。血が思い出したように傷口から流れ出す。

その足を必死に動かそうと試みる。でも動かそうとはしているの

だが思ったより傷が深いのか、一向に動こうとしない。

それを見た化け物は少しずつ私との距離を詰めてくる。恐怖で震える体を無理矢理動かし、動かない右足を引き摺りながら私は後ずさる。

化け物は右手の刃を上に掲げる。

「誰かあああ！」

叫び声と共に、刃は私に振り落とされる。私は死を覚悟し目を瞑った。

「…」

だがその刃が一向に私に到達しない。

目を開き、目の前の化け物に視線を向ける。その振り上げた右手の手首のあたりに、細長い紐のような物が巻きつき後ろに引っ張られている。

「させねえよ。女の子にはやさしくするもんだ、ぞ！」

そして、化け物の右手が擦じ切られる。擦じ切られた手は化け物の足元に転がった。

こちらからは化け物が邪魔で姿は見えないが若い男性のようだ。

化け物は声のするほうに振り返る。

だがその時大きく鈍い音が響く。それと同時に化け物が地面に叩きつけられた。

「もうおしまいよ」

そう言って倒れる化け物の後ろから姿を現したのは、さっきと別

の人物であろう、スーツを着こなしメガネをかけた女性。その後ろにはさっきの言葉の主であろう長い髪を後ろで纏めている男の子が。

その二人の姿が私には、テレビで見るような正義の味方のように見えた。

敵が倒れたのを見て、私はすぐに襲われていた少女に駆け寄る。成瀬は相手を警戒しながら私についてきた。

「大丈夫？」

私が駆け寄り声をかけると少女は少しボーっとしていたが、声をかけられたのに気付いてすぐに私のほうを見た。

「は、はい。だいじょ、う…」

返事をしたかと思うと、相当限界だったのか少女は私に倒れ掛かるように気を失ってしまった。

私は慌てて少女を抱える。見ると太腿の辺りが大きく切れていた。すぐにポケットからハンカチを取り出して、簡単な止血の応急処置をして、離れたところに少女を寝かせる。

「夏美さん」

成瀬の言葉に反応し振り返ると、敵がのそりと立ち上がっていた。切れた右手など気にするそぶりもなく。

「いくら妖怪でも手が切れてなんとも無いって…」

成瀬は怪訝な顔をして相手を見つめる。

目の前にいる敵は人一人ぐらいの大きさ。全身が体毛で覆われて、手は鎌のような形をしている。そして犬とも狐ともとれるような顔

かたちで、威嚇するような唸り声を私たちに上げていた。

「鎌鼬か。厄介な妖怪ね」

「もうさつきみたいに不意打ちも出来ないですしね」

出来ればさつきの一撃で倒したかったのだが、打ち付ける直前に少しミートポイントがずれ威力が半減してしまい、うまく倒すことが出来なかったのだ。

いや、『ずれてしまった』のではなく、『ずらされてしまった』
と言っのが妥当だろう。

私と成瀬は構えなおし、目の前の敵を見据えた。

「まあ片方武器を落とすただけ、良かったですかね」

「そうね。いくらかは、ね」

すこし悪戯いたずらっぽく私がいうと、それはよかった、なんて私の冗談に成瀬は笑いながら返す。

そして私から近づいていき攻撃を開始した。

それを見た鎌鼬は、残った左手の鎌を振るってくる。それを紙一重で避け、アタッシュケースを横薙ぎに殴りつけた。
だがそれは空を切る。

ならばと次の攻撃を下から振り上げていく。

またそれも空を切る。

「おっと」

と私はバランスを少し崩す。鎌鼬は少し態勢が崩れた私にまた鎌を振るってきた。

夏美さんは振るってきた鎌をアタツシユケースで受け止めると、ガン、と大きな音がする。

鎌はアタツシユケースに食い込むことなく防がれた。

夏美さんの武器であるアタツシユケースは特殊な金属による特別製。その強度について聞いてみると、斬鉄剣といい勝負、なんて言っていた。そんな物どこにあるのかと疑問に思ったが、きっとそれぐらい自信があるほど強いのだろう。

だがそれだけの強度だけあって、重さもそれなりだ。並の人は十分も持てない。

攻撃を防いだ夏美さんは一旦攻撃を止め、後退した。

「やっぱり。こんな攻撃じゃ当たらないか…」

悔しい顔をしながらそう言う夏美さん。

鎌鼬は旋風に乗れる妖怪だ。そして厄介なことが、こちらの攻撃によつて起きた風にも乗れてしまう。理不尽極まりない。

そんな妖怪に単調な攻撃では当たらない。

「でも、こっちは二人です。大丈夫ですよ」

ふいに俺はこんな事を言った。別になんてことない一言だったのだが、言ってしまったから、まずい、と思った。

案の定、夏美さんを見るとニコニコしていた。

「そう？　じゃあ成瀬君お願いできる？」

「…了解つす。でも出来ますかね」

一応了承した俺の言葉に夏美さんは、うん、と唸る。

「どうにかしなきゃ、でしょ」

なんて言うもんだから、俺は苦笑した。

まったく言ってくれる。こんな所は『A+』なのか疑わしいところだ。

なんて思いながら俺は鎌鼬に向かっていく。

まずは初撃は鞭を振り落とすが、やはりそれかわされてしまう。

「へ、ずるいなあ」

鞭のように細い攻撃ならかわされないんじゃないか、とも思ったのだが、その思惑は外れた。まあこの攻撃が本命じゃないのだが。策はあった。あまり乗り気じゃないが。

俺は敵を見据えると、あちらも反撃をしてきた。

「先読」

相手は風に乗れる。やはり相手のスピードの方が上だろう。それでも手が見えれば防ぐことは出来る。

三十センチ程の持ち手の棒をナイフのように右手に持ち、もう一方の左手で縄を纏めて持つ。

「二手目か…」

そう呟きながら俺は鎌鼬が足を踏み込んできたところを見計らって、足元に縄を放り投げる。

だが気にする素振りもなく鎌鼬は鎌を振るってきた。それを俺は鎌の刃の横つ面を叩き往なして軌道をずらし、刃が流れていったのを見て、少し踏み込み、がら空きの横腹に突きを放った。これなら起こる風は限りなく無いに等しい。

その狙いは見事的中し、しっかりと命中した。そして足元に投げた縄を拾う。

だが鎌鼬はこっちを睨むと鎌の無くなった右手でリアットのように殴りかかってきた。

「にゃろっ」

読んでいた通りの攻撃。

だが俺は避けるのではなく、受けることを選びしっかりと腕と棒を使いガードを固める。

ガードの上からでも力強く、かなりの威力でふっ飛ばされてしま

? ?

その者は少し高い建物の屋上の縁に座り、鼻歌を謳う。
眼下の方で二人の人間と一匹の獣が。

「」。フフ。あの子、結構やるわね」

クスクスと笑いながら女性は見守り続ける。だがもう一人の方に目を向けると笑みが消えた。

「夏美…」

冷たい表情。見るものすべてを凍らせるような…。

それでも鼻歌は続く。

横殴りにされ飛ばされた俺の右手には持ち手の棒が。そして左手には縄。

ただ左手の縄は先の方を持っていた。

「ばーか」

やられた方だと言うのに悪態をついたが、俺はこの後が狙いだつたのだ。

手が読めることを『避ける』ためではなく、『殴られる』ために利用したのだ。

鎌鼬の足に殴り飛ばされた俺の鞭の縄が狙い通り引っかかり倒れる。

風に乗る鎌鼬は、例えるなら『風に舞う羽』。空中で掴むのは非常に困難だ。掴もうとすればするほど、手をすり抜けて逃げていってしまう。

だが地面に落ちた羽なら掴む事が出来る。ならば鎌鼬も同じようにしてはどうかと考えた。

鎌鼬は倒れた状態。後は掴むだけ、いや、止めを刺す^{とど}だけだ。

「夏美さん！」

盛大に壁に体を打ちつけた俺は、むせながら夏美さんの名を呼ぶ。それを聞いた夏美さんは鎌鼬に向かっていき、アタツシユケースを打ち下ろす。

やはり鎌鼬でも倒れた状態では無理だったのか完璧に逃げ遅れ、その一撃をまともに受けた。

「昇華」

夏美さんがそう言うのと、青い炎が上がり呻き声を上げる鎌鼬はどんどん霧散していき跡形もなく消えてしまった。俺は作戦の成功に心の中でガッツポーズを取った。

俺はゆっくりと起き上がり、夏美さんに近づく。

夏美さんは霧散して鎌鼬がいなくなった場所を見つめている。その横顔はとても悲しげだ。

「ありがとうね、成瀬君」

近づいてきた俺に夏美さんは顔を向けて^{うめ}辛い言葉をかけてきた。俺が、いえ、と言うと夏美さんはまた鎌鼬がいた場所を見つめる。

「どうか安らかに……」

害をなし敵であった鎌鼬に目を瞑りながらそう呟く夏美さん。俺も隣に立って一緒に夏美さんと共に祈りをささげる。しばらくして、夏美さんはすっと顔を上げこちらに笑顔で向く。

「ごめんなさい。こんな事しちゃって」

「いえ、気にしないでください」

俺も笑顔で返す。

俺は思う。この人は強いだけじゃない、と。自分にはない腕や技術だけじゃなく、敵に対しての慈愛に満ちていて、それは誰にでも出来ることじゃない。

そして俺は今、そんなこの人に魅かれていた。この人のようにな

りたいと。

その夏美さんは、行こうか、と言って歩き出した。俺も後に続いて行こうとした。

「やっほー。夏美」

その時、突然声をかけられた。

聞いたことがない女性の声。それと共に感じたことのない霊圧を感じ、体が思うように動かなくなる。

その体を懸命に奮い立たせ声のしたほうに振り返った。

そこにはいつの間にもいたのが、黒いワンピースを着た栗色の長髪の女性が歪な笑顔で立っていた。

私の心臓の鼓動が早くなっていくのがわかった。

それは聞き忘れることのない声。

声のした方にゆっくりと振り返る。そこには病的なまでに白い肌という以外は、記憶と変わらない姿があった。

「…ねえ、さん…」

力が入らず呟くような声になる。

でも私の言葉に、目の前の彼女の笑顔がなくなった。

「…まだそう呼ぶの？」

目の前の者の声に怒りの色が帯び、それと共に冷たい視線が刺さ

る。

「私は…、あなたなんかの姉じゃない！」

叫び声と共に放たれる怒気を、私と成瀬は一身に受ける。

歪んでいく顔。目も血走り、今にも襲いかかってくるような雰囲気。

「私を追ってくるなんてどんなつもり？」

私は答えない。

その瞬間、手にナイフを持ち彼女は一直線に私に向かってきた。躊躇のない突きを放つ。

私はそれを手に持っていたアタッシュケースで防いだ。すぐに蹴りを繰り出すが当たらない。

彼女はおもちゃを与えられた子どものような顔をして、私の蹴りをかわす。

「夏美。あなたに私は倒せない」

そう言う彼女の顔はとても歪こぼな笑顔だった

「りゃー！」

その時、成瀬が横から鞭で攻撃を仕掛ける。

「フフ。子犬の躰はしとくものよ？ 夏美」

流れるような動作で降りかかってくる鞭をかわし、標的を成瀬に変えた彼女は成瀬に向かう。

「！ 成瀬君！ 離れて！」

私が言うよりも先に攻撃をかわした彼女は成瀬に向かってナイフを振り下ろす。

今までにないイメージだった。

襲い掛かってきた相手の攻撃を見据え、俺は『先読』を発動した。だが見えたのはとてもハッキリとしない攻撃の軌道風景。見えることには見えるのだが、それが果たして正しいのか分からない。こんなことは初めてだった。

「くっ！」

とにかく信じて避けてみる。

だが、避けたはずの攻撃は頬をかすめる。俺はその事に驚き、思考を止めてしまった。

そんな事を戦いの最中にしてはいけなかったが、それ程の驚きだったのだ。でもそんな事をしてはいけない相手だった。

動きの止まった俺に蹴りが襲い掛かる。分かっていたはずなのにその攻撃に反応する事が出来なかった。相手の見た目は、細い体つき、そのそらにいなような女性って感じだが、キックは重く、それは俺の膝の辺りを直撃し骨が折れるような音がした。

激痛が襲い掛かり、膝の力を失った俺は地面に倒れた。

倒され悶絶する俺にナイフを突刺すように振り下ろされる。

ガン、という音。

振り下ろされたナイフは、寸でのところで夏美さんの投げたアタツシユケースで弾かれ、俺の頭上から姿を消した。

そして夏美さんは素早く女を仰向けに倒し押さえつける。

「姉さん！ もうこんな事やめて！」

夏美さんは押さえつけた女にそう叫ぶ。

だがそんな夏美さんの言葉は届かないのか、その女は表情を変えない。

そして予想外の言葉を放った。

「また…、私を殺すの？ 夏美」

風が一段と強くなってきたのに、その言葉は脂汗を流し悶絶しそうな俺の耳にハッキリと届いた。

『私を殺すの？ 夏美』

その言葉に私の体は動かなくなる。動かなくなった私に彼女はもう一本ナイフを取り出し、それで下から斬りかかってきた。

私は鼻をかすめながらギリギリで避ける。鼻のちよつど真ん中辺りから血が流れた。

体を少し後ろに退いた私を見て、その隙に彼女は素早く私から離れて、間合いを取り声を出して笑っていた。

「もう。変わらないわね夏美は。茨ちゃんもこんな子に騙されちゃうし。ホントあんたって偽善者よね」

やはりこの人がやったのか。この人の能力なら、とは思っていた。ただこの人がいるかどうかは分からなかった。だから信じた。あの人はやってない、と。

でも事実を本人からつきつけられた。

そんなあなたに言いたいことはあるのに言葉に出来ない。

ただ、膝を着いている私の動かなくなった体と頭は、たった一言だけ紡ぎだす。

「千秋、姉さん…」

「何度言わせるの。私はあなたの姉なんかじゃない！」

そう言つと呆れたような顔をして歩き去っていく。

まるで興味を無くしたように。

「私の名前は『リリイ』。いい名前でしょ？」

今日はもういいわ。ただ挨拶でもしとこうと思ってただけだし。
じゃあね夏美」

「待って！」

私の呼ぶ声を無視して、リリイと名乗る彼女は背中を向けて、ひらひらと手を振り夜の闇に消えていく。

嵐のように去っていく彼女を、頭の働かなくなった私は見送る事しか出来なかった。

リリイと名乗った敵は去って行ってしまふ。

姿が見えなくなっても、何も出来なかった俺は倒れているだけだった。

そして同じように彼女が去っていった方を向いて座り込んでいる夏美さん。

「夏美さん……」

自分の体に治癒を施しながら、俺は悲しそうな顔をした夏美さんに声をかける。

だが夏美さんは返事をしない。聞こえないのか、それとも……。俺は頭を掻き^か毟^{むし}る。不甲斐ない上、こんな時どんな言葉をかけるべきなのか分からなかった。それでも無い頭を回転させて、霊気治療もそこそこに切り上げ、痛みを我慢して立ち上がり、夏美さんに

近寄る。

「ふぎゅー！」

夏美さんが変な声を出す。

俺は夏美さんの頬をつねった。柔らかい。

夏美さんの整った顔が歪み、左右から寄せてピヨ口にする。

「ひよ、ひよっとー！」

抗議をする夏美さんを見無視し、今度は逆に左右に引っ張った。

「痛い！」

夏美さんは声を上げた。

ランクを考えればこんな事出来るような間柄ではない。

でも今、俺はこの人の助手だ。何か出来るはずだ。

「あゝ足痛いつと。それより夏美さん」

頬をおさえながらキョトンとしている夏美さん。

俺は治りきらない足を気遣って座る。

「本意ではないですが、今日は切り上げますか。本来の目的である案件対象は倒しましたし。…追って相手と出会えても、二人してこんな感じじゃ何も出来そうにないっすからね」

何も返さない夏美さん。俺はまた自分の足の治療を始める。

霊気治療を施すのはあまり控えた方がいいのだが、さすがに足が折れてしまったのでやらない訳にはいかない。

「それとあと一つ」

「…何？」

返事をして夏美さんは俺の方を見て黙っている。

俺は頭を掻き、夏美さんに顔を向けた。

「俺は何も聞きませんよ」

予想外の言葉だったのか、え？、という顔をする夏美さん。

「だって俺は夏美さんの助手ですよ？ 雇われた身だって言うのに雇い主のことを詮索する、なんてそんな野暮な事しないですよ」

キョトンとする夏美さん。

俺だってそこまで鈍い男じゃない。これは聞いてもいいか、あまり聞かないほうがいいかぐらいは分かると思っている。

確かに聞きたいことばかりだ。

夏美さんは襲い掛かってきた女性の霊を『姉さん』と呼ぶし、あつちはそれを怒るし。

拳句にはその霊と戦闘するし、骨は折られるし。

そして一番気になっているあの女性が言った言葉。

…また…、私を殺すの？ 夏美…

あの女性の霊と何があつたのか、聞きたかった。

だが、俺はそこまで聞けるような間柄なんかじゃない。

「でも、形だけでも俺は助手です。何か抱えているのであれば手助

けしたいですよ？

字の通り『助』ける『手』、なんすから。夏美さんを支えたいと思っっています」

自分でもちよつと柄にも無いことを言ってしまった事に恥ずかしくなる。

「ありがとうございます。成瀬君」

眩くように夏美さんが言った。

顔つきも先ほどよりは良いように見える。

「と、それよりあの子、大丈夫ですか？」

ふと鎌鼬に追われ、助けた時に気を失った少女を思い出す。

一応治ったが、痛む足を引き摺りながら少女の元へと向かった。

私こと桜井 凜は、とても変な夢を見た。

その日はテレビの占いで運勢が最悪なんて言われていたものだから、私は本当は早く帰りたいかった。

でもそんな時に限って学校の委員会の仕事があつて、少し遅くなつてしまった。

それでも無事学校が終わり、これが最悪の運勢なんて占いもたいした事ないな、なんて安易に考えていたら、帰りにとんでもない化け物に出くわしてしまった。

その化け物から私は必死で逃げた。

こんな状況に陥るのは夢ぐらいだ。妙にリアルな夢だが、夢であるなら早く覚めてくれ。そんな風に心の中で叫んでみてもなんら状況は変わらない。

そんな事を考えていると、疲れてもう走れないと言つのに、私は足を切られ動けなくなり絶体絶命。

もう駄目だ。私は殺されるんだと覚悟した。

とその時、二人の人物が私の前に現れた。

その二人によって化け物は倒された。

駆け寄ってくる女性に返事をした所で私の意識は飛んでしまった。夢は終わったようだ。

「ここは…」

目を覚ましたはずの私の目には見知らぬ天井。

体を起こし、見渡しても一つとして私の部屋と思える物が無かった。

目に付く物と言えば、壁にかけられた二つのアタッシュケースと言われる物が。

思案していると、突然この部屋のドアが開かれた。

「あら。よかった。目が覚めたのね」

そこには夢で出てきたスーツを着た女性がいた。

「あの…」

私はすまなそうに目の前の女性に話しかけた。
女性は首を傾げながら、何？、と聞き返してくる。

「私はまだ夢を見ているのでしょうか」

私でもなんて質問をしてるんだろうつて思う。でも現状を把握できずにいる私は何か聞かずにはいられなかった。
女性は、フフ、っと笑った。

「残念ながら夢じゃないわ」

夢じゃない。と言う事はどういうことだろう。
この部屋にいるのも、私の前に現れた二人も現実。
という事は、私を襲ってきたあの化け物も……

「あ、あの化け物はどうしたんですか!？」

私はベットの隅の方に素早く逃げ、布団をかぶる。
思い出しても怖かった。あの鎌を持った獣のような化け物は一体
なんだったのか。

私が肩を震わせていると、不意に肩の辺りを、ポン、と叩かれる。
ビクツとして肩をすくませる私だったが、その手が背を撫でてきたのを感じ、布団から首を出した。

「もう大丈夫。あなたがここにいるのが一番の理由じゃない？」

「あ…」

言われてみればそうだ。ここにあの時現れた二人のうちの一人の女性がいるのだ。

現実なのであれば私は死んでない、はずだ。

そう思うと急に体の力が抜ける。

「はにゃ」

力を失った私の体は変な声を出して女性の胸に倒れた。

弾力で私の顔が弾む。やわらかい。

心地よさに体を任せる。

「ねえ…」

何を食べたたらこんな風になるんだろう。

やっぱり牛乳だろうか。あ、その場合は飲むか。

「大丈夫？」

「はわ！ ご、ごめんなさい！」

私がうんうん唸っていると、女性の声に気づき私はハツとしてすぐに体を離れた。

何をしてるんだ。私は。

それでも女性は私の頭を撫でながら、なんともないなら良かった、と言う。

素直にこの人を、やさしいなあ、と思った。

「…そういえば、足は大丈夫？」

「はい？ あ、えっと…」

言われて私は自分の足を見ている。

あまり痛みを感じていなかったので忘れていたが、足を切られていたのだ。

布団から出た自分の足。

「あれ？」

一瞬、やはり自分は夢を見ているのだと思った。
でも私は自分の足を見て驚いた。

「傷が…、無い…」

俺は少女に近づくとおかしなことに気がついた。

「あの…、夏美さん？」

助けた時、少女の足が切りつけられていて血を流していたので、俺は治療をしようと思った。

場所が場所だけに見るのは少々抵抗があったが、傷の具合を見ないことには治療は出来ない。女性に傷が残るのはかわいそうだし。やましい気持ちなど無いのだが、意を決し夏美さんによって簡単

な止血が施された太腿を見てみた。

「…傷、ないんすけど」

スカートからのびる少女のすらっとしている足のどこにも傷なんて無かった。それどころか傷跡まで無い。

当の本人は平和な顔して寝息を立てて寝ている始末。俺は何がなんだか分からなかった。

「これ、夏美さんがやったんですか？」

「ううん。私、そもそもそういうの苦手なもの」

俺が聞くと、夏美さんは首を振る。

まあ確かに、夏美さんが少女に触れてた時間はほんのちょっと。そんなので治癒なんて不可能だ。

「じゃあこの子が…、自分で？」

可能性としてはそれしかなかった。いくら…、あんな事があつたとしても誰かがそんな事をやっていれば気付けるだろう。

でもそんな様子は無かった。

あれこれ考えていると、何かに気付いた。

「…夏美さん、この子の霊力すごいですよ。俺触っていただけなのに…」

女の子の体からあふれ、俺の体に流れ込んでくる霊力の量が半端じゃなく、俺の体に満たしていくようだった。

それによって自然に俺の治癒力が向上してしまっているのか、さ

つきまで痛んでいた足も治ってきているようだ。

「とりあえず事務所に連れて行って様子を見ましよう？ その子、まだ起きないみたいだし」

夏美さんもさすがに困惑した。あんな事があり、加えてこの子だ。当然だろう。

夏美さんの提案に俺は同意し、少女をおぶって乗ってきた車の後部座席に寝せる。

俺と夏美さんも乗り込み、事務所に向かった。

少女を私の部屋から事務所に連れて行く。後からついてくる少女は、キョロキョロとしながらついてきた。

少女は黒い髪の毛が腰の辺りまであって、華奢な体つきでおりとした雰囲気から、『大和撫子^{やまとなでしこ}』を連想させる。事務所のソファに少女を座らせて、反対側のソファに私も座る。

前に座る少女は少しの間下を向いていたが、しばらくして私に視線を向ける。

「あ、あの…」

「なに？」

なるべく少女が身構えないように優しく返事をした。

少女はもじもじとしていて、中々次の言葉が出てこない。

少女は一度深呼吸をして、落ち着いた所で私に話してきた。

「お、遅くなりましたが、先程は助けをいただいております。ありがとうございました。」

「ううん、いいわよ。あれは私の仕事だった訳だし。」

「おし…、ごとなんですか？」

私の返答に少女は首を傾げた。当然だろう。

あんな魔物や異形のものや戦う仕事なんて表立ってある訳が無いのだから、普通の人間が知っているわけが無い。知っているのは一部の警察や政府ぐらいだろう。

「まあね。あ、でも他言無用よ。国家機密みたいなものだから。」

「はあ…。」

少し話が飲み込めないようで、また首を傾げる。

まあ一度に全部信じろと言う方が難しい。そこら辺はしょうがない。

「あ、そういえば、あともう一人の男の方はどうしたんですか？」

…もしかして、殺されちゃったんじゃない？」

身を乗り出し私に聞く。少女の真剣な顔を見て、私は口を手で押さえながら顎で少女の後ろを指す。

そこにはそのもう一人いた男性、成瀬がコーヒークップを手に持ったお盆に乗せ、苦笑いをしながら立っていた。

「そう簡単に殺さないで欲しいな？ 俺も一応そういう仕事をしてるんだから」

少し意地悪に言いながら成瀬はテーブルにカップを置いていく。少女にはスティック型の砂糖の入った袋を添えて。成瀬君、気が利くなあ。

少女はちよつと申し訳なさそうな顔をしながら、砂糖を入れかき混ぜてカップを手取る。

「ありがとうございます。いただきます」

少女が飲むのを、私は見つめていた。

見つめていた私に気付いたのか、少女は飲むのを止めてカップから口を離した。

「あの…、何か…」

少女は少し不安そうな顔になる。

私は表情を変えず、真剣に話し始める。

「うん。あなた、桜井 凜ちゃんに話があるの」

「え？ どうして私の名前…」

少女は今度は驚いた表情をした。

事務所に着くと少女を私の部屋に寝せて、少女について調べた。バツクの中から生徒手帳を見つけ、名前と生年月日が分かる。

「これだけ分かれば、何とかなるかな」

パソコンを広げ、知り合いの情報屋に少女の情報を送る。

プライバシーの侵害かもしれないし、あまり気が進まないのだが、今回のこの少女の件はイレギュラーすぎる。

触れた者に霊気が流れこむほどの量を持っている一般人。名前はわかったが、私の情報量では分からなかった。

しばらくするとパソコンのメール受信音が鳴った。

差出人はやはり情報屋。いつもながら仕事が速い。三〇分程しか経っていないかった。

メールを開いてみる。そこには少女の情報が。

『・桜井 凜 (16)』

・出身地 京都(生後まもなく今の土地に引っ越す(理由は親の転勤))

・テストでは霊気反応なし

・家族構成 ・父(41歳) ・母(34歳) ・妹(14歳)

・母方に退魔士の家系存在あり。(曾祖父の代で消滅)』

一般人の中であれだけの量の霊気を持っていて『霊気反応なし』ってのはありえない。きつたテストをちゃんと受けていなかったのだろう。

この国の判別方法の学校で行われる『集団式検査』、いわゆる知能検査と言われるものに施されている細工では限界みたいだ。早急

に何とかして欲しい。

そしてその後の家系で引つ掛かりがあった。だが曾祖父の代で退魔士の家系は途切れてしまったようだ。

だとしたら『隔世遺伝』と言うものだろうか。素質を隔世遺伝で何も知らない少女が受け継いでしまい今に至ってしまった、と考えてもいいだろう。

「神様は悪戯好きね…」

可哀そうに。望まないものを受け継いでしまうなんて。

その素質のせいでこんな量の多い靈気だ。たまったものじゃない。そして鎌鼬がその靈気に反応して、少女を襲った。

守る術を知らない少女は、何も知らずにただ自分の靈気を垂れ流し逃げるだけ。

「さて…、どうしたものか」

私はこれからどうするべきか考えた。

いつもいつも私たちが守ると言うのは効率が悪すぎる。少なからず自分の身を自分で守れるくらいにはなって欲しい。

するとある物が私の目に止まった。それを手に取る。

「うーん、まあ一応今のところはこれでなんとかなるかな？」

コーヒートを口に含み、私は一つ背伸びをして立ち上がり、自室へと向かう。

なぜ私の名前を知っていたのか、そう聞くと目の前の女性は私の生徒手帳を見せながら、勝手にごめんね、と言う。

まあ気を失った私の身元を調べるぐらい、やるかもしれない。でもなぜ連れてきたのだろう。どうせなら病院にでも連れて行けばよかったのに。

いろいろ聞きたいが、まずは女性の話を聞くことにした。

「あ、あの…、話って…」

「うん。失礼なんだけど、あなた自身が変わったところはない？」

「え？ あの、それは…、どういうこと…、ですか？」

私はドキツとした。思い当たる節はあった。

最近感じていたことに対してこの女性は言っているのだろうか。

「そうね。例えば…、普通なら見えないものが見れる、とか？」

「！」

私の思っていたことが分かっていたのか、女性はピシヤリと当ててきた。

私は小さい頃から、みんなが見えないようなものが見えていた。それは世間で言うところの『幽霊』と言うものだろうか。気付いた時には私にはそういうものが見えていた。

最初はそういうものと知らなかったから、不思議に思わなかった。

『どつして泣いてるの?』

小さい頃、同じくらい女の子が泣いているのを見て声をかけたことがあった。

着ている服はボロボロで、顔を手で覆い泣いていた女の子。私は泣き止めるように優しく声をかけていた。

そこに母親がやって来て、私に話しかけてきた。

『何してはるの? 凜ちゃん』

『うんとね、この子が泣いてるの』

私がそう言うと母親は不思議そうな顔をする。

すると私に笑いかけて、

『凜ちゃんの幼稚園、変な遊びが流行ってはるんやな。どこにもそんな子はおらんえ』

そう言われて私は女の子を見る。

確かにそこに女の子はいた。

でもその子の覆う手が下ろされると、おびただしい傷と血に覆われていた。

それを見て悲鳴を上げて逃げ出したのを覚えている。

「? 凜ちゃん?」

「え、あ、はい。だ、大丈夫です」

昔のことを思い出していた私は声をかけられて慌ててしまった。テーブルのコーヒークップを取り、一口飲んで落ち着く。

「身に、覚えがあるのね？」

「……はい」

女性に問われ、私は頷くしかなかった。

「仰るとおりです…。昔っから私、幽霊とかそういうのが見えるんです。それに…」

「それに？」

「私、ケガをしてもすぐに直るんで、周りからは気味悪がれて…」

良くわからないが何故か私はケガの直りが早い。

一度腕を骨折をし、親に病院に連れてってもらいギブスをしてもらった事があった。

腕を首から提げてるのは辛いし、お風呂は入りづらいしで本当に嫌だった。

私は、早く直れ早く直れ、といつも思っていた。すると普通なら直るのに二ヶ月以上かかるところを二週間ぐらいで直ってしまった。親や医者は不思議がっていたし、学校では私のことを気味悪がって避けるようになるしで悲しかった。

「でも…、親にこんな事相談できないし…、自分自身なんでか分からないし…」

「そうだったの…」

「すみません…。こんな事話して…」

「ううん。ありがとう、話してくれて」

私はまた落ち着くためにコーヒーを飲む。

普段は絶対に飲まないのだが、何故かおいしく感じた。

うまく表せないが、なんとなく落ち着くのだ。まるでハーブティでも飲んでるかのようだ。

すると目の前の女性は一呼吸して口を開いた。

「凜ちゃん？ 聞いてくれる？」

「？ はい」

神妙な顔つきになった女性。私はカップを置く。

「あなたはきつと、これからも今日みたいな目に会うかもしれないの」

「え？ どうしてですか？」

聞き返すと女性は、成瀬君電気消してくれる？、と言った。

あの子は成瀬君って言うのか。そう思っていると言われた男の子が電気を消した。

事務所内が暗くなる。何をするのか分からない私は不安になった。

「じゃあいくね？」

女性がそう言う。私は女性の声のする方を見ていた。するとそつちの方向がボウッと明るくなった。女性の人差し指がロウソクのように赤く光る。私は驚いた。今までの人生で見たことが無かった。

「その反応を見ると見えてるのね。霊気まで見れちゃうなんて…。思ったよりすごいわね」

指の光が消えると電気が点き、目の前の女性は顎あごに手をついていた。

「あ、あの…」

私はなんか雰囲気やバイ気がした。

「あのね？ よく聞いてほしいんだけどいい？ 凜ちゃんにとって大事なことなの」

「は、はい…」

「この先今日より大変な目に会うかもしれない。そんな時、私や成瀬君、私たち以外の退魔士と言われる人たちがいるとは限らないわ」

「たい、まし？」

聞きなれない単語、『たいまし』という単語に、私は首をかしげた。

それを察してか、女性は咳を一つして言った。

「退魔士と言うのは私たちのような魔を払う者の事よ」

そう言う女性。

私はピンとこなかったが、雰囲気で自分がとんでもない状況なんだという事だけわかった。

止んだと思った外の風は、また強く吹き始めた。

第一楽章『春嵐【シュンラン】』了

～間奏曲～

「はあ」

私は部屋に入るとすぐにベッドに突っ伏した。

もう今日は色々ありすぎて頭がついていかずオーバーヒート気味で、私はすぐに寝てしまいたかった。

身も心も疲れたとはこの事だろう。

手に持っていた白い小さな袋を握りしめ、思い返していた。

「あ、自己紹介がまだだったわね。この事務所の一応肩書きは所長、水華月 夏美。『夏美さん』って呼んでくれて構わないわ。よろしくね。」

手を差し出してきたので、私は握り返す。

透き通るように白い肌の女性の手。こんな人があんな化け物を倒したのだろうか。私は信じられなかった。

手を離すと私は話題を戻すため、不安に感じながら話を切り出す。

「えっと…、さっきの話、私の解釈なんですけど…、自分の身は自分で守れ、と」

「うん。そんだけの素質を持っているなら尚更ね」

俯きながら前にいる夏美さんに言うと黙って頷いた。

私は愕然とした。

だって私は今まで誰かと争ったりした事ないし、そもそもそんな事したくない。

「そんな！ 無理です！ 私そんな事出来ない……」

「なら、今日みたいなのに出くわして潔く死ぬ？」

そう言われて私は黙ってしまふ。

『死』……。言葉としてはなんて簡単な言葉だろう。まだ高校生でこれからだと言うのに死にたくなんか無い。

私は黙って首を横に振った。

「ごめんなさいね。あ、でもあなたに退魔士になれと言ってるわけじゃないのよ？ ただ守る術を身につけて欲しいってだけ。無理矢理この世界に連れ込まれるなんて嫌でしょ？」

「そう、なんですか？」

そう言われ私はホッとす。

もしかしたらこれからあんな化け物とかと戦う日々を送る、なんて少年マンガとかにありそうな流れになると思っていたから。すると夏美さんが胸ポケットから白い小さな袋を取り出す。

「あなたの事は一応当てはあるんだけど、今日は遅いからこれで終わりにしましょ？ とりあえず今日はこれを持って帰って。話はまた明日」

「あの、これは？」

袋をもらつとじつじつとした感触がした。

私は袋の口を少し開く。そこには群青色の石があった。これは何だろうと思っていると、夏美さんは微笑みながら教えてくれた。

「ちよつとしたお守り。その石は『ラピスラズリ』って言うの。『幸運の守り石』とも言われているのよ。知り合いからもらった物で、効果は抜群よ」

石を取り出し手に乗せ眺めてみた。

ボールのように丸く、群青色をして少し光沢のある綺麗な石。見ているとなんだか吸い込まれそうな気がした。そんな私をよそに、夏美さんは男の子の方を見る。

「成瀬君、帰りは一応送つてあげて」

話が終わると、連れて行かれた事務所から成瀬くんと呼ばれる男の子に送ってもらう事になった。

その男の子は、了解つす、と返事をして私の所まで来た。

「じゃあ行く？」

「あ、う、はい…。よろしく…、お願いします…」

いくらそういうお仕事をしていると言われても、知らない男の子なのでなんだか不安だった。妙に馴れ馴れしいし。

まあ見た感じ、あの綺麗な女性の下で働いているようだ。私みたいな子なんて興味ないだろうけど…。

不安そうに見ながらそんな事を考えていると、男の子は頭を掻いた。

「あの、そんな身構えないですよ。傷つくよ?」

私は、すいません、と言うと男の子は笑いながら、冗談だよ、と返してきた。

出て行く男の子の後に付いて行き、事務所を後にした。

事務所を出ると、私が道順を教えながら帰っていく。

道を教える以外黙っていたが、何も会話しないているのもなんだから話しかけてみた。

「すいません。送ってもらってしまって」

「いや、気にしないでいいよ。と言うか俺の方が年下なんだから、そんな敬語使わないで……」

「え! 成瀬君って年下なの?」

あんな事しているし馴れ馴れしい態度だし、背も結構高いから、同じ年か年上かと思った。

と言うか言葉遣いが年下っぽくない。

「俺の事呼ぶの呼び捨てでも構わないよ? 名前でもいいし。ちなみに俺の名前は『湧樹』。よろしく」

「あ、よろしく…、お願いします成瀬君…。桜井 凜です」

あれ?、私また敬語だ。

まあ恩人ではあるわけだしいいだろう、という事にしておく。

成瀬君の方も、まあいいや、なんて言っただけ先を歩いていく。と言
うかホントに成瀬君は年下っぽく感じない、なんて思ったけど口は
出さない事しておく。

夜も遅くなってきた空には満天の星空。まあ都心から近い事もあ
って結構明るいから星が見づらいたが…。

進んでいく住宅街の家々から笑い声や話し声が漏れてくる。それ
を聞きながら私は口を開く。

「私は…、普段いつもあんな風に家族みんなじゃべったりしてた
んだよね。そんな時に夏美さんや成瀬君はあんな事をしたりしてた
んだ」

「まあいつもじゃないけどね。だいたい中学入ったくらいからだか
ら三年ぐらい？、やってきたかな」

「そうなんだ…。

でも大変だっと思った事は無いの？ 同じ歳の友達とかはいろいろ
遊んでたりしてたんだから、羨ましいとか思ったりしたでしょ？」

「うーん、どうだろ。確かに大変だとか思ったりしたけど、友達ら
しい友達もいなかったし、同じ歳の奴を羨ましいとか思ったりした事は無
いよ。」

「この仕事も『仕事だけど仕事じゃない』、て言うか、なんて言っ
たら良いんだろうな。まあ家族みんなでこういう事していたから特
別な事してるつもりは無かったし」

家族って…。そんな環境で育ったんだ。

私には考え付かなかった。家族みんながあんな仕事をしているな
んて。

私は両手を頭の後ろに置いて隣を歩く成瀬君を見た。

こんな風にしているとどこにでもいるような男の子だった。とてもあんな仕事をしている人には見えない。視線に気付いたのか成瀬君がこちらを見た。

「ん？ どうしたの？」

「え、あ、いや、なんでもないよ。なんでも」

ふぐん、と言って成瀬君はまた前を見て歩く。

それからはあまりしゃべる事も無く歩いていった。

しばらくすると家に着いたと思ったら、家の前で母が待っていた。

「お母さん？」

「あ、凜ちゃん。やっと帰ってきはった。どこ行ってたん…、ん？」

声をかけてきた母は、私の横にいる成瀬君に気付いた。

その成瀬君は後ろ手になって笑顔で挨拶した。

「凜さんのお母さんですか？ こんばんは」

「そやけど…、そちらさんは？」

「凜さんの後輩で成瀬って言います。今日は街中で凜さんを見かけて声をかけて遊んでたんですよ。それなのにこんな遅くまですみません。凜さんを怒らないでください」

「…あ、成瀬君…」

私が声をかけようとしたら、母が割って入ってきた。

「そやったん。別にええで。無事に帰ってきはったんやし。付き添いおおきにな」

母は成瀬君にお礼を言う。成瀬君は、いえ、こちらこそ、と答えた。

その横で私は額から汗を流していた。

成瀬君は話が終わると、じゃあこれで、と言って帰っていった。それを見送りそそくさと家の中に入っていこうとした。

「ちよつと待ちい」

後ろから母が呼び止める。私は汗を流しながらゆっくりと振り返る。

そこには、ニヤニヤと笑っている母が…。

「凜ちゃんの高校で、女子高やなかったん？」

「私お風呂入るね！」

そう言っって私は駆け足で家に入っっていった。

帰り道、俺は来た道の途中にあった公園のベンチに座っていた。

「確かあの女の人、リリイって言っってたよな…」

そう言っただけ俺は持って来たバックの中のミニPCを開き、電源を点ける。

これは持ち運びが楽だし、使い勝手もいいので愛用している。PCが立ち上がるとすぐに携帯端末をつなぎ、ネットにアクセスする。

「案件対象、『リリイ』って」

夏美さんにああは言ったが、やはり気になった。

あれだけの強さ……。案件が出ていてもおかしくない。きっと何か引っかかるはずだ。

「ん？ あれ……」

だが表示されたのは『cannot be found』と言う文字。

その後も何回かやってみたが、何度やっても同じ。ヒットしなかった。

信じられなかった。対峙してみて感じた危険、実際に俺は殺される寸前だった。そんな奴が誰からもマークされていないはずが無い。もう一度やってみる。画面にはやはり見つからないという表示。頭を抱えてしまう。

夏美さんが『姉』と呼んでいたあの霊。その霊が言っていた言葉。

また、私を殺すの？

あの者と一体何があったのか。俺は知りたかった。

風は止んだと言っただけなのに、俺の頭の中は風が吹き荒れ、ぐちゃぐちゃに掻き回されているようだった。

く間奏曲く（後書き）

やばい！

東アジアカップが気になって書けない。

小笠原頑張れ！俺も頑張る！

「…うん。…それじゃあ」

私は言い終わると携帯の通話を切った。

これで一応彼女の心配は消えるかもしれない。

彼女は才はあるが、結局は力を持たない一般人。そんな彼女にいきなり力をつけると言う方が無理に決まっている。

そこで私は心当たりのある人に電話を試してみた。そしたら相談に乗ってくれるとの事だ。

「あとは待つだけ、か」

自分の机に腰掛けると、近くの机には成瀬がいた。その成瀬は机に座りパソコンの画面を見ていた。

イヤホンを片方して何かを見ているようだ。

「成瀬君？ 何見てるの？」

「え？ あ、ああ。今動画サイトの方で少し前のサッカーの試合のダイジェスト見てたんですよ」

「サッカー？ 成瀬君好きなの？」

私の問いかけに成瀬は、結構好きですね、と言って視線をまた画面に戻した。

相当好きなのだろう。画面に向ける視線が普段の成瀬と違つと感じ取れた。

初めて成瀬の歳相応の行動を見た気がした。何かに夢中になっているなんていいことだと思う。

そういえばもうすぐサッカーの大きな大会があると聞いた気がした。少し前に自分の国でやっていたことを思い出す。

ずっと好きだった人やそれ程好きじゃない人も一緒になって熱中して応援する様は、私には何か病的なものを感じてしまった。

今にして思えば集団催眠と言うやつかもしれない。『みんながやってるから』という共通意識になって、俺も、私もと増えていったのだろう。

と、意味の無いことを考えていた。

「そういえばあの子。遅いわね」

外に視線を向けると、雲ひとつ無い空が広がっていた。

? ?

ベンチに座る二人の男女がいた。

男の方は黒く長すぎず短くない髪をして、丸いメガネをかけていた。ジーンズを穿き、ハイネックの黒いシャツの上に茶色の上着を着た服装。

一方女性の方は金色の少しウェーブがかったロングヘアで、蒼い眼の色。白いワンピースの上にカーディガンを羽織っていた。

「どつしたんですか? ごしゅ、ゴホン。ウイン…様」

男性は携帯を閉じながら隣に座る女性の問いかけに答えた。

「ちょっと知り合いの人からね。はは。まだ『様』は取れないみたいですね」

「それはそうですよ。って、それより電話はなんだったんですか？」

「それが『今から来てくれる？』との事です」

そう言つと女性は頬を膨らませた。

「綺麗な顔なんですから、そんな顔をしないでください」

「綺麗な顔つて……。は！ そ、そんな事で騙されませんよ！

私たちは観光で来ているんですから、そんな事しないでいいじゃないですか！」

女性は言い終わるとそっぽを向いた。

男性は女性に近づいて、そつと頭に手を置き、優しく撫でた。背は女性の方が高いのでちよつと辛そうだが。

「ごめんなさい、アンナ。何か困っているようでしたので。用事が済んだらすぐにまた戻ってきましょう」

「……はい」

女性の方は頬を染めながら、恥ずかしそうに男性の言葉に頷く。立ち上がると、男性は傍に置いてあつた杖を持つ。

「じゃあ行きましょうか」

女性は、はい！、と返事をして男性の腕を掴み、二人は歩いていた。

私は着替えを済ませ、家を出て夏美さんたちの事務所に向かった。それは昨日の夜だった。

『明日、事務所に来てくれる？』

私は了承した。自分にとって大事な事だ。断るわけが無い。でも不安もあった。

力を持つ、と言うのはどういう事なのか分からなかった。もしかしたら何か辛い事をしなければいけないのか、なんて思うと、あまり向かいたくない気もした。

そんな不安な足どりで事務所に向かっていた。

ふと自分のポケットの中に手を入れる。

取り出したのは、昨日夏美さんから受け取った石の入った袋。

お守りだそうだが、私には本当に効き目があるのかどうか分からない。ただ持っていると、不安が薄れる気がした。

ちよつとしたおまじないみたいなものだろうか。小さい頃、お母さんや先生に『痛い痛い飛んでけ』とかやってくれたな。それみたいなものかも。

その時だった。

そんな事を考えて歩いていたせいか、曲がり角で何かとぶつかった。

「イタ！」

「うわ！」

大きな声を出して、私とぶつかった相手は転んでしまった。私は盛大に尻餅をついた。結構痛い。ぶつかった方を見ると、男の子が仰向けに倒れていた。

「あ、大丈夫……」

「ご主人様！ 大丈夫ですか！？」

私が声をかけるより先に、男の子の後ろから来た女性が駆け寄ってきた。

その駆け寄って来た背の高い金髪の女性は、どこか気品さえ感じる姿だった。

「あの、すいま……」

「どこか痛い所はありますか！？ 立てますか！？」

もう、声をかける余裕すらない。

女性は男の子の肩を掴み、揺らしていた。表情も必死だ。揺らされていて男の子は声が出せない。

と言うかこの二人、どういう関係だろう。

片や眼鏡をかけた男の子、片や綺麗な大人の女性。兄弟にしては顔が似ていない。親子だったら尚更顔が似てるだろうし、歳が難しそうだ。

しかもさつきから女性が男の子の事を『ご主人様』と言っているし、余計分らない。

「……、ご主人様が……、死んじゃう……」

「えええ！」

女性はよっぽど狼狽しているのか、涙目でとんでもない事まで言い出した。

ぶつかったただけで人が死んでしまうなんて…。余程の事がないとありえないだろう。

「ア、アンナ。ちょっと。僕は大丈夫だよ」

やっとの思いで男の子は声を出した。

その言葉に安心したのか、アンナと呼ばれた女性は更に目に涙を溜めた。

「ご主人様あゝ！」

叫んだ女性は男の子に抱きついた。少年は女性の胸に埋もれてしまっ

まっ。一通り見ていた私は目の前にいるのに見えていないようだった。女性の方だけかもしれないが…。

私は立ち上がり、恐る恐る二人に近寄った。

「あの…」

私の声に気がついたのであろう男の子は、女性から離れて立ち上がり、微笑みながらお辞儀をしてきた。

「あ、すみません。行きたい所の場所が分からなくてよそ見してしまっていて。怪我してませんか？」

「い、いえ。私の方こそごめんなさい。考え事して歩いてたから見た目通りの礼儀の正しい優等生タイプの男の子。男の子の屈託の無い微笑みに、私は少し見とれてしまった。すると、私と男の子の間に女性が入ってきた。顔を見てみると頬を膨らませていた。

「…ダメ」

「え？」

「ご主人様は私の…、わた、し、の…」

そこまで言うと言顔を真っ赤にしてしまう。そして両頬を押さえ、男の子の後ろに隠れてしゃがんでしまう。

それを男の子は何も言わず、女性の頭を撫でてあげていた。

俺は動画を見終わると、イヤホンを取り背もたれに体を預けた。最近のサッカーの日本代表はどうもうまくいかないようだ。だというのにその代表の監督は大層な目標を掲げている。格下相手の試合を今見ていたのだが、とても出来そうには思えなかった。大きな目標は良い事だが、それにもなった『結果』というものがほしい。それが今の個人的な意見だ。そんなどうでもいい事を考えていると、まだ凜が来ていないことに気付く。

「遅いつすね、あの子」

「そうね。もうそろそろ来てもいいかも」

何か書類をまとめながら夏美さんがこたえる。

スーツが似合うだけあって、夏美さんの仕事をしている姿はやはり似合っている。

「そういえば」

「何？ 成瀬君」

「夏美さんの言っていた心当たりってどんな人なんですか？」

俺が聞くと、そうねえ、と言って夏美さんは手を止めて腕を組みながら机に手をついた。

「昔の知り合いなの。まだ日本に来てなかった頃のね」

「あれ、夏美さんって外国にいたんですか？」

俺が聞くと、夏美さんはキョトンとして、言ってなかったっけ？、なんて言ってきた。

初耳だった。まあ俺自身そんな事に興味が無かったので聞かなかっただけなのだが。

『水華月』なんて苗字で外国で暮らしていたなんて思わない。なんて言い訳っぽい偏見をしまっていた。

「それでその人は……」

「まあ言わなくても分かると思うけど、同業者よ。腕の立つね。それに……」

「それに？」

「ある魔術結社の組織長の一人である魔術師なの」

第二楽章 『f a t u m【運命】』 1 (後書き)

東アジアカップを見てフラストレーションたまりまくり…。

それでも日本代表を応援します！

ていつかこれ小説関係ないな…。すみません。

「ご迷惑おかけしてしまつてすみませんでした」

「いえ、私のほうは大丈夫なんで…」

深々と頭を下げる女性。それを私はやめさせようとする。別に私は何もされていないんだが…。

場所を変えて私たちは今、近くの公園のベンチに座っていた。

私の隣には、茶色や黒といった暗い色を基調とした服装の男の子と、男の子とは逆の感じで白基調の服を着た金髪の女性。

傍^{はた}から見ると私たちはどういふ風に見えるのだろうか。

人通りがあまり無いところでよかつたと思う。まあこんな所に公園を作るのもどうかと思うが…。

「知り合いに呼ばれて来たんですが、迷つてしまつて。道を聞くにも誰も話を聞いてくれなくて」

「そうだったんだ…」

そう言つて私は二人を見た。

確かに話しづらいかもしれない。女性はまるつきり外国人だし、男のこの方も髪の毛は黒いけど、眼鏡の奥の眼の色が青い。私もこんな形じゃなかったら、話しかけられても逃げてしまふかもしれない。

すると男の子が私の手を見る。

そこには白い袋が。転んだ時からずっと握り締めていて、ポケットに入れるのを忘れていた。

「それは…」

「あ、これはちょっとしたお守りなの。最近知り合った人から貰ったんだ」

私がそう言うと男の子は、そうなんですか、と微笑んで返してきた。

私、何か面白い事を言っただろうか？

疑問に思っていたが、私は一つ大事な事を思い出した。

「そうだ！ 私その人の所に行くんだった。じゃあね」

立ち上がり私が行こうとすると、待ってください、と引き止められる。

「僕も一緒にしてよろしいですか？ お引止めしたお詫びも籠めて」

「え？ あ、いや、大丈夫だよ。たいした事な……」

「では、行きましようか」

私の断りも聞かず、男の子も立ち上がり歩いていく。女性も後を追う。

私は慌てて後を追ひ、呼び止めた。

「ちょ、ちょっと！ 来るのはいいけど、方向逆だよ！」

迷っていた訳が分かった気がした。

夏美さんの知り合い…。

この人の知り合いだからすごい人なんだろうと思ったが、想像していたより一回りぐらいすごかった。

「魔術結社の組織長、って…。どんだけすごい人ですか。てかそんな人がよく簡単に来てくれるって言いましたね」

「本人曰く、『名前だけの組織長』だそうよ。いつもどこか出歩いてて、仕事は部下に任せきりらしいから。今日本にいるのだから寺とか神社なんかの古い建築物巡りだとかで来てみたい。昔から変わらないわ、そういう所」

「なんていうか…、自由人ですね…」

かもしれない、と夏美さんが言う。

部下を束ねる者がフラフラとどこかに行っちゃうなんて…。もしも俺がその人の下に就いていたら、すぐにやめてしまっだろう。

「夏美さん、ありがとうございます」

なんとなく夏美さんにお礼を言ってしまう。俺の上司がこの人でよかった。

言われた本人は、なんで？、と言って不思議そうな顔をしながら次の資料を開いていた。

うん。この人はこのままでいて欲しい。

「じゃあ夕方辺りにでも来ますかね？」

「どうかな。明日になるかもね。自由人だし」

笑いながら言う夏美さん。俺もつられて笑ってしまった。

でも、その笑顔を見て俺は複雑な心境だった。

昨日あんな事があったのにこんな風に笑えるなんて、俺には出来ないだろう。きっと…。

俺は弱い人間だから…。

っと、いけない。何を感傷に浸っているんだ俺は。柄にも無い。

何か切り出そうと思った瞬間、事務所のドアを叩く音がして、開かれる。入ってきたのは今日呼び出した人物、桜井 凜だった。制服姿しか見ていないから、少し分からなかった。入るなり頭を下げる凜。

「す、すみません！ 遅くなってしまつて…」

「いや、大丈夫よ。来てくれてよかったわ」

優しく声をかける夏美さん。凜は、ありがとうございます、と言つてまた頭を下げた。

「でもどうしたの？ 何かあつたの？」

昨日話した感じや見た感じ、絶対遅刻しないような人だと思う。

なので不思議に思つて俺は凜に聞いてみた。

すると、ちよつと待つて、と言つてドアの外を見て誰かを手招き

している。

「途中この子とぶつかったね。なんかこの人たち道に迷ってみたいんだけど…」

どうも、と言いながら入ってきたのは眼鏡をかけた男の子と綺麗な女性。

どうも外国人のようだ。男の子は眼の色が違うし、女性は金髪だったから。

「それなのにぶつかったお詫びをしたい、って言っただけね。私には別にいいよって言ったんだけどね」

「え？ あの、よく分かんないんだけど…」

場所を探していたのについてくるなんて意味が分からない。

ここに来てって何もなし、そもそも俺たちには目的地はどこなのか分からない。

俺は頭を掻きながら男の子に近づく。そして俺は少年の目線まで屈んだ。

「なあ、どこに行きたいんだ？」

「いや…、あの…」

なんだか歯切れの悪い返事。人見知りで緊張してるんだろうか。

「ちょっと、あなた。ウイン様に失礼じゃない！」

ここで一緒にいた女性が俺に怒った。

どういった関係なんだろうか。年下だろう男の子を様付けで呼ぶなんて。お付の人か何かだろうか？

女性は俺と同じぐらいの身長で、腰に手をつき俺を睨んできた。なんだか迫力ある人だな。

「あ、いや、別にただ話を聞こうとしただけ……」

「年上に対しての礼儀もちゃんと出来ないようじゃたかが知れてるわ！」

俺の返答を待たずに捲くし立てる女性は、今度は腕を組んで怒っている。

いくら俺の態度が気に食わないからってそこまで……。

「え？ 年上？」

気になる単語が耳に残る。

女性の言った言葉の中の一つの単語。『年上』。

すると後ろの方から、ククク、という笑い声がした。振り向くと夏美さんが笑っていた。

「ちょっとウイン。あなた相変わらず小さいわね」

「はは。水華月も相変わらず元気そうで」

話している二人の間にいる俺は、何がなんだか分からない。と言うのは嘘で、なんとなく分かっていた。

「夏美さん……。この子と知り合いなんですか？……」

冷汗を掻きながら夏美さんの方を向く。

夏美さんはそれを察してかニヤニヤしながら言った。

「その人がさっき言ってた魔術師よ。しかも私と同じ歳よ」

信じられない……。と言っより…。

「すみませんでした！」

俺は男性の足元で相手が引くほど全力で土下座をした。

いくらなんでも失礼すぎる。夏美さんの知り合いで、しかも組織長である人を、年下の子と間違えてしまうなんて。

そつと顔を上げてみる。

困ったように笑っている男性の顔はやはりどうしても年上には見えなかった。

「いいですよ。慣れてますから…」

そう言った魔術師は暗い顔になる。かなり落ち込んでいる。

きつと結構気にしているんだろう。

女性が慌てて駆け寄る。そして魔術師を抱きしめた。

「大丈夫です、ウイン様。ウイン様は今のままが素敵なんです！」

フォローなのか何なのか分からないことを言っつて魔術師を励ます。

そして俺を睨みつけた。

「…許さない」

呟いた女性の金色の髪が揺らめく。

そしてぶつぶつと何かを言って、それと共にどんどん感じていた力が増大していく。

そうだとは思っていたが、こっちの人も魔術師なのか。

と言うかこの感じはヤバイ。このままだとこの事務所もただでは済まない。

すると下から両手を伸ばし女性の顔を挟み顔を自分の方に向ける男性。

「だめ」

微笑みながら一言そう言う。そんなんで済む訳な……。

「は、はい！ 申し訳ございません、ご主人様……」

済んでしまった…。

顔を触られている女性は顔を真っ赤にしている。

それに『ご主人様』って。ますますもって関係性が分からない。

第二楽章 『fatum』【運命】『 2 (後書き)

2 / 2 2 p m 0 : 4 5 ミスがあり書き直しました。寝ぼけてた
んでしょうか…。

何とか落ち着いて、二人をソファアのほうに案内した。
俺はお茶を用意する事にした。

「僕は出来れば紅茶で」

「私も同じく」

二人の注文を聞き、早速紅茶の用意をしようとする。
一応一通りの物はあった。ポットとティーカップ、それとダー
ジリンの茶葉も。夏美さんがコーヒーの道具一式と一緒に揃えていた
らしいが、俺たち二人してコーヒーばかり飲んでいたので、使った
事が無かった。

どうすればいいものか悩んでいると、凜がやってきた。

「私、淹れようか？」

「え？ 出来るの？」

「失礼な。これでも女の子なんだから、これぐらい出来るよ」

少し怒りながらも用意し始めた。

まずは少しお湯を沸かし、ポットとティーカップに注ぐ。

「何やってんの？」

「これ？ こうやってポットとカップを温めておくと、美味しく淹

れられるんだよ。そのままだと冷めて美味しさが引き出せないの」

へえ、と俺は感心した。

そのうちにお湯をまた沸かし、ポットのお湯を捨て水気を切ると、茶葉を入れ熱々のお湯を注ぐ。

三分程待ったあと、すぐにカップのお湯を捨て同じように水気を切ると、カップには特徴的ないい匂いを漂わせながら琥珀色の液体がカップに注がれた。

「手際良いね。良いお嫁さんになるよ」

「あはは…、ありがと…。でも何故か料理は全滅なんだよね…」

「何で？」

さあ、と言って凜は盆の上にカップを手早く乗せていく。

これだけ出来て料理は全滅なんて。かわいそうだな…。

私は事務所のソファーに座っている二人の前に紅茶を差し出した。男性の方はそのまま口を付け、一口のみ顔を向けた。

「紅茶を淹れるの上手ですね。美味しいです」

上品そうに微笑みながらお礼を言ってくる男性の顔は、やはり幼くとも年上とは思えなかった。

一方女性はお礼を言うなり、つけそえていた自分の分の砂糖と男

性の分の砂糖を入れ飲んでいた。とてもじゃないが、甘すぎやしないだろうか。

しばらくして二人がカップをテーブルに置く。

「自己紹介が遅れましたね。すみません。

僕の名は『ウイン』ウエストコット』です。こんな身なりですけど魔術師をやっています。水華月とは同い年で、昔は何度か仕事を一緒にやりました」

と言いながら横に置いておいた杖を持つ。

ウインさんと言う男性の持つ杖は何の装飾も施されておらず、『木』そのものと言った感じだった。

「これは櫪かしの木で出来ていまして、ドルイド教と呼ばれる宗教を行っていたケルト人が聖木として崇拜していた木なんですよ」

何も聞いてないのに説明してきた。ちょっと言いたかったんだろうか。

杖を眺める眼も輝いてるように見える。

だが、それよりも一つ聞きたい事があった。

「あ、あの…、魔術師って…、昔話とかに出てくる魔法使い、ってやつですか？」

あまりにも自然に出してきた単語、『魔術師』に食いつく。

そんな昔話に出てくるようなものを信じられないが、退魔士と言う夏美さんや成瀬君がいたんだ。信じるほか無い。

その質問に難しそうな顔をして、うん、と悩むウインさん。

「それとは似て非なるもの、と言うべきでしょうか。一般的に人間

自身が行使する力を魔術と言って、魔法とは人間以外による魔や妖精が起す力を差すと言われています。

まあ他の人から見れば同じようなものですからね。どちらでもいいと思いますよ。難しく考える必要も無いですし」

なんだか曖昧な受け答えだった。まあきつと明確な取り決めとかが無いのだろう。

例えばウインさんがここで魔術を行い、私から見ればどちらも同じ超常現象的なものだから魔術にも魔法にも捉えることが出来るのだ。

よってそこに大きな差は無い、と言えるだろう。

あゝ、なんてことなんでしょう…。

非日常的なことを何気なく私は肯定し始めてる。

悩む私を無視して、ウインさんが言い終わると、隣の女性が一つ咳をして注目を向けた。

「えっと、私は『アンナ・シュプレングル』。私の方があなたの言った魔法使い、って所かしら」

「え？」

何気ない女性の言葉に疑問が生まれる。

さつきウインさんが言った事が正しいのであれば、この人は『人』では無いということになる。

だが、目の前にいる女性は、どう見ても普通の人に見える。すると後ろから成瀬君が入ってきた。

「さつきアンナさんが力を使おうとした時、なんとなく分かったんだけど、あんた人間じゃないよね？」

私が思っていた事を代弁してくれるように成瀬君がアンナさんに質問する。

すごいな。単刀直入に聞けるなんて。

「ご名答」。まあ言葉遣いは微妙だけど、さすが退魔士。そういうのは得意なのね。

そう、あなたの言うとおり私は人間じゃないわ。私は『フェイ』って言われる妖精なの」

妖精……。それこそ御伽噺の世界じゃないか。

夏美さんや成瀬君に出会って、こんな人たちがいるのかと思ったばかりなのに、次は魔術師、その後は妖精ときた。

ついていけない……。頭の中がごちゃごちゃしてきそうだ。

「童話のシンデレラってあったでしょ？ あの中に出てくるシンデレラを助けた魔女って私と同じフェイなのよ。すごいでしょ？」

胸を張るアンナさん。なんだか自分の事のように誇らしげだ。

それにしてもすごい事だ。目の前にその元になった妖精がいるなんて。と、感心してしまう。

二人を見つめる。とてもアンバランスな二人。

なのに『魔術師』と『妖精』だと聞いた為か、なんとなくこの二人が一緒にいるのが似合っているように思える。

「そつえば、お二人のご関係は？」

ふと思っていた事を聞いてみた。

するとアンナさんは、え？、という顔をした直後、耳まで真っ赤にしてしまう。

ウィンさんの方は変わらず微笑んでいる。

なんだろう……。二人ともそれぞれ違う反応を示している。
だがなんとなく思う。

私は魔術師と妖精と言うぐらいだから、ウィンさんがアンナさん
を使役してるのかと思っただのだが、そうではないらしい。

「僕が旅をしたとき疲れた僕がうたた寝してて、起きたらいつの
間にかアンナが膝枕していたんです。僕が倒れていると勘違いした
らしいですが。」

その後も僕の事を気にかけてくれたのか、一緒に行きたいと言
ってくれたんです。僕としても一人旅は寂しく感じていたところな
んで嬉しかったです」

ウィンさんが言うとアンナさんは顔を赤くして俯いてしまう。

「アンナは優しいですよ。今も何もしてやれない僕なんかと一緒に
いてくれますし。ありがとうございます」

「い、いえ。私が、す、すす、好きでしている事なんで、き、気に
しないでください」

しどろもどろになるアンナさん。しかも『好き』という言葉が妙
に言い辛そうだった。

なんだかアンナさんがかわいらしく感じた。

第二楽章 『 f a t u m 』【運命】 『 3 (後書き) 』

一目ぼれってあるんですかね…。
書いといてなんです…。

「あ、すいません。無駄話が長くなってしまいましたね」

ウインはそう言いながら頭をかき微笑む。

そっだ。本題を忘れていた。

私も額に手を置いてクスクスと笑ってしまう。呼んだ張本人が忘れるなんて、あっちゃいけないのに。

私は凜の肩をポンと叩く。

「この子についてなんだけれど、多分分かるでしょ？」

私がウインに言うと、ウインの顔が真剣な表情になる。

そして凜を見つめている。

凜の方は一体なんだろうと緊張している様子だった。

しばらくして表情を和らげるウイン。

「とても珍しいお方ですね。例えるならば、まだ磨かれていない寶石の原石、って所でしょうか。興味深いです」

言いながら微笑むウイン。

ウインらしいたとえと言うかなんと言うか…。

確かに原石と言うのは的を得ている。

「この子、カモ何も持っていないのよ」

「この霊力の量で普通に暮らしてきたなんて、本当に珍しい」

ウインは眼を輝かせる。

昔から珍しいものや興味が惹かれるものが好きみたいだが、それは今も変わらないらしい。

まるで科学者が発明家のようなのだ。

前に同じような事を本人に言ってみた事がある。ウィンが言うには、魔術師とは『知識を求める者』らしい。その『モノ』について追求し、知識を得る。それを繰り返し、その過程で魔術を身につける。だから確かに科学者なんかと変わらないかもしれない、らしい。まあ魔術師や魔法使いすべての者に言える事じゃないみたいが。

「で、僕を頼ってきたのはどうして？」

私は凜から袋を受け取り差し出す。

「これを貰ったのを思い出してね、何か案があればと思ったんだけど。力がつけられないにしても、守る術すべを持たせることは出来るんじゃないか、ってね」

私の言葉にウィンは困ったような顔をした。

ちよつと無理な相談だとは思っていた。でも何かあると期待していたのだが。

「うーん、難しいですね。その守護石しゅごいしにしても、用意するのに時間が掛かりますし、どれだけ強いものでも期限がありますから。それだってもう期限が切れそうですからね。

仮に魔術を身につけさせるにしても、時間がありませんし……」

懸念していたが、やはりウィンも同じだった。

私は最初、守護石のような物を持たせる事を考えていた。

だが、物事にはどれにも期限が設けられてしまう。それが魔術にしても言える事だ。永遠なんてありえないのだから。

期限が切れる都度用意してもらつ手もあるが、それでは効率が悪い。

ならばいつその事、凜に守る術を持たせればいいのではないかも考えた。

簡単でもいいから魔術を身につければ、身を守る事が出来るかもしれないから。

だがそれも無理なようだ。

「魔術は学問的なモノなので誰にでも出来るはずです。でも時間は掛かります。すぐにと言われても簡単なものじゃありません。短くても二ヶ月は欲しいですし、僕自身そこまでは出来ませんから」

「そうよね…」

まあ大体そうは思っていたが、残念ながら無理のようだ。

前にいるウインは、力になれずすみません、と言いながら頭を下げた。

私が無理して呼んだのだからあまり気に病まないで欲しい。私のほうが悪いのだから。

「さて、じゃあ振り出して事か…」

「すみません。私なんかの為に」

悩む私たちを見て気を悪くしたのか、申し訳なさそうな顔をする凜。

「気にする事無いわ。もう少し考えてみましょう?」

そう言った直後、ウインと共に来ていた妖精のアンナが手を上げ

た。

「ご主人様、私に一つ考えがあるんですが」

アンナはウインの耳元に囁く。

それを聞くウインがニコニコしている。

「それは良いかもしれませんが。すごいですね、アンナ」

「ありがとうございます！ ご主人様」

ウインはアンナの頭を撫で、撫でられているアンナは目を細め気持ちよさそうにしている。

このバカップルめ。

ウインさんと夏美さんをおいて場所を移す俺たち。

何も聞かされず、ついていった先は事務所の屋上だった。

「あの、アンナさん。こんな所でどうするんですか？」

不安そうに尋ねる凜。聞かれた本人はただ、待ってて、と言って作業をしていた。

アンナさんは屋上の床にしゃがみこんで黙々と何かを書いていた。

先ほど話していた時に、いきなりチョークを貸して欲しい、と言うから慌てて俺が買いに行った。チョークなんてあるわけないし。

帰ってきてそれを渡すと、屋上に行くと言って今に至っている。

2 m程の大きさの二重の円を書き、間の四方向に文字のような何かを書き込み、中に星のようなものを書いている。これって…。

「『魔方陣』、ってやつですか？」

悪魔などの召喚や結界などに用いる模様。実際には見たことは無いが、本やテレビで見たことあるようなやつを思いだす。立ち上がり腰に手をやりながら、こちらに体を向ける。

「ちつつち、基本的にはそんな変わりないけど、これは『マジックサークル』って言うものよ。『魔法円』とも言つかしらね。四つ書いてあるこれらには四大元素が書かれているの」

一つずつ指を刺していく。

「これが地のタブレット」

対方向の文字を指差す。

「こつちが水のタブレット」

横方向に移動して指差す。

「火のタブレット。そして…」

残りの文字の元に歩いていき、指を差す。

「最後は風のタブレット」

そして円の中に入っていく。

「それら四大元素の力を借りて、この魔術は行使する事が出来るのよ」

後ろ手でもつこり微笑むアンナさん。

簡単に言ってくれるが、多分それ程簡単な事じゃない。

聞いた事があるが、魔術はしつかりと心の中でも形作る事が大切だそう。イメージとはまた違う、想念といったところだろうか。

魔法円を書いたからといって、そこで終わり、と言うわけじゃなく、そこから先が大事なのだ。

素人には出来無いと思う。今ここで同じように書かれている模様が書けたとしても、やはりそこから先が難しい。だから一般人が出来る事はないと言う。

そしてアンナさんは手を少し広げ目を瞑る。すると円が光り出す。

「じゃあ少し待っててね」

「え？」

聞き返すが何かぶつぶつと呟き始めたアンナさんは聞こえてない。そして、光が包み込み、アンナさんが消えてしまった。

「え…、どういう、事？」

いまいち状況が飲み込めない凜は俺に聞いてくる。

だが自分も何がなんだか分からない俺は、さあ、と言うだけだった。

私たちはそれぞれ上に行く前に用意してもらっていたコーヒーと紅茶を飲む。

ここに残るのは私とワイン。
だがワインに先ほどまでの穏やかな表情がなくなっていた。

「それで…、あなたの方はどうなんですか？」

「……どうって？」

話しかけられた私は、マグカップをテーブルに置く。
同時に、はあ、とため息を吐くワイン。

「あなたがこの国に来た目的は、どのくらい達成できているんですか？、ってことです」

まわりくどい事も言わず、直球で聞いてくる。顔に似合わないその行動は昔から変わらない。

「あなたの姉である千秋さんを追ってきているのは知ってるんです。いまさら隠す必要なんてない、そんなの知っているでしょう？」

「別に隠すつもりなんて…。ただあなたに言う必要は無いと思っただけ。そうじゃない？」

これは私個人の問題なんだか……」

「まだあなたはあの事を悔やんでいるんですか？」

言い終わる前に言ってくるワイン。

その言葉に何も言えなくなる私。

「あなたは旧約聖書の『アベル』のようになりたかったんですか？」

一度聞いた事があったが、どんな話だったか。

確か、兄である『カイン』に……。

「自分が殺されれば良かった、そんな事考えていないですよね」

胸が締め付けられる言葉。

私は言い返したいのだがなかなか声が出てこない。
だが私は必死に言葉を紡ぎ出す。

「それなら……、こんな事にならずに済んだのにね……」

波紋が起きているマグカップの中のコーヒー。

まるで私の心のようにだ……。

しばらくの間、私と成瀬君は屋上の手すりに寄りかかりながら、アンナさんが現れるのを待っていた。

五分ほど待っているが、いまだに戻ってくる気配は無い。

「どうしたんだろうね？ アンナさん」

「さあ…。と言つかいきなり消えたけど、どっか行ったの？ …まさか、失敗なんてないよな」

疑問と不安を残し、消えてしまったアンナさん。どうしてしまったんだろう。

日曜の昼下がり。暖かい日差しの中、寄りかかりながら座っている私と肘をついて空を見上げてる成瀬君は待ちぼうけを食らっていた。

きっとウインさんに耳打ちしていたことなんだろうけど、なぜか教えてもらってない。ただこちらから聞かなかったというだけかもしれないけど。

しかもいきなり待ちぼうけを食らってしまったので、私たち二人はほとんどしゃべってなかった。

このままだと気まずい…。

「ね、ねえ、成瀬君。そういえば成瀬君の家族も同じ退魔士なんだよね？」

私は成瀬君に話しかけてみた。当たり障りが無いように、危ない話題でいってみる。

「え…、あ、うん…」

あれ？ 返事があまりよくないのでちょっと不思議に思う。
成瀬君の表情も少し硬そうに思えた。

「あ、ごめん。なんかまずかった？」

私はあまり深入りしない方がいいかもしれないと思った。

飄々（ひょうひょう）とした感じの彼だったので、そんな顔をしたのは意外だった。

「いや、別に…。ただね…」

「ただ？」

聞かなきゃいいのに聞いてしまった。

ただ流れて聞き返してしまった私が本当に馬鹿だと思った。だがここまできたら聞いてみるしかない。

成瀬君は手すりから肘を離すと、私の横に座り込む。
表情は変わらず、視線は遠くを見つめているよう。

「親父と兄貴は…、死んだんだ…」

その言葉は冗談と取れないような響きで私の耳に伝わる。
周りの音が遠くなっていくような感じがした。

「死んだって…、この仕事で？」

「うん。まあ仕事柄仕方ない事ではあるけどね。戦うんだし、生き

るか死ぬかだから」

成瀬君は淡々としゃべる。

その表情はどこか悲しげで、私の胸がズキッと痛む。これ以上は聞いちゃいけない気がした。

「もういいよ…。なる…。」

「ただいま」

こちら側の肩を掴み、成瀬君の言葉を止めようとした瞬間、魔法円と呼ばれる模様が光りアンナさんが現れた。

私たちを見て、ん？、という顔をするアンナさん。いきなりだったので私は肩を掴んだままだった。

それを見て何を思ったのかニヤニヤしている。

「あ、ごめん。お邪魔しちゃったかな」

ヤバイ。何か勘違いしている。

慌てて手を離す私。だが、アンナさんはニヤニヤ顔のままだ。

「ち、ちがいますからね！ アンナさん！」

「はい」

絶対に分かっていない。返事が適当だ。

というか成瀬君も否定をしてくれ！ 無駄だとしてもそれくらいはして欲しい。

その当の本人は我関せずといった感じで魔法円に興味心身だ。気持ちは分かるが。

そういえばとアンナさんを見てみると、いなくなった時から何も変わらない格好だ。荷物があるわけじゃないし、手には何も持っていない。

「あの、それで突然いなくなりましたが、何してたんですか？」

率直な疑問をアンナさんに聞く。

えっとね、と言いながらアンナさんは手を広げキョロキョロする。何をしてるんだろう。

「ちょっと待つてね。おい」

何をするのかと思えば、服の胸元を摘み、中に話しかけた。

いきなりの奇行にギョツとする。

「え？ あの…。何してるんですか？」

「この中にいるのよ。恥ずかしくてこんなとこ隠れちゃって」

隠れてる？ 何かいるのだろうか。

よく見てみると、お腹の辺りでもぞもぞと何かが動き、声が漏れてくる。

アンナさんがそれを必死で出そうとするが、なかなか出てきてくれない。と言うより逃げているようだ。

「キャ！ そ、そこはくすぐりたい。やめて」

くすぐったがるアンナさんは、往生際が悪い、と言って軽く服の上から叩く。

小さな悲鳴が聞こえ、ポトリと床に何かが落ちる。

それは人形のように見えた。だがよく見ると、息をしている。目を回し、床に倒れているそれは、白い修道服のようなものを着ている。髪の毛は長くきめ細かく青っぽい色。そして背中に蝶のような翅はねを生やしていた。

? ?

「今日もいい天気。お掃除日和だわ」

昼下がりの暖かい日差しの中、私は教会の掃除をしていた。しばらくの間、私のご主人様であるウイン様は『ニホン』と言う所に旅行に行っていて、私が留守を任されている。

でもあの人も無責任だ。いつもどこかに行っちゃうし。それを止めないで一緒に行っちゃうアンナさんもアンナさんだ。二人きりでいたいのは分かるけど…。

まあ今はもう慣れてる。それにここには私以外に四人もいて、それをまとめるのが私の仕事。だから私が頑張っていなければ。

私は白い修道服を気かけながら掃除を続けた。汚れちゃ目立つちやうし。

「ただいま」

教会の扉が開くと同時に声がする。振り返るとそこにはご主人様と一緒に旅行に行ったアンナさんがいた。

「アンナさん、おかえりなさい。やっと帰ってきたんですか？」

私は持っていた雑巾を放し、アンナさんの元へ飛んでいく。
文字通り『飛んで』。

アンナの目の前で翅はねを羽ばたかせて飛んでいた。

「ごめんね。いつも留守番頼んじやって」

「別にいいですよ。慣れてますから」

手を頭に置いて申し訳なさそうにするアンナ。どうせいつもの事だから謝らなくていいのに。

「あれ？ ご主人様は…」

いつもは二人一緒に帰ってくるのに、ご主人様の姿が無い。
私がそう言うとアンナが私に近づく。しかも笑顔で。

「いや、私が帰ってきたのは用があってね」

何か嫌な予感がする。

私は少し後ろに下がった。気付かれないようにゆっくりと。

「へ、へえ。それで……、どうしたんですか？」

不安混じりの私の声を聞いて、アンナはまた私に近づく。

それでも私は後ろに下がって逃げていた。しばらくそうしていたのだが、遂に教会の壁に突き当たってしまい、逃げ場がなくなってしまう。ヤバイ…。

「用って言うのはね…」

冷汗を流しながら私は逃げようとした。だがそれは叶わず、アンナの手に乗まってしまう。

「あなたの事なの。ちょっと来てくれる？」

「え、ちょ……」

返す間もなく私を服の中に入れてしまった。

「ちょっと出してください！ どこに行くんですか！」

私の言葉に何も返してくれない。それがなんだかとても不安を掻き立てる。

私は服の中で抵抗するが、そんな事アンナさんは意にも介さない。そしてアンナさんが呪文を唱え始めた。これは……。

「や、やだ！ どこにも行きたくない！」

「お願い。これは人助けなのよ。あなたにしか頼めないの」

人。それは私がいあまり関わりたくないものだった。ご主人様を除いて。

それを聞いて抵抗の動きを一層強めていく。

「ひ、人って…、余計イヤです！ 何をさせる気ですか」

「でもご主人様と一緒に暮らせているんだから大丈夫よ。ホントに人見知りなんだからシャルったら。やってほしい事はあっちに着いてから話すわ」

「それ、は…」

そう言われると何も言い返せなくなる。

私はあまり人は好きじゃない。というか妖精が好き好んで人と接触しようとしたのは、私知ってる中ではアンナさんしか知らない。でも、助けられてからではあるが、ウィン様と共に暮らしている事は事実だ。

でもでも、何をさせられるか分からないし……。

「じゃ、行くわよ」

まだ結論が出ていない私をよそに早速目的地に向かおうとする。

「待って、待ってください！ あの子達はとうするんですか！」

「あ、そうだった」

よかった。何とか一時の足止めには成功した。だが、その直後だった。

「大丈夫ですよ。私達なら」

姿は服の中なので見えないが、声でなんとなく分かった。

「エアリー！ 何で……」

「私たちの事なら心配なく。もう私たち四人でなら大抵の事は出来ますから」

声に悪気が含まれてないが、私の事を助けてくれる気配は無い。
涙が出そうだ…。

「じゃ、そう言ってる事だし、行こうか？」

「いやあ~~~~~！」

私の悲鳴は誰かに届くのだろうか…。
そう考える間もなく、アンナさんは私と共に転送された。

第二楽章 『 f a t u m 』【運命】 『 5 (後書き) 』

祝20話目！

それでも5万文字か……。長くは書きたいんですけどね…。

「そんな…、私には出来ません。ご主人様の言う事なら聞きたいですが…」

私は俯いたまま拒否の態度を崩さない。意地でも折れないつもりだ。

「君なら任せられると思ったんですよ」

「…でも、私…」

別に気に食わないわけではないのだ。

ご主人様の頼みは重々分かってるし、私もしてあげたい。ただ――

するとウイン様は人差し指で、私の手を取る。

私はゆっくりと顔を上げて、ウイン様の顔を見た。

「お願いです。いつまでも、という訳じゃないですから」

何も知らないウイン様は私に微笑みながら頼んでくる。

はあ…。やっぱりアンナさんには敵わないんだろうな…。

目を回す着せ替え人形のような生き物を、アンナさんは拾い上げ

手の中に抱え、俺達の元へ歩いてきた。

それは透き通るほどに白い肌で、アンナさんのように髪を長く伸ばしている。サラサラとした髪の色は青い。

服は白いが、修道服といわれる物だろうか、テレビなどで見たことがある。

「コレも妖精、ですか？」

「コレとは失礼な！ 正真正銘妖精よ。私とは違う種類だけどね」

俺たちが話していると妖精が目を覚ました。

焦点が合わないようで必死に俺たちの方を見ている。

しばらくして俺たちを視認出来た妖精は、慌てて後ずさり翅を羽ばたかせてアンナさんの後ろに逃げていった。

そして肩の辺りから顔を半分出してこちらの様子を窺^{うかが}っていた。アンナさんは苦笑いを浮かべる。

「ごめんね。この子人見知りなのよ」

そう言いながらアンナさんは妖精に指を伸ばし、頭を撫でた。目を細め気持ち良さそうだ。

隣を見てみると凜がその光景を見つめていて、目が輝いていた。しかも分かるぐらいにそわそわしている。

「あの…」

凜が恐る恐る声をかけると、妖精はビクツとしてまたアンナさんの後ろに隠れた。

あっ、と凜は少し残念そうな声を出す。

「どうしたの？」

声をかけてきた凜にアンナさんが聞き返すと、凜は近づいていった。

「私にも…、触らせてくれませんか？」

その顔つきは真剣で、アンナさんは少し戸惑っている。きつと凜は小さな動物とか好きなんだろうな。

そこまでではないが、そういう俺もなんとなくチワワを連想させるあの妖精が気になってしょうがない。

妖精はより一層後ろに隠れていくのだが、そうはさせまいとアンナさんは妖精の首の後ろのほうの服をつまむ。

え？、という表情をする妖精を無視して、アンナさんは俺たちの前に差し出す。

キョトンとしていた妖精だったが、俺たちが近くにいると気付くと、涙目になった。

「か…、かわいい〜！」

そんな事に気付いてないのか、それとも気にせずなのか、凜は叫ぶと手を出し妖精を掴む。そして抱きしめた。

妖精は凜の手の中で手足を使って少し抵抗をしていたが、全然意に介さず凜は手を離さない。

しばらくして観念したのか、妖精は動くのを止め、されるがままだった。

そして顔の前に妖精を持ってきて、顔を合わせる。

「お名前は何て言うんですか？」

「あつ…、えつと…、『シャルル・リシエ』…、です…」

妖精は困ったような顔をしながら答えた。

その様子に凜はますます心奪われてしまっている。ポーっとしてシャルルという妖精を眺めていた。

「それでこの妖精と凜がなんか関係あるんですか？」

俺が率直な疑問をぶつけると、大アリよ、と言うアンナさん。俺には分からない。

すると凜とシャルルは少しづつ話し始め、少なからず気を許せるようになってきたようだ。まあ一方的に凜の方から質問して、シャルルが答えるって感じなのだが。

「でも、すごいですよねウィンさんって。二人の妖精と一緒に住んでいるなんて」

感心した俺の言葉にアンナさんは、ううん、と言って否定した。

「まだ他に四人の精霊がいるのよ。しかも…」

「しかも？」

「『四大元素』^{しだいげんそ}、って知ってる？」

『四大元素』？

確か五行思想と似たやつで、昔の哲学者が「万物の根源は『風』^{アルケ}と『火』と『水』と『土』の四つの元素それぞれから成り立っている」、とか言っていた中の四つの元素の事だ。厳密に言えば元素ではないのだが。

東洋は主に五行思想、西洋が四大元素説だったかな。よく比較される事が多いみたいだ。

現代では『地水火風』ちすいかふう や 『風火水土』ふうかすいど などと言われて、ゲームやマンガなんかでしょっちゅう使われてたり、タロットの小アルカナの4スートの棒、剣、杯、硬貨にそれぞれ対応させたりするけど、みんな知らないんだよな。

「その四大元素のそれぞれに対応する『四精霊』と呼ばれる精霊があっちにいるのよ」

「はは。何でもありだな…」

確か精霊って、水と火に対応する精霊は相性が悪くて一緒にいられないはずだけど。

それ考えると本当にウインさんってすごいな。

「あ、来たんですねシャル。待っていたんです」

と、その時、扉の方からそのウインさんの声がした。そちらを見ると夏美さんも一緒に立っていた。

ウインさんがこちらに歩いてくると、シャルルが凜の手の中をすり抜けて、飛んでいく。

シャルルはウインさんの周りを飛び回り肩に着地すると、お久しぶりです、と言ってスカートを両手でつま掴みながらお辞儀をする。

「いつも留守の番を任せてしまってますいません。あの四人は大丈夫でしたか？」

「いえ、気にしないでください。四人も仕事が出来るようになったので大丈夫です。私も助かるぐらいですよ」

「きつと君の教え方がよかったんですね。任せてよかったですよ」

ウインさんはお礼を言いながら、シャルルの頭を撫でる。

シャルルは恥ずかしいのか、顔を赤くしながら下を向いていた。

するとウインさんはこちらの方を向き近づいて俺と凜の前に立ち、両手を広げシャルルに乗るように促^{つな}がした。

シャルルは不思議そうな顔をしながら素直に従って、ちょこんとウインさんの手に座った。

「来てもらって早々申し訳ないのですが、君に頼みがあるのです」

「はい、なんでしょうか？」

「この子の事をお守りしてください」

その言葉に固まったようになるシャルル。全然頭の中が整理出来ていないようだ。

「どういふことでしょうか？」とシャルルが聞く。

「君にこの子の事を守ってあげて欲しいんですよ。この子に君が魔術を教えるついでにね」

シャルルは黙り、思考が止まっているようだった。

目もウインさんを見つめたまま固まっている。

ウインさんが指でシャルルの肩を揺する。するとシャルルは意識が戻った。そして…。

「えええ~~~~~!!」

シャルルは開口一番に叫ぶ。その声は小さな体に似合わないような大きさだった。

ウインさんはシャルルちゃんの手を離すと、シャルルちゃんを私に差し出す。

だけどシャルルちゃんはウインさんの指にガシッとしがみつき離さない。目には涙を浮かべている。

「私…、ご主人様の…、そばにいたいんです…」

泣き出しそうなのを我慢して、搾り出すように声を出す。

ああ、きつとこの子ウインさんのことが好きなんだろうな。

そんなシャルルちゃんを見てウインさんは彼女の頭を撫でる。それでも指を離さないシャルルちゃんにウインさんは話しかけた。

「大丈夫。しばらく日本にいたので会いに来ますから」

「でも…」

なんだか私は申し訳ない感じだった。

私のせいでシャルルちゃんの大好きなウインさんのそばから離れてしまうのだから。

でも私には他に方法があるわけではないし…。

「本当にお願ひします。君にしか頼めないんです」

ウィンさんの言葉にピクリと反応するシャルルちゃん。どうしたんだろうか。

「私…、だけ？」

シャルルちゃんの言葉に反応したようだ。

それを見てウィンさんは微笑みながら黙って頷く。そしてシャルルちゃんは涙を拭い、分かりました、と言う。

シャルルちゃんは私に、掌を出してください、と言うので私は従って掌を出した。シャルルちゃんはウィンさんの指を離し、私の掌に飛んできた。そしてそこで膝について座った。

「しばらくの間、ご主人様の命に従い、あなたのお傍にいさせて頂きます。よろしくお願いしますね」

「え？ 大丈夫なの？」

余程『私だけ』というのが嬉しかったのか、一転引き受ける事にしたシャルルちゃんは、私の言葉に、はい、と頷きながら答える。
私は指を差し出す。

「じゃあよろしく」

「はい。えっと…」

あ、そういえば私自己紹介してなかった。

「桜井 凜。凜でいいよ」

「わかりました。よろしくお願いしますね、凜」

シャルルちゃんは私の指を握り返す。ホントに可愛い。
これでひとまず安心かな？、と私は思った。

「でも、そんな子で大丈夫なの？」

と、突然成瀬君が入ってきた。

そうだ、言われてみれば私の事を守ってくれると言う事は、襲われた時に戦わなくちゃいけないんだよね。成瀬君の言うとおり、この子にそんな事出来るんだろうか。

それじゃあ、と言って微笑むシャルルちゃん。

「試してみますか？」

そういうシャルルちゃんの顔は自信満々の顔だった。

私の前には鞭を持ってきた成瀬君が立っている。

ちよつとドキドキしている私。本当に大丈夫だろうか。

「大丈夫ですよ、凜。私に任せてください」

私の肩にいるシャルルちゃんは勇気付けるように私に声をかけてくれる。

シャルルちゃんの笑顔に少し心が軽くなった気がした。

そして私は右手の指を見る。そこには見た事も無い文字が刻まれている。

ウインさんから渡された物で、刻まれている文字はエノク語と呼ばれるモノで、シャルルちゃんの名前が書いてあるらしく、所有者と名を刻まれた者を繋ぐ物らしい。ウインさんが言うには『契約書のような物』だそうだ。

これで私はシャルルちゃんと契約した事になり、それには対価が支払われる事になるようだ。

ウインさんは『凜さんの靈気を支払う事になります』と言うのだが、そう言われても私にはピンとこない。危ないのではないだろうかと思うのだが、夏美さんは、気にしなくてもいいと思う、と言っていたので大丈夫だと信じておこう。

「じゃあいくよ」

そう言って一度鞭を叩きつける。

私はビクツとしたのだが、シャルルちゃんはあまり動じていない。

「いつでもいいですよ。不意打ちでも構いませんから」

笑いながら挑発するような口調で言うシャルルちゃん。
なんか最初のイメージと違う。もう少しおしとやかなイメージだったのに。

「じゃあお言葉に甘えて……」

言い終わると同時に鞭をこちらに振るってきた。

あの、目がマジですけど、私の事を考えてください……。

私が見るには成瀬の振るった鞭は申し分ない攻撃だと思った。

だが狂いも無く身をすくめる凜に向かっていった鞭は、途中で見えない壁に当たったように弾かれる。

成瀬も、凜も驚いたような表情を見せる。

「彼女は風を操れる妖精なんですよ。あれぐらいの攻撃なら風を集め、風の壁のようにする事が出来ます」

と、ウィンが言う。

すると成瀬は鞭を引き戻し、持ち手を短剣のように持ち、近接攻撃を仕掛ける。

「凜。ボールペンを上に投げて」

シャルルがそう言うのと凜は慌てて胸につけていた鉄製のボールペ

ンを上投げた。それを見てシャルルは何かを唱え始める。

成瀬は警戒するが、そのまま凜に向かっていく。

その時、上に投げたボールペンがピタリと止まり、先が成瀬君の方を向いた。

凜の肩に乗るシャルルは手を成瀬に向けた。するとボールペンが意思を持ったように成瀬目掛けて飛んでいく。

寸での所で避け、少し後退する成瀬。

「ちょっと！ 危なくね！」

抗議する成瀬を見てうふふと笑うシャルル。だが向けていた手を下ろそうとしない。

シャルルの行動を怪しく思ったのか、成瀬は足を止める。その答えはすぐに分かった。

避けたはずのボールペンがまた成瀬目掛け飛んできたのだ。成瀬は先読を発動していたようで、それにもうまく反応し避けた。

そのボールペンは凜の元に帰っていき、目の前を風に舞うようにフワフワと浮いていた。

ほう、と感心するよつな声を出すウイン。

「彼、やりますね」

「私が助手として選んだんですもの。これぐらいはね」

とは言ったものの、今の戦況からしてはちょっと成瀬君にが悪い。

いくら攻撃範囲の長い鞭だとしても、主戦場は中近距離だろう。

それに一度手を合わせたときに感じたが、どちらかと言うと得意なのは近接攻撃の方のようだ。

それに対しシャルルは遠距離。しかも懐ふところになかなか入らせてくれ

ない防御方法をとっている。

「もう終わりにしますか？」

立ち止まっている成瀬に声をかけるシャルル。

「まさか。これからだよ」

ニヤツと笑いながら返す成瀬。

後退し、距離を置く。そして息を一つ吐いた。

とは言ったものの、このままじゃ俺に勝ち目はない。

攻撃しても風の盾で守られるし、近づこうにもただのボールペンが鳥のように速く、意思を持って動くように攻撃してくる。あの速さで当たれば結構な傷を負わされるだろう。厄介なものだ。

二つのうちどちらか一つでもどうにか出来ればいいんだが……。

……ん？、そういえば……。

「どうかな……」

俺は一つ思いつき、試してみる事にした。

持っていた持ち手を上に向け投げる。その行動をウィンさんや夏美さんを含め、皆が疑問に思っただろう。

シャルルの目がそちらに注意がいった隙に、俺は間合いを詰めようとした。

だが、すぐに俺の方を見たシャルルは手を向けてきた。それと同

時にボールペンが向かってくる。

「考えが幼稚すぎです」

笑いながら言うシャルル。カチンときた。手合わせだとしてもなめられるのは好きじゃない。

向かってきたボールペンを避けると、ピタリと立ち止まった。

「やっぱり無理か」

「当たり前ですよ。そんな策が通じると思……」

「でも」

俺は上を指差す。シャルルは言葉を止め、疑問に思いながらそちらを見た。

俺の投げた鞭が凜目掛け落ちていく。

「危ないよ〜」

俺が気の抜けたように言うと、シャルルは慌ててその鞭を風壁ふうへきで防御しようとした。

それを見て俺は一気に走り寄る。

走りながら見てみるとボールペンが落ちていた。思ったとおりだった。

「俺の勝ち」

「あっ」

俺の声に反応したシャルルだが、距離を考えるともう遅い。いくら妖精でも出来る事は一つ。魔術だってそう何個も同時に操作できるはず無い。

どちらかに意識をそらせばどちらかがおろそかになる。そう思いやってみたらドンピシャだった。

あとは一応シャルルでも掴んで『参った』とでも言わせて終わらせよう。そう思った。

だがここでイレギュラーな事が起こってしまった。

「ギャ！」

シャルルがこちらに気を取られたために、風壁を忘れてしまったのだ。

当然のように落ちてきた鞭は凜に落ちていき、頭にヒットした。ていうか避けるよ。

頭を打った凜は、そのまま気を失い倒れてしまう。

一時休戦になり、俺は凜に駆け寄った。

「キユウ〜…」

「ごめんなさい、凜！ 大丈夫！？」

いや、大丈夫ではないだろう。

倒れてしまった凜に懸命に声をかけながら頬を叩くシャルル。その凜はいまだ目を回した状態だ。

やれやれと俺は近寄り、凜を抱え夏美さんたちの方を見る。

「とりあえず下行きましようか？」

「そうね。その子が大体どのくらい出来るかは見れたしね」

夏美さんの返事を聞き、俺は凜を抱え下に向かう。

「凜、大丈夫かな…」

落ち込んだような声と表情のシャルル。

俺は、大丈夫だよ、と言っても凜のそばを離れなかった。

なんだか頭がズキズキする。

確か屋上でシャルルちゃんの腕試しをするとかで成瀬君と手合わせをしてたんだ。

それでその時に成瀬君が鞭を上には振り投げて、それがそのまま私に当たったんだっけ。目の前の状況についていけなくてポーっとしちゃったんだよね。鈍くさいってよく言われるんだよね、私…。

それにしても痛かったな、あの鞭。成瀬君もあんな重い物を振り回してたんだ。大変だなあ。

あれ？ そういえば、あの時手合わせの時に私って…

「いなくても良かったじゃん！」

私が叫びながら起き上がると「キャ」という悲鳴がし、ポテっと落ちたような音がした。

そちらの方に眼を向けると、そこにはシャルルちゃんがいた。私

の上に乗っかっていたのだろうか。

「ごめんね、シャルルちゃん。乗ってるの分からなくて」

「ううん。大丈夫です。私より凜の方は大丈夫ですか？」

「ちょっと頭がズキズキするけど、大丈夫だよ」

シャルルちゃんは、よかった、と言い胸を撫で下ろした。

ふとシャルルちゃんの横に袋のような物が落ちているのに気付いた。

見た感じぶよぶよしてて、水が入っているみたいだ。『氷のう』とかいうやつだった。

するとシャルルは慌てて氷のうを体を広げて隠そうとする。小さいので隠せてないけど。

「ずっと見ててくれたの？」

私の問いにシャルルちゃんは目を逸らしながらこくと頷く顔が赤くなっている。

ありがとう、と言いながら撫でてあげると、もっと顔を赤くして俯いてしまう。可愛いなあ。

私は手を出し乗ってと言つと、シャルルちゃんは素直に私の手に乗ってくれた。

「でも本当にありがとう、私なんかのために。これからお世話になるのにいきなり迷惑かけちゃったね」

「いえ、気にしないで下さい」

優しく微笑みながら私の事を気遣ってくれる。優しい子なんだな。

「もしかしたらこれからも迷惑かけちゃうかもしれないね」

「ふふふ。大丈夫です。お世話したり面倒見るのは得意なんですよ。がんばりましょう」

「そうだね。大好きなウィンさんのためにもね」

「はい。……へ？」

私の顔を見ながらポカンとするシャルルちゃん。

私の言った言葉をやっと頭に入ったのか、みるみる顔が赤くなる。茹蛸ゆでたこという表現がピッタリなほどに。

「な、なな、なん、で……」

言葉もうまく出てこないようで、声も上擦り、うまくしゃべれない。

聞きたいことは分かる。だから私は、内緒にしておくよ、と言ってあげた。

シャルルちゃんは恥ずかしそうに下を向いてしまう。ホントに可愛い。

「ま、とりあえずこれからよろしくね。シャルルちゃん」

腑に落ちない顔をしながら頷き、こちらこそ、と言うシャルルちゃん。

指と手で握手をする私たち。これからの誓いをこめて。

* * *

紡がれていく物語。

四人の物語はさまざまな色で紡がれていく。

第二楽章 『fatum』【運命】 了

く 間奏曲 1 く

「ここが凜のお家ですか」

私の胸のポケットにいるシャルルちゃん。

あの後事務所で夏美さんたちと話をしていたら夕方になり私は事務所を後にした。

そしてシャルルちゃんと家に帰ってきた私は、玄関を開け中に入る。

「ただいま」

家の中を響いていく私の声。すると奥の方からパタパタと足音がし、隠れて、と言うとシャルルちゃんはポケットの中に隠れた。

音が目の前まで来ると、そこにはエプロン姿の母親が。

「おかえり」。今日も遅かったんやない？ 何かあったんか？」

柔らかいしゃべり方で聞いてくる母に、ううん、何も、と言って返した。

母は腰の辺りまであるロングヘアで、すらっとした体つき。娘である私が見ても和風美人を連想させ、とても似合っている。

私もこんな風になりたいな、と思い髪を真似ているのは内緒だ。恥ずかしいし。

「どうしたん？ そんな所に立ってへんで、はよ上がりい」

母の言葉に促され、私は玄関を上がり部屋へと向かう。母はそのまま台所の方へ戻っていった。

「綺麗なお母さんなんだね。凜のお母さん」

「ありがと。でもホントお母さんってすごいんだよね。歳よりもずっと若く見えて綺麗だし…」

シャルルちゃんの言葉に私も同意しながら歩いていく。

すると階段を上っていこうとした時、上から妹の真理まじが降りてきた。

それを見て今度は何も言わなくてもシャルルちゃんはポケットの中に隠れる。

そして髪を纏まとめながら降りてくる真理は、纏め終わると私に声をかけてきた。

「おかえり、お姉ちゃん。今帰ってきたの？」

「うん。そっちは今日は部活じゃなかったの？」

「部活は午前中だから、お昼過ぎには帰ってきてたよ」

ポニーテールにしている、三つほど歳が下だというのに私と身長が変わらない妹。家の中だからか、Tシャツと学校の半ズボンというラフな格好をしている。

背格好も顔つきもあまり変わらないのだけど、胸が…、私より…。返事もせず私が恨めしそうな目で胸元を見ていると、それに気付いた

「もう、お姉ちゃんたら。私だって出来る事ならこんな胸お姉ちゃんにあげたいよ。クラスや部活の男子ヤローどももここばっか見てくるし」

「ごめんね、と私が言っても、ぶつぶつとまだ文句を言っている綾。相当胸に関してのストレスが溜まっているみたいだ。悪かったかなあ…。」

私と違い運動派の真理は部活をやっている、中学二年生でありながら空手部の副キャプテンでエースなのだそうだ。

いつか聞いた話だと、空手を始めたのも『格闘技をやれば胸が小さくなるかも』というのが理由らしい。確かにオリンピックに出て柔道やレスリングの女性の選手を見ると胸が小さい人が多い気がするけど…。

でもそんな浅知恵が理由で、しかもそれでエースになるほどまでになってしまったのだから凄い。

「じゃ、先行くよ。お姉ちゃん」

そのまま別れ、真理は下に。私は部屋着に着替えるため自分の部屋に向かった。

部屋に着くとポケットにいたシャルルちゃんが、ふう、と息を吐きながら出てきて、ベットに寝転がった。

「疲れた〜。やっと落ち着ける」

「ごめんね。さすがにバックの中は心配だからポケットにしてもらったの」

十分バックの中も入れると思うのだけど、見えないので何かあってはいけないと思ったのだ。

心配でバックを変に警戒して持つてるより、ポケットにいてもらった方がいくらか楽だ。

ウィンさんとの話だと、「シャルのような妖精は本来人間には見えないのですが、凜さんが凜さんですから、家族にはもしかしたら

見えてしまつかもしれません」と言っていたので、一応最初は隠れてもらう事にし、後々様子を見ながら探っていく事にした。

見えないのであれば離れずにいられるし、ご飯とかも気にかげずに食べさせられるようになるし重要だ。

「でもどうやって確かめればいいかな。いきなり目の前にシャルルちゃんを出すのは無理だよな」

「見えてしまっていたらその時点で意味がないですからね」

部屋着に着替え終わった私はベットにいるシャルルちゃんの横に腰掛けた。

しばらく二人で一緒に考えていると、シャルルちゃんが一つ思いついた。

「凜はこれって見えますか？」

「え？ なに？」

私が言うとシャルルちゃんは羽を羽^はばたかせ、目の前を飛び回る。すると気に留めてなかったのだけど、シャルルちゃんの飛んだあとに何かが飛んでいた。それはまるで蝶の鱗粉のようで一つ違う点を挙げるなら、輝くようにキラキラと舞っていた。

手を出すと掌に落ち、チラチラと光っている。なんだかラメのようで綺麗だ。

「これって？」

「『フェアリーダスト』って言うんです。中には『ピクシーダスト』とも言う人もいますけど」

「へ〜、そうなんだ。あ、じゃあこれを見せてみればいいって事？」

はい、と言って頷くシャルルちゃん。

「これなら私が行かなくてもいいですね」

「そうだね。シャルルちゃん頭いい！」

私が寝めると頭に手を置いて照れくさそうにしている。

そんなシャルルちゃんを私は指で撫でてあげた。

「お姉ちゃん、降りてきなよ。ケーキあるよ？」

ちょうどその時下から真理の声がした。私は早速試すべく、ベッ
トから立ち上がった。

手の甲に鱗粉がついているのを確認し、出て行くことするとシャ
ルルちゃんが呼び止めてきた。

「？ どうしたの？」

「あ、あの…、早く…、帰ってきてくださいね。慣れない所で一人
と言つのは…、寂しいので…」

下を向いてもじもじとしながら言ってくる。

確かに私だつて知らない場所で一人にされたら寂しい。ましてシ
ャルルちゃんのように小さな体だと余計だろう。

私はシャルルちゃんの前まで行きしゃがむ。

「うん。確かめたらすぐ戻ってくるよ。ケーキも持ってきてあげる」

「はい！　ありがとうございます。凜」

私の返答に、ぱあ、っと笑顔になるシャルルちゃん。

その笑顔に私はつられて笑ってしまった。とても綺麗な笑顔だ。

下に降りていくと真理は先にケーキを食べていて、お母さんの方は台所の方にいた。

私は真理の向かい側に座り、用意されていたケーキを少し口にする。

ケーキは生クリームとスポンジ、イチゴというシンプルな材料で作られた、いわゆる『ショートケーキ』というやつだ。

食べてみるとクリームは甘すぎず、スポンジはふわふわでとても美味しい。

真理の方も余程気に入ったようで、いつもは食べるのが早いのだが、ゆっくりと味わいながら食べていた。真理の美味しい物を食べる時の癖だ。

「美味しいね、お姉ちゃん」

「ホント。これどこで買ってきたの？　お母さん」

「ケーキ屋さんが近くにできたんですよ。開店記念ゆつて安かったから、買ってしまっただんや。たしか棒線が多い名前やったんやけど……」

うーん、と唸りながらお母さんはこちらに顔を向けずに答えた。

なんとなく名前が分かったのだけど、今はそれどころではない。
私は早速自分の手の甲を真理の方に向ける。

「どうしたの？ お姉ちゃん」

「いね、どう？」

「どう、って…」

そう言っただけで私の手の甲を見つめる真理。その様子をドキドキしながら見つめる私。

真理はしばらく見つめた後、ケーキを一口含んで飲み込むと顔をこちらに向けた。

「何？ ケガでもしたの？」

真理は首をかしげながら答えた。それを見て私はふうつと息を吐き、なんでもないと行って安心する。

すると横の方から近寄ってくる音がした。

「どうしたん？ 二人で何話してはるん？」

夕飯の準備が終わったのか、お母さんが私の脇に座り、一緒に持ってきた紅茶を私と真理の前に置いた。

夕飯の用意をしていたのいつの間にも用意をしたのか、お母さんの手際の良さに驚かされる。

持ってきた紅茶を口に含むと、とてもリラックスするような味わい。

「これってレモンティー？」

「でもなんか味が少し違うよね」

不思議に思いながら私と真理が聞くと、頼杖をついているお母さんは、分からんか？、と言う。

「それは砂糖代わりにはちみつを入れたんよ。ま、簡単に言ってお茶で作ったはちみつレモンや」

そう言われてみれば少しハチミツの味がした。

レモンティーのほのかな酸味とハチミツの優しい甘味がとてもマツチしている。

私がまたカップに口を付け紅茶を口に含むと、お母さんはニヤニヤしながらこちらを見て口を開く。

「もしかして…、昨日の彼の話か？」

その言葉に口の中のを逆流させてしまい、自分の顔どころかテーブルの方まで吹き出してしまった。

真理は、大丈夫？、と言いながらテーブルを拭き、お母さんは笑いながらも慌ててタオルを持ってきて私に手渡してくれた。それを受け取り私は顔を拭く。

「フフ。凶星やな」

「ち、違うよ！ それと成瀬君はただの友達……」

「ふ〜ん、そうなんか。女子高通いで男友達なんてなあ」

「うう…」

ああ…。成瀬君に言っておくべきだった。
私と真理は中高一貫の学校に通っていて、しかも女子校。当然だがそこに男子なんていない。
私から聞かずとも妹の真理が通っているのだ。ごまかせるはずがない。

「でも、そっか。へえ。お姉ちゃんがねえ」

「ねえ。ほんまに。男つ気がなかった凜ちゃんがねえ」

母と妹二人は私を見ながら同じようにニヤニヤしている。こつこつ所を見ると、似た物親子だなんて思う。

私はそんな二人の顔を見て苦笑い。

そして素早くティーカップとケーキを持ち、立ち上がった。

「こ、これ自分の部屋で食べるね！　じ、じゃあ」

あまり詮索されるのは避けたい。そう思った私はそそくさと自分の部屋へと向かっていった。

振り返りはしなかったが後ろからは、逃げられたか、という声でした。かなり楽しそうな声で。

これ以上あそこにといたらきつと根掘り葉掘り聞かれてしまっていただろう。

居間を出た私はひと息つき、そのまま部屋まで歩いていきドアを開ける。

「おまたせ、シャルルちゃ…、ん？」

部屋にあるベットの布団の上で小さくなりながら寝息を立ててい

るシャルルちゃん。小さな体なのにそのせいで余計に小さく見えた。時間としてほんの十分程。

そんな短時間で寝てしまうなんて、余程疲れていたのだろう。慣れないところだから気疲れも相当あったはずだ。無理もない。

寝ているシャルルちゃんを優しく手で持つて、布団に寝せ、毛布をかけてあげる。

「おやすみ、シャルルちゃん」

寝顔を見ながら、私は声をかける。

何も言葉を返しては来ないが、安心して眠っているのを見て私は微笑んだ。

く 間奏曲 1 く (後書き)

小説内に出てきたレモンティーの飲み方についてですが、私は結構好きですよ。

ただもしかしたらクセがあって苦手な人がいるかもしれませんが、機会があればお試しください。

く 間奏曲 2 く

凜が帰ったあとの事務所。

そこには俺と夏美さん、そしてウインさんとアンナさんがいた。今日はさすがにもう夕方という事もあり、ここに泊めて欲しいよ
うで、こちらは別に問題はないので快く承諾した。

今はそのために悪いのだが俺の部屋で寝てもらったために部屋を片付けている。

さすがに客人をソファアールなんかで寝せるわけにもいかない。ウインさんは構わないとは言ってくれたが…。

「そうは言ってもそこまで片付けるような物も無いんだよな」

やったのはベットのシーツと布団のカバーを取替え、あと掃除機をかけ、簡単に片づけをしただけ。

必要最低限の物しか持ってきてはいないので、これと言って片づけするほど散らかっているわけではないし。

「掃除良し。片付け良し。ベット良し、と。」

指差し確認をし、やり忘れが無いかをチェックする。大丈夫だと確認したあと、掃除機を持って部屋を出た。

歩いていくと突然事務所の中から話し声が聞こえてくる。

「これは私の問題なの。口を出さないで」

聞いた事の無い夏美さんの怒気を含んだ低い声が聞こえてきた。

それを聞いた俺は開けようとしたドアをゆっくり少し開き、物音を立てず様子を窺いながら聞き耳を立てた。

「はい。それは分かっています。ですがもう千秋さんの案件をいつまでも隠す事はできませんよ。ドイツ政府からの日本政府に対して行っていた情報操作の働きかけも限界があるんですから。自分の国の不祥事なのに優位に立っているのは良くわかりませんが…」

「…」

「あなたの気持ちは察します。でもあなたは自分から志願して案件処理に来たんです。そろそろ進展があつてもいい頃じゃないですか？」

ずっとウインさんの言葉を聞き、黙っている夏美さん。

ウインさんが口にした『政府』、『情報操作』、そして『千秋さん』…。

ふと昨日の夜の事を思い出す。

案件の場所に向かい、そこで出会ったリリイと名乗った女性の霊。それを夏美さんは「千秋姉さん」と言っていた。

そしてその後、あの霊について調べてみると何故か情報が出てこなかった。

あれは情報操作によるものだったのか…。どうりで情報が出てこないはずだ。まさかこんなからくりがあるとは思わなかったし。

「まあ無理もないですよね。霊体だとしても実の妹だったら、姉を庇いたいという気持ちが出てもおかしくはありません…」

「違う！ そんなんじゃない！ ただ私には私のやり方があるの。第一あなたに口出しする権利はあるの?!」

声を荒げ否定している夏美さん。だがそうなると分かっていたの

か、いたって冷静なウィンさん。

「権利なんて言われれば、そりゃあないですよ。僕とあなたはただの知り合いってだけですし、僕なんか今じゃほとんど退魔士の仕事なんてしてないですから」

夏美さんは、分かっているじゃない、と言って視線を横に移す。

その先には様子を窺っていた俺。

目が合いどうにも気まずく、どうすればいいか分からず、とりあえずウィンさんの方に声をかけた。

「えっと…、片付け終わったんすけど。」

「あ、そうですね。すいません、わざわざ。それでは休ませてもらいますか。アンナ、起きて」

ウィンさんが足を枕にされ寝ているアンナを起こす。

なんでも移動魔法はかなり疲れるらしく、今回は凜のためにやってくれたらしいが、普段はあまりやりたくはないらしい。

そのアンナさんは寝ぼけたような顔をしているのだが、ゆっくりと立ち上がった。

目がしっかり開いていないアンナさんの手をウィンさんが握った。

「では失礼します」

行くよ、といってフラフラとしているアンナさんを引っ張り、ウィンさんは部屋を出て行く。

そして部屋には俺と夏美さんは取り残されてしまった。

立っているのも変なので、夏美さんの向かいのソファーに座り、しばらく無言のまま過ぎていく時間。壁に掛かっている時計の針の

音だけが部屋に響いていた。

俺から切り出そうにも何を言っているのか分からず、ただそわそわとするだけだった。

その様子を見てか一つ息を吐き、夏美さんから口を開いた。

「…聞いてちゃった？」

「…」

俺は何も答えられない。

そんな俺を見て、夏美さんの方から声をかけてくれた。

「ちよつと、外歩こうか？ 巡回がてらね」

夏美さんは静かに立ち上がり外に向かう。落ち込んでる様子でもなく、ただ冷静に。

俺は鞭を取りに行った後、外で待っている夏美さんのもとに向かった。

外はもう暗くなり星が明るく輝いている。四月という事もあり、あまり寒くはない。

少しずつ家の明かりが消えていく街の中を歩いていく足音は二つ。俺たちの事情を知っているかのように人通りがない。

しばらくの間夏美さんは前を、俺は少し後ろを歩いていた。

「いつかは知られると思ったんだけど、まさかこんな形でなんてね」

「…すいません。事情は聞かないみたいなさ言ってたくせに。俺…」
俺は約束を破ったように思えてちよつと申し訳なかった。
声が聞こえたからといって聞いていい事なんてないのに、俺は聞いてしまったのだから。

俺が落ち込んだような声で言うと、クスっという声が出た。

「別にいいわ。気にしないでいいわよ。どうせもう遅いんじゃない？」

「そつ…、つすね…」

少し言葉のやり取りをすると、また俺たちはしゃべらずに歩いていった。

俺は前を歩く夏美さんを見る。

後ろで手を握り、少し上を見て歩くスーツの後姿。それがいつもの凛々しい姿には見えなかった。

ただそこには一人の女性としての『水華月 夏美』がいた。

「聞いたとおり、私はある案件でこっちに來てるの、って今更隠す事もないよね。どうせ分かってるだろうし…」

「あの女性の…、リリイって名乗る靈の排除…、つすか？」

「…うん」

立ち止まらず、夏美さんはこちらに顔を向けずに返事をする。俺もただその後を追って歩くだけ。

傍から見れば変な二人組みに見えるだろう。でも今はそんな事気

にしない。

今はただ、夏美さんの話を聞いていたかった。

「どうやってこっちに来たのか、リリイは日本に現れたの。それを知って驚いたドイツの退魔士政府機関は躍起になって事実をもみ消そうと動いたわ。まさか処理の失敗どころか国外に逃がしてしまっただんですもの」

滑稽よね、と笑いながら言う夏美さん。

「このままでは国の威信に関わる、そう判断した政府は秘密裏に案件解決することを示唆した。幸い逃げた先は国の関係性からも優位に立てる国だったからね。だからすぐに事は進み計画は決行されたわ。その計画は…」

「ドイツから退魔士を送り込み…、その問題を公おおやけの場に知られる前に処理をさせる…」

「ご名答。なんとも簡単な計画でしょ。で、その退魔士が私わたしってわけ」

信じられない話だ。そこまで大事おおいじだったなんて…。

自分自身長い間この仕事の世界で生きてきたが、そんな事が行われるなんて思ってもいなかった。

それにしてもこの国の立場って一体どんな位置なんだろう。相手の方が悪いと言うのに、それを簡単に相手の言う事を聞いてしまっているなんて…。って今はそれはどうでもいい。

そんな事よりも…

「夏美さんは出来んすか？」

「何が？」

「そのリリイと言う霊の…、排除を…」

俺がそう言うと、夏美さんはピタリと止まる。

下の方を見ながら一つ息を吐いた。

「それが私の仕事だからね。自分から志願したん……」

「でも……、姉さん……、なんすよね」

「……」

前を向いていた夏美さんはこちらを向いた。その顔は儂げな笑顔で、とても弱弱しい。

そんな夏美さんを見るのは初めてだった。

そして夏美さんは空を見上げる。

「だからこそよ。そもその原因が私なんだから……」

「え……？」

意味が分からない。

そして上を向いていた夏美さんは、もう一度俺の方を見た。

「だって……、私が姉さんを殺したんですもの」

夏美さんの口から想像つかない言葉が出てきた。

そう言った夏美さんは無表情で表情を変えず、ただ俺の方を見て

いる。

昨日の夜、あのリリイが言っていた言葉を思い出した。

『また…、私を殺すの？ 夏美』

それを思い出し、俺は何も言う事が出来なかった。ただ夏美さんの目を離さないように見ているだけだった。

すると夏美さんはクルツとまた前を向いて歩き出し、そして俺も追いかけていく。

俺たち二人はただ当てもなく歩いていた。

後ろから夏美さんのことを見ながら思う。

俺には何も言う権利なんてないかもしれない。だけど今はこれだけは夏美さんに言いたいと思った。

だからこそ、か…。

そんなもの、ただの強がりだ。そんな言葉を言ってしまった私がとても滑稽だった。

もしかしたら自分に言い聞かせるためだったんだろうか…。だとしたら尚更おかしい。

だってそれじゃあ、『自分が何のためにこの国にいるのか忘れていた』、と言っているのと同じだ。『だからこそ』、という私の言葉と矛盾している事になってしまうし。

そんな事を考えながら歩いていると、そつと後ろから成瀬君が話しかけてきた。

「大丈夫っすよ」

拍子抜けするような言葉に私は、え？、と聞き返してしまった。

「夏美さんだけじゃないんすから」

後ろに振り返ると、歯を見せ笑っている成瀬が。

その顔を見て私はキョトンとしてしまった。

「一人で何でも抱え込まないでくださいよ。助手の俺がいるんすから、もし辛くなったら俺に面倒な事全部丸投げしてもいいっすよ」

そんな事を平気で言う成瀬。その笑顔はとても無邪気な歳相応の顔。

そんな成瀬のギャップがとても可笑しくて、私は不覚にも笑ってしまった。それは反則だと思う。

まったく。私より何個も下の子に励まされてしまうなんて、なんか悔しい。

「フッフ、ありがとう。そうね、じゃあそしたら早速甘えちゃおうかしら。はっ」

「ちよ、やめてくださいよ！　そういう事じゃないんすから！」

ちょっとした仕返しで、成瀬の腕を組む。

突然の行動にビックリした様子の成瀬。効果は抜群のようだ。

そして成瀬が振りほどこうとするが、私がいっかりと腕を握ってしまい敵わず、成瀬はあきらめ黙って腕を組まれたままだった。

今は大丈夫だと分かっているけど、いざという時はどうい風にな

るかはわからない。

だけど今は、こんな何でもない日々が続く事を祈るだけだった。

人々の行き交う街の中。その中でも一際多く人がいる大通り。そこには横断歩道が『x』のような形になっている交差点があった。

横断歩道の信号が赤から青に変わり、人々が一斉になだれこむ。それはいつもの何一つ変わらない風景だった。

「きゃあああ!？」

だがそれは一人の悲鳴によって日常を『非』のつくものに変えた。その悲鳴に集まっていく人々。その中心にはナイフを持ち、首から血を流している女性が倒れていた。

見てしまい吐き気を訴える者や、不謹慎にも携帯で写真や動画を撮ろうとする者もいた。

そんな中、一人の女性が何も干渉しないといった感じで人だかりから離れていく。

すれ違つ人の中にはもしかしたらこの後一人ぐらいは驚く者もいるだろう。

遠くからサイレンの音がする。

それで辺りはまた騒ぎ出し、不運にも人ごみでその女性を隠していつてしまった…。

桜の花も散り始め、四月も半分以上過ぎた日のお昼過ぎ、事務所の中はまったりとしていた。

夏美さんは案件などの報告書類をまとめていて、俺も夏美さんの書類の手伝いをしていた。

「ルリちゃん、はい、ケーキ」

「あ、おいし〜」

それを尻目に凜は呑気にお茶なんてしている。シャルルのやつも一緒になってケーキを食べていた。

俺たちの分も買ってきてはくれているらしいが、今は食べられる状況ではない。ちょっと悔しい。

一旦手を休め、聞こえるか聞こえないかぐらいの声でつぶやいてみた。

「…太るぞ」

すると、どこからともなく現れたスリッパが俺の頭を『スパーン！』と叩く。

どうやらシャルルが風を操ってやったようで、なんか無意味に起用だ。と言うかどんな地獄耳だ。

頭をさすりながら凜たちのほうを見ると、鬼のような形相で睨んでいる。

どうやら結構気にしているみたいだが、男の俺からしてみれば別に食わなきゃいいと思う。

女はやたらとスイーツに弱い。「別腹だから」とか言って食ってるけど、結局カロリーは摂取してるんだし、太るのは当然だろう。

だがそんな事口には出さない。言ったらどんな目に会つか…。

「シャルル。いきなり叩く事はないだろ。ちょっと言っただ…。」

「それよりも成瀬君、今少し失礼な事考えてない？」

有無を言わさないような速さで俺の言葉を遮り、今にも襲ってきそうな顔で凜がこちらを見て言う。

「どうやら地獄耳は俺の心の中にまで届くようだ。」

「いいえ。そんな事はありませんよ」

「あなたが凜に対して敬語を使うなんて…、おかしいですよね？」

シャルルも同じように怖い顔で言う。

しまった。痛いところをつかれた。まあ本来は年上である凜に対しては敬語を使うのが当たり前なのだが、今になって直すのは遅いかなと思ひ、凜に対しての言葉遣いはそのままだった。

「そ、そんな事よりさ、『ルリ』ってシャルルの事？」

このままだと危ないと思ひ、咄嗟とつとに話を変えた。

ジト目をし、腑に落ちないような顔をしたが、そつだよ、と言つた凜は、シャルルと顔を合わせ、ねえ、と言つ。シャルルも同じ様にして返していた。

知り合つてからそれほど経っていないのだが、二人とも今ではかなり仲の良い友達といった感じだ。

それにしてもルリって言うのはどういう所からきたんだ？

「で、その呼び名はどこから？」

「名前だよ。ルリちゃんの名前つて、『シャルル＝リシエ』って言うでしょ？ その姓名の名の最後の『ル』と姓の方の最初の文字の『リ』を合わせて、『ルリ』ちゃん」

なるほど。でもなんでウィンさんたちが呼んでいた『シャル』じやなかったんだろう。

俺が疑問に思っていると、それが分かったように凜が言う。

「それにね、髪の色が夏美さんに貰った守り石と同じような色だったでしょ？ 調べてみたらその色が群青色って言われる他に、『瑠璃色』って言うらしくてね、その偶然がなんだか…、嬉しくって」

そう言った凜は少し頬を染めていた。

俺はシャルルの髪を見ると、確かにあの時渡した石の色と一緒に一緒だ。そういえばあの石、ラピスラズリって言ったよな。

ラピスラズリの『Lazuli』はペルシア語からアラビア語に入った『Lazward』って言う語が起源で、天や空という語意らしい。サッカーなどのイタリア代表の愛称である『Azzeri』の元の語で空の青を意味する『Azzerro』の語源にもなったとも聞いた気がする。まあ今はあまり関係ないが…。

風を自在に操る妖精に天と空って、かなり合っている気がする。偶然なのかも知れないが、純粹にいい呼び名にしたなと思った。

「ふう。やっと終わった。凜ちゃん、私にもケーキお願い出来る？」

そんな事を思っていると、いつの間にか夏美さんが仕事を終わらせてしまったようだ。

凜は、はい、と言って皿に箱の中から一つ取り出したのを乗せ、夏美さんの机に持っていく。

ありがとう、と言って受け取った夏美さんが一口口にした。

「あ、おいしい」

「そうなんですよ。これお母さんが見つけたお店で、ケーキが結構おいしいって評判なんですよ」

「へえ〜。で、そこって何て名前のお店なの？」

夏美さんが聞くと少し苦笑いになる凜。そんな凜を俺も夏美さんも不思議がる。

「『羅生門』…、って名前なんです…」

凜の口から出てきた名前は全然予想もしなかった名前だった。美味しいケーキのお店だから、きっと英語かなんかの名前だと思っただが、漢字だったとは。

「最初お母さんが名前を覚えていなかったんで、いけるかどうか分かんなかったんです。でも棒線がいつぱいって言うてたから、きつと漢字の名前のお店だと目星をつけて近く探してみたら見つかったんです。でもまさかあんな名前とは思わなかったですけど…」

まあ探し出したのもすごいのだが、よく中に入れたな。

しかも羅生門って…。

もしも小説の題名から名前を付けたのだとしたら、内容が内容だけにすごいチヨイスだと思う。でも逆に食べてみたいとも思う。

俺もやっつと仕事を済ませ、早速凜からケーキを受け取るうとする。差し出された皿を取ろうとすると、凜が離してくれない。

「あ、あの〜…」

「…謝らないの？」

笑顔で言う凜。

でも表情とは裏腹に、とても怖い。全然笑ってないように見える。一応俺なら無理矢理ケーキを奪う事は可能だ。でもそんな事してしまつたら後で何をされるか分かつた物じゃない、そう感じさせる雰囲気を持っていた。

そんなのを逆なでするような事はしない。こんな時に俺が取る行動は一つ。

「ごめんなさい」

深々と頭を下げ謝る事だ…。

成瀬君に謝罪をさせると私はすぐに手を離れた。

別にそこまで怒ってはいなかったけど、いつも私の事を年上と認識してないような態度だったから少しからかつただけだ。

いや、でもデリカシーのない言葉には少しムツとはしたけどね…。

「ちょっとテレビ見てもいいですか？」

どうぞ、と夏美さんの了承を得て、テレビをつけた。ルリちゃんも興味心身で見ている。

どうもルリちゃんは今までテレビを見たことがなかったらしく、こっちに来てからテレビが好きになったみたいで、いつも見ている。聞いてみると「いろんな知識が得られて、とても便利」だそうだ。でも間違つた情報は止めて欲しい。

ある日お風呂から部屋に帰ってくると、中で必死にルリちゃんが
机の引き出しを見ていた。

『ど、どうしたの？』

私がルリちゃんに聞くと、引き出しから顔を出してこちらを見る。

『未来へはここから行くんですか？ この国の乗り物はすごいです
ね！』

と言うルリちゃんの顔はとても輝いていた。

何を見たのかはすぐに分かった。きつと青くて自分の事を猫と言
い張るロボットの出るアニメだろう。

しばらくルリちゃんが机の引き出しをガサゴソと探し回るのを、
私は止める事が出来なかった。

テレビの電源を点けると、ニュースが始まったばかりだった。

休みの日とはいえニュースがないわけがないけど、丁度谷間の時
間帯だったようだ。

私がチャンネルを変えようとした時、聞いたことのある街の名前
が出てきて手が止まった。

画面が切り替わり、見たことのある風景が映し出される。

「あ、ここ…」

それは今私の住んでいる街の栄えている場所だった。

なんでも近くに空港が出来るみたいで、その周辺に当たる場所は都市開発の為にいろんな企業が進出してきている場所だった。道路の幅も建っている建物も大きくなって、まるで今までとは別世界になっっていると言う。

そんな場所でどんな事件があったのか、私は気になって画面を見つめる。

なんでも街の中にある大通りの横断歩道で自殺した人が出たようだ。

死因は首を切つての大量出血による失血死。ニュースによると手に持った刃物からはその本人の指紋しか出ておらず、現場で目撃者もない事から自殺と断定したようだ。

「あんな所で自殺するなんて…」

いつの間にか一緒に見ていたのか、成瀬君が一言呟く。

「自殺に場所なんて関係ないんじゃないの？」

「だって死にたいなら他に場所があるじゃん。何もわざわざ人目のつく場所する必要がないし、万に一つの可能性で正義感の強いやつが偶然そこにいたら自殺自体止められてしまうかもしれないだろう？ほら。意味がないじゃん」

万に一つとは…。まあ他人に関心をもつ人なんて今の時代ほとんどいないかもしれないけど、悲しい事を言わないでよ、成瀬君。でも確かに成瀬君の言われて納得する。

そしたらなぜこの人はこんな所で自殺なんてしたんだろう。

「余程の寂しがり屋か、あるいは…」

私の疑問を察してか、ルリちゃんが呟く。

「誰かに操られたか……。でもそんな簡単に出来るわけじゃないし、出来る者もそうそういないんですけどね」

そう言っつてルリちゃんはまたテレビを見る。

その言葉は今までの私にとって現実味のない話なのに、今では信じてしまいそうだ。だって言っているのがルリちゃんだし。

「どう思います？ 夏見さ……」

夏美さんの方に顔を向けると、夏美さんはとても険しい顔でコーヒークップを見ていた。私の声が聞こえなかったのか返事もなかった。

私が、夏美さん？、と言っつとようやく気がついた夏美さんは、はつと私のほうを見る。

「あ、ごめんなさい。ボーっとしちゃっつて」

「いえ、気にしないでください。夏美さん、疲れてるんですか？」

そうかもね、と言っつ夏美さんの顔は確かに悪い。

でもそれは疲労によるものというより、どこか……

「じゃあ、ちょっと寝させてもらっつわ。ごめんね」

そう言っつて急に自室に向かっつ夏美さん。事務所を出て行き、扉がしまる。

いきなり私とルリちゃんと成瀬君は事務所に取り残され、しばし無言でいた。

ルリちゃんは相変わらずテレビに夢中。成瀬君もケーキを食べていた。

私はなんとなく最後に見た夏美さんの顔が気になった。

「成瀬君…、夏美さんどうかしたのかな？」

成瀬君はケーキを食べ終え、淹れておいたコーヒーを飲む。そしてこちらを見て、

「多分大丈夫だと思いますよ」

「ふん。そう…」

私はそっけなく返してきた成瀬君に、同じようにそっけなく返す。でもなんとなく分かった。

きっと成瀬君は何か気付いているんだろう。

私に敬語使ってるし…。

私は部屋に入り、扉に背を預けながら閉めた。

深く息を吸い込んで、それを全部吐き出す。でも、それでも気持ちには落ち着かない。

ふと私はシャルルが言っていた言葉の一部が頭に浮かぶ。

『誰かに操られた』

その言葉を聞いて私の心臓の鼓動が早くなった。そのために私はそれを抑えるために黙り込んでしまった。

信じたくはない。だってその証拠はないし。でも、私は今それを出来る者を知っていた。

私がこの国まで追いかけて、昔からよく知る者を…。

「姉さん…」

そう呟くと私はベットに倒れこみ、手を広げ仰向けになり天井を見つめる。

そして目を瞑り、あの日、この国で久しぶりに出会った姉さんを思い出した。

生前に見た姉さんと変わりない姿。でもそれは姿だけで、わかっていた事だけど、もうあの頃の姉さんではなかった。

私が殺してしまう以前の姉に…。

トントン、とドアを叩く音が聞こえ、私は目を開く。

いつの間にか少し寝てしまったようで、部屋に入った時から二〇

分程経っていた。凜の言うとおり疲れているんだろうか。

私は上半身を起き上がらせて、はい、とノックに返事をする。

「成瀬です。ちょっといいですか？」

成瀬か…。何か用だろうか。

私は少し考えた後、いいわ、と言って許可した。

ガチャリとドアが開かれ、入ってきた成瀬の手にはコーヒーカーブが二つ。

私はベットに腰掛けたまま、どうぞ、と成瀬に言われて手渡されたカップを受け取る。

成瀬はカップを手渡すと、壁に向かっていきそのまま寄りかかった。

「…どうしたの？ 急に」

そんな成瀬に私は問う。なんとなく成瀬が何かを聞きたいという雰囲気があった。

「…はい、少し気になっていた事がありました…。前に『椎名 莢』って子の案件があったじゃないですか。その事で」

「…」

私は返事をせず、ただ黙って成瀬の言葉を聞いていた。

成瀬は一度手に持ったカップを口に付け、一口飲む。そして離し、真剣な表情でこちらを見てきた。

「その後に出会った、その…、リリイって奴がその子の名前を出していましたよね？ あの子の件…、もしかしてその霊が絡んでるん

「じゃないですか？」

私は驚いた。

成瀬はどうも同ランクの退魔士より少々『勘』が鋭いようで、些細な事で何か疑ってくる。

正直ここまで出来る者とは思っていなかった。

今となつては、成瀬はあんなその場しのぎの募集で来る程度の者ではない。

それを私は自分より若く、しかも学生という事もあり、心のどこかで成瀬を侮っていた。

でも成瀬は立派な一人の退魔士だった。侮っていた自分を恥じる。

「どう…、なんですか？」

さつきよりも増して真剣な表情の成瀬。先ほど凜に対してたじたじだった者と同一人物とは思えないような雰囲気。そんな違いにおかしくなり、私は口を押さえた。

「ちょ、酷いですよ。俺は真剣に聞いているのに」

「フフフ。ごめんごめん」

確かに失礼だ。成瀬が真剣に聞いているというのに。

私は少し深呼吸をして落ち着くと、成瀬の方を向き、眼鏡の位置を直して成瀬を見つめた。

「…うん。あれはきっと姉さんの仕業。あの人の能力は知ってるから…。隠すつもりはなかったんだけどね」

私は一旦成瀬に貰ったコーヒーを飲んだ。

いつも飲んでいるのだが、苦いけどいい香りで暖かく、とても心が安らぐ。おかげで落ち着いて話せそう。成瀬はそれを考えて持つてきてくれたんだろうか。そんな気遣い、どこで憶えたんだろう。そんな事を考えつつ、口を離し私は続ける。

「『言霊操作』…。それが姉さんの能力なの」

「それって…」

「名前の通りよ。言葉で対象を操る、ただそれだけ。だけど、それはとても危険なもの…」

それを聞いて成瀬は黙ってしまった。

きつと伝わったのだろう。その能力の危険性を。勘が良い成瀬なら尚更だ。

私はゆっくりと立ち上がり、窓の外を見る。

部屋の外は日が暮れてきていて、空がオレンジ色になっていた。

そういえばいつの日だったか、こんな夕暮れ時にあの人が言っていた。

『私はこの能力、好きじゃない。関係ない誰かを傷つけちゃうかもしれないから…』

あの言葉は本心だったはずだ。

あの時の姉さんの顔は、不安げに見ていた私を心配させまいと笑顔だったが、どこか悲しげな表情だった。

それが夕暮れ時という事もあり、より寂しさをかもしだして、あの顔を今も忘れられない。でも…。

「…じゃあ、あの子はその能力で操られ自殺した、って事ですか？」

「多分ね…。あの人もそんな感じのことを言っていたし…」

私は遠くを見つめながら答えた。

そう。あの人は一人の少女を殺してしまった。その能力ちからを使って…。

「それじゃあニュースの自殺ももしかしたら…」

そこまで言って成瀬は言葉を止めた。

今回のニュースの件、あれだけでは分からないが、もしかしたら場所が場所だけに自殺というのは考えにくい。成瀬もそれを考え私に聞いてきたのだろう。

もしそうだとすれば…。

考えたくはないが可能性にはあり得てしまう。

「夏美さん、どうしますか？」

成瀬が私に問う。

「…確かめるしかないわね」

私は呟くようにそう言うと、分かりました、と成瀬は言って静かに部屋を出て行った。

部屋の中は静けさを取り戻し、外から夕方のチャイムが聞こえてくる。

私はカップの中身を見つめた。

コーヒーは黒く濁っているのに、口に含めばとても美味しい。

なのに同じように黒く濁っている私の頭は、私の心の中を暗くしていくだけ…。

「なんでかな…」

私はそんな独り言を言う。

それはただ部屋の空気を振るわせるだけだった。

俺は部屋を出てカップを洗うために台所へ向かう。そして流しでカップを洗い始めた。

何かしていないと落ち着かなかった。

「はあ…」

一つ大きな溜息をする。自分でしておいて憂鬱な気分だ。

俺はなんであんな事を聞いたんだろう。あのニュースだって自殺と言っていたのに。

それでも俺はなんとなく夏美さんの様子が変わると、あの時気がかりだった事を思い出してしまい、何か関係があるんじゃないかと聞かずにはいられなかった。

本当はあまり答えたくはないはずだ。なのに夏美さんはちゃんと答えてくれた。それが余計罪悪感を増していく。

カップを洗い終え、食器棚に置き、支度をする為に自室へと戻った。

部屋に入って支度を始めようとしたその時、机に置かれたアルミケースが目に入り、それを手に取る。

開くと中には一枚の写真。真ん中には小さい頃の俺、そしてその後ろには…。

「兄貴、親父。俺はあんな事聞けるような奴じゃないのにな…」

そう言っつて写真を見ていたが、はっと気付きケースを閉じる。今から出かけるというのに待たせてしまつては悪い。

支度を再開し、済ませて外に出て行くと、もう夏美さんが待つていた。

「じゃあ行くところか？」

何も咎めずそう言つ夏美さんはいつも通りの夏美さんに見えた。それがまた俺の罪悪感が沸く。

「はい。お待たせしました」

俺は努めて冷静に返事をし、そして夏美さんの車に乗り込むとあのニュースで言つていた場所へと向かった。

空も暗くなつた頃、俺たちは事件のあつた場所に着き車を降りた。暗くなつたと言つてもまだ時間は七時。交差点には警察官の制服を着ている者がいたのだが、家路を急ぐ者や友達同士で遊びに繰り出す者たちでその場所はにぎわつていた。

事件があつた場所だと言つのに変わりなく生活している人々の様子は、一種の機械のようだ。

そしてこの街も、『人』という『歯車』が一つ落ちてもそれが必要なモノでなければ絶対に壊れない機械だ。決して止まる事なく、ただ動き、廻り続けているだけ。誰も止めることも、まして壊す事も出来ない。

それがとても滑稽に思えた。その機械の中に今、どれ程の物が分らない『俺』と言う『歯車』もいるのだけど…。

目の前の行き交う人達を見る。

「これじゃあ調べられませんか…」

「…そうですね」

俺も夏美さんも人の多さにお手上げ状態だ。あまりにも人が多すぎて調査のしようがない。

しばらく歩いて人がいなくなってくるのを待つしかなさそうだ。

夏美さんはアタッシュケースを持つ。今日は場所が場所なので一つしか持ってきていないようだ。

俺は中に鞭が入っているリュックを背負い、歩き出した。

一緒に歩く俺達は周りから見れば変に見えるはずだ。でも誰も不思議そうな眼で見えてこない。

他人に気を向ける者なんてそうそういない。それが普通だと思う。

「これからどうしますか？」

「そうですね、しばらくは時間を潰すし…」

とその時、遠くの方で悲鳴が聞こえてきた。

「行きましょー！」

すぐに夏美さんが動き出し、悲鳴のした方に向かっていく。

俺もその後引き続き走っていった。

走っていくとすでに小さな人だかりになっている場所を見つけ、そこに走り寄っていき、人ごみを掻き分け、その中の方に入ってい

った。

少ししてほとんど前に人のいない辺りまで行くと、中の様子が見えた。

そこには血を流している男性が。

「成瀬君」

「了解つす」

夏美さんからの言葉はそれだけだが、何をすべきかは分かった。駆け寄り、男性の出血場所を見る。男性の首の部分、がいけいどうみやく外頸動脈と
言われる部分が切られていた。

見た限り出血は多いように見えるが、傷口はそこまで大きくない。早く処置すればなんとかなるかもしれない。

「早く！ 救急車！」

俺がそう叫ぶと近くにいた女性が、私呼びます、と言ってくれた。

そちらの心配はなくなり安心する。

俺はもう一度男性の方を見てリュックからタオルを取り出し傷口を押さえる。これなら血を拭わなければバレル事はないだろう。これで本来の目的が果せる。

そして俺はそつと男性の傷口に靈気を流し込み治療をし始める。最初痛みを感じたのか、体がビクツとした。だがそれでも治療を続けていく。

すると次第に血の気がなくなったように顔色が悪かったのが少しずつ良くなっていき、呼吸も落ち着いていた。ひとまず何とかなりそうだ。

その後も押さえている傷口も大体塞がりそうな時、事件を聞きつ

けた警察官たちがやってきた。報告を受けやってきたのだろう。だが俺に治療されていた男性を見て困惑顔だ。血が出ていた痕があるのに傷がないのだ。驚くのも無理はない。

それを見て夏美さんが近づいていき、警察官たちに話をつける。すると警察官たちは頷き俺たちの素性が分かったようで、周りを取り囲む野次馬たちの整理を始めた。

その後すぐに駆けつけた救急隊員に後の処置を任す。まあ傷は塞がっているからほとんどやる事はないだろうが。

俺は人ごみを掻き分けて外に出て行く。途中俺を見てくる人たちがいたが、気にせず歩いていく。どうせ覚えている人なんていないだろうし。

人ごみから出るとそこには夏美さんが。

「お待ちせしまし、…た？」

俺が出てくるなり、静かに、と小さな声で俺に言う夏美さん。

夏美さんの表情が真剣そのものだったので、俺が不思議そうな顔をすると夏美さんが親指でそっちを見ると声を出さず指示してきた。俺は言われるままにそちらに目だけを向ける。その瞬間心臓がドクンと大きく音を鳴らす。誰を見ろとは言われていなかったのだが、一発で分かった。

するとこちらの動きに気付いたのだろうか、相手が動き出す。

俺たちは気付かれぬよう追いかけ始めた。

学び舎に授業終了の鐘が鳴り響き、私の周りの同級生たちは仲の良い者同士で家路につこうとする人達ばかり。

私も例外なく誰かと帰ろうと同じように支度を始めていた。

「お〜い、リンリン」

すると声が聞こえるのと同時ぐらいに後ろから抱きつかれる。

そしてそのままの態勢で、後ろから腕が伸びてきて胸を触ってきた。

「わ、ひゃ！ ちょ、ちょっとやめてよ！ 雅ちゃん！」

「いいじゃないの。減るもんじゃないし。むしろ増えるよ」

と親父くさい事を言っつて静止する私の言葉を聞かず、手を止めない。

そんな同級生の、永倉ながくら 雅ちゃんはショートカットでスカートの下にスパッツを穿いていて、見るからに活発な感じの女の子。その見た目どおり私とは正反対のスポーツ少女で、部活を三つほど掛け持ちしているという。しかも全部でエース級と言っつからビックリだ。そんな彼女とは一年生の時から何故か友達で、二年のクラス替えで離れ離れになった後もこうして雅ちゃんのほうから私の所へ来てくれる。

人見知りの私からすれば大切な友達だ。会いに来てくれるだけでも嬉しい。

でもいつもの事だけど、雅ちゃんはスキンシップがやたらと多い。今みたいに抱きついたり胸を触ったりしてくるだけじゃなく、一番

ビックリしたのは頬にキスをしてきた時だ。
さすがに雅ちゃんでもやっておいて恥ずかしかったらしい。私な
んか尚更だ。

「も、もういいでしょ？ 雅ちゃん」

「ふむ。わらわは満足じゃ」

なかなか手を止めてくれないので私が言つと、変な口調で返し雅
ちゃんはやつと私から離れた。

私は乱れた制服を直しながら聞く。

「何かあったの？」

そう言つと、あ、そうだった、と言つて雅ちゃんは腰に両手を当
てる

「ふっふっふ。いい情報を仕入れたのよ。今回はとびきりよ」

雅ちゃんは制服のポケットから一枚の紙を取り出す。

その紙には不気味なデザインで『都市伝説』という字が大きく書
かれている。多分家でインターネットの記事を印刷したのだろう。

書いてあるのは『口裂け女』や『人面犬』といった良く聞く怪談
ものや、『影に潜む妖怪』や『ビルの上を徘徊する幽霊』なんて言
う噂のようなものまで書かれていた。

雅ちゃんはこういうものが本当に好きだ。いつも家に帰るとすぐ
にそういうものを調べたりしていると聞いたことがある。

そしてそれを私に話すのがまた好きみたいで、雅ちゃん曰く『リ
アクションが最高！』らしい。私としてはただ単に怖がっていただ
けなんだけど…。

「また怖い話？　今回はどんな話なの？」

「あれ？　あまり怖がらないんだね。最近何かあったの？　反応が寂しくなつたよ」

雅ちゃんは私の手を持ちながらぶんぶんと振って抗議してくる。それを見て私は苦笑いを返す。

「いつまでも子供じゃないもん。毎回怖がってばかりじゃないよ」

「ああ、こうやって小鳥は親鳥から巣立っていくのね。シクシク」

大袈裟に手を目に当てて泣く素振りをする雅ちゃん。

まあ私が本物に出会って怖い目に会ったなんて知らないもんね。あんな事があつた後だと話なんかじゃさほど怖くない。

しかも私にはルリちゃんがいる。こんな頼もしい子がいれば怖がる事もなくなる。

今も胸の中に……。は！

「ちよ、ちよっと待ってね！　トイレ行ってくる!!」

「うん、わかった。待ってるね」

雅ちゃんの返事を聞くと私は急いでトイレに入り、すぐに個室の中に駆け込む。

そして胸ポケットを開き、

「ルリちゃん！　大丈夫？」

「は、はい。何とか…」

そこには服がしわでぐちゃぐちゃになっていて、疲弊しているルリちゃんがいた。

ずいぶんと長い時間握られてたからきつかったはずだ。申し訳ない。

すぐに掌の上に乗せて服を直しやすくしてあげて、髪の毛も少しぼさぼさになっていたので、私は別のポケットに入れてある折りたたみの櫛で髪を直してあげる。

ルリちゃんの髪はきめ細かく絹のよう。少し櫛で梳いてあげるとサラサラとした髪にすぐ元通りになった。同じ女の子としては羨ましい。私なんか朝寝癖直しかかですいぶん手間取っちゃうからなあ。身だしなみを直し終え、ルリちゃんは落ち着くところらに向き直る。

「ふう。ありがとうございます、凜」

「ううん。でもなんとも無くて良かった。心配しちゃったよ」

「ふふ。私もビックリしました」

そう言っつてルリちゃんが笑い、私もつられて笑ってしまつ。

* * *

私と一緒に暮らすようになってからしばらく経ち、今ではこうして笑いあつて話すぐらいになった。

今私たちは、ルリちゃんは魔法を、私もいろんな事を教えあつている。

魔術を教えてもらっている私は、今のところまともに魔術は使え

ない。

ルリちゃんには、ゆっくりでいいですよ？、とは言ってもらえるけど、ルリちゃんの為にも早くここでの件を済ませて帰らせてあげたい。だけど現状はさほど変わらない…。頑張ろう…。

一方のルリちゃんも現代の暮らしというのを知らなかったらしく、いろんな事が初めてだった。

テレビを見るのは初めて、お風呂というのも初めてで、最初は面白くも大変だった。

テレビの時なんかは、

『この中には、私みたいな小さな妖精か精霊を閉じ込められているんですか?!』

なんて言うルリちゃんが、出してあげなきゃ！、と言って本気でテレビを壊そうとしたから必死でルリちゃんを止めた。あれは大変だった。

あとお風呂も入る時、

『私、食べられちゃうんですか?!』

と涙を浮かべて私にしがみついていたルリちゃん。どうも茹でられるのかと思っただけで後あとで聞くと、本当に怖かった、と言っていた。私はそれを見て苦笑いしたけど、なんだかルリちゃんの子供っぽさが見れて、言葉は悪いかもしれないけど面白かった。今ではどちらも慣れてテレビはお気に入りだし、お風呂も大好きみたい。本当によかった。

* * *

そんな事を考えながらルリちゃんの事を見る。

「ん？　どうかしたんですか？」

首を傾げながらこっちを見ているルリちゃん。

私は、うつん、と言って首を横に振った。

それを見てルリちゃんは掌に座る。

「それにしても凜はあの子と仲が良いんですね」

「ありがと。私も雅ちゃんの事が好きだからね。一緒にいて落ち着くし、他の人から見てそんなふうに見えるってホントに嬉しいよ」

「へへ。あんな事されてもですか……。どこか危険な香りがしますね。フッフ」

ルリちゃんは悪戯っぽく笑って言う。

最初何を言ってるのか分からなかったが、ルリちゃんの表情を見て一つ思い当たった。

カアツと顔が熱くなり、鏡なんかなくても赤くなっているのが分かる。

「そ、そんなんじゃないってば！　やめてよ。ルリちゃん」

取り乱しながら慌てて否定する。そんな私を見てもっとニヤニヤするルリちゃん。

確かに私たちの仲がいいのは認めるけど、今ルリちゃんが想像してるようなそんな仲じゃない。

「百合の花って私嫌いじゃないですよ？」

「だから……」

意地悪を言うルリちゃんに言い返そうとしたとき、トイレの入り口の扉の開く音が聞こえ言葉を切る。するとすぐに声がした。

「リンリン。どうかしたの？ 遅いけど」

「あ、雅ちゃん？ ううん、なんでも無い。今電話してて。すぐ行く」

慌てて誤魔化すと、そう？、と言って扉の閉まる音がし、ホッと一息ついた。そしてルリちゃんを胸のポケットに入れ、個室の扉を開く。

「じゃあまた少し我慢しててね？」

「はい。大丈夫ですよ」

そう言っただけでルリちゃんはすっぴりと中に隠れ、私は雅ちゃんの前に戻っていく。

「ニジユウシン？」

「そう。巷でそう言われて今有名なんだから。この頃この近くで自殺者が増えてるって言うのもそれが関係してるってネットの中では噂なんだよ」

雅ちゃんは胸を張って言う。

あの後教室に戻ると雅ちゃんは机を向かい合わせて待っていた。準備万端といった感じで待っている雅ちゃんは向かい側に座るよう促してきて、それに従って席に着き話をして今に至る。

今回の話題は『ニジユウシン』というものらしい。私は聞いたことが無かった。

「それに出会って皆自殺した、って言ってるわ。噂だから変に言えないけどね」

物騒な事を淡々と言う雅ちゃん。だけど話が話だけに面白おかしくって訳ではない。

話自体はそれほど怖いと思わなかったけど、『自殺』という単語に少し背筋が冷える感じがした。

「自殺って…。死にたくない人がそんな都合よく急にそんな事するわけが無いんじゃない？」

私は雅ちゃんの話に疑問を持つ。

死ぬ人の心境なんて全然分からないけど、死ぬのだって理由があるはずだ。理由の無い自殺なんてただの事故と同じだし、まして急に『生』から『死』に意識が向かうのなんてあるはずが無い。

もしそうだとしたらただの精神異常者といえる。

すると雅ちゃんはその言葉を待っていたのか、すぐに首を横に振り人差し指を立てる。

「違うの。ここからがところなのよ。何故なら…」

「…何故なら？」

間を置かれ次の言葉を待つ私はたまらず唾を飲み込む。

「そのニジユウシンに殺された、って噂なのよ」

「殺され…、た？」

また怖い単語が出てきて少し身震いした。けどまた一つ疑問が残る。

「でもニューズなんかでは自殺って断言してるみたいだよ。理由はあるの？」

その言葉に雅ちゃんは、ちょっと待って、と言ってプラスチックの定規を取り出す。

そしてそれを私に差し出す。

「これで自分の首を切るような格好をしてみてください。それで定規のどこを持つのか憶えておいて」

言われるとおり定規の目盛りのあるほうを首に当て切るような格好をする。

そして首から定規を離し持っている位置を確認。確認し終わると定規をそのまま雅ちゃんに手渡した。

雅ちゃんは受け取った定規を私の首に切りつけるような格好をする。でもすぐに止めて持っている定規の手を見せてきた。

「ほら。この違いが噂で出てきてるんだ。分かる？」

雅ちゃんの手を見る。

それを見て少し考え、私の持っていたときの手の位置を思い出す。

「あ。手が逆なんだ」

私が持っていた時、首を切るのに刃の方を親指の付け根の方に向けてたけど、切りつける時の雅ちゃんの手は逆になっている。

注意しなければあまり気にしないこともかもしれない。

逆と言う事は持つ所に付いているはずの指紋の位置が違ってしまうのだ。警察だったらそこに気付いたはずだ。でも検出されたそれが切られた本人の指紋で、位置が違っていただけで少し不思議に思うだけで終わってしまい、そのまま今回の件は自殺として処理されてしまったのだろう。

「さすがリンリン。頭が良いね。でもなんでこんな細かい情報が出回っちゃったのかな…。警察の中の若い人でも流しちゃったのかな？」

確かに雅ちゃんの言うとおりだ。

こんな細部の情報が漏洩してしまうなんて、この国の安全性を疑ってしまう。

まあそんな事は今は関係ないか。

「それで？ 何か別の用件があるんでしょ？」

私はなんとなく雅ちゃんが何か言いたそうな雰囲気だったので言ってみると、待ってましたと言わんばかりに私のそば来て手を握ってくる。

「あのね、それでさ明日行ってみない？ 事件があった場所に。どうせ明日は休みだし」

買い物とかしながらさ、とも付け加えて。

一応夏美さんとかには、あまり危ない所には近づかないように、
と言われてた。私を危険な目に会わないようにという事だろう。
だからちよつととまどったけど、これぐらいだったら大丈夫だろ
うと思ひ、

「じゃあ買物メインなら……」

「ありがとう、リンリン。嬉しいよ!」

私が言い終わらないぐらいのタイミングでお礼を言う雅ちゃん。
ぶんぶん私の手を握りながら振って感謝の言葉を言う。そんな
様子を見て私は悪い気はしなかった。

すると胸の辺りからトントンと叩かれる感触がした。

私が雅ちゃんの目を盗み胸ポケットにいるルリちゃんに、どうし
たの?、と小声で言うつと、

「凜。明日は……」

ルリちゃんがそこまで言うつて私は思い出した。

「あ。でもあしたは午前中に用があるからその後でもいい?」

そういえば今現在の状況の報告として夏美さんたちの事務所に行
く予定があつたのを思い出す。大事な事だからその用事は外せない。
雅ちゃんには申し訳ないがそれだけは行かなくては。

「あ、そうなんだ。うん。別に大丈夫だよ」

雅ちゃんは快く了承してくれ、明日の待ち合わせ時間や場所を決
め始めた。

私は雅ちゃんの話聞きながら、ふと持ってきた紙を見る。

そこには今言っていた『ニジュウシン』の情報か。今までの情報や目撃情報などが多く書いてある。

見たら死ぬ、と言うのに目撃情報があるのは訳、死んでしまう人の決まりがのさだ。

それは、その『ニジュウシン』は死んでしまう人と・・・。

「瓜二つ、か…」

約束の時間までもう少し。私は急ぎ足で待ち合わせ場所へと向かう。

本当は午後からの方がよかったけれど、どうせなら事件のあった時間帯で、なんて言う雅ちゃんの押しが強さに負け、夕方間近の時間となった。

自殺があつた時間は大体夕方から夜にかけての時間帯で、混み合う時間帯だった。そんな時間帯に来てしまった為か思ったよりも時間がかかってしまった。

「こんな事ならもう少し早く出てくればよかつたかな」

「そうですね。それにしても人が多いです。こんなにいっぱいの人を見るのは初めてです」

なんて私たちは普通に会話をしていた。

私は胸のポケットから顔を出しているルリちゃんと話しているのだが、行き交う人はいっぱいいるのに、この様子を気に留める人はいない。意外と人が多い所だとかこういう風に隠す事無くしゃべる事が出来る。

盲点と言うやつだろうか。それとも単に他人に気を向けないだけだろうか。どっちにしても私たちには助かる。

しばらくそんな風に歩いていて、間に合うところまで来た時、歩く早さを緩め、ふと私とルリちゃんは少し前の事務所のことを思い出し話し始めた。

「二人とも大丈夫かな？」

「お二人の様子がちよつと気になりますね」

それは事務所を出てくるちよつと前。

事務所のテレビを点けたときにニュースでやっていた、これから私が行く用事と関係する自殺の事を話していた時の事だ。

私が夏美さんに話題を振った時に見せた表情。そして夏美さんの事を聞いたときの成瀬君の私に対する態度。聞くに聞けないような雰囲気と、時間も時間だったので何も聞けず、事務所を出てきてしまった。

聞いたところで話してくれるか分からないのだけど…。

「でもきつと…、大丈夫だよな？」

「うん。お二人とも腕の立つ退魔士ですからね。大丈夫だとは思いますが…」

お互いハッキリしない事を言いながら歩いていく。こんな風にお世話になつていても二人の事を私たちは何も知らない。

なんだかんだ言つても私もこの行き交う人と同じなんだろうか？
結局は他人だ、なんて思つて接しているのかと思つと自分が恥ずかしくなる。

でもこうしてルリちゃんと一緒にいるとしても、私なんかはやっぱりただの一般人。『退魔士』なんていう特殊な仕事をしている二人とは自然と一線を引かれてしまうのは仕方の無い事なんだろう。なんだろうけど…、わかっているんだけどそれが寂しい感じがした。

「でもどうして凜はそうやってあの二人を気にかけるんですか？
凜は別にお二人の仕事仲間、って言うか退魔士ではないんですよね？」

「うん、そうだよ。でもね…」

「でも？」

「こつやって出会ったのって運命だと思わない？ 二人と出会ったのも、ルリちゃんと出会ったのも、全部が偶然なんかで片付けちゃ駄目な気がするの。勝手な思い込みだけどね」

そう言っつて私は胸ポケットのルリちゃんに微笑みを向ける。そしてそのまま続ける。

「出会ったのはきつと、みんなに私にしか出来ない何かがあるからなんだ、つて思っっちゃうんだよね。フフ。私つて変だよ。何をしたらいいのか分からないくせに、よくそんなこと言っつてみんなに『ロマンチスト空想家』なんて言われちゃうんだ」

そんな風に苦笑しながら言っつ私を見て、ルリちゃんは首を横に振る。

「別に変なんかじゃないですよ。凜は素敵です。私はそんな風に思える凜がうらやましいです」

「えへへ。ありがと、ルリちゃん」

ルリちゃんにそう言っつてもらえ、素直にお礼を言っつ。親友のような存在に自分の事を認めてもらえたのは、なんだか嬉しかった。

「あ、凜。そろそろ急がないと」

ルリちゃんに言われ、そうだね、と返す私は、待ち合わせ場所へと急いだ。

空全体が夕暮れに覆われた頃、約束の時間ちよつと過ぎぐらいに私は待ち合わせ場所の喫茶店に着いた。雅ちゃんのことだ。きつともういるだろう。雅ちゃんはどうも几帳面な性格みたいで、待ち合わせ五分前には待ち合わせ場所にいる。特に例外が無ければだけど。雅ちゃんから待ち合わせに指定してきた喫茶店は、人通りの多い大通りからわき道にそれた所で、死角になっているような場所にあった。

私はゆつくりとお店のドアを開ける。すると中からゆつたりとしたBGMが流れてきて、コーヒーの匂いがお店中に広がっていた。

中に入ると私は店内を見回して雅ちゃんを探す。お店は客入りが良いようで、BGM以外は何も聞こえないようなくらい。この店の主人だと思われる、ひげを生やし怖い目つきの人^{マスター}がただグラスを拭いているだけ。余計なお世話かもしれないけど、こんな状況で大丈夫なのだろうか。

もう少し今の人^{マスター}が来るように店の中を明るくする、とか、若い人を雇う、なんて事をすれば良いのに。

するとそんな余計なお世話な私の考えが伝わってしまったのだろうか、マスターがこちらをじつと見つめる。

「凜…。なんか怖いです」

「だ、大丈夫だよ…。多分…」

マスターの目の圧力に、私だけじゃなくルリちゃんまで威圧されてしまう。堪らず意味も無くお辞儀をして、すぐに目を逸らし店内

を見渡す。

すると奥の方で一人携帯を操作している女の子の姿が見え、私は見覚えのあるその姿に向かっていく。すると……。

「あ。リンリン」

こちらに気付き顔を向けるのはやっぱり雅ちゃん。私に向かって手招きをする。

「ごめん。ちょっと混んでて遅くなっちゃった」

「ううん、大丈夫。私もほんのちよつと前に来たばかりだから。やっぱりこの時間は混むね。明日も休みだから余計かな？」

そうなんだ、と言って私は雅ちゃんの向かい側に座る。

すると間もなくマスターが来て、何も頼んでいない私の前にカッブを置いていく。中には紅茶が注がれていた。

「あ、あの…、これ…」

恐る恐る聞いてみると、こちらに振り返るマスター。やっぱり顔が怖い。

「…サービス」

「あ、ありがとうございます」

一言そう言って立ち去ろうとするマスター。雰囲気でお礼を言ってしまった私。

でも聞きたいのはそれだけじゃない。私は、ちょ、ちよつと待つ

てください、と言ってマスターを引き止める。

するとマスターはちゃんと聞いてくれ、立ち止まってくれた。

「あの、そうじゃなくて…。この紅茶の種類ってなんなんですか？」

「…『ローズヒップ』」

最初と同じように一言で終わらせるようとするマスター。なんだか顔に似合わない名前がこの人の口から出てきて、私は少し肩の力が抜けた。

「そうなんですか。どおりで何処かで嗅いだような気がしたんですよ。あ、すいません。仕事なのに呼び止めてしまって」

その言葉を聞いた後、お辞儀をしながらマスターが戻っていった。お母さんの趣味の影響で、一通りのハーブティーの種類は知っていた。そのせいかどうしても気になってしまいうксеがある。

『ローズヒップ』って言うのは何度か聞いたことがあった。たしか花言葉が、『温かい心』とかだった。他にも意味があった気がするけど、それだけは知っていた。

一口含んでみると、レモンのような酸味があるのだけど、それほど嫌な感じのする酸っぱさでは無い。むしろリラックスさせてくれるような気さえする。

なんだかマスターの優しさが伝わってくるようだった。

「結構穴場なんだ、ココ。どう？」

マスターが去っていくと雅ちゃんが小声でこの店の感想を聞いてきた。

私は口からカップを離しテーブルに置く。

「お店の雰囲気とかマスターの見た目は難しいところがあるけど、このハーブティーは美味しいし、マスターの心遣いを考えると、かなりの高得点つてところかな？」

「やった！ 私結構ここ気に入ってるんだ。近くに来ると必ず来るからね。だから親友のリンリンに認めてもらえるとかちょっと嬉しいよ」

そう言つて雅ちゃんは小さくガッツポーズを取つた。

その様子に私が笑つと、雅ちゃんもつられるように笑つた。

するとマスターの咳払いが聞こえた。そちらの方に私と雅ちゃんが目を向けるとこちらを見つめながらガラスのコップを拭いている。

私と雅は『すいません』という意味を込めてお辞儀をし、それを見たマスターがお辞儀を返し視線をコップの方に向けた。

それを見て私たちはホッと息を吐いた。

「ごめんね」

「ううん。大丈夫」

多分マスターもそこまで怒っているようじゃなかったし、大丈夫だろう。

私も雅ちゃんも出された紅茶を一口飲んで落ち着く。

一息ついて最初に私が口を開いた。

「とりあえずこの後どうするの？」

私が言つと、ううん、と唸る雅ちゃん。

「じゃあ、とりあえず買い物でもしてみよつか。町の散策がてらに」
「いいよ。あまり遅くなるとお店見れなくなっちゃうしね」

しばらく喫茶店でのんびりした後、私たちは店を出ていく。
外はもう暗い色を帯び始めていた。携帯の時刻を見ると七時前。
大体事件のあった時間帯で丁度いい時間だ。

でも二人で歩き大通りに出て行くと、人通りは相変わらずで減っていき様子が無い。

間を縫っていくように進んでいくのだけど、はぐれてしまいそう。
すると雅ちゃんが振り返り、私に手を差し出してくる。

「手、繋ごう。リンリン」

「あ、うん」

差し出された手を私が握ると、雅ちゃんが私にニカツと笑ってくる。そして前を向いて私を引っ張って力強く歩いていく。
なんだか嬉しそうな顔だけど、手を繋ぐのが嬉しいんだろうか。
その時、ポケットにいるルリちゃんが私をニヤニヤと見つめてくる。

「フフフ。いいですねえ。やっぱり…」

「ちょっと何考えてるの？ ルリちゃん。違うからね！」

慌てて否定する私。

思ったより大きな声になっちゃったのか、前に行く雅ちゃんが振

り返る。

「ん？ どうしたの？ リンリン」

「え、あ、べ、別になんでもないよ！」

「そ、そう。ならいいんだけど」

私の返事が変になってしまい、ちよつと不思議そうな顔をする雅ちゃんだったけど、一応納得してくれたみたいでまた前を見て歩き始めた。

ホツと一息つき、ルリちゃんを見る。

「もう。ルリちゃんったら」

「ごめんなさい。凜」

その後しばらく歩き、一際人通りが多い場所まで出た。

そこには事件があったためか、制服を着た警察官が何人もいた。

その人たちは鋭い目つきで辺りを見渡していた。

でもこの人の数だ。こんな中での仕事は疲れると思う。

あんな事があつたのだから、もう少しみんな来ないで欲しいだろう。

人はみんな何だかんだ言っても他人の事など気にしないのだろう。なんだか事務所での成瀬君の言葉が正論なんだと思わされてしまう。でも私も誘われて来たにしても、こうやってこの場所に来てしまっているんだ。人の事など言えないんだけど。

「じゃあ近くにある服のお店にでも行く？」

手を引く雅ちゃんの間いに、うん、と言って私は頷く。

だけど歩いていこうとしたその時、遠くから男性の悲鳴が聞こえた。

「行ってみましょ！」

「あ、ちよつと待って」

私の制止の声も届かず、雅ちゃんは私の手を引き急ぎ足で悲鳴のあつた元へ向かっていく。

そしてたどり着くと、もうそこには人だかりが出来ていて、中の様子が見れるような状況ではなかった。

「ちよつと行ってきたみる。リンリンは少し待ってて」

雅ちゃんは私の手を離し、人ごみの中を掻き分け入っていく。

私は少しの間待っていていようと人ごみを少し離れたところで見ていることにした。

私はあまり人ごみは好きじゃない。多分それを知っていたから雅ちゃんは私を残していったのだろう。

すぐ帰ってくるだろうと思って言われたとおり待っていたその時、ルリちゃんがトントンと私を叩く。

「どうしたの？ ルリちゃん」

「凜。あれ……」

ルリちゃんが指を差す先を見ると、一人の男性が。

事件に興味を示しているのか、いないのか。その男性は遠くから

人ごみを見ていた。

まあその行動はすこし不思議だけど、どうしたといふんだろう。

「あの男の人がどうしたの？」

私がそう言うと、ルリちゃんは真剣な顔つきで私を見た。

「あれは人じゃありません」

「え……」

私はもう一度その男性の方を見た。

するとその男性は、口元に笑みを浮かべて人ごみを見つめていた。

「おまたせ、リンリン…って、あれ？」

私が人ごみの中から帰ってくると、そこにリンリンの姿は無かった。

長い時間一人にさせてしまったんだ。怒って帰ってしまったのかもしれない。

「あちゃ〜。怒らせちゃったかな。まあ私が悪いからしょうがないね」

私は頭を掻きながらそんな事を言う。

そしてつい先ほどの事を思い出した。

私が入っていった時、そこには倒れている男性が。

首からは血が出ていて、一目でこの頃この辺りで頻発している連続自殺だと分かった。何故だかこの現実離れしている状況のせいかな、変に冷静でいられてしまった。

周りの人は助けようとせず、ただ傍観しているだけという状況。周りを見てみると、行く気はある人はいるようだけど、行けずにいるとどまっていると言った感じ。多分助けるための術を知らないのだ。

まあただの一般人が大量出血者の正しい手当てを知ってるわけないし、もしも変な事して状況を悪化させてしまっただけは元も子もない。そんな事を考えてしまい、誰も動けずにいるのだ。私もその一人だけ…。

と、その時、リュックを背負っていて、首の辺りで髪を纏めている一人の男の子が男性に駆け寄った。
そしてリュックからタオルを出し傷口に当てる。

「早く！ 救急車！」

男の子が叫ぶのを見て、私は咄嗟に携帯を取り出す。
自分でも何でそういう行動を取ったのか分からない。勝手に体が動いたのだ。

「私が呼びます！」

咄嗟に言った私の言葉に安心したのか、男の子はもう一度男性に顔を向け止血をしてあげてるようだった。

見た感じ直接傷口をタオルで押さえている簡単な止血方法。押さえているタオルにはほとんど血が滲んでいく。

それだけで大丈夫なのだろうかと思った。

けど不思議な事に、男性の顔色が良くなってきている気がする。血の気が失せたように青白い感じではなくなり、人本来の肌の色になりつつあった。

それを見て安心しつつも何処かそれが不可解でならない。どういう理由かわからない。

しばらくして私が呼んだ救急隊員が駆けつける。男の子はその男性を救急隊員に託すと、スッと消えていってしまった。

私はその子の後を追おうとしたのだが、駆けつけた警察官に呼び止められてしまう。

何でもここでの状況を聞きたいのだそうだ。仕方なく私は少しの間警察官に状況を説明していて、やっと開放されて出てきた。

人だかりのあった場所は、救急車が走り去っていくと人々は少しずついなくなっていくた。

街の人々は警察が現場検証をしているのを横目に歩いていく。それ以外はまるで何事も無かったという感じ。

「私も帰ろっかな？ あゝあゝ、明日リンリンに謝らないと……。怒ってないといいけど……」

そう言っって私自身もその人々に混じり、トボトボと家路につく事にした。

成瀬と共に男を追いかけて始めて、空はもう暗闇で覆われていた。

人ごみの中を縫うように歩き、付かず離れずの位置で対象を見失わないようにしていく。

まだ相手には気付かれてはいないようで警戒している様子は無い。どんとんと人ごみを縫うように歩いている。

「でも最初見たときはビックリしたっすよ」

「私もよ。でも逆にあれだけ堂々としているとわからないものよね」
隣を歩いている成瀬と話す。

人ごみから離れ三〇分。対象に特別動きは見られず今に至る。

今すぐ処理できればいいのだけど、場所が場所だけに迂闊に手は出せない。

男を追い続けてからずつと機会を窺っている私たち。けどなかなか人もいなくならない。

ここまで来たら根競べのようなものだろう。

「『木の葉を隠すなら森に隠せ』でしたっけ？ まさにその通りだ」

「そうね。あれが『殺された人と同じ顔』なんて、通り過ぎていく人たちは知らないでしょうし」

その時、前に行く私たちが追っている男が横の方を向く。そのおかげで横からだけど、もう一度相手の顔が見れた。

やはり同じ顔。

「成瀬君の方が近くで見たからわかるでしょ？ あの人と顔が一緒だった」

「はい。俺が助けた人と瓜二つつすもん」

私たちの前に行く男は、成瀬が言うように、助けた男性と瓜二つだった。

一般のサラリーマンのスーツ姿だけじゃない。顔や背丈までもだ。双子の兄弟だつてそこまで似ているのはほとんど無いだろう。

第一、もしも双子だとしたらあの時助けようとしているはず。それなのに人ごみから外れ、かなり遠い所から見守っていた。そんな身内がいるはずない。

しかも笑っていた。他人だとしても不謹慎すぎる。

被害者の近くに瓜二つの人物。これに当てはまるのは一つしかない。

「アレは『ドッペルゲンガー』ね」

私の言葉に成瀬が、そうっすね、と言って頷く。

「よく知られてる『見たら精神に異常をきたし死んでしまう』なんて言われる、本人の脳や精神による『ドッペルゲンガー』と別のやつすよね」

「ええ。これは『出会ってしまったたら殺されてしまう』って言う方ね。成瀬君の言う方だったら私たちが見えるわけ無いでしょうし」

成瀬の言う方は一種の病気のような物だ。中にはドッペルゲンガー自体を全て病気だと言う者もいて、いろいろ議論すべされている。

実態は病気の方も本当だが、第三者によって目撃されるものは霊的なものといえる。

その証拠にいろんな事例がある。例えば、あるアメリカの大統領が暗殺された時や、日本のある小説家が死んだ時に、本人や第三者によって目撃された、と言う。今となつては確かめる術は無いが、本当だとしたらドッペルゲンガーの仕業と見て間違いないだろう。その間も私たちはドッペルゲンガーと思われる男性を追う。

「それにしてもどこ行くんすかね？ アイツ」

「…今はただ追っていくしかないわ」

了解つす、と言って成瀬は前に向き直り、前に行く男を見る。でも成瀬の言うとおり、相手はただ歩いているだけで何もしていない。これからどうするつもりなのか。

すると駅前を通りかかった時、丁度駅から人が流れ出てきた。

前に行く男と私たちが巻き込まれてしまう。私と成瀬は必死で見失わないようにした。だが人の数がかなり多く、見えなくなつてし

まう。

次第に出てくる人の数が少なくなり、私たちは慌てて男のいた方を見た。

だけど――。

「やられたわ。まさかこれを狙ってたなんて。私たち気付かれてたのね」

「くそ！ アイツどこ行つた！」

怒りを露にする成瀬。私たちは相手を見失ってしまった。

私たちはすぐに辺りを見渡す。時間としてはほんのちよっとのはず。そこほど遠くに行つてないはずだ。

だが周りは人で溢れていて、この中から視認で見つけるのはかなり難しい。それでも私たちは男を捜す。

二人で見渡しているのはかなり目立つらしく、道行く人が私たちを見てくる。その為、私たちの周りだけ少し空間が出来ていた。でも今はそれを気にしている場合じゃない。

こめかみの辺りを汗がたり落ちていく。暑さではなく焦りから流れるその汗が妙に冷たく感じた。

その瞬間、横の方に気配を感じてそちらに顔を向ける。

そこにはポツンと一人の女性が。でもそれは格好だけで、感じる雰囲気は普通ではないのが伝わってきた。

身構える間もなく私が視認するや否や、女性は笑みを浮かべながら私にせまってくる。その手には怪しく光るナイフが。それが私に向け突くように向かってくる。

私は迫ってきたナイフを間一髪の所で避けながら、そのまま女性の突き出してきた手にアタッシュケースを横からぶつける。すると持っているナイフを落とし、払われたナイフは道行く人々の足元をすり抜けて滑っていった。

女性はそのまま払われた方に態勢が崩れ、その崩れかかっている女性の足を私が下段蹴りのように払うと地面に倒れた。私は押さえつけようとしたのだが……

「危ない！」

突然私に向かって成瀬が叫ぶ。

すると女性はもう一本ナイフを持っていたようで、私にナイフを振るってきた。

咄嗟に避けたものの、スーツの腕の部分に切られた痕が。女性の持つナイフに少量の血が付いている。そんな気はなかったのだけど、少し油断してしまったようだ。自分自身に、Aランクのくせに、と呆れてしまう。と言うか笑ってしまう。

そんな後ろに下がった私を見るなり女性はすぐさま立ち上がり、人ごみの中に逃げていく。

私と成瀬はその後を何とか見失わないように追いかけていたのだが、女性が突然スツと道から逸れていく。そこはビルの間に出来た人が入り込まない場所。

あの女性はここで私たちから逃げるつもりなのか、それとも……

「…誘われてるんすかね？」

「さあ？ でもそういう風に思えるわね……」

道の先を見つめる成瀬が私に問いかけてくる。

誘われているのだとしたら、もうこの先は相手の主戦場^{ホーム}。

先ほど私に向かってきた時の事を思い出すと、戦い方からして格下の相手と思つて間違いない。でもどんなに格下の相手でも相手のホームである限り、危険は付き物だ。

「気をつけてね。成瀬君」

「夏美さんこそ」

「フフ。言ってくれるわね」

笑って生意気な事を言う成瀬のおでこを小突く。

私も笑っていたのだけど、ここからが本番ね、と心にし動き出し始めると笑みを消し、暗い路地裏へと向かっていく。

少し中に入ると、俺たちの前には分かれ道が。路地裏という場所が場所だけに、どんな風になっているのかわからない。

ここはどうやら二手に分かれるほか無いらしい。

「じゃあ私は右を、成瀬君は左をお願いね」

「敵と接触した時は無理せず、つすね？」

「うん。じゃあ行きましょ？」

「んじゃ、また後で」

そう言っただけ俺たちはそれぞれの道に進んでいった。

普段見ることの無い路地裏は、いくら進んでも変わり映えの無い風景。

今一体どれだけ進んだのか、同じところに戻ってきてしまったの

かと、いろんな事を考えてしまい、時間も時間だけに、それが暗く
なってしまう、光の無い路地裏は一層暗く感じてしまう。

俺の歩く音が静かな路地裏に響く。

しばらく歩いていくと少し広い場所に出た。そこは上から差し込
む月明かりのおかげで少し明るかった。

「どこいったんだ？ アイ…」

一人呟く俺だったが、それをすぐに止める。

俺はなんとなく気配を感じて静かにすると、前の方にある角の先
から小さな靴音が聞こえてきた。

どんどん近づいてくる音を聞き、俺は気配を殺して角の手前まで
向かい、そこで待ち構える。この細い路地だ。俺の鞭はあまり使え
ないだろう。それよりも武器を使わずに戦った方が効率的だ。

音がすぐそこまで来て、待ち構えていた俺は、角からスツと影が
出てきたところで一気に詰め寄る。

相手はひるんだように身をかがめたのを見て、チャンスと思い俺
が距離を詰めようとすると、突然起きた風で巻き上げられた砂が目
に入り視覚を奪われてしまった。

やられた！、と思ったのだがすぐに、あれ？、と疑問を持ち俺は
動きを止めた。

風が止み、目の痛みも和らいだ所でゆっくりと目を開く。目の前
にいるのを見て一気に緊張感が解けてしまう。

「お前らなんでココに…」

そこには見慣れた女性が身をかがめ、胸ポケットにいる見慣れた
妖精がこちらをを見て苦笑いを浮かべていた。

俺の目の前には昼間帰ったはずの凜とシャルルがいた。怒られる
と思っっているのか、凜は俯いていて、シャルルは凜の胸ポケットに
潜り込んでいる。

まあその通りなんだけど…。

「時間が無いから手短かに。わかったか？」

「…」

気まずそうに返事をしない凜。俺はそれを見て頭を掻きながら近
寄る。

「返事は？」

「……はい」

ようやく返事をした凜。なおも俯いている。

怒られそうな事だったとは認識してるみたいだな。もしもそんな
事も考えずにこんな所にノコノコ来たのなら、文句の一つ、いや、
『体罰的肉体言語』で教え込まなくてはならない。

いや、まあ俺自身はそんなキャラじゃない。そんな事言っても
本当にそこまでの事はしたことがない。それに、したくは無い。

でも命に関わる事なら別モノだ。注意はしなくては。

俺じゃなく相手自身の命の為だから…。

「よし。じゃあまず何でここにいる？ 危ない事には関わるな、っ
て夏美さんに言われてたんじゃないのか？」

そう言われた凜は、手を胸の前に持つてきて、もじもじしている。そして俺の方を見て、口を開く。

「あのね…、友達に誘われてね…、今はいいんだけど…。都市伝説を確かめに行こうって事になって…」

「それで？」

「さつき近くの交差点で事件があった時、友達が見に行っちゃって、私は遠くから見てたの。そしたら近くに変な人がいて、ルリちゃんと言っには人じゃないって言われたけど。それを成瀬君たちが追ってるのを見て。それで…」

追ってきたって訳か…。

まったく、興味本意でそんな事をしてしまう凜が『ある意味』すごいと思った。

「でも俺たちが追ってるのを見て危険だとか思わなかったのか？俺たちのやっっている事が危険なのはわかってると思ってたんだけどな」

今だって俺だったから良いものの、もし俺じゃなく追っていた敵に遭遇していたら危険だったかもしれない。

シャルルがいるにしても、凜は一般人だ。何かあっても不思議じゃない。

「……少しは思ったし、危ないからやめようと思ったけど…。どんな事してるか気になってたし…。二人のこと…、何も知らないから…。…うう」

凜はそこまで言うと目に涙を浮かべた。

それはズルいだろう。昔誰かが言っていた言葉を思い出す。『涙は女の武器』。アレを言っていた人は少し非難を浴びていたけど、俺はその人の言う事、まさにそうだなと今思う。

凜は必死でこらえているのだが、どんと目に涙が湧いてきて、止めきれなくなった涙が一筋、頬の辺りを伝っていく。

それを見ていたシャルルが胸ポケットから顔を出し、こちらに顔を向ける。

「あゝ。紳士が女性を泣かせるなんて最低ですよ」

「こら！ 茶化すな。俺は日本男児だからいいんだよ」

茶化してきたシャルルに俺が怒って言うと、サッとポケットの中に隠れていった。

するとその間泣くのを我慢していた凜から、嗚咽が聞こえてきた。気まづくなり俺はまた頭を掻く。

このまま本格的に泣き始めてしまったら、ばつが悪い。これは一旦やめておいた方が良さそうだ。

「もういい。時間が無いからまた後で」

「は…、はい…」

「でも送っていけないから、一人で、って言うかシャルルとおとなしく帰ってもらおう。危なそうなところは避けて帰れ。いいな？ シャルルも凜を守れよ？」

泣きながらも凜がコクンと頷いた。対するシャルルは返事がない

が、手だけを出してひらひらと振っている。それを見て俺は、ふう、と息を吐く。

危険な敵がいるが、まあ戦う訳じゃなければ、あのぐらいならシヤルルがいれば大丈夫だろう。今はとりあえず俺は敵を追うことが先決だ。

一人落ち込んでいる凜を残し、俺は先を急いだ。

走り去るのを凜のポケットから見送り、姿が見えなくなってから顔を出す。

「怒られちゃいましたね。凜」

「…」

凜の方を見ずに言った私の言葉に何も返さない凜。

凜の方を向いてみると、凜の目はもう涙で溢れていた。涙を拭いている凜にかける言葉が無い。

まったく成瀬は。あの人には優しさが無いのだろうか。もっと優しく言っただけならいいのに。あんな男ではモテないだろう。

その点ウイン様だったらあんな人と違って、優しく注意してくれる。もしかしたらウイン様自身は本気で怒っているのだろうけど、その姿さえも素敵なのだ。

同じ人でもこんなに違うのか、と怒ってしまふ。

「ごめんね…。ルリちゃん…。一緒に怒られちゃって…」

「大丈夫ですよ。謝らないでください。私も引き止めなかったんですし。可愛い顔が台無しですよ」

そう言ってポケットにあったハンカチを差し出してあげる為、それを取り出し目の前で羽ばたく。

「ありがとう…」

凜はそのハンカチを取ると目に押さえる。

私は凜をそっとしておく事にした。

凜のポケットから出て、ただ周りを飛び回る。その間ずっと凜の嗚咽がこの路地裏を響いていた。

そんな凜の様子と、何も出来ない自分に胸が痛んだ。

しばらく飛び廻っていると、やっと落ち着いたのか、凜がここに来るようになるという事なのだろうか、掌を出してきた。

思案した私はその上に降り立つと、目の前の凜を見る。その目は赤くなってまぶたが少し腫れていた。

「大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。ごめんね。それじゃあ帰ろっか？」

私が心配になってかけた言葉に、凜は笑顔を見せ返してくれた。泣き顔の後だけど、やっぱり凜は笑顔が似合う。

「帰ったらいっぱい愚痴を聞きますよ？」

「ありがと。ルリちゃん」

凜はまた笑顔で返し、私を胸ポケットに入れ歩き出して家路につくことにした。

私たちは通ってきた道を逆走していき、この路地裏の出口を探す。改めて通ってきた道を見て思う。よくこんな危なそうな所を歩いてきてしまったものだ。

歩く道は街頭はもちろんある筈もなく、月明かりだけが頼りだった。と言っても真上から差し込んでいるわけじゃないので、ほとんど暗いままと言って間違えは無い。

妖精の私から見ても、こんな所には好んで寄り付かないだろう。凜の顔を見てみると、凜の方も同じ気持ちなんだろう。どこか落ち着かず、びくびくしている様に見える。

「凜。大丈夫ですよ。私がいいますから」

「う、うん…。ありがと…」

ちゃんと返事を返してくれたけど、やっぱり怖がっているみたい。歩く凜を私が励ましながら少しずつ出口に向かっていく。

確かこの通りを抜けて右に曲がれば大通りに出るはずだ。出るはずだった…。

「ただど…。」

「あれ？ 違ったみたいですね」

「うん…。行き止まりだね」

凜が言うように今私たちの前には出口のはずの場所が壁になっていた。

「もう一度戻りましょうか？」

「そうだね」

私たちは踵を返し、元来た場所へと向かう。

ここまで来た時と逆の順路というだけで特別難しいことは無いのだが…。

「あれ？ ココでしたっけ？」

「うーん、なんか違うような気がする」

なんとなく分かっていたのだけど、どうやら迷ってしまったようだ。

考えてみれば実際周りを見ても目印になるような物は無い。見える物と言えば建物の薄汚れている壁や空き缶などのゴミぐらい。今まで通ってきた道も同じような所だった。

こんな殺風景で目印も無いところを動き回れば迷ってしまうのは当然だ。

それでも少し歩いてみたのだけど、一向に外に出られる気配が無い。

「…どうしましょうか？ このまま無闇に歩いてても時間がかかるだけですし、それに…」

「危ないからね…」

このまま同じ事をして同じ事の繰り返し、時間だけが進んでいってしまおう。

ましてここは成瀬や水華月さんたち、『退魔士』が追っている相手も潜んでいる。凜が言うように、もしその相手に出会ってしまったら危険だ。

私も出来る限りのことはするが、出会わないほうがいいに違いない。

とは言ってもどうしたものか…。

ふと空を見上げてみる。もう夜の色に染まってしまった空に、いくつもの光の点が浮かび上がっている。

そこで一つ思い浮かんだ。

「そつだ、凜。私が上から見てきますね。上から見ればどう行けばいいか分かると思いますから」

「そつか。その手があつたね」

それじゃあ見てきます、と言って私は上へと向かう。

こちら辺はそこまで大きな建物ではなかったので、少し羽ばたいて行くと、すぐに建物の高さまで飛んでいけた。

上まで行くと周りの建物の様子が分かった。

今いる場所は同じような建物が乱立している。きっと急な街の発展のせいで、計画性無く建ててしまったのだろう。

そのせいで建物の間にへんなスペースがいくつも出来てしまい、それがいつの間にか今歩いていた場所のような空間が出来てしまった。

幽霊や魔物を恐れる人間が、自分たちでそんな陰気の堪りやすい場所を作ってしまったのだ。その矛盾がなんだかおかしい。

そんな事を思いながら、今いる場所から大通りまでどう行けばいいのを見始めた。すると……。

「あら。珍しいわね。こんな所に妖精さんなんて」

後ろから女性の声が出て、それと共に圧倒的なまでの威圧感を感じ、高鳴っていく私の心臓の鼓動が、この人は危険だ、と知らせてくる。

それでも何者なのか気になって後ろに振り返ると、そこには白いワンピースを着た髪の長い女性が立っていた。

そしてその人は、とても歪いびつな笑顔をしていた…。

路地裏に入ってからしばらく経った。私は少しずつ奥へ奥へと進んでいた。

入り組んでいる路地裏では、敵はどこから出てくるか分からない。無闇に進んでいっては返り討ちにあってしまう。慎重に進んでいかなくてはいけない。

「それにしても中々見つからないわね…」

なのに敵は姿を現さない。逃げられたとも思ったのだが、それならば誘われた意味がない。

すると先の方が少し明るく見えた。私は慎重に先へと進む。

その場所に出ると、そこは今まで通ってきた場所より少し広い空間があった。建物が光を遮断しない為か、そこは月明かりや星の光のおかげで暗さが和やわらいでいた。

結構奥の方まで来たのか、さっきまで遠くの方で聞こえていたよな車や雑踏の音は、今はもう聞こえない。

そのせいかな、この場所がどこか異質な空間に思わせた。

すると奥の方から靴の音が。

私はその瞬間、音のする方向に警戒態勢をとり、手に持つアタッシューケースを握り締める。

靴の音は止まることなく、こちらに向かってくる。

「こんな所まで追ってくるなんてな」

その声は女の声。口調は兎も角、どこかで聞いたような声…。

そして少しずつ近づいてきた相手の格好がようやく見える。やっぱりか、と思った。

「アンタ何者だよ？」

「正義の味方」

その姿を見ても私は無表情で答える。

ネクタイを着けないスーツ姿で、髪は短く、眼鏡を掛けているその姿を。

「ははは、正義の味方って。オレもなりたいね」

「いいえ。それは無理よ」

私は即答すると、目の前の女性はキョトンとしてしまう。

「なんで？」

そう言って相手は手を広げ自分の事を見る。足元から胴体、そして手を。

最後に自分の頬に手をあて、首を傾げながら私のほつを見る。

私の目の前、そこには……。

「こんなにアンタそっくりなのにか？」

そこに鏡があると思うほど瓜二つの自分がいた。

私は恐怖心に邪魔されて動く事が出来なかった。

ここからでは見えないが、下には凜が待っている。早く凜の元に行つてすぐにここを離れなければ…。そうは思つてもなかなか思うように動く事ができない。まるで体中が固められたようだ。

もし動くタイミングを間違えれば、凜まで巻き込みかねないからだ。

幸い、相手の女性が動き出す様子はない。だけど動かす何を考えているか分からない相手と見つめあつるのは、じりじりと過ぎていく時間もあるのか、冷静さをそぎ落とされてしまいそうだ。

「あら？ どうかしたの？」

そんな私の焦りを知つてか知らずか、私の前に立っていた女性は笑顔を見せながら私に近づいてきた。

このままでは危ないと思ひ横の方を見ると、工事の時に足場を作る時に使うのであろう何本もの鉄パイプが置かれていて、青いビニールシートに被せられていた。

それを見た私は勇気を振り絞つて手を向けて、風を起こしてそれを浮かび上げた。

私の起こした風は、成瀬と戦つた時のようなペンを浮かせる程度のモノではなく、置いてあつたそのパイプを木の葉のように楽々と浮かせる『竜巻』のようなモノ。

そして浮かせたパイプは、唸りを上げるような荒々しさで女性の周りを旋回し始めた。

女性はそれを警戒するわけではなく、ただ興味深げに見ていた。

「すごい　そんな小さな体でこんなこと出来るのね」

そう言ってケラケラと笑っている女性の姿は、とても感じる霊圧の主とは思えなかった。それはまるで小さな幼い少女のような姿。私はそれが馬鹿にされたような気がしてしまい、手を女性に向けて鉄パイプで一斉に攻撃を仕掛けようとした。

その時だった。

女性は急に私のほうを見た。その表情はさっきとは違い、冷え切ったような視線を私に向けていた。そして、

「『もう…、やめなさい』」

そんな言葉が女性から発せられた。

発せられた女性の声は私の耳に、と言うよりも『頭』に深く刻み付けるように届く。だけどそれは『声』と言うより、『旋律』と言った方があっているかもしれない。

そして頭に届いたその旋律は、キーンと響くような感覚を頭の中で感じさせる。それは心地悪くもあり、反対に心地よくも感じた。すると突然、そんな自分でも分からないようなモノを感じた私は、自分の意思とは関係なく風を起こす事をやめてしまった。

浮く力を失った鉄パイプは屋上の床に大きな音を立てて落ちていった。

その耳障りな音を聞きながら、何が何だかわからない私は、ただ目の前にいる大きな恐怖を小さな体全体で感じていた。

「危ないじゃない。ダメよ、そんな事しちゃ」

子供を叱りつけるような口調で言う女性。その顔はさっきまでの表情ではなく、元に戻っていた。

「言う事を聞く子は好き。妖精でもね」

そして笑いながらまた近づいてくる。

このままでは危ない。私だけでなく凜まで巻き込んでしまつかもしれないから。

私はすぐさま撤退を決断し、後ろを振り返ることなく凜のいる地上に下降し始めた。

白い修道服を着る小さな妖精を見送る女性。

その顔は苦笑していて、どこか寂しげにも見える。

「嫌われちゃったみたいね…」

小さく呟いたその言葉は降りていく妖精には聞こえない。

女性は髪をなびかせながら振り返る。そして鼻歌を歌い、月を見上げ歩き去っていく。

誰もいない建物の上を、ただ一人…。

「遅いなあ…」

上に行ったルリちゃんを待ち、私は壁に寄りかかっていた。

見てくるだけだから、それ程時間はかからないと思っていたんだけど…。

周りは壁に囲まれ薄暗い。ココは一人待つにはとても怖かった。今頃だけど、よくこんな所を歩いてきたものだ。ルリちゃんと一緒にいたにしても、これはさすがに怖い。

とその時、上の方で何かを感じた。

それは指輪を通し、ルリちゃんのものだとわかった。そんな事がわかるとは聞いていなかったけど、なんとなくこの感じがそうなんだと直感した。その直感は当たったのだろう。上の方で風が渦巻いているようだ。

しかし、急に風が途絶え、上の方で甲高い金属音がした。

「ルリちゃん！」

私はルリちゃんに何かがあつたんじゃないかと思い、上に向かって名前を叫ぶ。

「凜！」

そのルリちゃんが降りてきたのが見え、私は無事がわかり安堵した。

けど、降りてきたルリちゃん表情は、上に行った時とは違い、怯えきつたような表情。一直線に私の元に来た。

そしてルリちゃんは私の手に降り、体が崩れ落ちた。その体は振るえ、小さな体が余計小さく見える。

「どっしたの？ ルリちゃ……」

「凜！ ここを離れましょう！ 早く！」

私の手にしがみつき、私の言葉を切りながら話すルリちゃん表情は、真剣そのもの。

その表情を見た私は、ただ危険だということだけを知り、この場所を離れる事にした。

怯えながらもルリちゃんは私に道を指示してくれる。そのルリちゃんをポケットに入れ、少し小走りで進んでいた。

ルリちゃんをチラッと見ると、さっきより落ち着いた様子。

「大丈夫？ ルリちゃん」

「ええ。すいませんでした」

気にしなくていいよ、と言って私は走るのを止め、歩き始めた。

誰か追ってくる気配も無いので、大丈夫だろう。普段運動をあまりしないので疲れてもう走れない、と言っるのが本音だけ……。

歩き始め、少しずつ息を整えていく。

「それにしても……、どうしたの？ あんなに慌てて降りてきたけど」

「え？ 凜は気付かなかったんですか？ 私の事を呼んでいたの、てっきり気付いていたのかと思ってました」

「気付いてた……？」

「一体何の事だかわからない。上で何かあったんだらうか。」

「あれはルリちゃんが心配だったんだよ。それに、この指輪をはめてたら魔法を使ったのが伝わってきたの。ってよくは分からないん

ただどね。それだけが気になっちゃったから、気付かなかったのかも…」

なんて鈍感だろう。私は苦笑した。

でも、その後すぐにルリちゃんの魔法を使用してる感覚が伝わってこなくなったのが、ルリちゃんを呼んだ理由だ。

あの時はルリちゃんに何かあったんじゃないかとすごい心配してたし、しょうがない。

「それで、何があったの？」

「あのですね…」

私が質問すると、ルリちゃんは真剣な顔つきで話し始めた。

話によると、建物の上に女性の霊がいたのと言う。それもルリちゃんの魔法を止められたらしい。

初めて会ったとき、事務所の屋上で成瀬君と手合わせをしたのを見ていたから、あんな常識外れの力を止めたなんて信じられない。

「こんな所にあんなのがいるなんて信じられません…。私の魔法を止めたのだから、物理的なものじゃなく、私自身を操って止めたんですよ」

「それって…、さっき追ってた奴とは違うの？」

「とんでもない！ それなんか比じゃない位です。あのまま戦っていたら、私は殺されてたかもしれないです…」

それを聞いて私は背筋が凍った。もしかしたら私も危なかったかもしれない。あの時、ルリちゃんに言われてあの場をすぐに離れて

よかった。

もしかしたらルリちゃんは私が気かりで、すぐ下に来れなかったのだろう。相手が追ってきたら、私に標的を移すかもしれないから。

でも、もし私の為に危ない目に会ってしまったのなら、私は申し訳ない。

でも今の私は何も出来ない。

「…頑張らなくちゃ」

「え？ 何か言いましたか？」

聞こえないように言ったはずだけど、少し気付かれてしまったルリちゃんに、なんでもないよ、と言って誤魔化する。

ルリちゃんも、そうですね、と言って気にかげられずに前を向いた。

「とりあえず今はここをいち早く出ることです。そうすれば危険は無いですから」

ルリちゃんに言われ、私は今はこの路地裏を出ることを目指す。

あれ？、っと思いきがつけば車や雑踏の音が聞こえ、だんだんと音が大きくなってきた。

出口まではもうすぐみたいだ。

目の前にいる私トッベルゲンガーそっくりな女性は両手を広げ、自分の体をじっく

りと見ている。

「それにしても、アンタの体、オレ気に入ったよ」

ドッペルゲンガーの言葉に私は笑ってしまふ。

「ならその言葉遣いを直すことね。それじゃあ女としては失格だわ」

すると私の言葉に目を丸くして私を見つめるドッペルゲンガーは、ブツ、っと噴出して同じ顔で笑った。

目の前で自分が笑っているのは、なんだか変な気分だ。

笑っていたドッペルゲンガーが、こちらを向き見つめる。

「へへ。そんな事言ってるけど、オレはこの後どうしたいか知ってるんだろ？ こんな所まで追ってくるんだから、お前普通の人間じゃないよな」

「そうね。私の経験からいくと、私を殺す、って所かし……！」

その瞬間、私が言い終わるのを待たずにいきなり距離をつめ、私に向けてナイフを突刺してくる。

私はすぐにアタツシユケースでガードした。ガンツ、という鈍い金属音が路地裏に響き渡る。

「失礼なのね。話しは最後まで聞くもの、よ！」

私はそのまま横薙ぎにアタツシユケースで殴りかかる。

「っー！」

だが、ドツペルゲンガーは私の反撃を予想してたのか、後ろに退避して避けた。

タイミング、攻撃の速度。さっきまで追っていたときの動きを考えれば申し分ないはずだった。

だが今、あっさり避けたドツペルゲンガーの動きは、追っていたときの動きなんかとは別モノだった。

もしかやと思い追撃をする。

思い切り地を蹴り、敵との距離を詰め、アタッシュケースを振り落とす。

するとその起動を見極めたかのようにドツペルゲンガーは回転しながら横に避けた。

その回転の勢いのままナイフで切りつけてきた。

ここは避けるところだろうが、私は逆に懐に踏み込んだ。

私の行動に意表を突かれた敵は、気付くのが遅く、動きを止められない。

そしてナイフを持っていての方の腕を掴み、一本背負いのように投げ飛ばそうとした。

「さっすが〜！」

言っている言葉のおかしいドツペルゲンガー。投げ飛ばされたのに変な事を言っているのが気がかりだった。それでも動きを止めずに投げ飛ばす。

でもすぐにその意味が分かった。

投げ飛ばされたドツペルゲンガーは無理やり体を捻り着地した。

動き自体はまるっきりの素人。でもそんな動きができる理由は一つしかない。

「私の真似事コピーをするなんてね。厄介な事になったわ…」

まったくの偶然なのかもしれないが、そんな感じの事をしたことを覚えている。

確か成瀬がうちの事務所に来た時だっただろうか。実力判断のために行った手合わせで、私が成瀬の攻撃を防いだ時にやった動きと似ていた。

「いや、今のは危なかった。やっぱりサイコーだよ、アンタ」

首を傾けて笑う姿は、同じ顔である私には不快でならない。

「でも同じやつは二人要らないよなあ？」

そしてドッペルゲンガーは右手に持っていたナイフを逆手に持ち替え、殴るような動きで切り掛かってきた。

単調な動きに私は慌てる事無く横に避ける。私はそのままアタッシューケースを殴りつけようとする。

すると首をこちらに向けて、ニヤツと笑う私と同じ顔。

私はハツとなつてすぐに退避する。間もなく私がいた所をナイフがヒュツと空を切った。そのまま飛んでいったナイフは後ろのほうの壁にぶつかり、地面に転がる。

その転がる無機質な音を聞きながら、退避した私が相手を見る。

「何だよ。これでも駄目なのかよ」

悪態をつくドッペルゲンガーの腕が、ブランと力を失くしたように下に向いていた。

思いつきり逆方向に振った腕の間接が、耐え切れずに外れてしまったようだ。

ドッペルゲンガーはそれを無理矢理直してこちらを見る。

「まっただまだ〜」

そしてまた私に襲い掛かってきた。

その様子はまるで子供のように無邪気で……

「哀れね……」

誰に言うのではなくただ呟いた言葉。

ただ私はこの目の前にいる私に似た背格好の相手を哀れんでいた。

第三楽章 『gear』【歯車】 7 (後書き)

気がつけばもうすぐ10万文字。

今まで短編ばかり書いていて、2・3千字ぐらいしか書いた事
なかった私には信じられません。

それもこれも今まで見てくれている読者のおかげです。これだけ見
てくれる人がいるんだと力を貰っていました。

本当にありがとうございます。

って、終わりみたいに書いてちゃったけど、続きますからね！

連続して聞こえてくる金属音が徐々に近づいてきた。

それは歩いてきた俺の耳に聞こえてきた音で、多分音の元は、夏美さんのアタツシユケースの音だろう。

前に鎌鼬かまいたちと戦った時に、夏美さんが鎌鼬の攻撃を防いだときの音と似ていて、俺は確信を持って音のする方向に進んでいた。

ずっと繰り返されているその音に、もしかしたら夏美さんが危険なんじゃないか、と思い、急いで向かっている。

前の方に明るい場所を見つけ、音も大きくなってきた。空間に出ると二人の人物の姿が。

「夏美さん！」

思ったとおり夏美さんがいたのだが、服はボロボロで、膝をついていて息も荒かった。

まさかそんな、と思いながら加勢するために俺は駆け寄ろうとした。

でもすぐに思い止まり、違和感に気付く。

よく見ると、姿は夏美さんなのだが手にはナイフを持っている。それは通りで夏美さんの腕を切りつけた時のナイフと同じ『ように見えた』。『ように見えた』というのは、そのナイフがもう刃がボロボロで、原形を留めていないからだ。多分こっちは追っていたドッペルゲンガーだろう。

前に立つもう一人の方の姿も夏美さんで、手にはアタツシユケースを持っていた。

どう見ても夏美さんが優勢に思えた。

でも、その表情はどこか悲しそう。

「死ねよ！」

するといきなり、しゃがんでいたドツペルゲンガーが立ち上がって向かっていく。

それを夏美さんは危なげなく避けながら、なぜか当てるだけの攻撃をするだけ。倒すような力強さは無い。

それでも足元がおぼつかないドツペルゲンガーが倒れさせるには十分だった。

倒れているドツペルゲンガーを仕留めるわけではなく、それを夏美さんは、ただ見つめているだけだった。

意味のわからない俺は、その行動をただ見守るだけだった。

私への攻撃を繰り返すドツペルゲンガー。

私はそれをことごとく避けていく。単調な攻撃を繰り返しているため、何度か攻撃を受けながら、隙だらけの体に攻撃を与える。だけどそれは相手をただ突き放すようなモノ。

相手を見ると、その顔は私が意識してそうしている事に気付いたようで、さっきまでの笑みは消え、怒りが隠しきれずに表情に表れている。

でもその体はすでにボロボロになっていて、動きが鈍くなってきた。

すると突然、攻撃を止めて距離を取るドツペルゲンガー。

「クソッ！ 何だよお前！」

イライラが遂に限界に達したのか、怒声を私に浴びせてくる。

私はそれをただ聞くだけだった。
何も言い返さない私に苛立ちを隠せないドツペルゲンガー。

「何もしないなら、お前の存在をオレに渡せ！」

叫びと共に、怒りの表情で私に襲い掛かるドツペルゲンガー。避けるのは容易なほど動きが荒く鈍い。私は容易く相手の脇腹めがけて蹴りを浴びせた。

うっ、と呻きながら転がる相手を見て、私は口を開いた。

「…それは出来ないわ。それに…、あなたは私になれない」

「ゴホゴホッ…、はあ？ 意味わかんねえよ」

脇腹を押さえながら立とうとするが、力が入らない様子。自分の体力やダメージを考えずに闇雲に戦っていたのだ。無理も無い。いや、元からそうだった知識を持っていないんだ。知識が無ければ考える事も出来ないから…。

「あなたはあなたでしかいられないの。姿かたちをどれだけ誰かに似せようかね」

「うるさい！」

持っていたナイフを私に投げつける。力も無く、それ以前に、折れ曲がり原形がわからない程のナイフは、避けるまでも無く私に当たり、力が出ない今のドツペルゲンガー自身の状態を象徴するように刺さることなく地面に転がった。

それでもドツペルゲンガーはナイフを捨てることなく、これならどうだ、と言うような勢いで殴りかかってきた。

その様子には溜息のようなものをついてしまう。

それは呆れから出たものだろうか、それとも哀れみからだろうか。自分自身のことはずなのに、自分でもよく分らない。

ただ私自身ドッペルゲンガーの攻撃を受けるつもりはなく、私は避けながら近づいてきたところを見計らって、アタッシュケースで殴りつける。

それに何とか反応したドッペルゲンガーだったが、ガードした腕ごと横から殴られ、踏み止まる事が出来ずに人形のように力なく転がっていった。

転がっていったドッペルゲンガーは限界を迎えたらしく、立ち上がる気力がないようで、地面に転がり荒い息を整えようと必死だ。

「夏美さん」

するとその時、駆けつけた成瀬も合流してきた。

「成瀬君、お疲れ様」

「いや、俺は何もしてないっすけど…」

少しいじけながら言う成瀬。

私は、そういう事じゃないわよ、と言って肩を叩く。

成瀬は一つ息を吐き出し、ひとまず気を取り戻すと、目の前にいるドッペルゲンガーを見た。

「こいつがドッペルゲンガーっすか？」

「ええ。私の格好を真似されて、ちょっと危ないと思ったけど」

私の言葉にキョトンとってしまう成瀬。

「……これですか？」

そう言われ相手の格好を見れば、私がスーツに傷一つも無いのに対して、ドッペルゲンガーのほうはボロボロで、鼻血まで流していた。

力の優劣は誰が見ても一目瞭然と言える。

「……なんでだよ」

倒れているドッペルゲンガーが呟いた。

無理をしていたせいか、うまく起き上がることが出来ずに首だけをこちらに向けて睨んでいた。

私と成瀬はそれを受け止め、ただ見つめ返した。

「オレは人になりたいだけなのに……、なんで邪魔するんだよ！ 大人しく、潔く死ねよ！」

今にも襲い掛かってきそうな汚い怒声を浴びせながら、うつ伏せの格好になるドッペルゲンガー。

そしてゆっくりとした動作でこちらに這って向かってくる。

歯を食いしばり、うまく動かない腕を懸命に伸ばして進んでいる姿は、敵ながら痛々しい。

「人になれなきゃ、オレには存在すらないんだ！ なら誰かを殺してそいつの存在を奪うしか方法は無いじゃないか！ それのどこが悪い！」

悲しい叫び声は路地裏に響き渡る。

怒りとも悲しみとも取れるような表情で睨むドッペルゲンガーの

指先は、全体重を支えて進んでいたためか、不自然な方向に曲がっている。

そんな姿を見ながら、私は悲哀の目を向けながら口を開いた。

「生きてる者の存在を、あなたが奪う権利は無いからよ」

そう言いながら私はドッペルゲンガーの元に歩み寄る。

這っているドッペルゲンガーの顔の前で止まる。

「…じゃあオレはどうすればいい？」

目の前にいる私に、顔を上げてドッペルゲンガーが問う。その顔はさっきまでの顔とは違い、救いを求めるような今にも泣きそうな顔。

でも私は何も答えずに、体を踏みつけて自由を奪い、持っていたアタツシユケースを振り上げる。

それを見てドッペルゲンガーは必死に体を動かして逃れようともがく。うまく力の入らない体では逃れるのは難儀だろう。

自分と瓜二つの者をこうやって見ているのが、なんだか複雑で、酷く自分が悪い事をしているような気分になる。だからと言って逃がそうとは思わないが…。

私はアタツシユケースを握る手に力を籠める。

「…昇華」

握っていたアタツシユケースに炎が灯る。そしてそれを躊躇わずに振り落とす。

鳩尾みぞおちの辺りに落とされたアタツシユケース。それはドッペルゲンガーの体を貫き、地面に到達し、ガンツ、という音を立てた。

アタツシユケースに纏まとっていた炎が、ドッペルゲンガーの二つに

分かれた身体を少しずつ蝕むように覆っていく。それを見てドッペルゲンガーは驚きの表情を見せ、満足に動かない身体を必死に動かして消そうとするのだが、それは叶わない。

こうしなくてはいけないのだが、こういう光景はやはり自分が酷い事をしている気分になる。

その炎によって霧散していくドッペルゲンガー。それなのに今感じているだろう痛みを自分で理解できないのか、その理解したできないモノに困惑していて、苦痛の表情と言うより、自分がどうなっってしまったのかという事に恐れているようだった。

この様子から見ても、もしかしたらこの先に訪れる死ものも理解できていないのかもしれない。そうだとしたらその様子はあまりにも哀れに見えて仕方ない。

「あなたはあなたがしてきた事で、どういう風になるか…。自分で感じなさい」

私の言葉に答える事も出来ず、ドッペルゲンガーは悶え苦しんでいた。

そうこうしている内に、蝕んでいく炎は口にまで到達し、声をだせなくなる。こちらを向いたドッペルゲンガーの目には、知らず知らず流したのだろうか、一筋の涙が見えた。

……でもそれは一瞬。

炎は最後まで残った頭部を燃やし尽し、跡形も無くなった。

何もなくなつた場所を見つめる。

「…ごめんなさいね」

最後に見たあの表情が、呟く私に後味の悪さだけ残していく。

路地裏に俺たちが歩く音が反響する。

ひとまず仕事を終わらした俺たちは、大通りに出るために歩いて
いた。

「それにしても迷惑な話つすよね。自分の存在が欲しいからって人
を殺すなんて」

俺はアイツの言っていた事を思い出す。

這い蹲りながら俺たちに向かつて、とても見ていられない顔を
して叫んでいた言葉を。

なんて身勝手に、迷惑な話だろうか。

殺された人たちを考えると、どうしても許せない。

そんな事を考えていると、夏美さんは意外な事を言ってきた。

「…あの子も、被害者みたいなものなのよ」

「え?…」

一人殺し（あんな事）をしたと言つのに、被害者と言つのはどう
いう意味だろうか。

俺は夏美さんの話に耳を傾けた。

「ドッペルゲンガーって、人によって生まれたっていうのは知って
る?」

「えつと…、確かいろいろな人の『〜になりたい』っていう欲が集まって出来た『欲望の集合体』、でしたっけ？」

「そう。でもそれって、逆に言えば『人の欲望のせいでも生まれてしまった』とも言えるじゃない？」

夏美さんの言っている事は極論だが、確かにそうとも言える。

「望まれずに生まれてしまった…。しかも『自分』と言う存在を誰かに認めてもらえない事無く…。そして誰とも関われずにたった一人で生きてきた。それって本当に辛い事だったと思う…。」

そんなあの子は、存在だけでも欲しい、そう思った。でもあの子の育てられることがなかった頭は、結果として誰かを殺し、その人の存在を奪うことを選んでしまった。

ま、私の想像ではあるけどね」

そこまで聞き、俺は言葉を返せなかった。

確かにその話は想像の域を出ないし、ドッペルゲンガーに都合のいい話かもしれない。でももしそうだとしたら、あまりいい気分じゃない。

もしかしたら夏美さんや俺もドッペルゲンガーを生み出した一人かもしれないからだ。

自分達で生み出したものを自分達で殺す。それはあまりにも身勝手に思える。

「まるで若い男女が子供作って虐待しちゃう、ってみたいっすね…」

「そんな可愛いものじゃないけどね…。でもそう考えると、私たちが親みたいじゃない？」

「あ、そっか…」

「じゃあ悪いのは私たち？」

痛いところを突かれ黙ってしまっ。

俺は、うっん、と唸っていると、それを見ていた夏美さんがクスツと笑った。

「ごめんごめん。そんな考え込まないで。私たちは私たちのしている事を信じていかなきゃ、ね」

そう言って空を見上げる。

横から見た夏美さんの顔は、さっきまでの顔とは違い、とても悲しそうだった。

「それがどんなに辛い事でも…、っすか？」

俺の言葉に、うん、と言って頷く夏美さん。その後は俺も夏美さんも何もしゃべらなかつた。

夜はもう深く黒く染まっていた。

俺達の歩く路地裏も、先が見えないほどに暗い。

第三楽章 『gear』【歯車】 8 (後書き)

かなり疲れた…。

ちよつと日々のニュースの中で許せない事があり、どうしてもそれを盛り込めないかと思っていたのですが、結局最後になってそれほど盛り込んだだけ。

突発的に盛り込むのはやめましょう(笑)。

祝10万文字突破!!

く間奏曲く（前書き）

前章のドッペルゲンガーの事ですが、『人間の欲望の集合体』なんて書いてしまいましたけど…、

私のデタラメです。

（一度このドッペルゲンガーの事をやっているテレビを見た次の日に、友達と言っていた事をネタにただけです。スイマセン！）

まあそこまで気にかけてる人がいるか分かりませんが、誤解してしまっただけなので一応。

〈間奏曲〉

ドッペルゲンガーの件から数日。

世間では黄金週間と言われる大連休に突入した。事務所前の道行く人の様子も普段見ないような学生らしき男女や、三、四〇代と思われる男性の姿もあった。

そしてテレビを点ければ、渋滞情報や行楽地の情報などが、どのテレビ局でもやっていた。

「『今から行ける行楽地』、か。ってそんなんテレビで言ったら意味無いじゃん」

何もする事なくテレビを見ている俺は、ただテレビに突っ込んでいた。

普段からそこまで暑さに弱いわけじゃないが、この陽気の急な変化にはさすがに参ってしまう。

何故なら変に寒い日が多かった四月を終え、ようやく暖かくなってきたと思いきや、連休に入ってから夏日になってしまったのだ。地球は春というものを忘れてしまったか？

「日本は四季折々の姿を見せる、ってのが売りだったのに、こんな『ジキルとハイド』みたいに真逆の季節を味わう事になるなんて…」

「これも温暖化の影響なのかしらね。ふう…。」

夏美さんもこの季節の変化について行けないのか、ファイルを団つ扇代ちわわりに扇いでいる。

こここの所、仕事は見廻りぐらいでそんなに忙しくない。

夏美さんが言うには、平和という事は良い事よ、だそつだ。確か

にこうダレイ日が続くと、何も無いのは俺もそう思える。

でもこういう仕事をしていて何もする事がないと言うのは、『収入が無い』という事だ。それはさすがに生活をしていく上で大きな問題になってきてしまう。

…もうやめよう。考え事をするのも疲れる。

「エアコンでも買いませんか？ これからもっと熱くなってきましたし」

俺の提案を聞いて夏美さんは腕を組んで、うん、と唸って考えている。

「そんな言うほどじゃないんだけど、私クーラー苦手なのよ。だからあまり使いたくは無いの」

「へえ〜。まあ夏なのにひざ掛けとか持ってる人もいますし。OLさんとか？」

「こつこつ仕事やってても、そういう所は普通の人と変わらないからね。嫌になっちゃうわ」

俺達はなんとなくこの陽気をごまかすようになってなんでもない話題で気を紛らわしていた。

ふと俺は自分の母親のことを思い出す。

「そういえば俺の母親も冷房とか苦手っすね。でも母親は着物を着てるのに全然暑そうにしてないんすよ。慣れてるっていうのもあるんでしょっけど」

着物とは言っても、『小紋』や『紬』といった普段着専用のもの

だ。世間一般で礼服として着られ、細かい刺繍などが施されている着物とは違い、主に通気性や機能性が重視されている。

「だけど着物は『夏の気候に不向き』と言われてて、洋服に比べれば確かに和服は少し暑苦しく見える。普段着として着ている人なんて、自分の母親やうちに来た人以外で見た事が無い。」

「確か舞妓さんなんかは暑い時に帯をキツく締めて汗を流さないようにする、なんて事聞いたことがあるわ。原理とかはよく分からないけどね」

「じゃあ俺の母親もそんな風にしてたんすかね？」

もしそうやって努力しているのかと思うと、改めて母親がすごいと思った。

そういえばこの頃忙しかった事もあってか、家の方に電話していないような気がする。後で久しぶりにしようかな？

でもこれと言って話す事もないし、どうしたものか…。

「別にただ声を聞かせるだけでいいんじゃないの？」

不意に夏美さんからそんな事を言ってくる。

「ん…。なんでそんな事言うんすか？」

「ただそんな気がしただけよ。フッフ」

俺を見ながら目を細めて笑う夏美さん。俺はその視線から逃げるように顔を逸らす。

俺の顔がそんなにわかりやすい顔だったのだろうか。気をつけなければ…。

その時視線を事務所のテーブルの上に向ける。

そこにはいろいろなチラシが置いてあった。事務所の郵便受けにいつも送られてくる物で、それと違って重要な物は無い。

でもよく見ると、そのチラシの間から角の方が出ているハガキが見える。

どうせどこかの店の案内だろうと思ったのだが、特にする事もなし、気になった俺は立ち上がりテーブルにあるそれを見ることにした。

その上に重ねて置いてあるチラシは、この辺に新しく出来たお店や風俗店のチラシばかり。よく見れば凜が言っていたケーキがうまい店の『羅生門』のチラシまで入っている。

と、そんな事よりも、とチラシをどかして中にあるハガキを手にとった。

だが俺はそれを見た瞬間固まってしまう。

「……このチラシの山って、…いつ頃のやつですか？」

「え？ 全然知らないわ。でも最後にチラッと見たのは一週間ぐらい前かしら？ どうせくだらないチラシばかりだし、最近そこに置けばなしにしちゃってたからね」

それがどうしたの？、といった顔で見つめてくる夏美さん。

それじゃあこのハガキを長くて一週間は放置してしまった、という事になる。日頃からちゃんとチェックしておかないとダメだな…。

俺は夏美さんの視線に答えず、ヤバイなあ、と思いながら黙ってハガキを見つめるだけだった。

「じゃあやってみてください」

私は、はい、と前にいる妖精先生ルリちゃんに返事をして、言われた事をやってみた。

私とルリちゃんの間には、ノートから切り取った何枚もの紙切れが。

それらに掌を向けて、私はルリちゃんから教わった『詠唱』を行う。とは言っても今やりたい事を唱え、心の中で強くイメージするだけだ。

その手には刑事とかがするような白い綿の手袋をつけ、掌の方に小さな魔法円が描かれていた。

ルリちゃんが言うには、魔術を行う時に頭に魔法円を思い浮かべるだけでもいいけど、習い始めて一月も経っていない者が、今行う事をイメージと共に、円や三角形、文字をはつきりと心の中で見えるくらいにまで念じる事は不可能です、との事だ。

それだったらいつも持ち歩け、それを描いた物を使っても魔術を行使できるという事で、こうやって手袋を使う事にしたのだ。

さすがにウインさんのように杖を持ち歩く事は目立つから出来ない。なのでこういった目立たずに持ち歩ける物でも大丈夫というのは安心した。

『清き風よ 小さく吹きて 紙を舞わさん』

ルリちゃんに教わった詠唱を行い、それが起こるイメージを膨らませる。恥ずかしかったけど、最初はそうやって言わなきゃ出来ないですよ、とルリちゃんにこっぴどく怒られ、反省してちゃんと行

うようになつた。

「ただ、そんな私の行動を無視するかのように紙切れは一つも動かない。」

私とルリちゃんは、あれ？、という表情で見つめあい、すぐに視線を紙切れに戻す

『清き風よ 小さく吹きて 紙を舞わさん』

もう一度同じように唱える。

でも全然さつきと変わらず紙切れ一つ動かなかった。

虚^{むな}しさを象徴するように、部屋にある時計の針の音だけが耳に入るほど私とルリちゃんは無言になってしまった。

私はどうしてなのか分からず、ルリちゃんはどう声をかければいいのか分からず、と言った所だろうか。

そんな中、ルリちゃんが静寂を破ってくれた。

「ま、まあ…、そんな早く出来なくて当然ですよ。まだ一ヶ月も経ってないんですから…」

「ありがとうございます。でも……」

「『でも』も何もありません。魔法や魔術って言うのは、長い年月や世代をかけて出来たものなんです。どんな魔術師でもそれらを習得するまで長い時間が必要です。それを今すぐになんて…、出来なくて当たり前ですよ！」

私はルリちゃんに怒られて黙ってしまふ。

それもそうか…。こつやって怒っているという事は、妖精として生まれたルリちゃんでも大変なんだろう。

それなのに少しやり始め、出来ないからといって挫折してしまふ

中途半端な私…。怒ってしまったのも無理も無い。

私はなんだか自分が恥ずかしくなって泣きそうになる。

ルリちゃんは目に涙を溜める私を見て、慌てて私に寄ってきて謝った。

「う、ごめんなさい。つい言いすぎてしまつて…」

「ううん。いいよ、大丈夫。私の方こそごめんね？」

謝らないでください、と言ってルリちゃんはティッシュを持ってきて涙を拭ってくれた。

すると突然部屋の扉が開かれた。

「どつしたの？ お姉ち……」

隣の部屋にいた妹の真理が、私の部屋にやってきたのだ。私の声が聞こえてきたのだろうか？

入ってきた真理と私は見つめ合ってしまった。

真理の方は私の顔のあたりを見つめている。多分というか絶対にこのティッシュが気になつているんだと思う。

それを持つているのはルリちゃん。という事はルリちゃんの見えない真理にはティッシュが顔に引っ付いているように見えているはずだ。何事かと思つているはずだ。

私のほうはそれを考えている事が分かつてなんと言つたらいいか分からずにいた。

意を決し私は顔にあるティッシュをルリちゃんごと掴む。その時、ルリちゃんから、んぎゅっ！、という声が漏れたが、今は気にしていられない。

「あ、の、その、これは…、その…、あ！ 手品の練習ー！ う、う」

めにえ……。うるさかった？」

慌ててしまい少しかんでしまったのだが、とりあえず誤魔化す事に専念した。

手につけている手袋を見せて、よりアピールをしていく。

「今度友達の誕生会でやるんだ。手袋にもこうやって描いておいて、雰囲気も出せるようにね。あと進行もスムーズに行かなきゃ大変だから、しゃべりの方も練習してたの」

ちよつと苦しい言い訳だったかもしれない。

それでも身振り手振りをして、らしく見せてみた。

そんな私を疑いを向けるような目で見る真理。しばらくして真理が溜息をつく。

「そっか。何かあったのかと思って気になっちゃっただけだから」

「そ、そう。じゃあ一応静かにしてる、ね」

そんな気にしなくていいよ、と言って真理は部屋を出て行った。何とか乗り切れたようで、私は一息ついた。でも、私は手の感触にはっとする。

「ルリちゃん！」

私の右手にいるルリちゃんが、ぐったりとして目を回していた。

私と凜は家を出て夏美さんの事務所へと向かっていた。

「…ごめんねルリちゃん。咄嗟だったから」

「もう大丈夫ですから、気にしないでください。アレは仕方なかったですし」

家を出てから何回目だろうか。ずっとさっきの私にした事を謝っている。

私自身は別に怒っていないのだけど、どうも気にしているようだ。でも私は凜のこういう所は嫌いじゃない。何かとつても私の事を大事に思ってくれているようで嬉しいのだ。

「それよりも、凜は魔術を身につける事を第一に考えてください」

私はそう凜に続けて言う。凜は、うん、と言って頬を指先で掻きながら、苦虫を噛んだような顔をする。

凜には慌てないでと言っただけで、今のままでは魔術を身につけるのは到底難しいと思われる。

私の為とは言え、早くしようという焦りから余計に勝手が掴めないのだろう。

その気持ちは嬉しいのだが、それで出来なくなってしまっ
ては元も子もない。

「でも、それは出来ないよ…」

「え？」

でも帰ってきたのは予想しなかった返事が返ってきた。
なんで？、という顔をして凜を見ていた私を見つめ返す。

「一番はルリちゃんだよ」

「凜……」

笑っている凜の頬が赤くなっている。

それを見て私まで顔が熱くなるのが分かった。それが恥ずかしくて私はポケットの中に首までスッポリと入ってしまう。

「……私も今の一番は、凜……だよ？……」

ふと言ってしまった自分の言葉に、更に赤面していく私。何を言っているんだろうか、私は……。

凜はよく聞こえなかったのか私を見ながら、どうしたの？、と言ってくる。私は返事が出来なかった。

その様子に凜は空気を呼んだのか、それ以上話しかける事無く歩いていく。

すると前の方に若い女性の姿が。

その女性は白い杖のような物をつきながら、右往左往している。

「どうしたんでしょうね？ あの人」

「目が見えない人、みたいだね」

凜にそう言われ女性の事を見ると、さっきから目を開けずに

キヨロキヨロしている。

確かによく見ればあの杖は『白杖』ウチクシと呼ばれる物だった。一度ウイン様を尋ねてきた人が持っていたのを見て、聞いた事があるのをおい出す。

ウイン様の教会にいるせいか、いろいろな人が出入りするのだ。同じような人で『盲導犬』と呼ばれる犬を連れている人もいたし、車椅子に連れられていた人もいた。

そんな事を考えていると、凧がその女性に向かっていく。

「な、何かお困り…、ですか?…」

凧のこうした優しさはとてもすごいと思う。今の世の中、なかなか声をかけて手助けをするような人はいないと思う。

私が感心していると、私たちの声に反応し、振り向く女性の姿はとても綺麗な動作。

最初、え?、という顔をした女性はしばらく私たちを見ると、成人とは思えないとても可憐な微笑を向ける。

「優しいお二人ね。お嬢さんの声も甘くて優しい香りがする」

「香、り?…」

凧が『香り』という言葉に反応したが、女性はもう一つ気になる事を言っていた。『二人』と。

この人は凧だけでなく、私にも気付いている事になる。

私は少し警戒し、身構える。

「何者ですか? アナタ」

突然話しかけた私にビックリしたのは凧だけで、女性は動じず、

少し近づいて私のいるポケットの辺りに顔を向けた。

「あら？ そちらの妖精さんは鉄臭い怖い香り。嫌われちゃたのかしら？ フッフフ」

まさか、妖精という事まで分かっているなんて。

でも、よく分からない事を言いながらも笑う女性の素振りに敵意は感じられない。その姿に私は拍子抜けしてしまう。

この女性は何者なのだろうか…。

く間奏曲く（後書き）

この話をあげる少し前に、原因不明の腹痛が私を襲ってきた…。

一応薬を飲んで落ち着いたけど、この頃こんな事が多い。

先週は偏頭痛に…。高校以来だったので怖かった。

来週は健康診断…。何か引っかけたかかってしまうかもしれない…。

第四章 『迷霧【メイム】』 1 (前書き)

人は必ず自分の運命を決める時が来る。

それは今すぐにかもしれないし、明日かもしれない。

そしてそれがどんなに辛い道でも、どんなに険しい道であっても、それらをすべて受け止めて進まなくてはならない。

悲しくもそれは生きるもの全てに出来てしまった、避ける事の出来ない運命…。

第四章 『迷霧【メイム】』 1

昼下がりの事務所。大型連休と言われても、ここはさほど大きく変わった所は無い。

だけど私の前にいる成瀬はハガキを握ったまま、ずっと狭い空間を行ったり来たりしている。

私はノートPCを操作しながら、横目で様子を窺っていた。

「ヤバイなあ…。もう遅いか…。いや、でも…」

さっきからこんな調子が続いていて、私はさすがに無視をしていられなかった。

「どうしたの？ 成瀬君」

私の声に反応して立ち止まる成瀬。どうも落ち着きが無い。

「いや、あのですね…。ちょっとこれが送られてきてたんで…」

そう言って成瀬は手に持ったハガキを渡してきた。

ハガキの宛名は成瀬となっていて、しかも墨で書かれていた。そして書かれている字も古風な字体で書かれていた。

裏には絵とかは入っておらず、文章だけが書かれていた。

「これがどうしたの？」

「その送り主の名前を見てください」

言われて私は文章を飛ばして目線を最後の方に移すと、そこに送

り主の名前が書かれていた。

『成瀬 巴』とよえ

パツと見で最初は、古風な名前の人だなあ、なんて思っていたのだけど、その苗字をもう一度見てみる。

それは今日の前にいる男の子と同じ苗字。さすがに偶然というわけじゃないだろう。

「これ…、成瀬君の親御さん？」

「…はい。俺の母です」

そう言っつて成瀬はソファーに腰掛ける。また何か考えているようだ。

成瀬の様子を不思議に思い、私は文章の方に目線を戻した。

そこに書かれていたのは、最初の方はちょっとした挨拶が書かれていて、その後のほうを見るとこんな事が書かれていた。

『ところで、今度の連休には帰って来れそうですか？

大変そうでしたらこっちから伺いたいと思っています。

連休までには返事をください。なければこっちから伺いますからでは、体に気をつけて』

そこまで呼んで成瀬が考えこんでいる理由が分かった。

「…返事してないのね。成瀬君」

「だってそんなの知らなかったですもん。ていうかこの時代に手紙なんてよこすなよ。メールしてくれよ」

成瀬はソファに倒れこみながら、足をバタつかせながら今まで聞いた事無い口調で文句を言っている。

そんな姿に少し笑ってしまう。こうしていると歳相応の男の子に見えなくも無い。

私は今日の日付を確認するため、カレンダーを見る。今日は丁度連休の真ん中辺り。

私たちは事務所が家の代わりになっている。一応昼間は私と成瀬のどちらかはいるようにしているので、日中は留守にする事はほとんど無い。だけどそれらしい人物はまだ尋ねてきた様子は無かった。

「もしかして、成瀬君のお母様も忘れてるんじゃないかしら？ だれも今日まで来た人なんて凜ちゃんたち以外いないだし」

「そうだといいですけど…」

含みのある言い方をする成瀬。私が、けど？、と言うと成瀬は元気の無い顔を向ける。ちょっと心配になるような顔色の悪さ。大丈夫だろうか？

「俺の母親…、意地っ張りでギリギリまで信じてる人なんすよ。1日2日は我慢したでしょうけど、今日あたり絶対に来ると思うんす」

…」

そう聞いてハガキを見てみると、確かに成瀬がそう考える理由が分かる。

どう見てもこちらから行くか、あっちから来るかの二択しか取れないように書いてある。きっと成瀬の母親の考えはその通りなのだろう。

「…で、何が心配なの？」

そこが問題なのだ。成瀬が何を心配しているのかがまいち分からない。

親としてはしばらく会っていないのだから子供がどんな様子が見たい気持ちがあつて当たり前のはず。顔を見せるくらいいいと思うのだけど…。

それに私としては成瀬が来てくれてありがたい事しかない。仕事は出来るし、炊事や洗濯などの家事もやってもらつてばかりな気がする。

…そう考えると私が雇つているとはいえ、してもらいっぱなしも良くないかも…。私も何かするようにしよう。

兎も角、私がそんな成瀬を悪く言つつもりはないのだから、何も問題は無いはずだ。

私の問いに成瀬は頬を指先で掻きながら顔をこちらに向ける。

「えつとですね…、それが家を出た理由の一つ、つて言つても間違えじゃないと言えます」

そう言つて苦笑いを浮かべる成瀬。

その時、事務所の扉を開く音が聞こえ、成瀬が体をビクツとさせた。

噂をすれば何とやら、と言つ言葉がある。もしかしてと思い私は扉の方を見るが、そこには予想とは違つて、見慣れた顔の女の子が、ポケットに妖精を入れて立っていた。

私が事務所に入ると、その事務所の主と助手、夏美さんと成瀬君がこつちを見ていた。ちよつとビックリしてしまつて中に入る事が出来ずに扉の所で立ち止まつてしまつてしまふ。

夏美さんの表情はいつもどおりに見える。だけど成瀬君のほうを見るとどうも顔色が悪いように見える。というか怖い。

でも私の顔を確認すると、急に落ち着いた表情に戻っていた。

そんな様子を不思議に思い、夏美さんに、どうしたんですか？、と聞いてみた。

「うん。ちよつとね…」

夏美さんはそう言つて成瀬君を見るだけでそれ以上の事を言わない。私は成瀬君に直接聞こうとした。

でも成瀬君は考え事をしているようで、今は話しかけれそうに無い。

まあ個人的なことなのかもしれないので、あまり触れないようにしよう。

それよりもと大事な事を伝える事にする。

「夏美さん。来る途中で、ここに用があるつて人とあつたんですよ。入つてもらつてもいいですか？」

「エッ?!」

私の言葉を遮るように途端にすごい反応を見せたのは成瀬君。

そんな成瀬君に、どうしたの？、と聞こうとした時、急に後ろでコツンと強く地面を叩く音がした。私とその音に反応する間もなく、ここに来る途中であつた女性の人が私の脇を、スツとすり抜けて入

ってしまっ。

その動作はあまりにも優雅で無駄の無い動き。ただ『歩いてる姿』
と言うのに、私は女性のその動きに見とれてしまい、止める事を忘
れてしまっ。

気付いた時には女性はもう夏美さんの目の前まで行っていた。
肩の辺りで切りそろえられた黒い髪に桜色の着物を着ているその
女性は、そんな素早い動きをしているというのに、息一つ乱れてい
ない。

しかも目の前にいる夏美さんに微笑むほどの余裕まで見せている。
とても目の見えない女性とは思えない。もしかしたらあの手に持っ
た白杖は嘘なんじゃないだろうか。

一方の夏美さんも私と同じ気持ちなのか、突然現れた和服美人を
見つめるだけだった。

「アナタが水華月さん、かしら？」

「あ、そうですが、もしかして……」

夏美さんの口ぶりからすると、どうもこの女性のことを知ってい
るようだ。

すると女性はお辞儀をする。

「もうご存知のようで。どうも、うちの湧樹がお世話になっていま
す」

「やっぱりそうですか。あ、どうぞこちらにおかけください」

夏美さんはすぐに立ち上がり、女性をソファの方へ促した。

女性は言われるままにソファに向かい座ろうとする。

それを見て余計に信じられなくなる。座るときの所作もやはり綺

麗な動作で、私は女性の視力が無いというのを疑ってしまう。

そんな事を考えているのが伝わってしまったのか、女性はこちらに向いて微笑んできた。私はドキッとしてしまう。

「アナタもそんな所に立ってないで、こちらに座りなさいな」

女性の言葉に私は、はい、と返事を返して、言われるままにソファーに座った。

「本当にありがとうね。案内してもらって。それにしてもあなたもここで働いていたなんて、凄い偶然ね」

「どういたしまして。あ、あと私は別に働いてるとかじゃないんですよ」

あらそう、そう言って私の胸の辺りに顔を向けた。

その先には、ポケットの中にいるルリちゃん。ルリちゃんも、私？、と言った表情をしている。

「そんな可愛い妖精さんと一緒にいるから、てっきりお嬢さんも退魔士かと思っただわ」

「ありがとうございます。ルリちゃんは私の先生で友達なんです。今は訳あって一緒に居てもらってるんですよ」

私はそう言いながら、ルリちゃんの頭を撫でてあげる。ルリちゃんは気持ちよさそうにされるがまま。

女性はそんな様子を見て、お似合いのパートナーね、なんて言うてくれた。

そんな風に話していると、成瀬君がカップを持って後ろから来た。

いつの間にかコーヒーを用意してきたようだ。
私の事を見ている。しかもジト目で。

「凜って、なんで尋ねてくる人に会うんだろうな？」

「そういえば……」

言われてみればそうだ。

前にウィンさんが尋ねてくる際も、道に迷っていたウィンさんと出会ったのは私だ。そしてその時と今回も同じように私が事務所まで連れてきたんだっけ。

偶然も二度続くとちょっと怖い。私ってそういう運を持っているんだろうか。

私がそう考えていると、成瀬君がもう一言付け加える。

「……そのまま迷って来れなきゃ良かったのに」

すると突然成瀬君の頭上に白杖が振り落とされた。

成瀬君は死角からの攻撃に避けることが出来ず、コツンと良い音が事務所の中に響いた。

叩かれた成瀬君は頭を押さえながら悶絶している。

一方振り落とした白杖を持っている女性は、先ほどと変わらず笑顔を向けているが、どこか怒気を含んだ表情をしている。少し怖い。

「ってえな！ 何すんだよ！」

「あなたが変なこと言うからでしょ？ 湧樹」

抗議をした成瀬君だったけど、女性の有無を言わさない態度に一つ舌打ちをするだけで、それ以上の事はしない。そしてソファアームに

背を預け、不満な態度を隠さないでいた。

その態度に女性は一度はムツとした表情になるが、これ以上言っても意味がないと思っただのか、一つ溜息をついただけだった。

それを見ていた私は、お節介にも成瀬君に注意する。そこら辺は自分が成瀬君より年上という所からかもしれない。

「成瀬君、お姉さんがこうやって来てくれたのに、そんな事言っちゃダメだよ」

私がそう言うと、皆が、え？、という表情をして私を見た。私、まずい事を言っただろうか？

見た感じ成瀬君より年上だと言うのは確かだと思うし、夏美さんと同じくらい歳の見える。そしたらそう思っても普通だと思うのだけど…。

そんな疑問をよそに、女性が口を抑えて上品な仕草で笑っている。しかも少し嬉しそう。

成瀬君は苦笑い。夏美さんも笑うのを堪えている。

私はそんな皆の反応に困ってしまう。

オロオロとして困っている私を見て、見かねた成瀬君は私の肩を叩いてきた。

「姉さんじゃないんだ。『母さん』だよ」

「エッ?!」

私はさっきの成瀬君に匹敵するような驚きの声を上げてしまう。

そんな反応にすっかりご満悦の女性。耐えられずに笑ってしまう

夏美さん。そんな二人を見比べてみた。

確かに女性は着物を着ていて大人の雰囲気漂わせている。でもやっぱりそこまで歳が離れているように見えない。

「成瀬君のお母さんって、何歳なの？」

「えっと…。確か俺を生んだってのがじゅ……」

そこまで言っただけで成瀬君は言葉を切った。と言っただけで切られた。成瀬君の母の持つ白杖で叩かれて…。

先ほどの叩く強さなど比じゃないというほどの速さと力強さ。いつ動いたのか一つも見ることが出来なかった。

叩かれた成瀬君は、悶絶する事も無く倒れている。というか気絶している。

それを見て私は怖くなって震えていた。すると突然、

「凜さん、って言うのかしら？」

「は、はひい！」

急に話しかけられ、私は変な返事をしてうまく動かない首を動かして女性のほうを見る。女性はこちらの方に顔を向けて微笑んでいた。でもどうしても笑っているように見えない。そして…、

「女性の年齢を聞くのは…、女性に対しての『三つの野暮な事』の一つよ？ それが同姓の方でもね」

そう言って微笑む女性。その表情は『もう聞くな』と言っているように思えた。

私はチラリと倒れている成瀬君を見てしまい、背筋に悪寒が走る。私は女性に向き直り、コクコクと頷くだけだった。

目の前が真っ暗だ。それに体が『今は動くな』と言ってくるように動く事を許してくれない。

しかも頭がズキズキして仕方が無い…。割れているような錯覚さえする。

その痛みは何が原因だったのか思い出そうとしたのだけど、頭の痛さに負けてそれを放棄した。

それなのに…、

…こんな風に頭が痛いので、懐かしいな…。

何故だかズキズキする頭の痛さに、不愉快さと共に懐かしさを感じてしまう。

いつだっただろうか。確か自分が小学生の時だったはず。その時もこんな風に頭に痛みを感じていた事があった。

…そうだ。親父に殴られたんだっけ、俺…。

何でそうされたのかは覚えていないのだが、その時の親父の顔は何故だか簡単に思い出せた。

俺を見つめる親父の顔は、俺を真正面から睨みつけていて、有無を言わさないといった雰囲気を出していた。

俺はその顔を見て怒り返す事は出来ず、『ごめんなさい』という言葉を口から出すことと、目から大粒の涙を流す事しか出来なかった。

でもそんな俺を見て、親父は俺の頭に手を置いてやさしく撫でてくれた。

その手は大きくて、温かくて…。それなのに俺の涙は余計に溢れ

だしてしまっただけだ。

「なんだ…？ 今の…」

ふいに目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。

何か変な夢を見た気分だが、頭の中がボーっとしててよく思い出せない。なんだか歯がゆさを感じた。

思い出せるのは頭の痛みぐら……。

「っ！。いつてえ…」

ここはどうやら夢ではないようだ。

頭に鈍い痛みがある。痛みのある部分に手を触れてみると、そこは大きく腫れていた。

何故こんな風になっているのか…。

「確か…」

何があったのかを思い出す。確かそれは凜に俺が母さんの歳を言おうとした時だった。

突然頭に何かを落とされたような衝撃を受けてしまい、その衝撃は俺の意識を遮断するのは容易いほどの威力で、俺は一瞬で眠りにつかされてしまったのだ。

そして気付いた時にはここ、自分の部屋にいたという訳だ。

「母さん……、やりすぎだよ…」

誰にやられたのかは見ていなかったけど、誰がやったのかは明白

で少し笑ってしまう。

こんな衝撃で打撃を喰らわす人なんて、俺はあの場にいた人の中で一人しか知らない。ずっと育てられてきて、体が覚えてしまっているんだ。間違えようが無い。

母さんはどうも自分の歳に対して過敏に反応するのだ。

前に少し言い合いになった時も、売り言葉に買い言葉で「若作りの年増！」と言ってしまった事があった。別に本気で言ったわけじゃない。

でもそれを聞いた母さんの顔は、今まで見たことも無い顔だった。それはまるで般若面のような顔で、それを見て体が動かなくなつた俺は、本当に死を覚悟したのを憶えている…。

しかしあの時の事は憶えていたというのに、とんだ凡ミスをした…。

「にしても、やっぱり母さんが来た理由って、アレしかないよな…」

それを考えると憂鬱になる。

すると突然目の前の扉が開かれ、俺は少し身構えてしまう。

最初母さんかと思っただのだが、そこにいたのは手に水を入れた洗面器とタオルを持った凜。ポケットにはシャルルも一緒にだった。

私が入った時、成瀬君は目を覚ましていた。

気のせいだろうか。少し安心したような顔つきに見える。

「どっ？ 頭の方」

それには触れず、とりあえず成瀬君に話しかける。すると成瀬君は、私の言葉を聞いて急に頭を押さえた。

「これはヤバイ。脳内出血してるかも…」

「そんな事言つて…。ホントになったら大変ですよ？」

そうだよ、なんて成瀬君はルリちゃん言葉に返ししながら笑っている。この様子ならどうやらなんとも無いようだ。

水に浸したタオルを成瀬君に手渡す。それを受け取って頭を冷やす成瀬君を見ると、改めて本当になんとも無くてよかったと思う。

思い出してみると何事も無かったのが不思議だと思う。

あの時の成瀬君に振り落とされた打撃は尋常じゃない速さだった。見えなかったのは素人目のせいだけではないだろう。

でもその割には音がそこまで大きい音にはならなかったし、私から見た限りはケガもそこまで酷くない。それは多分成瀬君のお母さんの持っていた杖のおかげだろう。

近頃の白杖は持つ人の事も考えてか、カーボンなどの強化プラスチックでできているようで、大きく軽量化されているらしい。

昔は金属でできているモノがあったらしく、それでやられていたらそれこそ脳内出血か頭から大量出血だった。…いや、あの強さだと潰されていてもおかしくない。それを想像すると少しゾツとする。そんな事を考えている私をよそに、成瀬君はタオルを押さえながらベットに寝転がる。

「でも歳の事で実の子供を気絶させるなんて…、やりすぎだろ」

それを聞いて私は成瀬君に近づき、頭を下げた。

突然そんな事をしたものだから、成瀬君は戸惑っている。

「…そうだったのって、私のせいでもあるよね。…ごめんね」

知らなかったとはいえ、元はと言えば私が聞いたせいで成瀬君がこうやって被害を受けてしまったんだ。痛がっている成瀬君を見ると、少なからず私自身も申し訳なく思う。

成瀬君はそんな私を見て上半身だけ起き上がった。

「そんな。気にする事無いつて、こんなの。やりすぎとか言ってたけど、結構慣れてる事だし」

そう言った後成瀬君は立ち上がり、押さえていたタオルを洗面器に入れ、よく絞って頭に当ててもう一度座る。

「俺が小学生の時なんかは、何か悪い事するとすぐに怒られてたから。」

まあそれ自体は口で怒られるぐらいなんだけど。俺って捻くれて、親の言う事聞けなかったんだよ」

「え？ 捻くれ者なのは今もじゃないですか？」

急に成瀬君が真面目な雰囲気で喋り始めたのに、ルリちゃんが茶々を入れるのだけど、そう？、と普通に答えてスルーする成瀬君。反省しているのか、ルリちゃんは何も言わなくなってしまった。

大丈夫だよ、という意味で私はルリちゃんの頭を撫でてあげる。でも逆効果だったようで、ポケットにうずくまってしまった。

そんなこちらの様子を気にせず、成瀬君は続ける。

「まあそうなれば親は当然怒るじゃん？ もう…、そうならたら大変だったよ…」

そこまで言って黙る成瀬君。

「どんな事…、されたの?…」

成瀬君が急に黙ってしまったので、その先が余計に気になり聞いてみる。

でも何も答えてくれない。

「ねえ…、何、されたの?」

もう一度聞いてみるけど、やはり答えない成瀬君。

でもその代わり、よく見ると成瀬君の体が大きく震えていた。顔も青ざめていて異様でしようがない。

「ああ…。なんとなく分かった…。もういいよ…」

「…いい判断ありがとう」

とりあえずこの話はここで終わりとなった。というよりも私と成瀬君両方が無言でここで終わりにした方がいいと判断した。

でもこのまま黙るのも変なので、一つ気になってた事を聞いてみる。

「そういえば聞きたい事があつただけど、なんであんな事言ったの?」

「…ん? あんな事って?」

「そのまま迷って来れなきゃ良かったのに、って。いくらなんでも言い過ぎじゃない? お母さんが心配して来てくれたのに」

どこから来てるのかは知らないけど、一人で家から出てった息子を訪ねて来たんだ。私だったらありがたいと思うのだけど…。でもそこまで私が言つと、成瀬君はなんだか機嫌が悪くなったよ。うな顔になる。

あれ？…、聞かないほうが良かったかな…。

成瀬君はもう一度立ち上がり、押さえていたタオルを洗面器に入れて、手を頭の後ろに置いてベツトに倒れこんで天井を見上げていた。

「母さんはさ、俺に辞めて欲しいんだってさ」

「何を？ あ、家に帰って来い、とか言われてるの？ …もしかして、成瀬君のお母さんって親馬鹿？」

そう言った私を見て成瀬君は、フツ、と笑った。

ちよつと馬鹿にされたようでムツとする。分からないんだからしようがないじゃないか。

「この事務所に働きに行くのを辞めてくれ、っていうならまだマシだと思つよ。家が嫌いというわけじゃないから帰ればいいだけの話だし。」

…でもそうじゃないんだ」

そこまで成瀬君が言つて私もやつと分かった。

「今やってる仕事…、退魔士を辞めてつて…、事？…」

そう私が言ったのに、成瀬君は何も返してくれない。

でもそれが、私の言葉に肯定しているのと同じだという事が簡単

に分かってしまった。

私の前に座る成瀬の母である巴さんが微笑んで私を見つめてくる。

どのくらい経っただろうか。気絶した成瀬が凜にズルズルと部屋に連れてかれてからずっとこのままだ。

巴さんの方からは何も言っでこず、私も何を話せばいいのかと考えてしまつて切り出せずにいる。

そんな様子を見かねてか、巴さんが口を開いた。

「いきなりお邪魔してしまつてごめんなさいね？」

「あ、いえ。巴さんもこんな所までありがとうございます」

気になさらないで、と言いなからカップを手にとつて口をつける。和服姿なのに所作が綺麗でマグカップがとても似合う。

それにしてもこうやって目の前で見ると、凜が『お姉さん』と言つてしまうのがわかる。私だつて先に成瀬から聞いてなかつたら、間違えていたかもしれない。

「それで、家の湧樹はどんな様子かしら？」

「湧樹くんですか？ いつも仕事を一緒にして手伝つてもらつてますし、申し訳ないのですがここでの家事の方は彼に頼りつきりで、本当にとても助かつてます」

「そう言ってくれると親としては嬉しいわ。邪魔してないか心配だったの。あの子変に大人びてて、家じゃ素直に言う事を聞かないものだから」

そう言って笑う巴さんにつられて私も笑ってしまふ。

こうやって一緒に話していると、成瀬が何を心配していたのか分からない。

白杖を持っている所を見る限り、この人は目が見えないのだろう。そんな親が成瀬のことを心配してこんな所にまで来てくれて、しかも私がこき使っているように話しても、それを咎める事もない。私はてっきりそういう事をガミガミ言ってくるような、親馬鹿か子煩惱と言われるような人を想像していた。

それなのに成瀬は何をそんなに心配していたのか…。

「それでね、あなたにご相談があるの。聞いてくれるかしら？」

突然そんな事を言ってくる巴さん。

「ええ。私でよければ何でもいいですよ。湧樹君にお世話になってますしね」

何だろうと思いつつ私にそう言って私は笑って返す。

だが、巴さんは今までの微笑んだ表情ではなく真剣な表情。さっきまでの穏やかな雰囲気など嘘のように。

私はその雰囲気にも吞まれそうになりながら、巴さんを見つめ返す。

「あの子にね、一言言ってくれるだけでいいのよ」

そう言って巴さんはカップを取り、もう一度口を付ける。

私はそれを見て黙って待つ。

そしてカップから口を離し、巴さんは私を見つめてくる。

「退魔士をやめなさい、って」

巴さんはまた微笑むのだが、それはさっきまでの微笑とはとても同じものとは思えなかった。

第四章 『迷霧【メイム】』 2 (後書き)

サッカーは魔物…。

夢中になって見ながら酒を飲みまくり、次の日の午後3時に起きてしまっ…。

予定では金曜か土曜の深夜なのに、遅くなってしまった。もうこんな失敗はしないようにしたい…。

巴さんの突然の申し出に、何も返す事ができずに私は戸惑ってしまっ。

退魔士を辞めなさい…。

それは何を理由にそうさせたいのか…。

少しの間だが成瀬と共に仕事をしてきたのだが、一つも悪いところは見当たらない。

ランクも符号無しのBランクで、歳を考えれば上々の出来。手合わせした時も分かったが、実践も結構な場数をこなしてきたのが伺えた。

これでやめさせなくてはならない理由が見当たらない。

「…何故、それを私に言うてほしいんですか？」

私は単刀直入に巴さんに聞く。

その巴さんはコトつとテーブルにカップを置いた。

「ずっとここに来てから湧樹を見てきた水華月さん、あなたに『才能が無い』と言われればあの子ももしかしたら諦めがつくと思うの。そうすればあの子もこの仕事を辞めてくれるんじゃないかと思って」

巴さんはサラッとそんな事を簡単に言い、表情も崩さない。

本気なんだろうか？ 私の頭にそんな疑問が浮かぶ。

親が子供に退魔士という仕事をさせないというのは別に無い事ではない。

でもそれは退魔士だった親が子供にその退魔士という存在を隠し

て一般人として暮らす、というのがほとんどの、というより過去の例を見ても当たり前と言つていい手段と言える。

それは、子供には自分のような道を辿つて欲しくない、という親心が働いての手段なのだろう。

それなのに今の成瀬のように子供がその存在を知り、しかも退魔士になっているというのを辞めさせるといふのは聞いたことが無い。でも目の前に座る巴さんの態度からは、嘘をついているような感じはしない。

「でもそういう事は巴さん本人から伝えたほうがいいんじゃないですか？ 私なんて一緒に働いているといつても、期間としてはそれ程経っていませんし、何よりずっと湧樹君の事を育ててきた親である巴さんが言つた方が聞いてくれると思うのですが…」

これから先の人生に関係あることだし、そういう事は当人同士で話し合うほうがいいと思うのだけど…。

でも私がそう言つと、何も言わずにただ溜息をつく巴さん。そして私に顔を向け口を開く。

「そうね…、あなたの言つとおり私が言つべきよね」

「なら何でそうなならないのですか？」

すると巴さんは自嘲気味に笑う。

「もう何回も言つたわ。退魔士なんてやめなさい、つて。でもあの子、頑なにそれを受け入れてくれないの。それだけは母さんの言う事でも聞けない、つて。」

……理由は、分かつてるんだけどね……」

「その、理由っていうのは…」

すると巴さんは自分の左手の薬指を見つめる。

「主人が…、あの子の父親が亡くなったのが原因なの。その後からあと明らかに仕事の取り組み方が変わったもの。聞いてもあの子は関係ないって言うけど、私にはそんなの嘘って分かる。言葉が嘘を言っている匂いなんだもの。」

「…まあ言葉の匂いなんて嗅がなくても分かるわ。あの子のそういう所、主人に似て嘘が下手だから…」

巴さんは、言葉遣いがおかしくなるのよ、と加えて言っつて小さく微笑む。その表情はまさに母親そのもので、どこか嬉しそうですもあった。

それにしても、父親が亡くなったのが原因、か…。

「…失礼ですが、もしかしてご主人が亡くなったのって…」

「退魔士の仕事で、上の息子と一緒にね…」

父親だけじゃなく成瀬のお兄さんも亡くなっていたのか…。

確かに悲しい出来事だ。だけどそれは退魔士としては宿命と言わざるを得ない。命を賭けて戦っていれば、そういう危険だってある。この職についた者やその家族はそういう事があるという事を心こしている。

成瀬だってそれは同じはずだ。そしてそれが成瀬の辞めない理由に繋がると思えない。

「でもそれが一体湧樹君にどう影響したんですか…」

「それが…」

そう言うところか戸惑うような態度を見せる巴さん。

私は何も言わずに言葉を待つ。そしてやっと口を開いた巴さんの言葉は意外なものだった。

「主人や上の息子が死んだ、その原因になったのが…、あの子なんです…」

「湧樹君が？」

巴さんは頷いてそのまま続ける。

「あれは主人が湧樹を連れていった時…、あの子が小学生の頃かしら…。」

その案件自体、主人と上の息子だけで処理出来る危険のない案件だったから、どうせなら、って湧樹も連れて行くことになったの。

でもその時、あの子が身勝手な行動をしたみたいでね…。主人達があの子を守るうとして、そのまま…。

葬式の間中ずっと泣きっぱなしで主人と兄に謝ってたわ…。お父さんお兄さん、ごめんなさい、って…。今でもその時の湧樹の姿を憶えてる…」

そこまで言うと巴さんは一度落ち着くためにカップを手に取り口を付けた。きつとそれを話すのはとても辛いのだろう。よく見るとカップを持つ手が小さく震えていた。

そして聞いていた私も、何も答えられずにいた。

ただ理由より何より、一五歳のあの男の子がそんな過去があつて退魔士になっているなんて思いもしなかったから。

まして小学生の子供がそんな経験をしたらトラウマになりかねな

い。それでよく退魔士になろうと思ったものだ。

……いや、逆かもしれない。

巴さんが言うようにそれが理由なんだ。

「湧樹君は退魔士を続けているのは…、退魔士であったお二人への償いなんですか？」

「詳しい事は分からないわ。でも私はそう思ってる。

あの子、それからずっと何かにとり憑かれたように退魔士の仕事をやってるから」

「じゃあ…、湧樹君のその理由が、巴さんの辞めさせたい理由なんですね？」

巴さんは返事をせずに頷いた。

「あの子がそんな理由で退魔士を続けていくなら、私は辞めさせたい。そんな償いとかで…、あの子に命を粗末にしてほしくないの…」

巴さんは両の手を膝の上で握り、顔を下に向ける。

「私は退魔士だったと言う前に、一人の母親なんですもの。子供にそんな重荷を背負って生きていつてほしくないわ…。

私はどうせならもっとあの子に平和に生きてほしいの。退魔士として生きていくというのが、どれだけ大変か知っているから…」

そこまで言うと、巴さんは黙り込んでしまった。

静かになった事務所の中、私はどうしたものかと考えてしまった。

するとその時、事務所の扉が開かれてそちらを見ると、そこに立っていたのは凜と成瀬だった。

「成瀬君」

俺が黙ってベットに寝転がりながら天井を見ていると、凜が突然声をかけてきた。

俺は、ん？、と言って顔を向ける。

「成瀬君はお母さんが嫌い？」

「へ？」

急に意味の分からない質問をしてくる凜。

「何でそんな事聞くの？」

俺がそう聞いても凜は、いいから答えて、と言っただけで理由を教えしてくれない。何なんだろうか？

凜を見てみると、表情は真剣だった。俺はその表情を見て、改めて考えてみる事にした。

俺が…、母さんを嫌ってるか…。そんな事はない。

確かに俺は母さんに辞めろと言われるのが嫌でこの事務所で仕事をしている。家から出ればさすがに母さんから言われるのを避けられて、同時にそれは退魔士の仕事を辞めたくないという意味を表せると思ってたからだ。

だから別に母さんを嫌っての行動ではない。人にどう取られるかは知らないが、少なくとも俺の中では違うと思っっている。

「…嫌いじゃない。親父がいなくなってから、俺を一人で育ててくれたんだ。嫌う事なんて……」

むしろ感謝しているほどだった。

俺みたいな手のかかる子供を女手一つで育てるのは大変だったはずだ。

すると俺の言葉を聞いて、よかった、と言って俺のそばに座る凜。

「なら、成瀬君にもお母さんの気持ち分かるはずだよ、きっと」

凜はそう言って微笑む。イマイチ何を言いたいのか分からない。俺が母さんを嫌いじゃないから分かる事…、ってなんだ？

「親だったら、子供を思っただけなんだよ？　きっと成瀬君のお母さんもそうだったんじゃないかな」

「そうって？」

「成瀬君のお母さんも退魔士だったんでしょ？」

「うん」

「ならきつとお母さんは成瀬君よりこの仕事の大変さや危険もいっ

ばい知ってるんだよ。そういう大変な仕事って知ってて、簡単に自分の子供をそんな職に就かせたいわけないもん。

家なんて前に進路の事について話してたことがあったんだけど、私のお父さんがコックさんやっててね。私もなりたいて言ったら「親がやってるから自分もやるなんてのは感心しない」なんて言われて、私が言い返したりしてケンカになっちゃったの。

そしたらその後、お母さんが来て……」

すると凜は膝を抱えるように座る。膝に顎を乗せて溜息を一つ。

「義行さんは反対してるんじゃない。簡単に決めてほしくないんですよ。ホンマは子供に同じ道歩く言うてくれて嬉しいんですけど、義行さんはあの仕事の大変さを知ってはる。だからあんな意地悪な事言いはるんよ」って。

あ、何言ってるんだろうね、私。成瀬君と私の話じゃ、全然違うのに。ごめんね」

「……」

俺は凜の話に何も返せなかった。

なんとなく、凜が言われた言葉ってのが俺の頭に残る。

そういえば昔、まだ親父と兄貴が生きてた頃、小さい俺が親父達みたいな退魔士になりたいと言った時があった。

その時、俺も凜と同じような事を言われた時があった。簡単になりたくないなんていうな、と。

今思うと、子供が言う夢を簡単に否定するのは酷かったんじゃないか……。

でも最後には自分のやりたいようにやれと言ってきて、俺に戦術を教えてくれた。それはとても嬉しかった。

「まあでも、一度お母さんとちゃんと話し合うのもいいんじゃないかな。何も言わなかったらさ、あつちの言いたい事が分からないだけじゃなくて、こつちの言いたい事も伝わらないんだもん」

ね？、と言ってこつちを見る凜の顔は妙に大人びてて、一年だけでもやっぱり年上なんだなって思う。

…ちょっと悔しい。でも、その通りかもしれない。

「…何も話さない事には始まらないもんな」

俺がそう言うと、凜が俺の頭を撫でてくる。

何だと思いいながら俺は目だけで抗議する。でも凜は気にせず撫でるのをやめない。

「愛くるしいやつめ」

そんな事を言う凜。その表情は、さながら悩み相談を受けた姉と言ったところだろうか。

恥ずかしさと共に、悔しさもこみ上げてくる。凜に年上面をされたのが特に。

それを悟られまいと俺は一つ言ってやる事にした。

「でもさ。凜が親に料理人になるのを反対されたのって、料理が出来るからなんじゃ……」

そこまで言って俺は言葉を止めた。

それは目の前にいる凜が、見たことのない表情をしていたから。

「成瀬君……」

小さく俺の名前を呼ぶ凜に返事をする事が出来ず、ただ黙って滝のように汗を流していた。
それを気にすることなく、俺に体を向ける凜。顔は笑っているのだが、絶対に笑っていない。

「言葉には、気をつけようね？」

俺の返事を待つことなく、凜は俺に平手ではなく、躊躇なく拳を放った…。

「ごめんなさい…。凜様…」

俺は持つてきてくれたタオルを、頭ではなく頬に押さえていた。

一方前に行く凜は謝っている俺を見ようともしない。

余程料理が出来ないのを気にしてるんだ…。これからは気をつけよう…。

そんな事を思いながら事務所の前まで来ると、凜が立ち止まる。

不思議に思っつて声を掛けようとすると、凜がやっところちらを見た。

そして口の前に人差し指を立て、喋るなどジェスチャーする。

すると、事務所の中から声が聞こえてくる。

『あの子がそんな理由で退魔士を続けていくなら、私は辞めさせたい。そんな償いとかで…、あの子に命を粗末にしてほしくないの…』

それは俺のよく知っている声…、母さんの声だった。

少しするとまた聞こえてくる。

『私は退魔士だったと言う前に、一人の母親なんですもの。子供にそんな重荷を背負って生きていつてほしくないわ…。』

私はどうせならもっとあの子に平和に生きてほしいの。退魔士として生きていくというのが、どれだけ大変か知っているから…』

初めて聞く母の本音。

それはたった一人の俺の母親としての言葉だった。

それを聞いた俺は、なんだか自分が酷く情けなくなった。自分の事だけを分かってもらおうとしていた俺が…。

いつの間にか俺は扉を開いていた。

いや、ちゃんと自分の意思でだ。言葉を伝えるために。

俺の思いを、伝えるために…。

私は扉の開く音が聞こえ、そちらに顔を向けた。

私の目は扉を開けた者の姿を見る事が出来ないのだけど、日々の生活の習性で顔を向けてしまう。目が見えないからといって、顔を向けずにいるのはさすがに失礼だと思うから。

最初は水華月さんのお客さんかと思って会釈をしたのだけれど、なかなか挨拶の声も聞こえず、入ってくる足音もしない。

どうしたのかと思ったけど、その様子からなんとなく相手が誰だか分かった。

「…湧樹？」

一応確信を持っていたのだが、相手は私の言葉に何も返答してこない。ただその代わり、扉の辺りから私の反対側に向かっていく足音が聞こえる。

私はいつものように相手を認識する為に白杖を手を取った。これは今の私の目としての役割を持つ大事な物だ。と言っても私の使い方とは本来の用途とは少し違う。

それを象徴するのが私の持っている白杖の地面を叩く先端部分、それが金属で出来ている。

他にもいろいろな素材があるのだけど、私はよく音が響く金属を使うようにしている。そうじゃなければ意味を持たなくなるから。

私はそれで少し強めに地面を叩く。コーンという少し高めの音が事務所の中に響き、私はすぐに耳を澄ませた。

そして反響する音が私の耳に集束し、跳ね返ってきた音の微妙なずれ等で、頭の中で周辺の立体像が生まれ、それにより今反対側に向かっていった者の背丈などが認識でき、やはり湧樹だという事が分かった。

これは『反響定位』はんきやうていいいと呼ばれるもので、別に退魔士としての能力でもなんでもない。

私のような目が見えない者が、訓練次第で身につける事が出来る『聴覚による目』と言える。それはある程度の大きさや、慣れてきた者なら大まかな形も分かるようになる。

例えばコウモリや鯨などもこれと同じような事を行って食を得ている。音を自ら発し、その跳ね返り音を受信して獲物との位置関係を把握すると言われ、聴覚に頼っている動物に多く見られるらしい。

『エコーロケーション』とも呼ばれ、近年ではこれを視覚障害者にトレーニングさせる事を推奨してるそう。

「…聞いてたの？」

私はとりあえず声をかけた。また何も返してくれないんじゃないかと考えたけど、今度は、うん、という小さな声が返ってきた。

その声は確かに湧樹のものだった。

「形はどうであれ、盗み聞きしたみたいで…、ごめん…、なさい…」

最後の方ははっきりとしてないが、湧樹は謝ってきた。

私が何か返事をしようとしたけど、その前に湧樹が喋る。

「だから、俺の言いたい事もちゃんと母さんに伝える。俺だけ聞いたんじゃ不公平だから」

湧樹のその言葉に、嘘の匂いはしない。そしてその代わり、決意の表れが匂いから覗えた。

その様子に私は姿勢を正し、湧樹の方を向く。

でもその時、私はある事に気付いた。

「初めてかしらね…。私があなたからこんな風にちゃんと話を聞くの…」

その言葉に湧樹は何も答えない。

思えばずっと私は湧樹に退魔士を辞めると言うだけで、記憶にある限り湧樹の言いたい事をほとんど聞いた事がなかったはずだ。

気付けば言い合いになって余計に話が出来なくなり、結局何も話し合うことも出来なかった。

それを考えると私は少し気落ちする。

子供の話や聞かず、ただ私の意見だけを押し付けて反対されてしまつのを嘆いてた私が、あまりに滑稽に思えて…。

「ごめんなさい…。湧樹…」

自然と私はそんな言葉を口から出していた。

いきなりこんな事を言っただけだと思われるかもしれない。

けど、私は言っておかなくてはと思ったのだ。

「何謝ってんの？」

すると湧樹は気付かないのか、それとも気付いてないふりをしていいのか、そんな事を言っている。私も、なんでもないわ、と言うだけだった。

そのせいか、私と湧樹は互いに何を話せばいいものか考えてしまい、黙り込んでしまう。

気まづくなつたようで、一緒に来ていた少女が、お茶淹れてきますね、と言っただけで妖精と共に奥の方にいなくなってしまう。

すると水華月さんという方も、提出する書類まとめてないや、と

言ってそそくさと同じようにどこかへ行ってしまった。
それにより私と湧樹は事務所に取り残されてしまい、静かになっ
てしまう。

最初どうしたものかと考えてボーっとしてしまったけど、どちら
ともなく笑ってしまっ。

「二人とも、あからさま過ぎでしょ……」

湧樹の呟きに、そうね、と言ってまた笑ってしまっ。

ひとしきり笑っつと、さっきまでの私と湧樹の間にあつた気まずさ
が感じられなくなる。

こんな簡単な事で息子と向き合えなくなつてた事を思うと、むな
しいと言っより余計に可笑しくなつた。

今思えば家族なのだから話し合っ事なんて簡単な事だつた。

家族だからこそ伝えたい事を伝えられずなのに……。

母親である私から歩み寄つてあげればよかつた……。

そんな思いが次々にこみ上げてくる。

もう後悔なんてしてもしょうがないのだけど……。今までの事はや
り直したくても出来ないのだから……。

「ふう。それで？ 言いたい事つて何なのかしら？」

私は落ち着いて湧樹に話しかけた。

湧樹もその様子を察してか、さっきまでの緊張した雰囲気を感じ
られなくなつた。

とにかく何か言わなくちゃと考える俺。

思いを伝えるなんて思っていないながら、どうしたらいいかと悩んでしまう。

実際突発的に言ってしまった言葉だから、何も用意していない。その時、ふとさつき部屋にいた時の凜の言葉を思い出す。

……何も言わなかったらさ、あっちの言いたい事が分からないだけじゃなくて、こっちの言いたい事も伝わらないんだもん。

そうだ。それだけの事なんだ。

なのに俺は、今まで変に意固地になってしまい、何も伝えようともしていなかった。

きつと俺自身、どこかそれを話してしまうのが恥ずかしいと考えていただけなんだろう。まあ今もそれを言うのが恥ずかしいと思っているけど…。

それでも俺は、母さんとちゃんと話しをしようと思ひ、姿勢を正した。

「さつき、母さんが言ってたよね？俺が退魔士を続けている理由が償いの為、って」

「……うん」

「確かにそれもあるかもしれない。

だって俺を助けて父さん達が死んだんだから…。それを何も感じないなんて言ったらただの馬鹿か親不孝者だ。母さんに言われても

それは忘れる事は出来ない。

でも理由はそれだけじゃないんだ……」

そう……。それだけじゃないんだ。

母さんは、え？、という表情をして俺の方に顔を向けている。

「これはあまり言いたくなかったけど……。聞いてよ。父さんが……。言ってた事……」

「あの人か？……」

きつと母さんは知らない。父さんも俺に似て変に頭が固いから、隠しているってバレても、そんな事口が裂けても言えないだろうし。いや、考えたら俺に似てと言ったけど、俺が父さんに似てるんだろ。うな。

そんな事を思いながら、俺はあの時のことを思い出しながら喋り始めた。

退魔士になると宣言してからは、俺はいつも父さんや兄貴に稽古をつけてもらっていた。

その日も稽古を終え、道場で疲れて動けない状態になってしまった俺に、父さんが俺のそばにやって来た時だった。

それはいつものように稽古の反省点を話すだけだった。

でもその日、ふと父さんに俺が言った言葉から始まった会話があった。

『父さん』

『ん？ なんだ？』

『強くなる秘訣ってあるの？』

それは本当に素朴な疑問だった。

まあしつかり毎日稽古をする以外には思っただが、何か他に理由があるんじゃないかと思っていたのだ。

すると俺の言葉を聞いた父さんが顎に手をやって、うん、と唸っていた。

そしてそのまま俺の方を見ながら答える。

『まあ秘訣ってもんはないが、俺が強くなった理由はある』

『え！？ なんなの？ 教えてよ！』

俺は強くなれる方法があると分かると、少し興奮しながら父さんに詰め寄ってしまった。

『ああ…、うん…。まあ…、なんだ…。ちょっと恥ずかしいんだがな…』

父さんはそう言うと、苦笑いを浮かべながら、言いづらそうに頭を掻いていた。

俺は父さんが何でそんな態度をするのか分からなかった。一緒にいた兄貴は何か分かったのか、少しニヤニヤしながら父さんを見ていた。すると父さんはますます気まずそうにしていた。

『ねえ。なんなの？』

それを見た俺が少し怒りながら言うと、父さんは一息を吐く。

『ああ。分かった。言ってやるけど…、一つ約束してくれ。母さんには言うなよ?』

『え? うん…』

どうしてそこで母さんが出てくるのか分からなかったが、自分が聞けるんならと思い承諾した。

父さんはそれを聞いて一つ咳をした。

『強くなった理由はな…、母さんだよ』

『母…、さん?…』

イマイチ意味が分からない。強くなった理由を聞いてるのに、またここで母さんが出てきてしまったから。

そう言った父さんは、何故か顔を真っ赤にしていた。兄貴の方はもう堪えきれず大笑い。

父さんと兄貴の様子に、俺は訳が分からなくなった。

そんな俺を見かねて、父さんが説明してくれる

『お前にはまだ分からないかもな。』

まあ簡単に言つと、母さんに心配させないため、だよ』

『心配させない…』

『ああ。母さんああ見えて結構心配性でな?』

俺が危険な仕事を引き受けると、反対してくるんだよ。

……自分だつて退魔士やってたとき無茶してたくせに……』

父さんはブツブツと文句を言い始める。
それよりも俺はあの母さんが心配性と言うのが信じられなかった。
いつも仕事に行く父さんを見送った時、俺が「父さん、大丈夫かな?…」と聞くと、母さんはいつも俺に笑顔を向けて「大丈夫よ」と言ってくれていたから。
すると父さんはひとしきり文句を言い終えたのか、やっと本題に戻った。

『でもそれって、俺がまだまだ弱く見えるって事じゃないか、とも思えるだろ?』

『そう…、かも…』

『だから俺は、あいつに心配させないくらい強くなってやろう、って思えるんだよ』

なんとなく分かるような、分からないようなでモヤモヤしている。
そんな俺の頭を撫でる父さん。

『ま、難しく考えるな。大事な人の為に頑張ってたら自然と強くなれたってだけだ。お前もいつか分かるよ』

そう言って立ち上がって道場を出て行くこととする。
すると出口付近で立ち止まり、俺たちに振り向いた。

『今はお前らがいるからってのも理由だぞ?』

父さんはそう言つとそそくさと道場を後にしていった。

一方俺は父さんが言い捨ててった言葉が、何故か嬉しいような、恥ずかしいようなで複雑だった。

俺が喋り終わると、母さんは黙っていた。

俺はまずい事を言ってしまったかと心配しながら、自分も黙り込んでしまう。

すると母さんが、湧樹、と俺を呼ぶ。

「ちょっと…、風に当たりたいわ…。外に行きましょう？」

「…ああ。…いいよ」

突然の母さんの申し出だった。

母さんは俺の返事を聞くなり立ち上がる。それを見た俺は、ちょっと待って、と言う。

「あんまり出歩くより、屋上の方がいいんじゃない？」

そう。それじゃあ、と言ってそれを了承する母さん。

それを聞いた俺は、屋上へと案内するために先を歩いた。

「すみません。少し遅くなっ…、て？」

気まづくなくなつて席を外した手前、戻ろつか戻らないべきか考えていたら長く台所にいてしまった。

自分でお茶を持ってくると言っていたのに、遅くなつては申し訳がない。

そう思つて急ぎ足でお茶をお盆に乗せて持つていくと、何故か事務所には一人も姿が見えなかった。

夏美さんはきつと私と同じ理由で退席したのだろう。あの空間はさすがに夏美さんでもキツかつたみたい。

それよりも、成瀬君と成瀬君のお母さんはどこに行ったのだろうか。

お盆をテーブルの上に置き、ソファーに腰掛ける。

「お茶…、冷めちゃいますね」

私のポケットにいるルリちゃんがお茶を見つめながら私に話しかけてくる。

「そうだね」

お盆に乗せたカップの一つを取り、口を付ける。

本当に…、どこに行つたんだらうか。

私が外を見つめると、ルリちゃんも一緒になつて外を見る。

外はもう、空が少しオレンジ色に染まっていて、行き交う人も家路についている頃だった。

屋上に出ると、もう日が少し暮れ始めていた。話していて時間の流れが把握できてなかったようだ。

昼間はあんなにも暑かったというのに、夕方になると少し風もあるせいか、肌寒いとさえ感じる。まったくもってこの異常気象は厄介だ。

そんな事を思いながら、俺は母さんと共に屋上の手すりに寄りかかっている。

風が少し強く吹いていて、俺の隣にいる母さんの着物が音を立ててなびいている。母さんはそれを手で押さえながら、遠くの方を見つめて黙っていた。

俺もただ黙って、母さんの隣にいるだけだった。すると、母さんはスツと顔をこちらに向けた。

「…もうすぐ、お父さん達の命日ね…」

「…っん」

母さんの言葉に、俺は鼓動が大きくドクンツと鳴る。それでも返事はしつかりとした。

どうせ母さんには言葉だけで俺の心なんて読まれてしまっけど…。母さんに言われなくても忘れはしない。…忘れたくても忘れられないだろっけど。

「その時には…、こっちに帰ってくるの？」

「まあ、そのつもりだよ」

「そう。よかった」

そう言っただけで母さんは俺に微笑む。

自分の親ながらこっちの姿を見ると、実際の年齢が分からなくなるくらい若々しさを保っている。

多分格好が格好だから敬遠されがちだけど、着物じゃなかったら結構男の人に声をかけられるんじゃないかと思える程だ。

するとそんな事を考えている俺の腕を、突然母さんが触ってきた。

「！ 何すんの！？」

驚く俺の声を聞いても触り続ける母さん。そして更に腰の辺りや頭を両手で挟むように触られる。

その様子を俺は頭に『？』を浮かべながら辞めるのを待っていた。しばらくして納得したような顔をして、母さんはやっと俺の手を離す。

「いつの間にか、こんなに成長してたのね。お父さんには敵わないけど、お兄ちゃんと同じくらい大きくなったんじゃない？」

そう言っただけで俺の前に立つ母さん。

こっちで見ると、母さんと俺って身長がほとんど同じくらい、と言っただけで俺のほうが大きい位だ。あまり気にしていなかったから、その事実にはちょっと驚いた。

母さんの方も同じような事を思っているようで、腕を組んで何か考えているようだ。

「つい最近までちっちゃいちっちゃい思ってたのに、早いわねえ…」
「そりゃあ…、もうあの時の兄貴に追いついちゃったからね…。そう考えると自分でも早いと思う」

俺が母さんにそう言つと、母さんは、そうだったわね、と言つ。その顔は嬉しそうでもあり悲しそうでもあるような微笑みだった。

気付けばもうあの時の兄貴と同年。時が経つのは早い。

あの頃の俺は自分がどういう風に成長すると思つていたのだろうか。一つ分かる事は、兄貴と同年にこんなに早くなるなんて思つてはいなかっただろう。

「それで？ あなたが言いたい事はなんなの？ まだ聞いてないわ」
「え？」

突然の質問に何も言い返せず、母さんの方を見るだけだった。

「さつき事務所の中で話したのは昔話みたいな物でしょ。しかも父さんの。まああの人の話が聞けたのは嬉しかったけど…」

でも私はね…。湧樹、あなたの言葉を聞きたいの。あなたがこの先どうしたいかを…」

そうだった。今思えば俺自身の伝えたい事なんて一つも伝えてない。

決して忘れていたわけじゃない。

母さんは言い終わると、俺のほうを見て真剣な表情で返事を待っている。

「そうだね。俺自身何も伝えてないし。そこはハッキリしておかないとな」

そう言っただけ俺は母さんに向き直る。

母さんの方は、微笑みながら俺の言葉を待っていた。

でもいざ言っとなると少し緊張する。俺は大きく深呼吸して落ち着かせる。

そして目の前の母さんを見た。

「まあ、分かっているとと思うけど。退魔士を辞める気はないよ。俺は」

俺がそう言っただけ、何も言わず頷く母さん。

それを見て俺は続ける。

「そりゃあ今の俺にとって母さんは大切な人だよ。世界でたった一人の大切な家族だ。」

そんな人が言っている事を聞けないのを、申し訳なく思っている。でも、それでも俺は退魔士として生きていきたい」

「……なんで？」

「父さんがずっとやってきた事を…、俺は知りたから……。」

どんな風に考えて、どんな事を思いながら退魔士をずっとやってきたかを…」

俺は嘘偽りなく、今の思いを伝えた。

それを聞いた母さんは、何も言わずただ俺と向かい合っている。

俺は母さんと向かい合っただけ、何も言わずに母さんの言葉を待った。

なかなか何も言っただけでもない母さんだったが、急に下に顔を向け、そして肩を震わせていた。

もしかして何か不味い事を言ってしまったんだろうかと心配になり、少し身構える。

でも次の瞬間、母さんは顔を上げた。しかも――

「くくく…。あははははは！」

大きな声を上げて笑っているのだ。

俺は一瞬何があったのか分からず、ただその様子を呆然と見つめた。

何が面白いのかわからないが、もう笑うのを止める事が出来ないように、母さんは涙を浮かべ腹を抱えている。

「あのさ…、どうしたの？、母さん…」

一人置き去りにされたように感じた俺は、堪らず母さんに声をかける。だけどその言葉も聞こえないのか、母さんはただ笑っている。俺は苦笑いを浮かべ、母さんが落ち着くのを待っていることしか出来なかった。

「…あれ？ 成瀬君たちは？」

私が部屋から事務所に戻ると、そこには凧と、凧が命名した妖精のルリがいるだけだった。見てみると、テーブルの上にはカップが四つ。一つは空で、他はまだ飲まれた形跡が無い。

「私が来たときにはもういませんでしたよ」

「そうなの。あ、それとごめんなさいね。用意してもらったのに。一つ貰うね」

私はそう言っ、綺麗な琥珀色をした紅茶が入っているカップの一つを手取る。

「あ、さめてますけど…」

止めようとする凧。

それでも私は凧の声を聞きながら、カップに口を付けた。

確かにぬるい。と言っより冷えてると言っの方が正しいほどかもしれない。でも……

「うっん、大丈夫。凧ちゃんが淹れてくれる紅茶は美味しいから」

私が率直な観想を言っ、ありがとっございます、と言っ凧。その顔はとても嬉しそっだった。

そんな顔をされると、私もちよっと嬉しい。

そして私はカップ半分ほど紅茶を飲み、カップをテーブルに置いて凧を見る。

「そっいえば、凧ちゃん。魔術の方はどんな調子？」

私がそう言うと、体をビクッとさせる凜。

そして凜は下を向いてしまい、それをポケットにいるルリが心配そうに見つめていた。

「…その様子だと、うまくいってないみたいね」

「……はい。すみません」

私の言葉に凜はそう返すと、申し訳なさそうにさらに体を縮みこませてしまう。

見かねたルリがポケットから飛び出し、私の目の前まで飛んでくる。

「私からもすみません…。でも凜も頑張ってるんです。頑張っているんですが……」

そう言ってテーブルに着地して、しゃがみこんで「の」の字を書いている。

教えている身としては、申し訳なく思っているのだろう。

私はそんな二人を見ながら紅茶を一口飲んだ。

「大丈夫よ。別に責めるつもりで言ったわけじゃないんだから、そんな顔しないで」

でもその言葉は逆効果だったようで、凜の方は目に涙を浮かべてしまった。

ルリの方は床に倒れこみ、余計にネガティブな気が漂ってきた。

その様子には私は苦笑いを浮かべる。

それにしてもまだダメか…。このままではちょっとキツイ気がしてきた。

「でもこれ以外方法はなさそうだし、このまま様子見しかないかな…」

自分の身を守るといっわけだし、中途半端にしてはダメだ。今はまだ様子見るしかないだろう。

そう考えていると、突然凜が顔を上げる。

「あ…、あの！　一つ相談があるん、です…」

凜は真剣な顔つきで言う。その様子に何事かと思いながら、私は凜と向かい合った。

しばらくして、ようやく落ち着いた母さん。

「ごめんなさいね、と言いなながら自分の頬を押さえていた。思いつきり笑ってしまったので頬に違和感があるのだろう。グニグニとマツサージをして、表情を戻そうとする。

ようやく手を離し、一息ついて俺に向かい微笑む。

「フッフ。ホント…、あの人そっくりね」

「あの人って、父さんの事？」

俺が聞くと、そうよ、と言う母さん。その顔はどこか嬉しそうに

見えた。

「一つも言葉を飾れなくて、本当の事しか言えなくて。今言ってた事も一つも嘘が言えてなくて、そしたらつい笑っちゃって。」

あなたって逆に何か嘘つこうとした時だって、こっちが匂いを嗅ぐまでもなくバレバレだし。そういう嘘がつけないところもホントそっくり」

そこまで言ってまた笑い始める母さん。

一方の俺は、気恥ずかしいような嬉しいような複雑な気持ちで、微妙な表情をする俺

その俺の心境を悟ったのか、母さんは俺の額に人差し指をつきつける。

「なあに？ 父さんと似てるのが気に食わないの？」

「い、いや、そういう訳じゃないけど……。ただ、恥ずかしい気がする」

俺はそう言って母さんの手を払いのけ、そっぽを向く。恥ずかしくてしょうがない。

すると母さんはそんな俺の頭を、ペシッと叩いてきた。イタ！、と言いながら俺は母さんを見る。すると、

「私は嬉しいわよ。あの人に似てくれて」

そう言いながら、え？、と言っている俺の頭を撫でる。

そして俺に微笑む。

「それに、あなたの本音も聞けたしね。湧樹」

その後も俺は恥ずかしいと思いながら、手を払う事をせずに撫で
られ続けていた。

言っておくが、決して俺はマザコンなんかじゃない。…多分。

その後も母さんとの他愛もない会話が思いのほか弾んでしまい、気がつけば夕暮れが暗闇に染まりつつある。

二ヶ月ほど会っていなかっただけに、話し出してしまうと話したい事が次から次に出てきて、なかなか終わらす事ができなかった。

まあ自分の考えをちゃんと伝えられたっていうので、気が楽になったというのもあるだろうけど…。

「そろそろ中に入ろうか？ 母さん」

「あら。結構時間が経ってたのね。ちょっと寒いわ」

「じゃあ中に行きましょう？」と言って母さんは俺を置いて先にいってしまふ。

俺は母さんが先に行くのを見ていたのだが、見た感じどこか前と違って見えた。何がと言われてもハッキリ言えない。でもなんとなく歩いていく母さんの足どりが軽く見えたのだ。

これも話せたおかげだろうか。そう考えると俺はちゃんと母さんと話せてよかったなと思えた。たった一人の家族なのに、いつまでもギクシャクした親子関係ではいたくなかったから。

そんな事を思いながら、俺は母さんの後ろを追いかけていった。

私は夏美さんの顔を見つめる。夏美さんも真剣な顔で私の言葉を待っていた。

それなのに私は、切り出したのはいいものの、本当にいいのかと考えてしまう。

「それで？ どうしたの？」

夏美さんは何も言わない私を不審に思ったみたいで、そんな私に声をかける。

それでも何も言えないでいた私は、ポケットにいるルリちゃんと目が合った。そのルリちゃんは私の事を心配そうに見ていた。

それもそのはず。この事は少し前から一人で考えていた事なのでルリちゃんには何も伝えていない。

成瀬君とルリちゃんがこの屋上で戦った時や、私とルリちゃんが路地裏に成瀬君たちを追いかけていった時に成瀬君と出くわしてしまった時の私自身の様子がきつかけだったから。

ルリちゃんは私を守ってくれていたから、きっと私の気持ちを知らない。

ただ守られるだけの私の気持ちは…。

私は膝に置いた手でスカートを握り締めて、話し始めた。

「その…、お願いがあるんです」

「ん？ いいわよ。何？」

やっと話し始めた私に安心したように、夏美さんは微笑みながら私を見つめる。

私はその反応に安心して続ける。

「私…、夏美さんや成瀬君のように戦えるようになりたいんです」

「え？」

私の言葉に聞いた夏美さんは私を見つめキョトンとしている。

そんな反応をすると私は思った。きっと夏美さんは私からそんな事を言ってくると思っていなかったんだろう。

私自身だつてこの考えはどうだろうかと思っている。だから夏美さんがそんな反応をしたつておかしくはない。

「ど、どうしたの？ 何かあったの？」

夏美さんは困惑しながら私に質問をする。

ルリちゃんの方も驚きの表情で私を見つめ、夏美さんへの返答を待っていた。

そんな空気と自分で何を言ってるんだという思いからだろうか、心臓の鼓動がだんだんと早くなっているのが分かる。

それでも私は落ち着いてゆっくりと話し始めた。

「あ、いえ。別に深い意味があるわけじゃないんです。すいません。ただ…」

「ただ？」

「何も出来ない自分が歯痒くて…」

私がそう言うと、夏美さんもルリちゃんも黙ってしまった。

私がこういう風に考えるのには訳がある。その考えるきっかけとなったのが二つあった。それはこの屋上で成瀬君とルリちゃんが戦った時と、少し前の路地裏でのある出来事だ。

確かに魔術を習う以外に、ルリちゃんには私の事を守ってもらうという前提もあって一緒にいてもらっている。

でも本当にそれだけでいいのだろうか…。そう思ってしまったのだ。

ただ立っているだけの私の事を守るとなると、ルリちゃんだけでは難しい状況にだってなる事もあるはず。

現にそのきつかけとなった屋上で件の件でもそう。あの時、目の前の状況についていけず体が動かなくなっていた私の頭に、成瀬君の投げた鞭がぶつかってしまった。

そして路地裏での出来事もある。突然出てきた成瀬君にただ驚くだけで何もせずに足を竦すくませるだけだった。この時は何事も無く終わったけど、もしも相手が成瀬君じゃなく、追っていた相手だったら危なかった。

私が考えすぎと思われるかもしれないけど、その二つとも私自身が動けたんじゃないか、そうとも考えることが出来てしまった。

「別に本当に戦いたい訳じゃないんです。ただルリちゃんに迷惑をかけたくないってだけなんです」

「凜…。私は別に迷惑だなんて思ってないですよ…」

私の元に来たルリちゃんはテーブルから上目遣いで私を見ながら言う。

そんなルリちゃんを私は手に乗せて目の前に持ってきた。

手の上のルリちゃんは目を離さずに私を見ている。私も目を逸らさず、ルリちゃんに微笑みかける。

「ありがとう。…でもねルリちゃん。ルリちゃんが良くて私にしがちうんだ。」

それに私が自分で危ないときに動いてくれれば、ルリちゃんの負担も減ると思わない？」

「まあ…、それは……。いや、でも、それじゃあ…」

悩むような顔で私の問いかけに答えるルリちゃん。

きつとこれから先どうするかを考えているのだろう。

今もまだ私は魔術を教わっている身。それをどうするのか…。それについても一応考えてはある。

私は夏美さんに向き直る。

「今までどおりルリちゃんからは魔術を教わろうと思っています。それと同時に夏美さんに体術なんかを教わりたいのですが…」

そこまで聞いた夏美さんは、腕を組んで考え込む。確かに同時にやっついてどつちつかずの状態になるかもしれないデメリットを考えれば、どちらかを専念させたいだろう。

それでも私は後には引かず、お願いします、と言いながら頭を下げる。

それを見た夏美さんは大きく息を一つ吐いた。

「本当は気は乗らないけど、凜ちゃんがそこまで言うなら出来る限りの事はするわ」

渋々ながらも了承してくれる夏美さん。

それを聞いた私はお礼の言葉を言おうとしたが、

「ただし」

夏美さんがそう言って私の言葉を止める。

私はお辞儀をするかしないかの微妙な体勢のまま止まって夏美さんを見る。その夏美さんは少し意地悪そうな微笑みを浮かべていた。ちよつといやな予感がする…。

「何か『目標』があつたほうがいいわね」

「目標…、ですか？」

そう、と言って頷く夏美さん。

「何事も目標があつてこそ頑張れるものでしょ？ まあでも、これに関しては私のほうだけに限定するわ。魔術に関しての判断は私には出来ないから、それはルリちゃんの判断で任せるわ」

夏美さんはそう言ってルリちゃんに視線を向けると、ルリちゃんはとりあえずという感じでゆっくりと頷いた。

「それはいいですけど、私はとりあえず魔術を教えるだけですから、判断も何もありませんが…」

ルリちゃんはそこまで言って翅^{はね}を羽ばたかせて私の肩に飛んできて座り私を見つめる。その顔はとても心配そうな表情をしている。

私はそんなルリちゃんの頭を撫で、ごめんね、と言った。

そして聞いていた夏美さんは、わかつたわ、と言ってテーブルに置いておいたカップを取る。

中身を飲み干し、カップをテーブルに置くと、一つ背伸びをした。

「じゃあどうしよっかな？　そこまで難しい事は出来ないだろうし」

「…お手柔らかに、お願いします」

私は苦笑いを浮かべながらお願いする。

どうも夏美さんは見た目仕事の出来る女性って感じなのに、今の表情とかを見ると、かなり意地悪な気がする。そんな夏美さんを見るのは初めてだった。

…もしかして、こっちが素なのかな？

するとその時、そんな事を思っていると、ガチャツと事務所の扉が開く。

そこには成瀬君達二人の姿が。

何故か成瀬君のお母さんである巴さんが笑っていて、後ろにいる成瀬君は頭を手で押さえている。

なんとなく巴さんと夏美さんの笑い方が似ていて、いやな予感がする。

「夏美さん。私から提案があります」

あ、予感的中したかも…。

事務所の前まで着くと母さんが立ち止まる。

俺が、どうしたの？、と声をかけようとすると、母さんは口に入

差し指を当てて、喋るなど指示してくる。

「なんだか『デジャヴ』を見ているような気がしたが、とりあえず母さんの指示に従った。

すると事務所の中から凜の声が聞こえてきた。

『私…、夏美さんや成瀬君のように戦えるようになりたいんです』

凜の声は確かにそう言った。

その言葉に俺は驚いた。

あの凜がそんな事を言うなんて思ってなかったから。自分の身を守るために魔術を習うなんて事をしていたが、戦うなんて事はないと思っていた。

なのになんで…。

『何も出来ない自分が歯痒くて…』

俺の疑問に答えてくれるように聞こえてくる凜の言葉。

なんとなく凜がそう思った理由が分かった。

俺だつて父さんや兄貴が戦っているのを見て、何も出来ない自分が悔しい、って思っていたし。

そんな事を思っていると、前にいる母さんがこちらに向いて笑う。

「あの子、あなたに似てるわね？」

意地悪そうに笑う母さんの顔を見て、少し恥ずかしくなる。

俺が思っている事が分かったかのようなタイミングだから、ちょっとビックリもした。

「ああいう子、私好きなよね…」

ニヤニヤとしている母さんのつぶやきにいやな予感を憶える。母さんがこんな顔をした時は、嫌な事しか覚えていない。

俺が小さい頃に何度この顔を見て、辛い思いをしただろうか。思いつくと体が震えてしまう。

そんな俺をよそに、母さんは話が一段落した事務所の中に入っただけで、それはもう俺が止める間もなく……。

「夏美さん。私から提案があります」

入るや否や、いきなりの発言。しかも盗み聞きは隠すつもりは無いらしい。なんか母さんのそういう所がとてもすごいと思った。俺には出来ない。

中の様子を見ると、こちらを見て普通にしている夏美さんと面食らったような凜の姿が。

そんな様子も気にせず、母さんは話を始める。

「今度湧樹といっしょに家にいらっしやうてはどうですか？」

突然の申し出にさすがに夏美さんもキョトンとする。

俺だつて驚いた。一体どんな提案なんだ？

「家に道場があるんで、今うちで家の中の手伝いをしてもらっている私の姉の子供と戦ってみる、って言うのはどうですか？ 歳は湧樹の四つほど下ですけど……」

「ん？ え?! 美緒みおの奴こっちにいるの？」

俺は提案にビックリするのではなく、美緒がこっちの家に来てるほうがビックリしてしまった。母さんはただ一言、そうよ、と言うだけで、聞いてみるとなんでも美緒が来たのは俺が家を出てすぐだ

ったらしい。どつりで俺が知らないはずだ。
すると夏美さんは、

「その子、実力的にはどうなんですか？」

いきなりの提案だが、夏美さんはどうも乗り気のように見える。
その乗ってきた様子に母さんは気をよくして続ける。

「まだ資格無しのひよっこです。でもどうしても退魔士になりたいらしくて、家の方で私に習って修行してるんです。渋々ながらやっています。私はあの子の師。あの子がどれだけ成長したか知ることが出来るので、是非とも……」

そう言ってお辞儀をする母さん。それを見た夏美さんはソファーから立ち上がり、母さんの元にやってくる。
そして手を差し出す。

「それじゃあ失礼じゃなければ、よろしくお願いします」

「お気になさらず。お待ちしています」

母さんはその手を取って握り返した。

はあ……。面倒になりそう……。そんな事を考えながら凜の方を見ると、困惑した顔で俺を見つめている。多分自分の立場が面倒な状態になってる事に気付いてるのだろう。

そつと凜に近づき、俺は凜の肩をポンと叩く。

「……がんばれ」

少ない言葉だが、凜には通じたようだ。

凜はガクツと肩を落としていた。

第四楽章『迷霧【メイム】』 了

～間奏曲～

日も暮れて、さすがにもう遅いのでと凜が帰った後、俺は夏美さんと俺の母さん二人と共に夕飯を食べる事となった。

いつも通り俺一人で作ろうと思ったが、母さんが、手伝うわ、と言って一緒に作っていた。

と言っても母さんが出てきたら、俺がする事なんてほとんど無い。やる事と言えば逆に俺が母さんの手伝いになってしまう。

その母さんの腕はそこらの料理人なんか真つ青なくらいだ。味付けの文句どころか手際にさえ言う事なんて無い。しかも目が見えないというのだから、今一生懸命頑張つて一人前になるうとしている料理人がそれを知ったら、絶対に自信喪失してしまうだろう。

そんな母さんだが、ただ一つ問題はある…。

まあもう作り始めてしまったからそこは何も言わずに手伝うだけだ。

問題を後回しにするように、今はこの下ごしらえの手伝いをして頭から忘れようとする。

その横で母さんは鼻歌を歌いながら大根を煮ている。よく耳を澄ますと…、

「情～熱のお　赤い…」

鼻歌どころか結構本気で歌いかけてる。

しかもどっかで聞いたことがある。なんか柑橘系の果物の名前をした女の子の母親が歌ってたような…。

……う～ん、だめだ。思い出せない。

そこまで分かかって思い出せないのは悔しいけど、まあ今はとりあえず忘れておこう。

するとそんな俺の様子を察してか、母さんが、どうしたの？、と

声をかけてくる。

「急に黙っちゃって…。もしかして味付け間違えた？ 砂糖と塩が逆だったとか」

「ぷは！ そんなお約束な事はしてないよ。何でも無い。ちょっと考え事しただけです」

俺は母さんに誤魔化すように言い返す。

そう？、と言ってまた調理に戻る母さんを見て安心した。すると母さんはこつちを見ずに俺に声をかける。

「考え事と言えば、さっきいたあの子のことだけど…」

「ん、凜の事？ それがどうしたの？」

すると母さんは少し笑い、口を押さえた。

俺はその様子を見守り、落ち着くのを待った。

「変わった子ね？ 今ならまだ平穏な生活に戻れるっていうのに、自分から荆道せいみちに少し足を踏み入れようとしてるなんて」

「そこで止まってくれればいいんだけど……」

「ただの優しさから来る気の迷いならいいわね。でも……」

そこで言葉を止めた母さんを見ると、意地悪そうな微笑を俺に向けてくる。

そして持っていた菜箸を俺のほうに向ける。

「ああいつ子に限ってそのまま荊道に進んでっちゃうのよね。いつの間にか…」

「怖い事言わないでよ。母さんが言つと当たり前そうだし…。俺はそうならないように願つよ…」

俺は牛蒡うぼろを笹搔さきしながら苦笑いで答える。

さすがにあの感じからして、そこまでの意思は無いはず。護身のために習っている魔術だけでなく、言ってみればその保険として体術を習つというところだろう。

それだけならいい。

今まで普通に生きてきた一般人が、本来は足を踏み入れてはならない領域せかいだ。凜の一般人ではありえないような靈気量を持っているというイレギュラー的な事が無ければ、凜は絶対に関わる事が無かつたであろう領域せかい…。

少し前から人員不足を嘆く今日こんにちの退魔士業界の事を考えたら、人員を確保できるかもしれない今の状況は嬉しい事かもしれない。

でもどうせなら凜が自分で身を守る事が出来るようになったのなら、どちらかを選べる立場である凜には今までどおりの生活を送る事を俺は進めたい。

そんな事を思っていると、母さんは菜箸を置く。

「でもあの女の子の人生だからね。あの子が選ぶ道を他の誰かが強制するのは出来ないわ」

「まあ…。それはそうだけど…」

母さんの言う事はもつともだ。凜がもし退魔士になると言ってきたら、俺はやめたほうがいいと言つたろうが、強制的に止める事は出来ない。

出来る事ならそうならないよう願う。
考えていた時、ふと今さっきまでの事を思い出す。

「……って、母さんが言えるのか？」

言っていた母さんを見て、思わず突っ込んでしまう。

そう言っている自分は退魔士になっている俺の事を辞めさせようとしたじゃないか。

だが俺の声が聞こえないのか、何も返ってこない。

「おい。母さ……」

言いながら振り返って見ると、母さんは聞こえないふりをするように鼻歌を再開していて、調理に没頭していた。耳が良いからそんな事してたつて聞こえてるはずじゃないか。

それでも「自分はいいのかよ！」とは言わず、それを見た俺は溜息をつきながらそれ以上聞かずに料理を続けた。

やばい……。なんか変な事になつてる気がする……。

私はあの後家に帰り、今は部屋のベットに寝転がって頭を抱えていた。

確かに自分から言った事が原因なんだけど、まさかこんな事になるなんて思ってたし……。

「ルリちゃん……。どうしよう……」

青いネコ型のロボットにすぎりつくようなメガネ少年のように、ルリちゃんにすぎりつく。

だけどそのルリちゃんは苦笑いを浮かべながら首を横に振った。

「もうどうにも出来なそうですね。諦めましょう」

「やっぱり……」

分かりきっていた返答を実際に聞くと、思いつきり気分が落ち込んでいく。そして顔をベットに押し付ける事しか出来なかった。

ただルリちゃんの力になりたい。そう思って夏美さんをお願いしただけなのに、いつの間にか成瀬君の従姉妹いとこと戦う事になってしまったのだ。

あの成瀬君や成瀬君のお母さんの親戚の子が相手なのだから、きっと簡単に済む事ではない。

……いや、問題はその前だった。

そもそもそうなってしまった事が問題なんだ。

私だって武術や体術を習うなんて簡単な事ではないと覚悟はしていた。成瀬君や夏美さんを見ていれば、そんな事誰だって分かる。

それでも習うとなれば、きっと大変な事が待っていると思っただけ……。まさかこうなるとは……。

私はうつ伏せの状態から仰向けの姿勢になった。するとそこにルリちゃんが私の胸の辺りに座った。

「それにしても凜。一言相談してほしかったですよ？ 私……」

いじける様な口調で言ったルリちゃんは、口を尖らせ、足をバタ

つかせた。

「いつも一緒にいたのに…、凜にとって私はそんな存在なんですね…」

そう言って俯くルリちゃんは本当に寂しいような表情をしていた。私はルリちゃんの顔を見て、なんだか申し訳なく思ってしまうと同時に、なんだかちよっと嬉しかった。

正直な事を言うと、私はルリちゃんの事を友達と言うより、大切なパートナーだと思っている。だからそんなルリちゃんに守られている事が恥ずかしくなってしまうんだ。

どうせなら自分だって力になりたい。そう思っていた。

でも私一人でルリちゃんのことを思っているだけの、言ってみればただの片思いで、ルリちゃんはそんな事迷惑かもしれないとも思っていた。

けれどルリちゃんの手を聞いた私は、そうではないと分かり嬉しかった。

「そんな事無いよ…。ルリちゃん」

私は微笑みながらルリちゃんの手を指で撫でる。

「ごめんね？　ただルリちゃんに心配をかけたくなくて、それで一人で考えてたんだ。

でもそれが逆に心配かける事になっちゃって…。本当にごめん…

…」

「…」

私の言葉に何も返さないルリちゃんだったが、頭を撫でる私の

手から逃げようとはしなかった。

なんとなくだけど、この様子だと少しは分かってもらえたよう。するとこっちを全然見てくれなかったルリちゃんが私に顔を向けた。

「……まあ今回は私のためみたいですし、その気持ちは嬉しいです。……ありがとうございます」

最後のお礼の言葉は小さい声で言い、顔も赤くしている。その様子がとても愛くるしくて、ルリちゃんの小さな体を胸に抱いてしまった。

「きゅ、きゅるしいです！」

「ふふふ。離さないもんね」

最初のうちはもがいていたルリちゃんだったが、私が全然離さない様子に諦めたのか、抵抗をやめた。私はそれでもルリちゃんを抱いていた。

髪の毛を触ってみると、とてもサラサラでいつまでも触っていたと思うってしまう。

そうやって落ち着いていると、ふとルリちゃんが私に声をかけた。

「魔術の修行も忘れないくださいね？」

「う…、頑張ります」

それを聞いて、よろしい、と言うルリちゃん。

一方の私は返事を返しながらも、大丈夫だろうかと不安に感じて

いた。

自分の部屋にいた私は、成瀬に呼ばれ部屋を出た。

料理の置かれていたテーブルを見て、私は言葉を失ってしまふ。

そこには所狭しと置かれた料理の数々があつた。

金平ごぼうや大根卸しを添えた鯖の塩焼きと出し巻きに、美味しそうな味噌だれがかかっている風呂吹き大根、しかも材料を余すことなく使うようにけんちん汁まで。

「すごいですね。これ全部巴さんが？」

「あるもので作っただけですし、私の味付けなんでお口に合うか分かりませんが」

そう言つて台所の方からお茶を持つて現れた巴さん。その動きに無駄は無く、次々と湯飲みを置いて席に着く。

まったくもつて今の巴さんを見ても、目が見えないとは思えない。

一般の視覚障害者の『エコーロケーション反響定位』とは別格と言えるだろう。やはり

退魔士であつただけあり、そこら辺もやはり違うのだろう。

立っていた私は巴さんに促され、テーブルに着いた。

そこへ人数分の茶碗にご飯をよそつて持つてきた成瀬が現れる。

そしてそれぞれの前に置いて成瀬も席に着いた。

「じゃあ、いただきます」

どうぞ、と言つ巴さんの言葉を聞いて、まずは金平ゴボウに手を付ける。

美味しい。本当に美味しい。

しっかりと味が付いていて、それでいて味が濃すぎず薄すぎず、ゴボウはもちろん、人参やコンニャク、鶏肉が絶妙にマッチしていた。

その後も他の料理に手をつけると、どれもが非のうちようが無い出来で、ご飯がどんどん進んでいった。

気付けばテーブルの上にあつた料理の姿が消えていた。箸をおき、手を合わせる。

「美味しかったです、巴さん。ごちそう様でした」

「フッフ。お口に合つてよかったです。お粗末さまでした」

巴さんはそう言つて微笑んで、手に持つたお茶をすする。

成瀬はというと茶碗や皿を片付けるため、それらを持って台所に消えていった。

「そついえば夏美さん。あの女の子の事、どうするおつもりですか？」

唐突に投げかけられた巴さんからの質問に、腕を組んでしまつ。

「うん。まあ出来る事をするしかないですね」

正直な話、まだ何も決めてない。
力にはなると言ったのだけど、どうするべきか……。
そうやって私が考えているのを感じ取ったのか、巴さんは湯飲みを置いた。

「それならうちの湧樹に頼むといいですね。あの子、いろいろと戦い方を身につけていたから」

「戦い方、ですか？」

「あの子の武器って鞭でしょ？　うちの男たちはみんなその武器を使ってて、剣道とかで言う流派とかが無いから、いろいろな武道や格闘技の動きを取り入れてるんです。」

「ですからいろいろ出来る事はあるかもしれませんがよ？」

確かに鞭で戦う流派や格闘術は無い。

ゲームやマンガでは結構見られる武器ではあるが、実際に武器としては役に立たないと言われている。本来の用途としては、牛や馬を叩いたり、地面を叩いて大きな音を出すという事ぐらいだからだ。ここまで聞くと、鞭とはダメな武器と思われるかもしれませんが、使い次第ではまだ無限の可能性を秘めているとも言える。

「そのためにはいろいろな戦い方を身につけなくてはダメだったのだから。」

「じゃあ、ちょっとお願いしてみます。…って、すみません。大事な息子さんをこきつかってしまっ」

「いいのよ、と言って巴さんが湯飲みを持って、中身が無くなっていくのに気付く。」

「あら？ お茶がなくなつたみたい」

「そう言つて立ち上がり、台所へと向かう。
すると入れ替わりに成瀬がやってきた。そしてそろそろ私の元
にやってくる。」

「夏美さん」

戻ってくるなり、声をかけてくる成瀬。

私は成瀬の行動を不思議に思いながら話を聞くと、成瀬は気まず
そうな顔をする。

「突然で悪いのですが、食費をもらえないでしょうか？」

「え？ この前渡したはずじゃ……」

私が言うように確か渡したはずだった。

しかもその時、一週間はこれでもつ、と成瀬は言っていた。それ
では計算が合わない。

「言い辛いのですが、母さんが食料を使い切つてしまつて……」

母さん、料理は出来るんですけど、ペース配分が分かってないんで
すよ」

苦笑いを浮かべる成瀬。私も同じような表情を浮かべてしまう。

そんな様子を知つてか知らずか、台所から巴さんの鼻歌が聞こえ
てきた。

第五楽章『趣意【シュイ】』 1

暑い…。

下に見える道行く人も、汗を拭いながら歩く人を見るようになった。今日この頃。

そんな陽気の中、私は帽子をかぶって事務所の屋上にいた。前には成瀬君が立っている。

「どうした？ 遅れてる」

そう言った成瀬君の手には竹で出来た長い棒。それを振り上げ、そして前に何かがあったら潰れるんじゃないかという位の速さで振り落としていた。

それを繰り返す成瀬君に習い、私も同じような棒を持ち、同じような動作を繰り返す。

何をやってるんだろうか、私は…。だんだんとやってる内に疲れが溜まってきて、そんな事を考えるようになっていた。

するとそのせいか、動作が段々と成瀬君から遅れてきてしまっていた。

「すいま…、せん！」

ただ一言それだけ言ってペースを早くし、何とか少しずつ成瀬君に追いつく。

それがかえって手への疲労が増してしまい、振り下ろした次の瞬間に、手に持っていた棒を落としてしまった。

しまったと思ったときにはもう遅い。成瀬君が意地悪そうな笑みを浮かべる。

「はい。罰ゲーム」

「…はい」

私は成瀬君に素直に返事をして、そばにあったジャージの上を着る。

日に当たっていたせいから、着た瞬間に熱気が私の体に纏わりつく。まあそれが罰ゲームなのだ。

六月に入ったあたりから、もうすぐ夏なんだと感じられるようになった。先月の陽気はよく分からないほどだった。暑かった黄金週間が明けると、何故か寒い日が続くという経験した事の無い季節の移り変わりを体験した。

そのあまりにも差のある寒暖差に、体がだるくなって付いていけなそうだった。自分的には体は強い方とは思っていない。むしろ弱いと思っっている。

それなのに今、そのまま初夏の陽気が漂ってきて気付けばもうすぐ夏という状態だ。ここまで風邪をひかずに過ごしているのが自分が不思議でしようがない。

そんな事を思いながら、私は落とした棒を拾おうとする。

その時、ふと自分の手を見つめた。

私の手にはテーピングが巻いてあった。もう何日もこんな風にしていた。

それはまだ黄金週間の頃の事だ。

夏美さんと話した翌日、連休ももう少しで終わりという日に何故か呼び出された。

・・・あれ？

そういえばしばらくあの事務所でお世話になってるけど、呼び出されたのは初めてだ。行く度たびに「じゃあまた今度」と言われて、自分の都合のいい日にお邪魔していたからだ。でもそれよりも気になる事があった。

「何で…、私の番号知ってるの？」

教えてないのも不思議なくらいだけど、それはまた別として、番号を教えた覚えはないし、携帯は肌身離さず持っているので、勝手に見られたという事は無いだろう。

あの二人、夏美さんと成瀬君が勝手に見るなんてしないと思う。

・・・なら何故？

いくら考えても分からず、ルリちゃんに聞いてみる。

「ルリちゃん。私の携帯の番号教えた？」

「いえ。そもそも携帯がよく分かりませんから、教える事が出来ません」

とルリちゃんも心当たりが無いよう。

私は疑問を抱えながら着替えをし、部屋を出た。

部屋を出て階段を下りようとしたその時、隣の部屋のドアが開く。

「あれ？ お姉ちゃん、今日もまた出かけるの？」

ハーフパンツに黒いＴシャツを着て、いつものポニーテール姿の

真理がいた。

ちなみにTシャツは聞いた話だと、何とかロックフェスティバルと言つ音楽の祭典の限定Tシャツだとか。

帰つて来た時は放心状態のような顔をして、しばらくしたら今度は興奮して買ってきたそのTシャツを見せてきてで大変だった。けれどそのTシャツも今や部屋着代わりとなつてしまつている。

私としては何故そんな物を買つてきてしまうのか疑問だった。

結構な値段だし、そもそも目的が音楽を聴く事なのだから。

まあ、そうは言つても楽しみ方は人それぞれだ。私が言う事じゃないだろう。

「うん。ちょっとね。けど帰ってくるのはそんなに遅くならないと思う」

「ふん…」

すると真理が私を見てニヤニヤとしている。

なんだろうっか？

「そんなに根詰めて毎日会うぐらいだったら、嘘ついてお泊りしてくれば？ 噂のな・る・せ・君の所にも」

言い終わると、んふんふん、と気味の悪い笑い方をした。

最初何を言つてるんだと思つたけど、その意味が分かつた私は顔を赤くして真理に近づく。

「ちょっと真理、違うからね！ お母さんから聞いたんでしょ、それ。

何度もお母さんには言つてあるけど成瀬君とはそんな関係じゃないんだから！ 分かつた?!」

母がきつと話したのだろう。お母さんには何度も違つと言って否定してきたのに、未だに信じてもらえてない。

しかもそれを妹に話してしまうのだからどうしようもない。

本気で否定している私の様子を見ても真理は、はいはい、と言ってニヤニヤするだけ。とても信じてもらえたとはいえなかつた。

ちゃんと信じてもらえるまで言いたいんだけど、今は呼び出されていて時間が無い。

私は不満を抱えながらもそれ以上詰め寄ることなく階段を下りていこうとした。でもその前に…。

「真理。ホンツツツトに違うからね！　じゃあもう時間無いから行くね」

そついい残した私は階段を下りていった。

？　？

下りていく姉を見つめてその背中を見送ると、私は手早く靴下をはいた。

何かに着替えたいけど今は時間が無い。幸い今の格好は、見ようによつては運動する人の格好にも見える。あまり格好を気にしない私はこれでいいと判断した。

先に行かせるのはいいけど、見失つては意味が無い。急ぐのにはそつという理由がある。

「私も見てみたいし。その成瀬つて人…」

母の話では、中々いい子やったわ、なんて言って頷いていた。母がお世辞でもいい人と判断するなんて稀まれなので、私は興味が沸いて

いた。

姉を夢中にさせ、母まで唸らせるとなかなかの男性なのだろう。

そんな人を見てみたくて今日、姉を尾行する事にしたのだ。

玄関でスニーカーを履き、しっかりと靴紐を結んで動きやすいようにする。

「よし。じゃあお母さん。出かけてくるね」

は〜い、というお母さんの声が聞こえてくる。

私は姉を追いかけるべく、玄関を飛び出していった。

「あの…、凜。ちょっといいですか？」

夏美さん達のいる事務所に向けて歩き始めてから少し経った時、何かに気付いたように肩に乗っていたルリちゃんが、私に声をかけた。

「何？ どうしたの？」

私は肩に乗っているルリちゃんに顔を向ける。するとそのルリちゃんも苦笑いを浮かべて私を見た。

「あれ…、凜の妹の真理さんじゃないですか？」

「え、真理？」

言われて私は後ろに振り返った。

すると今通ってきた道にあったお店の看板に、サツと隠れる影が見えた。

顔は見えなかったけど、それでもその追ってきている人物が、私の妹という事は分かった。

派手なプリントのされた見覚えのある黒いTシャツに、追いかけるようになびいていたポニーテール。それはどう考えても私の妹だった。

しかもしばらく見ていると、それに気付いてないのか分からないけど、ひよこつと少し顔を出してしまう妹の眞理。それでその正体が眞理だと確信できた。

それにしても家にいた時と同じ格好で追ってくるなんて、前から思ってたけど、眞理は服装を気にしなさすぎだ。あんな格好で、もし誰か知っている人と会っても恥ずかしくないのだろうか。

……いや、眞理の事だ。きっと気にしないだろう。

普段から制服なんか胸元のボタンを開けてて、女としての自覚が無い。

姉としてそこは注意はしようと、服装はちゃんとしなさい、と言ってみた事があった。でも聞く耳を持たず、

『この方が楽なんだもん』

と言っただけだった。

頭痛がするような答えで、私はもうそれから何も言わなくなったのだ。

それを思い出しながら、私は肩に座るルリちゃんに話しかけた。

今から眞理の元に行つて、付いてこないで、と言つても諦めの悪

い真理の事だ。きつと付いてくるだろう。

「どうする？ このまま追ってこられても面倒だよな」

「そうですね……。じゃあ…、逃げますか？」

私は頷くと、ルリちゃんがポケットに入ったのを確認し、少し歩
きながら後ろの様子をさりげなく見る。やはり付いてきてるようだ。
そんな事をしながら、前を見ていたルリちゃんが声をかける。

「凜。あそこ」

ルリちゃんの視線の先を見ると、建物の間に路地がある。

それを確認し、私は一気に駆けていった。

少し路地を入った所で走りながら耳を澄ますと、後ろから追いか
けてくる足音が聞こえた。もしかしくなくても真理の追ってくる音だ
ろう。

それを聞き、私は走りながらこの後どうするかを考えた。しばらく
走っているこの道。どうもしばらくは分かれ道が無いらしく、後
ろから追ってくる真理を振り切る事は難しそう。

まして運動神経のいい真理だ。そうそう簡単にバテてはくれない。
むしろ私の方が先にバテてしまいそうだ。今の段階で限界なのだか
ら。

すると曲がり角があり、私は曲がっていくと、

「行き止まり！」

言葉どおり行き止まり。目の前には私たちの行く手を阻む建物の
壁が。周りにも隠れられそうな場所はないし、元来た道に戻るほか
無い。別に真理と鉢合わせになってもいいのだけど、ここまで来た

ら逃げ切りたい。私の変な意地っ張りな面に火がついているのだ。とは言っても状況が状況。そうしている間にも後ろの方から足音が聞こえ、それはどんと近づいてくる。

「ルリちゃん、どうする？」

うーん、と思索しているようなルリちゃんの声。…出来れば早め
にお願い。

開き直って道を戻るか…。私はそう思った。

するとルリちゃんが手を叩き何かを思いついたようだ。

「一つ試してみましよう」

急に駆け出した姉は建物の間の路地裏と呼ばれる場所に入っていた。
た。

道を歩いていたら時、しきりに後ろを振り向いていたのを考えると、
私の尾行に気付いたらしい。

迂闊うかつだった。まさか気付かれるとは思わなかったし。

でも逃げ込んだこの路地裏は、私に味方してくれたようだ。

この路地は角なんかを曲がったりする事はあるけど、分かれ道な
んてものは無く隠れるような場所も今の所無かった。このまま走っ
て行けば運動が苦手な姉に引き離される事は無いだろう。

そんな事を思いながら、私はまた突き当たった曲がり角を曲がる。
すると風が私の顔を撫でるように通り過ぎていく。

それを気にすることなく目の前を見た。

「…あれ？」

私がそう言うのも、目の前には壁があつて行き止まりなのだ。
それだけじゃない。今まで追っていた姉の姿まで無いのだ。する
と混乱している私の後ろの方で足音がする。
それに気付いた私はすぐに元来た道に戻って立ち止まる。
目の前には走り去っていく姉の姿が。

「な……」

何で？

私はそんな言葉しか浮かばなかった。

ここまでの場所で隠れられる場所なんて無かったのだから。

第五楽章 『趣意【シユイ】』 2

追ってきているかも確認せず、私はひたすらもう一度大通りに出るために走り続けた。

でもさっきの出来事を思い出し、ここまで走っていた疲れも相まって思うように足が動かない。

「こ、怖かったあ……」

そしてただそれだけしか言えない私。

それを聞いてルリちゃんは苦笑いを浮かべる。

「すみませんでした。やっぱり体験した事無いと、そうなくても仕方ないかもしれませんね」

ポケットから出たルリちゃんが私の前に飛んできて、私に手をかざす。

足音が迫っているのに何をすると言うのだろうか。私がそんな事を思っているのをよそに、何かを唱え始めた。

「な、何する、の？」

心配そうに私が聞くと答える事が出来ないらしく、ずっとぶつぶつと詠唱を続けていた。

そして終わったかと思うと、真剣な顔で私を見るルリちゃん。

「行きますよ？」

「へ？ つわ！？」

ルリちゃんがこちらを向いたと思ったら、急に私の周りに風が渦巻くように発生し、次の瞬間には私の体が浮き上がった。

「きゃ！ え？ 何？」

訳が分からないという感じで声を出す私。でもそんな状況にもかかわらず、私は風で捲めくれそうなスクートを押さえてしまった。条件反射だろうか？ それえともよく分からず慌てているだけだろうか。そんな私を見かねてか、隣に羽ばたいてルリちゃんが来た。

「凜、落ち着いてください。じつとしてれば私が風で運びますから」
そう言われて訳も分からず、とりあえずルリちゃんの言うとおりにする。

そしてそこでやっと自分の今の状況を必死で整理していた。でもあまりにも現実離れた今の状況。何かに乗る事も無く空を飛ぶと言う状況は私の頭が追いつかない。マンガやアニメの世界のようだ。浮いている私は恐る恐る下を見た。さっきまでいたアスファルトの地面が見え、ちようどそこへ真理がやってくる。気付かれるかと思っただけ、さすがに上にいるとは思わない真理はやっぱり上を見ない。その上空を私は風に乗って気付かれる事無く飛んでいった。そして通り過ぎた後、ゆっくりと地上に降りていく。まるで夢を見ていたような気持ちになっていた私は、ポーっとしてしまった。

「じゃあ行きましょう」

「あ。う、うん」

そんな私はルリちゃん言葉で急に意識を引き戻され、うながされるまま走ってその場を後にした。

結構奥に来てしまっていたようで、まだ大通りに出られない私たち。でも大通りを走る車の音が聞こえてきて、もうすぐこの路地から抜け出せるのが分かった。

それにしてもさっきの事を思い出すと、本当にあんな事をしたなんて信じられない。

自分の体が浮き上がり、下の方に見えるアスファルトの地面や追ってきた真理を上から見るといふ普段見ないような所にいたと思うと今頃になっているんな思いが湧いてきていた。

そんな気持ちを察してか、私の隣と一緒に飛んでいたルリちゃんが心配そうな顔で私を見る。

「あの…、すいませんでした…。急にあんな事やってしまったから気分が悪くなったようで……」

「え？ ううん。そんな事無いよルリちゃん。ただちょっと怖かったかな」

と言って笑い、気にしなくていいよ、と私が付け加えて言うと、しょんぼりしながらも私の胸ポケットに入る。

最近知っただけで、どうもルリちゃんはここが気に入ったようだ。

一度ルリちゃんに見える人が今の所私の周りにいないようなので、

肩にでもいれば？、と言った時があった。それならば話しかけるのも楽になるし、姿が見えるのは私としては嬉しい。

でもルリちゃんは、その申し出を首を振って断った。そして胸のポケットを指差す。

『そこなら凜の鼓動も聞こえるし、落ち着くんです』

そう言ったルリちゃんも顔を赤くしてたけど、私自身も聞いて恥ずかしくなった。

……と、それはどうでもいい。

私は落ち込んだルリちゃんを勇気付けるように話し始めた。

「それにしてもルリちゃんってあんな事も出来るんだね。すごかったなあ」

とつさに言った事だけど、確かにそう思ったのも事実だった。あんな体験したくても私が今までどおり普通の生活をしていたら簡単に出来ないし。

私がそう言っているとポケットから顔だけを出すルリちゃん。

「いえ…、うまくいってよかったと思ってます。実は初めてなんですよ、あれ」

「え！？ そうなの？」

ルリちゃんは、テヘ、とでも言うような顔をした。

一方の私は意外な言葉に驚いていた。でも思い出してみると確かにアレをやるときに、『試したい』と言っていたような……。

ルリちゃんのような妖精はもともと人と関わりを持たない、とルリちゃんから聞いたことがある。

それならばさっきのような事を試す事なんてしなかつただろう。その後ルリちゃんが出会ったウィンさんなんか自分の力で空を飛んだりする事が出来るみたいだから、試す試さない以前の問題か。

それにしても初めてか……。

本当に何も無くてよかった……。

私は誰に向けるでもなく、苦笑いを浮かべていた。

「それにしても……、私もルリちゃんほどじゃなくてもいいから、魔術が使えるようになりたいよ」

ふと私は思った事を言った。前に魔術を行う際には『今やりたい事を唱え、心の中で強くイメージする』と言っていた事があつたけど、人が浮き上がるほどの風をイメージなんて私の頭では出来ない。それではいくらやっても無理だろう。

するとそれを聞いたルリちゃんが私を見る。

「大丈夫ですよ。今はまだコツがつかめてないだけです」

勇気付けてくれるルリちゃん。それがとても嬉しい。

すると、後ろの方から足音が近づいてくる。

「ありや、真理が来たみたい」

「大通りに出れば人ごみに紛れられるはずですよ。行きましょう」

ルリちゃんという言葉に促されるように私は頷いて走り始める。私たちは大通りの中に入って行き、人ごみに紛れていった。

私は凜に連絡を入れ、事務所で来るのを待っていた。

成瀬は外出してしまっている。なんでも近くのスーパーが特売日
のようで、昨日巴さんが使い切ってしまった物の少しでも買い直し
たいよう。

というか特売日に買い物に行く高校生って…。

ふとおばさんとかに混じって買い物をする成瀬を思い浮かべる。
品定めをする成瀬を思い浮かべた時、笑いがこみ上げてきた。

でもきつと成瀬のことだから、笑われていたってそんな事気にし
ないだろうけど…。

「あら。どうかしたんですか？」

ちょうど事務所に来ていた巴さんが尋ねてくる。

昨日は成瀬の部屋を使ってもらい、この事務所に泊まった。成瀬
には悪いのだが、また事務所のソファで眠ってもらったのだ。

「いえ。ちょっと思い出し笑いを…。すみません」

私の言葉を聞いて、そうですか、と言って微笑む巴さん。
そして立ち上がり、荷物を持つ。

「じゃあそろそろ失礼しますね」

「もう行かれるんですか？ 湧樹君ももうすぐ帰って来ると思いま

すよ
「

「そうしたいのは山々なんです、座席の予約をしていた帰りの電
車があるので」

それでは仕方ないと思って巴さんを引き止めるのをやめた。
割った市の様子を見て、それじゃあ、と言って出て行くこととする
巴さん。私はそれを見て立ち上がって見送ろうとした。
すると巴さんはドアの前で立ち止まってこちらに振り返る。

「あ、そうそう夏美さん」

「はい？」

私に近づいてきて、少し前で立ち止まると、

「湧樹の事、よろしくお願いしますね」

そういってお辞儀をする巴さん。私が、はい、と言つと巴さんは、
顔を上げて微笑んでいた。

退魔士だったと言う巴さんの母親らしい行動に、私も思わず微笑
んでしまった。

すると突然ドアが勢いよく開き、入ってきたのは凜だった。
凜を見るととても疲れた様子で息が上がっていた。

やっとの思いで辿りついた事務所に勢いよく飛び込んでいった私。夏美さんはビククリした様子でそんな私の事を見ていた。

「すみません！ 遅くなっちゃって」

そんな事を気にする余裕は無く、膝に手をついて大きく息をしていた。

するとその様子を見てか、夏美さんはどっかに行ってしまった。

「どうしたの？ 何かあったの？」

また出てきた夏美さんの手には、コップが握られている。

手渡されると私はすぐに中身を飲み込んだ。

茶色い色をしていたので麦茶なのかと思ったのだけど、麦茶は麦茶でも、砂糖入りのものだった。噂では聞いていたけど、甘い麦茶って存在するんだ。

でもそんな事に反応している余裕は無く、美味しいと感想を言う事無くコップの中身を飲みこんでいく。

一杯飲み干すとようやく落ち着いてきた私は、ありがとうございますと言いました、と夏美さんに言った。

「それで、なんで凜ちゃんはそのなに疲れてるの？」

「あ、その…。妹に追いかけて…。妹の真理までこういう事に巻き込みたくないですから」

「ああ、そういう理由で」

夏美さんも納得したように頷く。私からコップを受け取ってまたキツチンの方へと消えていった。

そして私も落ち着いてきたとき、今頃になって巴さんの存在に気付いた。

私の様子を微笑んで見ている巴さんの顔は、やっぱり親子だから成瀬君に似ている。

「すみません、挨拶も無しにこんな変な所見せてしまっ…」

「いえ。妹さんを巻き込みたくないなんて、優しいお姉さんじゃない」

そう言われて私はちょっと恥ずかしくなった。嫌なわけじゃなく、嬉しいと言っ意味で。

恥ずかしそうに顔を下にむけると、巴さんの足下に荷物があるのに気付いた。

「あれ？ もうお帰りなんですか？」

「ええ。あまり長居してもお邪魔しちゃうでしょうし。それに…」

耳の辺り、と言うより頭を押さえている巴さん。

「ちょっとキツイから…」

キツイ？ 風邪でも引いていたのだろうか。

でも昨日から見ている限りだと、別にそんな感じは無かった。今も鼻声でもないし。

ただ少しそう言っているだけあって顔色が良くないように見える。

「駅まで送りますよ？ お一人だと危ないかもしれませんし」

私がそう言つと巴さんは首を横に振つた。

「大丈夫よ。病気とかではないから」

「でも…」

「気持ちは受け取っておくわ。それよりあなたも大変よ？ 今度こつちに来る時を楽しみにしてるわね」

巴さんが意地悪そうな笑みを浮かべて言った言葉に、一気に気持ち沈んでいく

そういえばそう言う事を言っていた様な…。夢ではなかったんだ……。

「美央は強いわよ。年下だけど甘く見ないでね。これからまた私が稽古をつけておくから尚の事」

そんな巴さんの言葉にさらに私が落ち込んでいると、胸にいたルリちゃんも肩に座り、苦笑いを浮かべて頭を撫でる。

私はそのまま撫でられ続けていた。

すると事務所のドアが開き、そこには成瀬君の姿が。

両手に袋を抱え、少し息が上がっていた。

「疲れた〜。途中でちよつと教育指導したから疲れちったよ。て、それより…」

そう言つて成瀬君は袋を持って私の前に来る。

袋を足下に置いて、私の両の二の腕を掴んだ。

「絶対勝つぞ。凜」

え？、と言ってしまう私。

何故成瀬君がそう言うのか私はよく分からなかった。

第五楽章 『趣意【シュイ】』 3

「え…、どういう事？」

飯も食べ終わり、落ち着いたときの事だった。

俺は母さんが持ってきたお茶を飲んでいたのだが、母さんの言葉に手を止めてしまう。

「だから湧樹、あなたもあの子に戦い方を教えなさいって言ってるのよ。耳が悪いの？」

いや俺は耳もどこも悪くない。ただ母さんがそれを言うかが不明なのだ。

別に凛に教えることに協力するのは構わない。気乗りはしないが夏美さんが承諾した以上、俺が止めるべき事ではないし。

でもなんでそれを母さんに言われなきゃならないんだ？

混乱している俺をよそに、母さんは真面目な顔をして続ける。

「で、あの子と美央ちゃんて試合をするじゃない？」

「うん…」

そこまで言った母さんの顔がどう見ても意地悪そうな表情で俺は感づいた。こういう時の母さんは面倒な事を言うて決まってる。

なんとなく、と言うより限りなく答えに近いような気がする…。

「それであの子が負けたら…」

「…負けたら、俺がそっちに帰るとか？」

なんとなくを装うように聞いてみた俺の言葉に、母さんはより一層笑みを浮かべる。

「んふふ どう?」

その表情を見てそうなんだと確信した。俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

さっき話していたこともあって、もうそれは問題になる事ではないと思っていた。

まさかまたぶり返すとは…。

「ちょっと待つて。でもそれはさすがに分が悪すぎると思っただけ」

俺は少しでもこの状況がいい方向に向くように一つ意見をする。

スタートラインが同じ状態なら、相手が母親が教える奴と言えど申し出を受ける事はするだろう。

でも相手はあの美央だ。退魔士の資格を持っていないといつても、ずっと修行をしていたと言う。

それではスタートラインが明らかに何メートルも前の相手になっってしまう。俺の言い分は間違いではないはずだ。

そんな理不尽な事を言っているのが気付かないのか、母さんは夏美さんと話をまとめようとしている。

「だから待つてって。俺の言ってる事全然聞いて無いじゃん」

俺の言葉に気付いた母さんが、あら、ごめんなさい、と言う。

ちよつとイラツときたがグツとこらえる。ここで受け入れてしまつては俺に勝ち目がない気がする。

「なあに？ あ、もしかして自信が無いの？」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、追い討ちをかけるように口元を押さえてワザとらしくニヤニヤしながら言う母さん。

その様子を見て、さすがに力チンときた。自分でも簡単な奴と思えるけど、そんな事を気にしてられない。

「分かったよ、受けて立ってやる」

明らかに誘われているのが見え見えだが、俺はあえてそれを受け入れる事にした。

もし凜が勝ったら母さんの事を見返せるかもしれない。そんな考えが俺の中にはあったからだ。

そうと決まれば一つしておかなければならない。
俺は夏美さんの方を向く。

「夏美さん。凜に教えんの、俺に任せてください」

「え、どうして？」

不思議そうな顔をする夏美さん。

俺は母さんに視線を移しながら答える。

「俺一人でやらなきゃ勝っても嬉しくない！」

見えてないのは分かっているが、俺は親を睨みながら語気を強くしていった。

すると小さな笑い声が聞こえて視線を向けると、夏美さんが笑っていた。

それを見てなんだか少しムキになっていた自分が急に恥ずかしくなってしまう、下を向いてしまう。

「あら、ごめんごめん。悪気があったわけじゃないの。成瀬君でもそういう風になるんだなって思ったからおもわずね。ホントにごめんなさい」

「…いえ、俺のほうがちょっとムキになっちゃってすいません。勝手に先走ってました」

そういって落ち込んでいると、夏美さんがやってきて俺の頭を撫でる。

「うつん。別に悪いとは言っていないわ。それに…、それだけ本気なら返事は一つしかないんじゃない?」

え?、と言いながら顔を上げると微笑んでいる夏美さんが。

「凜ちゃんの件は成瀬君に頼むわ」

そう言って手を差し出してくる夏美さん。

俺はその手を握り返し、ありがとございます、と言う。自分から申し出たと言っても任せてもらえるのは嬉しい。

「って事があつた」

帰ってきた成瀬君にあの後、かなり端的に事の経緯を説明された私はただ黙っていた。

「というか私抜きで話が進んじゃダメではないだろうか。まあ今言っても手遅れだろうけど…。」

それにしても親子間の問題に巻き込まれるなんて思ってもみなかった。昨日の様子からもう大丈夫だろうと思っただけど、こんな形での決着のつけ方になるなんて…。

目の前にはもうやる気満々の成瀬君。そしてそれを見守る巴さんと夏美さん。もはや私が「異議あり！」と某ゲームのように言っても却下されてしまうだろう。

私はただ溜息をつくだけであつた。

「もういいや…」

「凜…。頑張ってください」

苦笑いを浮かべ、私に声をかけるルリちゃんに、ありがとう、と言っただけだつた。

まあでもいいか。私が教わるのが夏美さんからではなく、成瀬君になっただけだし。

そう思っているながら成瀬君を見れば、持っていた袋をガサゴソとあさっている。何をしてるんだろうか。

「成瀬君、どうしたの？」

私が聞くと、あつたあつた、と言いながら袋から何かを取り出し、私の前に差し出した。

見ると持っているのは、

「靴と、ジャージ?」

靴と言っても普段出歩くときに履くような物ではなく、いかにも運動する人が履くような物。そしてその下にジャージまで一緒に持っている。

私は戸惑いながらそれを受け取った。

「俺からプレゼント。やるからにはちゃんとした服装じゃないと、動き辛いし汗臭くなっちゃうから」

「あ…、ありがとう…」

なんだか成瀬君が燃えている。申し訳ないのだけど、少し引きそうだった。

そんな成瀬君の気持ちは察してあげたいけど、さっき聞いた話からすると実際の所は明らかに私の方が分が悪いと思われる。

成瀬君には悪いけど、私自身も無理があると思われる。

期間もそんなに無いし、運動自体あまりやった事の無い私。勝ち目があるほうがおかしい状況だ。

そんな事を考えていて、私の顔に出ていたのか、成瀬君が近づいてきて私の頭をペシッと叩く。

「イタ！」

私は叩かれた所を手で押さえながら、成瀬君のほうを見て目で、なにをするの?、と抗議する。

「今変な事考えたる。大方私じゃ勝てないとかだろうけど」

「う…。でも本当に私なんかじゃ勝てないでしょ？」

するとすかさず私の額にデコピンをしてくる成瀬君。

そのデコピンは思いのほか痛かった。私は涙目で成瀬君を見つめた。

「それならそうならないようにする、たったそれだけだろ？」

もしかして凜の覚悟はそれだけだったって事？ なら教えたりしないよ。そんな人に教えても時間の無駄だし」

そう言っ腕を組む成瀬君。私は手渡された靴とジャージを見つめる。

成瀬君は自分のためと言うのもあるだろうけど、私の為にこんな物まで買ってくれて、しっかりと教えるという姿勢を見せてくれてる。

そして私は胸のポケットにいるルリちゃんに視線を移す。

ルリちゃんの為と言いながら、私は冗談半分だったのだろうか。

確かに最初は危ない思いをするなんて絶対にやだ、って思ってた。今だって危険な目には絶対に遭いたくないと思ってる。

でも…、ルリちゃんに迷惑をかけたくないという思いも本当だ。

私がルリちゃんの負担を少なく出来るなら、なんだってしてあげたい。

「成瀬君、ごめん…。そうだね。最初から諦めてたらダメだね」

持っていたジャージと靴を握り締めながら、私は成瀬君を見る。

「お願いします。成瀬君」

そう言っ私が手を差し出すと、成瀬君はその手を取っ握っ

くれる。

「どこまで出来るかは凜次第。俺のことは別に考えなくていいから、教えてもらうからにはとりあえずちゃんと頑張れよ?」

私はその言葉に、うん、としつかりと返した。

なんだか自分がこんなに体育会系のようになっているのが不思議だけど、もうそんな事気にする事なんてしない。

ルリちゃんのため、気にするなどは言っただけど、成瀬君のため。

そして自分のために…。

決意を持って私は成瀬君の手を握った。

「うん。これは私も気を付けなきゃね。まずは帰ったら美央にこの事を伝えないと」

側にいて私たちの様子を見ていた巴さんの声が聞こえて、私はちよつと恥ずかしくなって成瀬君の手を離れた。

見てみれば夏美さんも同じような顔をして見えて、余計に恥ずかしくなった私は、

「い、いや〜」

手に持っていたもので顔を押さえながら、部屋を出て行った。

どこに行つたのか分からないが、凜が出て行ってしまうのを、俺と夏美さん、そして母さんがただ黙って見送っていた。バタンと扉が閉まり暫しの静寂の後、笑い始める母さん。

「大変ね、湧樹」

「はは。でも策は無いわけじゃないから。あまり余裕見せてると危ないよ?」

俺がそう言つと、母さんが少し驚いた顔をして、すぐにまた微笑んだ。

「あら? ただの強がり?」

俺は母さんの言葉に、どうだろうね、と返すだけにして、それ以上何も言わなかった。

どうせその言葉が嘘か本当かばれてしまつし、言う必要が無い。

「……でもないみたいね。フフ。それじゃあその『策』、楽しみにしてるわ」

そう言つて母さんは置いていた荷物を持つ。

「それじゃあ行くところかしら。もう何時かしら?」

俺はそう言われて壁に掛かっている時計を見る。時刻は十一時を少し回つた所。

「母さんの乗る電車って何時に出るの?」

「確か…、十一時三十分だったかしら。美央に予約を取ってもらったから多分あってるわ」

ここから駅までは歩いて一五〇分ぐらいのはず。今から出てギリギリぐらいだ。

ちよつと貸して、と言って母さんの手から切符を取ると、そこに書いてある発射時刻をしてみるが、母さんの言っている時間で間違いない。

俺は冷汗を流しながら切符を返す。

「…危ないわね」

そう言ったのは側にいた夏美さん。

俺が頷くと、すぐに車のキーを取り出す夏美さん。

「じゃあ送っていきますね。車なら五分ぐらいで着きますから」

そう言って先に出て行く夏美さん。

雇ってもらっている俺としては申し訳ない。

すると隣にいた母さんが頭を撫でてきた。顔を見るとさっきまでの笑みは無く、真剣な顔つき。

「頑張りなさいね。湧樹」

「何だよ急に。それより早く行かな…」

「あの人の力になってあげなさい。いい？」

急に変な事を言う母さん。意味が分からず何も言えなくなってしまっ俺。

それを察してか、母さんはまた微笑む。

「…うん。気にしないで。湧樹は今までと同じようにしてればいいわよ」

「？…うん、分かった」

結局よく分からずその話は終わらしてしまった。

でも今は、母さんが電車に間に合うかが大事だ。

荷物を持つ母さんに下まで付いていき、車に乗って出るのを見送る。

車が見えなくなつて階段を上つて事務所に帰りながら、俺は母さんの言っていた事を思い出す。

『あの人の力になつてあげなさい』

心の中で考えてみるが、よく意味が分からず頭を搔いてしまう。

まあ気にしないでって言っていたし、今度家に帰ったときにも聞いてみるか。

そう思いながら俺は事務所で凜を待つことにした。

勢いで飛び出した私は、しばらく走って事務所の近くの公園までやって来てやっと我に帰った。

ようやく落ち着いていた私は、疲れて乱れた息を整えていた。

「はあ、はあ、何やってるんだろ、私…」

今日はずっと走りっぱなしな気がした。こんな事なら意地を張って真理から逃げたりしなれば良かった…。

これは明日はきつと筋肉痛で苦しむのが目に見えて分かる。ふと手に持っている物をじっと見つめた。

「どうしたんですか？」

すると私の様子を気遣ってか、ルリちゃんが声をかけてきた。

うん、と言いながら、私は丁度近くにあったベンチに腰をかける。座ると同時にポケットから飛び出したルリちゃんは私の膝の上に座って、私の事を心配そうに見つめていた。

「ちょっとね、本当に私、大丈夫かなって思ってた…」

「凜…」

自分でも無理な事をしていると思っている。だから私はまだ少し悩んでいた。これからの事を…。

ルリちゃんには心配かけないように頑張ってたけど、今になつてしりごみするほど不安になってきたのだ。

普段から運動をしないし、元々運動が苦手って事もある。それが

問題になったり気にしたりした事は無い。

まさかそれがこんな形で私を悩ますなんて思わなかった。すると落ち込んでいる私を見て、ルリちゃんが声をかけてくれる。

「凜。もし私の為に嫌な思いをするのであれば、私は嬉しくありません。もしもそれがそんなに悩むのであれば、私は凜にやめてほしいと思います」

え？、と思いながら私はルリちゃんを見る。ルリちゃんはそのまま続けた。

「私は正直言うと、凜があんな風に思っていてくれた事が、申し訳ないという思いと一緒に、嬉しいと思っていました。一緒に過ごして始めて日も浅い私なんかの為に、って。」

魔術を教えている身でそんな事思っちゃいけないんですけどね。すみません」

そう言っただけで顔を掻きながら笑うルリちゃん。

初めて聞いたルリちゃんの本音……。そう思ってくれていた事が私は知らなかった。

「でも…、それが凜が苦しむのは私は嬉しくありません。気持ちだけで十分です」

そう言ったルリちゃんの顔は、悲しいとも取れるような笑顔だった。

私はそれを見て、そんな風に思わせてしまった事を申し訳なく思った。

私はちゃんと覚悟してああいう事を言ったんじゃないのか。私はそう心に問いかける。その覚悟がもしかしたら甘かったのかもしれない。

ないと私は思った。

私はルリちゃんの手を指で取り、ルリちゃんの顔を見る。

「うん…。私が甘かったのかもしれない……。ルリちゃんに心配させないぐらいになりたい、って思ってたのに、こんなに心配させちゃって、私って本当にダメだね…」

「凜はダメなんかじゃありません」

「ううん。ダメだよ、このままじゃ。こんな中途半端な私じゃまた同じようにルリちゃんに心配かけちゃうし…」

心配するような顔で見つめるルリちゃん。

そんなルリちゃんに私は微笑む。突然そんな事をしたものだからルリちゃんが目を丸くする。

「だからここでもう一度言う。私頑張るから、ルリちゃん」

そう言いながらルリちゃんの頭を撫でる。

魔術の先生であると同時に、大切な友達。そんな存在のルリちゃんの為に私は頑張りたい。

自分のイメージ的にはそんな事思うような人ではないと思う。

でも誰かになんとと言われてもその思いは本当だ。

「もちろん魔術も、ですよ？」

笑顔を見せながら言うルリちゃん。

そんなルリちゃんを愛しく思い、私はルリちゃんの体を握り、頬に寄せる。

恥ずかしいです、とルリちゃんは言うものの、逃げようとはしなかった。

私は巴さんを助手席に乗せ、駅に向かう。

きつと乗るはずの電車には間に合うだろう。もう2・3分もすれば駅に辿り着く。

「…」

「…」

車内の様子は事務所を出てから一つも変わらない。結構私もこの状態がきつかった。

別に意識して何も喋らないのではないのだが、なんとなく私も巴さんも喋らなかった。

気まずいとも思っていたけど、無理に何か喋ってまた黙り込んだら、短い時間でもさすがにキツイ。ここはそのまま送り届けるだけでいいだろう。そう思っていた。

すると突然、巴さんが口を開いた。

「夏美さん」

「あ、はい。何でしょうか？」

運転をしているので助手席にいる巴さんの様子を少ししか確認す

る事は出来ない。

私は巴さんの声に耳を傾けてそのまま運転を続ける。

「私の思い過ぎしならいいんですけど……、何か……、悩んでませんか？」

その言葉に私の心臓が大きく鳴った。それでも何とか平静を保つように運転に集中した。

「ただ聞かれているのに何も返さないのは不自然に思い、どうしてですか？」と返す。

「あなたの言葉に何にかは分かりませんが、心の迷い独特の匂いを感じたので……。お会いしてからずっと気になっていたんです……。」

勝手に心を覗くような事をしてすいません。したくなくても分かっってしまうので……。」

巴さんは申し訳なさそうな声を出して、その後布の擦れるような音がした。ちょうど信号で止まり、巴さんのほうを見ると、こちらに頭を下げ、ちょうど顔を上げたところだった。

「……いえ、気にしないでください。別に大した事ではないので。」

「……って言ってもそれが嘘っていうのも分かっちゃいますよね？」

「……はい」

「参りましたね、私はそう言いながら頬を指先で掻いた。」

「もしかとは思っていたけど、巴さんは『共感覚』シナスタジアと呼ばれる感性間知覚の保持者のよう。」

それは例えば、文字や音に色を感じたり、人の性格などに色を感じたりと多種多様な知覚現象の事。誤解してしまうかもしれないが、

音や形を本来感じることに無い感覚で感じる、と言った方が簡単かもしれない。

有名な芸術家や小説家、音楽家の中には、その共感覚と呼ばれるものを保持する者がいたと言われている。まあそれは実際にそうだったかは定かではないけど…。

知識としては知っていたけど、実際にその保持者に会うのは初めてだった。

「すごいですね。エコーロケーションと共感覚の持ち主なんて」

信号が青になり、車を発進させる。

「よしてください。そんなにいいモノではないですから…」

巴さんは私の言葉を否定しながら大きく息を吐いた。

「こうやって外に出るのもキツイんです…。人が多い所では比例して声の量も多いですから、こうやって出歩くのはキツイんです」

頭を押さえながら言う巴さんは本当に辛そうだ。

巴さんの共感覚は声に嗅覚が反応するようだ。それによって相手の感情を嗅ぎ取っているのだろう。

それがどれだけ辛いかは私には分からない。でも私がもしいろんな匂いが溢れる場所にいたら、きっと気が狂ってしまっんじゃないかと思う。

それを日常的に感じながら暮らしているんだから、巴さんの苦勞はきつと普通の感覚者には分からない。

「でも、それでも湧樹君に会いに来てるんですから、湧樹君は嬉しいと思いますよ?」

「そうかしら？ あの子の事だから素直に言ってくれないだろうけど」

私が、そうですね、と言うと二人で笑い合ってしまった。

と、そこでちょうど駅に着き、駅前にある送迎の為の専用スペースに車を止める。

「じゃあすいません。ありがとうございました」

そう言いながら車を降り、こちらに向かってお辞儀をする巴さん。また近いうちに、と私が言うと、そちらも頑張つて、と言って巴さんは微笑んだ。そしてくるっと振り返り駅の方へ向かっていく。私はそれを見送っていた。

すると急にこちらに振り返る巴さん。なんだろうか…。

「そういえば、車の中での話。まだ詳しく聞いてません。うまくはぐらかされてしまいましたね、私」

あちゃあ、誤魔化せてなかったか。

いや、はぐらかした時にはきつともう巴さんにはバレていただろう。

苦笑いをした私を見て、巴さんが口を押さえ、フフ、と笑う。

「お節介かもしれないですが、こっちに来た時に相談に乗りますよ？」

とワザとらしく言う巴さんは、私の返事を聞かずにそのまま振り返り、駅の中に消えていった。

今日三杯目の麦茶を飲み干す。俺は一人事務所に座っていた。

…… 思いのほか一人というのは寂しい。

この頃はこの事務所に来てから一人になる事なんてあまり無かったから余計にそんな思いが湧く。

それにしても喉が渴いた。やっぱりさつき出かけたときの事が原因だろう。それ自体は大した事じゃないんだが……。暑い時に慣れない事をするもんじゃない。

もう一杯つごうと思ったら、中身が空なのに気付く。溜息をつきながらソファーに深く座りなおした。

「誰か帰ってこいよ……」

こんな事なら母さんの見送りでも一緒に行けばよかった。でも夏美さんが「凜ちゃんが帰ってきて誰もいないのはかわいそうでしょ？」なんて言うし、母さんも「見送りはいいわ」なんて言うものだから、俺は一人待つことになってしまったのだ。

まあちよつど疲れていたし、疲れも取りたかったから良いという事にしよう。うん、そう思おう……。

すると事務所のドアが開き、そこに凜の姿があった。

「お帰り」

とりあえず俺がその声をかけると、

「…ただいま」

凜は苦笑いしながら返してくれた。

凜はそのまま俺の向かいのソファアに座る。

「あはは…。ちょっと恥ずかしいからつて外に飛び出す事無かったよね。今思うとそっちの方が恥ずかしかったかも……」

そう言いながら恥ずかしそうに手を頭に置く凜。その時すこし髪が持ち上がった凜の姿を見て、ん？、と何かを感じた。

俺は前にいる凜の顔を見つめる。

あれ？、もしかして…。

するとそんな俺の様子に気付いた凜が、不思議そうな顔をして俺を見る。

「どっかしたの？」

「あ、いや別に。考え事してたらボーっとしちゃって…」

ふうん、と微妙に納得してないような返事をした凜だったが、何も追及してこなかった。俺もそれ以上考えなかった。

それよりも兎に角戻ってきてくれてよかった。これでこれからのついでの話が出来る。

「それでき、これからどうすればいいかな？」

思っていた事が伝わったように凜は真剣な顔つきで俺に尋ねてくる。これは話が早い。それにしても…。

俺はなんとなく凜の様子がさつきと違うように感じた。何かあったのだろうか。

まあそれは今はどうでもいい。俺は凜の言葉を聞いて返事をする。

「とりあえず今日から始めるから。特訓」

そう言っただけ俺は席を立つ。

さすがに昨日今日で始めるなんて急すぎるかもしれないが、なにせ期間が無い。一時も時間を無駄に出来なかった。

急にそんな事を言っただ大丈夫かと思っただが、凜は驚いたような顔をしたけど、

「うん、私も出来れば早くやりたいと思っただけ」

と言っただけ了承してくれた。

これはちょっと意外だった。もう少し考えたりするかと思っただけだけど、嬉しい意外さだった。

それならばと事務所のドアの方に歩いていく。

「じゃあ俺は下で待ってるから」

着替えちゃえよな、と言っただけ残し、俺は部屋を出て行った。

ボタンとドアが閉まり、成瀬君は事務所の外へと出て行った。

事務所には私とルリちゃんが取り残される。ルリちゃんは私の胸ポケットにいるから当然だけど。

「じゃあルリちゃん。ちょっとポケットから出ててね？」

私の言葉に素直に応じ、ルリちゃんはポケットから出てテーブルに腰掛けて私が着替えるのを見守っていた。

微笑みながらじーっと見つめているルリちゃん。私はその視線が少し恥ずかしいと思いつつながら着替えを続け、私は上を脱ぐためにボタンを取っていく。

そして全部外し終えて上を脱ぐと、ルリちゃんは、うん、と唸り腕を組んでこちらを見ていた。

「な、なにか…」

私は脱いだ服で体を隠しながら聞くと、ルリちゃんは立上がってテーブルから私の元に飛んでくる。

するとルリちゃんは私の周りを2・3周ほど旋回して私の事を見る。そして見終わったルリちゃんは私の目の前に飛んできた。

「私だとひいき目になっちゃうかもしれないですけど、凜ってそんなに悪くないですよね」

突然変な事を言うルリちゃん。私は、悪くないって？、と聞いてしまっ。

「スタイルですよ。全然太ってないし、だからと言って痩せ過ぎずに、ほどよく肉が付いているんですもん。女性から見れば羨ましいと思ってしまいますよ」

そんな事を言うものだから私は顔を真っ赤にしてしまった。

「な、ななな、何言ってるのルリちゃん！」

私は慌ててそばに置いておいたジャージを取って体を隠し、否定したのだけど、テーブルの上に戻ったルリちゃんはそれでも続ける。

「胸が小さいのなんてどうでもいいじゃないですか。モデルみたいに綺麗なんですから」

「ちょ、ちょっとやめてよ！ て言うかルリちゃん知ってたの？」

私は顔を真っ赤にして体を縮みこませていた。他人から言われるとかなり恥ずかしい。

私は恥ずかしさに耐えきれず、持っていたTシャツとジャージを素早く着て、テーブルの上にいるルリちゃんに近寄る。

余程私が泣きそうな顔をしていたのか、少しルリちゃんが心配そうな顔をして近づいてきた。

「すみません。気を悪くしないでくださいね？ でも私は本当の事言ってるんですよ。凛は綺麗、って」

ルリちゃんはそう言い切ると、私に微笑む。

ルリちゃんがそういう事で嘘を言わないっていうのは知ってる。

だからこそそんな事を言ってくれて、しかも屈託の無いルリちゃんの微笑みは、余計に私を恥ずかしくさせ、顔が熱くなるのが分かる。

きつと今の私は『林檎みたい』と言われても可笑しくなくらい程紅くなってるだろう。

…正直に言えば自分が気にしていた事を、そんな事無いと励ましてくれているようで本当は嬉しい。

でも素直にありがとと言うつていうのも恥ずかしい。だから少し意地悪してやろうと思った。

まず私は何も言わずにルリちゃんの事をそつと掌に乗せる。するとルリちゃんは何も言わない私が怒ったと思ったようで、体を強張らせて目をつぶって震えていた。小動物のようでかわいらしい。

ちよつと面白くなって私は笑ってしまうのを我慢して指で突付く。ルリちゃんは突付くたびに、ビクツビクツと体が反応し、それがとても愛くるしくて顔がにやけてしまう。

私は一旦やめ、顔の側にルリちゃんを持ってくる。何もされないのを不思議に思ったのか、ルリちゃんが恐る恐る顔を上げた。

それを見越して私はわざと怒ったような顔を見ると、ルリちゃんは慌てて頭を伏せてしまう。

「う、ごめんなさい！ 変な事言っちゃって」

そう言ってますます体を震わせるルリちゃん。本当に可愛い…。

それを見て私は耐え切れなくなり笑ってしまう。するとその笑い声を聞いて、ルリちゃんが頭を上げる。見るとルリちゃんはキョトンとしていた。

「嘘だよ、ルリちゃん。本当に恥ずかしかったけど、嬉しかったし…」

私は微笑みながらルリちゃんに話すと、ルリちゃんは目に涙を浮

かべ、私の事をポカポカと殴ってきた。
大きさが大きだから痛くない。と言うよりなんだか心地いい振動だ。

「やめてください。そういう事するの。本当に怒らせちゃったと思っただじゃないですか……」

言い終わると叩くのをやめて顔を私に押し付ける。

ちよつとやりすぎたか……。そう思った私は、少し反省しながらルリちゃんの頭を優しく撫でる。

絹のようなきめ細かい髪が撫でる私の手にあわせて揺れる様は、サラサラという擬音がとても合っている。

「ごめんごめん。そんなに引つかかるなんて思わなかったから」

ところが、ルリちゃんは私から離れない。

しばらく様子を見てみると、小さく肩が震えていて、私はちよつと驚く。

「え？ ええ？！ ルリちゃん。ねえ、ルリちゃん？」

慌てて私がルリちゃんの肩を揺する。それでも中々服を話さないルリちゃんに余計に不安になってしまう。

でもなんだか様子が変わる。

体を震わせてるのは違いのないのだけど、さっきまでの震え方とは種類が違うように思う。

もしかして……。

私がそう思ったのが分かったように顔を上げるルリちゃん。

その顔はニヤニヤとしている。やっぱり……。

「ふふふ。お返しです」

そう言ったルリちゃんを見ながら私が、やられました、と言うと、どちらからとも無く笑い出す。

なんてくだらない事をしているんだろう、私たちは…。でもそんなくだらない事をやりあえるような仲になれた事が、親友になれたんだと分かった事が嬉しかった。

すると笑い合っている私たちを静止させる人物が現れる。

「いつんなったら来るんだ？」

声のするドアの方を見ると、不機嫌な顔をした成瀬君の姿が…。ヤバイ…。コレハチョットオコッテル……。

絶対にそうだと分かる雰囲気伝わってきて、私は慌てて、も、もう行く所、と言い訳をしながら立ち上がった。

「あ、凜」

すると丁度行こうとした時、ルリちゃんに呼び止められる。

「あれ？ ルリちゃん行かないの？」

「はい。ちょっと夏美さんに話したい事があります。心配しないでください。私は後から行きますから。凜が指輪をつけているので居場所は分かります」

そう言って申し訳なさそうな顔をするルリちゃん。

私は、わかったよ、と言って待っている成瀬君の所へと向かった。

事務所の下にある車庫に車を入れ、私は階段を上がっていく。

「迷い、か……」

つぶやくきながら、頭を搔いて小さく笑う私。

頭の中で思い浮かべるのは、この国に来た理由。…それは悪霊と
なってしまった姉さんの極秘排除。

やる事は一つなのになあ…。何を私は迷っているんだろう…。そ
もそも私自身から志願したんだから、迷う事なんてないはず…。
そんな事は分かっているはずなのに、指摘されたとおり私は迷っ
ていた。

「私は…、姉さんを……」

何度も心に誓っては、本当にそれでいいんだろうかと迷ってしま
う言葉。答えはいまだに出せていない。

そんな事を考えながら私が事務所の中に入ると、目の前の状況に
一気に現実に戻されたような気がした。

コップの破片や水が散乱していて大変な状況だったからだ。

…泥棒でも入ったの？

そう考えた時、台所の方から何かがやってくる。

雑巾とバケツを持ち、フラフラと飛んでいるルリだ。

帰ってきた私に気づき、ルリは苦笑いを浮かべる。

「お、おかえりなさい……」

声にも力が無い。一体何が起きたのだろうか。

「これ、どうしたの？」

私がルリに聞いてみると、ルリはテーブルにちゃんと座り、落ち込んでいた。

「あの…、喉が渴いたので麦茶を注ごうと思ったら、冷蔵庫にあった麦茶が容器いっぱいに入っていたもので、注いでいた時に重くて手を離してしまっ……」

そしたらそのあと慌ててどうにかしようとしてたら、逆に……」

余計に大変な事になっちゃったって訳か。

慌てていたルリを思い浮かべると、なんだか微笑ましく思える。

「まあしょうがないわ。私も片付けるの手伝ってあげるから元気出して。ね？」

そう言つと、ルリは申し訳なさそうに頭を下げた。

コップの欠片を片付け、床やテーブルを拭き、一通り終わった所でソファに座る私。

ルリは持ってきていた雑巾やバケツを片付け、戻ってきてテーブルに降り立つ。

「すみません。戻ってきてすぐにこんな事手伝ってもらって…」

「いいわよ、気にしないで。…ちょうど何かしないと落ち着かなかつたし」

「え？」

「ううん、こっちの話。それより気になってたんだけど…」

片付けを手伝っていて思ってた事が一つあったのだ。

「ルリちゃんはあんまり魔法使ったりはしないの？ こついう事で」

ルリは妖精であり、風を操る簡単な魔法を使える、とウインに聞いていたから。

もしそうならさっきの片付けだって簡単に出来るはず。それなのになんで使わないんだらう？

そう疑問に思っていると、ルリは苦笑いしながら答えてくれる。

「習慣みたいなものです、あっちにいた時の。ウイン様の下に行った時に言われていたんです。」

「ここで一緒に暮らす間は魔法を使わないでください、って」

「ウインから？」

はい、と返事をしながらルリは頭をポリポリと搔く。

何故そんな事をするのだらう。イマイチそんな事をするのが分からない私は、またどうして？、と聞いた。

「なんだかウイン様は魔法や魔術に頼り切るのが嫌いなようで。簡単に出来る事は極力自分自身でやりたいようですし」

なんと言うか、アイツらしいと言えばアイツらしい。

ウインは魔術師としては異端と言われるような部類に入るだろう。普段から極力魔術を使わず、研究結果には一切興味を示さない。

それを聞いて一度私が、知識を求めるのが魔術師なんですよ？、と聞いた時に、僕は自分が必要だと思う以上はいらないうです、と云っていた。

そんなものかとも思っただけど、それが噂ではウインのそんな魔術師を否定するような生き方を、結社内では結構不満に思っている人がいるらしい。

でもウインのいる魔術結社は魔術師がいるのにはかなりいい環境らしく、しかも上の方の人物であるウインに反発する事が出来ないらしい。うまく生きている。

まあそんなウインのおかげで気ままに研究などを出来て嬉しいとも聞いた。

一体どつちなのが良く分からない。魔術師なんて天才以外は、奇人か変人かもしれない。

「それに文明機器を使った方が楽、というのもあるかもしれないね。ウイン様は、いつか魔法や魔術は文明機器に越されてしまますよ、とも言っていましたから」

冗談っぽいかもしれないけど、確かにそうかもしれない。

例えば風を起こすのも扇風機やクーラーを使えばいいし、火を熾おこすのもマツチやライターがある。

昔はそんな事が出来ればすごいと思われただろうけど、今じゃそうやって火や風を誰もが楽に得られるのだ。

そういう事を考え、いつか魔法のような事も、簡単に地球上で当

たり前になるだろう、ってウィンが考えだろう。

「現実主義者ね。ウインは」

私の言葉に、そうですね、と答えるルリ。

あれ？ 遅いかもしれないけど、ルリはなんでここにいるんだろう。凜と一緒にはずじゃ…。

「あ、そうです。夏美さんにお知らせする事がありました…」

私は、なに？、と言って耳を傾ける。

「『白いワンピースを着た髪の長い女性』の霊に憶えはありますか？」

「え……」

思いがけなかったルリからの言葉に、私は心臓が鷲掴みにされたような感覚に襲われた。

第五楽章 『趣意【シユイ】』 5 (後書き)

なんでもない事を長々と…。

そういう事を書くのが好きなんでしょうが、私は…。

しばらく歩いて人のあまりいない公園にたどり着く。

今時公園に遊びに来る子供なんていないだろう。携帯ゲーム機が爆発的に人気になったのと、今の世の中で何が分かるか分からないと、親が外で遊ぶのを禁じているのが原因だろう。

国民的アニメの「サザエさん」や「ドラえもん」とかの中で、野球をして外で遊ぶシーンが懐かしいとさえ感じてきてしまう時がもうすぐ来るだろう。

「ここでいいっか…」

そんな事を思っていると、前を歩いていた成瀬君が手に持っている物を地面に置き、振り返る。

「じゃあとりあえず準備運動から」

「あ、はい」

返事をして、成瀬君と共に準備運動を開始する。

体育の授業でするような準備運動をしているのだけど、誰も見ていないはずなのになんだか恥ずかしい。それでもそれを我慢して、屈伸や伸脚、アキレス腱を伸ばしたりと一通りする。

やっと終わったと思ったら、そのまま柔軟体操。

私は地面に座るように促され、長座の体勢になり、成瀬君が後ろから私の背中を押す。

「へえ。運動できないと言っても体は柔らかいんだな」

「む。馬鹿にしないでよ。これぐらいは出来るからね」

そう言っただけのまま柔軟を繰り返す。

昔から体力テストでは、総合判定がほとんど最低に近い判定で、それが行われる時期は憂鬱だった。

でもいつも一つだけは評価が最高のものがあつた。

それは『長座体前屈』と言われる柔軟性を調べるテストで、座った姿勢から上半身を前に倒していくというとても私にとっては喜ばしいものだ。これに限っては私は絶対の自信を持っていて、運動神経抜群の雅ちゃんにも負けない。

雅ちゃん曰く、『宝の持腐れ』だそう。確かに運動が出来ないのにそれだけ優れていても、何の意味も無いかもしれない。言われてムツともしたけど…。

ようやく柔軟体操を終えて、立ち上がると、成瀬君は笑っていた。

「それならちようどいい」

そう言っただけであつた物を手に取る。

ずっと気になっていたそれは、私の身長より高い棒のようなもの。見た感じ物干し竿と言った感じ。

すると成瀬君はそれを私に渡す。私はそれを手にとって持ってみる。意外と重くは無いけど、触ると結構硬い感触がした。

「それでどうするの?」

手渡されただけじゃ分からず、私は成瀬君に聞いてみた。

「じゃあとりあえず慣れる事から」

成瀬君はそう言っただけで棒を手で器用に回し始めた。

まるでバトンのように綺麗に回る棒。成瀬君は乱れることなく回し続けながら私に話しかける。

「薙刀なぎなたって知ってる？」

「えっと…、確か時代劇でなら見たことあるかも…。『大奥』ってドラマの中で、夜の見廻りみたいなシーンで女の人が持ってたと思う」

長い棒の先に刀のような刃がついたのを持っていて、紐で袖をまとめていた着物の女性を思い出す。

ただそれは薙刀らしき物を持っているだけのシーンだっただけであって、実際にそれを使って戦っていたのを見たわけじゃない。でも見た感じ、どんな風に薙刀を使うのかは想像できる気がする。

私の言葉に、へえ、時代劇見てるなんて意外、なんて成瀬君が言う。

まあ私だけがではなく、家族みんなが好きだ。お母さんは特に。

「確かに薙刀術は江戸時代ぐらいには武家の女性なら誰もが習う武芸だったんだ。大奥の女性がみんな習得していたのかは分からないけど。」

つと、それは兎も角、凛にはこれをやってもらう」

「でもこんな大きいのでいいの？ 難しそうだし…」

渡された棒の大きさは、私の身長を超え、2mぐらいだろうか。

こんな大きいのを振り回すような武術を、運動音痴の私が行うのはやめた方がいいと思った。

そんな私の言葉を聞いた成瀬君は、いや、と言う。

「長くて扱いにくいのはあっているかもしれないけど、この薙刀つて武器は女性に適してるんだ。適度に間合いを保てるし、力が無くてもこういう風に長ければ…」

と、成瀬君はそこで言葉を止め、両手で持っていた棒を横薙ぎに振りぬく。

誰もいない方へ振りぬいた棒は、本当に風を切さいたような音を上げた。それを私は呆然と眺めていた。

「こんな風に遠心力でスピードが出る。じゃあここで問題。スピードが増すと言う事は？」

そんな私を見てか、急に問題を振られてしまった。成瀬君の顔を見ると、ニヤニヤと意地悪そうな笑いを浮かべている。

絶対私の様子を見てわざと言ったんだ…。くうく、顔が憎たらしい！

このまま終わらせられないと、必死に答えをひねり出そうとする。遠心力…、スピード……。分かりそうに分らない答えを、その二つの言葉から導き出そうとした。

何度か言葉を頭の中で繰り返すうち、一つ思い浮かんだ。

「薙ぎ払う威力が、増す？」

そう私が言うつと棒を回すのをやめ、険しい顔をする成瀬君。何か変な事言っただろうか？

ちょっとひねりが無いがそれしか思い浮かばない。不安になりながら成瀬君の言葉を待つ。

「面白くない…。本当に関西出身か？ 良いボケを期待してた…」

「」

「今は関係ないんじゃない！」

何でボケを期待されてたんだろう。確かに私は生まれは京都だったけど、その後すぐ京都を離れたんだから、ほとんど関西人ではない。しかも関西の人だからってみんながみんな、ボケをするとは限らない。

まあけど成瀬君の様子からすると、当たっていたんだろう。成瀬君は何事も無かったかのように話し始める。

「まあだからと言っても雑刀を武器とする男も結構いるけどね。多分知ってると思う奴で言えば、『鬼若』か。分かる？」

「うーん…、分からない」

だって『鬼若』なんて名前、歴史なんかで聞いたことないし。

困ったような顔をしていると、それを見ていた成瀬君が柄えの方を地面に立てたまま付ける。

「ヒントは牛若丸が五条大橋で戦ったとされる大男」

そう言っただけは両手で持ち、

牛若丸？、ってたしか義経って人の小さい頃の名前だったから、もしかして…。

「…弁慶？」

「大当たり。でも訂正すると、弁慶と牛若丸が戦っていた場所は特定できてないんだ。五条大橋ってのも何かの作品で有名になっちゃったんだって。それと…。」

なんだか成瀬君がすごい燃えてる。まだまだあるよと言うように豆知識を披露しているのだけど、付いていけない。

成瀬君はそのまま持っている棒を実演するように振るっていた。余程弁慶が好きなんだろう。熱がオーバーヒートして自分がうまく抑えられないのが分かる。

一方の私は何も言えなくなって黙っていた。

どう受け答えすればいいのかよく分からないのだ。

ここは知っている事を出来る限り言ってお話を合わせよう。そう思いながら暑く語る成瀬君に、恐る恐る話しかけた。

「で、でもさ、確か牛若丸に負けちゃったんだよね。弁慶って…。つて、あ……」

ヤバイと思ったときにはもう遅かった。

膝を抱え、地面に視線を向ける成瀬君が目の前にいた。いつの間にそんな体勢に…。

「…ふ、ふん。牛若丸に負けたのは、会うまで999回戦ってたから、疲れがたまってる動けなかったに決まってる。万全だったら負けてない……。きつと…」

ぶつぶつと暗く語り始める成瀬君。

さっきまでの様子とは違い、どんどん暗くなり始めている。好きなものを馬鹿にされると悔しいのは分かるけど、そこまで態度で表すなんて…。

私はその様子を見ながら、成瀬君が元に戻るのを待つことにした。

「それで、その女性がどうしたの？」

私の言葉に聞き返す夏美さん。

私は夏美さんの近くまでいき、テーブルの縁に腰掛けた。

「あまりにも禍々（まがまが）しい靈圧を感じさせて、しかもあんな危険そうな靈だったら、夏美さんが何か知ってるんじゃないかって思いました」

私はこつちに来てそんなに経っていない。こつちの事は分からないけど、こんな普通の街にあんな靈がいるのはおかしいと言うのは分かる。

そんな疑問を持っていた私は、夏美さんだったら何か知ってるんじゃないかと思って聞く事にしたのだ。

湧樹に聞くとという手もあったけど、なんだかそつちの手は気が進まなかった。

「そつ…。ワンピースを着た女性ね……」

そつ言っつて顎に手を当てて目を閉じ、考え込んでいる夏美さん。

こつちやっつて見ると、夏美さんは綺麗と格好良さが見事にマッチしている。女性である私から見ても、夏美さんの佇まいのは、何か特別な物を感じさせる雰囲気を感じさせていた。

すると、しばらく考えていた夏美さんは、そつと目を開けた。

「ごめんなさいね。ちょっと私の記憶には無いわ」

夏美さんは首をかしげて微笑みながら答えてくれる。

私は、そうですか、と言って一つ息を吐いた。

「…でも、ルリちゃんがそう言う位の霊は気になるわ。その霊にはどこであったの？」

「え、あ、えっと…、前に夏美さんたちがドッペルゲンガーを追っていた時ですね。ドッペルゲンガーが逃げ込んだ路地裏の上で、です」

あの時、ドッペルゲンガーを追っている夏美さんたちの後を追っていた時の事だ。

私たちが路地裏で迷って私が上から道を見た時に現われた。

白い丈の長いワンピースを着て、病的なまでに白い肌、少し色の抜けた長い髪。そして一番の印象は、歪な笑顔。

それらすべてが私の頭から離れない。

「そう。それでその霊には何かされた？」

夏美さんから聞かれ、あの時の事を思い出す。

「私が魔法を使ったときに、自分の意思とは関係なく魔法を途中で辞めてしまいました。」

私は本気であの女性を倒そうとしていたのに…。特別何かされたわけじゃなくて、ただ『やめなさい』って言われただけなんです。それなのに体が勝手に……」

自分でもあの感覚が不思議でしようがない。

まるで旋律のような女性の声が、頭に直接流れ込んできたような

感覚。そしてそれに従ってしまふ自分の体。

すると夏美さんの方を見た瞬間に、私は息を呑んだ。

無表情で虚空を見つめるその姿。いつも見ていた夏美さんとは違うようなその姿に、何故かあの女性の姿が重なって見えた。

それが何故だか分からない私は、黙って見つめてしまう。

「ん？ ルリちゃん。どうしたの？」

私の視線に気付いたのか、こちらを見て声をかけてきた。

失礼な事をしてしまった。あんな危険な女性の霊と夏美さんを似てるだなんて。

慌てて、なんでもありません、と言って頭を下げる私。ごめんなさいという気持ちも込めて。

それを見て夏美さんは、変な子ね、と言ってその場は収まった。

「ルリちゃんの見た女性の霊は早急に調べておくわ。それよりも…」

「はい？」

そう言って私を微笑みながら見る夏美さん。

「凜ちゃんの所には行かなくていいの？」

「あ！ そうでした。すぐに後から行きます、って言ってあったんです」

夏美さんに言われて思い出した。気付けば結構な時間が立っていた。

慌ててドアの所まで行って振り返る。

「お時間とつてすいませんでした。じゃあ凜の所に行つてきます」

「あれ？ 凜ちゃんの場合は分かるの？」

「あ、それなら凜が身に着けている指輪の気配を追えば大丈夫です」

私との契約書代わりである指輪を持っていれば、凜の場所は分かる。

私だけが感じ取れる気配を発しているのだ。

それを聞いた夏美さんは、

「ん……。じゃあ行つてらっしゃい」

手をひらひらと振って、笑顔で私の事を見送ってくれる。

何か妙な感じがしたけど、私は特に気にする事も無くドアを開ける。

小さな体でこんなドアを開けるのは重労働だ。扉の開け閉めは風を使えば楽に出来るけど、その前に行うドアノブを回すというのが難しい。

やっとの思いで事務所の外に出た私はドアを閉めると、凜の元へと急いだ。

窓の外を見ると、人々は何事も無く過ごしている。

私はただそれを見つめていた。

すると小学生位の女の子が小さい女の子を連れているという光景が目に入った。笑いあいながら歩く二人の様子から姉妹なのだと分かる。

大きい方の女の子が、小さな女の子の手を引いていた。微笑ましい光景だけど、私は何故かそんな小さな女の子達相手に、嫉妬しているかのように心がざわつく。

「私たちは…、なんである子たちみたいになれなかったのかしら…

…」

自分自身で発した言葉が、ずっと頭に響く。

そしてふと、あの女の子二人が昔の私と姉さんの姿と重なる。

私の手を取って先を歩く姉さんは、とても頼りになって、いつでも私を助けてくれる正義ヒーローの味方だった。

そしてそんな姉さんは、私の一番大好きな人だった。

でも私が中学生の時、姉さんは私の前に現れなくなってしまった。

私は悲しんだ。私の大好きな人だから、会えない事は本当に悲しかった。

すると私の前からいなくなったヒーローは、私が悲しんでいるのが分かったのか、私の前にまた現れた。

でもその時には姉さんはヒーローではなく、『悪』^{ヒール}となっていました。
っていた。

あの姉さんがするとは思えないような事件を起こして…。

強くて大好きだった人がそんな事するわけ無い、そう思っていた
私の前でした事は…。

「お父さん…。お母さん…。」

今でも思い出すあの光景。

降り続く雪の間を舞うように飛び散る赤い鮮血。それが見えるた
びに倒れていく父と母。まだ中学生だった私は、それをただ見てい
ることしか出来なかった。

それを無表情で行う姉さんが怖くて、私は歯をガタガタとさせて
動けないでいた。

でも動かなくなった父と母に気付いた姉さんは、立ち尽くし、血
に染まる自分の手を見つめ、涙を流し泣いていた。

その姿はとても幼いように見えて、私は訳が分からなくなった。
すると突然私のほうを見る姉さん。

「夏美…」

そう私の名前を呟いて近づいてくる姉さん。力なく垂れている手
には、血塗られたナイフが握られていた。

必死にうまく動かない体を動かして後ずさる私を、一步一步距離
を詰めてくる姉さん。その表情に感情というものが見られない。

すると後ずさる私の手に何か当たった。

そんな場合じゃないのにそれを確認すると、それは鉄で出来た杭
だった。

本当はそんな事したくない。でも私は意を決してそれを握りしめ、迫る姉さんに向けて振り放った。

夢と信じたい今の光景を、振り払うように…。

「変な私…」

柄にも無く小さい子供なんか嫉妬したり、昔の事を思い出したりする私に苦笑しながら、置いてあった車のキーを再び握り締める。

「いるかは分からないけど、行ってみて損はないかな…」

そう言っつて事務所のドアを開けて、ドアの外で立ち止まる。

そしてそこから中を見た。

ほんの数ヶ月過ぎた事務所。それでも、ほんの少しの間でも、ここには少なからず思い出が詰まっている。

「じゃ…、またね…」

誰もいない事務所に響く私の声を、当然受け止めてくれる者はいない。

でもとりあえず言っておきたかった。

私には驚沢すぎるほどの時間で、また得たい時間だから。

たとえ『またね』が嘘になるとしても…。

そしてドアから手を放すと、重々しい音を立ててドアが閉まった。

「りゅん！」

俺と凜の元にルリがやってきた。

なんか迷ってしまった犬が飼い主を見つけたときのようなスピードで飛んできたルリは、目もまた犬のように輝かせてそのまま凜まで飛んでいく。でも…、

「ひゃ！」

そう叫んで慌てて凜から離れる。それもそのはず、凜は俺が渡した棒を回していたからだ。

俺がやっと落ち着いてから、まず長い棒になれる為に凜には俺が良いと言つまで回してもらつ事にした。

凜は、八つ当たり？、とか言っていたがそれはない。本当に。

「ル、ルリちゃ〜ん…」

力なくルリを呼ぶ凜の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

かれこれ20分ぐらいは回しているだろうか。いまだに俺は止めていいと言っていない。でも投げ出さない凜にはちよつと驚いていた。

最初は音を上げるくらいやってやろうと思ったのだが、予想以上に頑張っている凜。それ程意志が固いのだろう。

でもさすがにずっと同じことの繰り返しはキツイようだ。俺だっ

てずっと同じ事をしていれば辛い。

心配そうに見つめていたルリは俺のほうを向いて睨みつける。

「ちょっと湧樹。凜がかわいそうじゃない!」

俺の顔寸前まで近寄って抗議するルリ。本当に俺のことが嫌いなんだな。接する態度が俺だけ悪い。

まあ確かにこれはキツイ。でも、

「じゃあ悪霊とかと戦うのは楽な事か?」

俺がそう言うと、ルリは悔しそうな顔をしながら口を閉じて何も言わない。

こんなもの、退魔士の仕事を考えれば全然辛いなんて内に入らない。退魔士の世界では戦うという事は、「命」をかけることと同じだ。

凜が身を守るだけにしても、それも同じような事。自分の「命」を守らなくてはならないんだ。半端な事はしておけない。

「それに俺が夏美さんの事務所で働けるかもかかっているんだ。俺は厳しくいくぞ」

「……それが本音?」

ルリがジト目でそんな事を言う。俺は目を逸らし何も答えない。

「り、凜。一旦休憩」

「良かった……」

凜は俺の言葉を聞いて、すぐに棒を回すのを止めた。そして突き立てている棒を掴みながら膝から崩れ落ちる。結構限界だったようだ。

ルリは近寄って、大丈夫ですか？、と言って凜を気遣っている。りんも息を絶え絶えながら、大丈夫だよ、と言って返事をした。全然そんな風には見えない。

それを見てちよつとやりすぎたかな、と思いながらバックからペツトボトルを取り出した。

その間に凜は棒を杖代わりに突きながらヨロヨロと歩いてベンチに向かい、力尽きたように座っていた。その凜に、ペツトボトルの二つの内の一つを凜に差し出す。

「お疲れさん」

「あ、ありがと…」

受け取った凜は蓋を開けて一気に飲み込む。半分くらい一気に飲んでしまっていた。それでもぐったりしている。

俺はとなりに座り、ペツトボトルの中身を一口飲み込んだ。意外と俺も疲れていたのか、それとも暑い気候のせいか、自分の体に水分がどんどん吸収していくように感じた。

「凜。まだこれでも序の口だぞ。得物に慣れるなんて当たり前前的事なんだし」

俺がそう言うと凜は聞いているのか聞いてないのか、返事をしてくれない。

この凜の様子を見ると、技や基本を教えるより先に基礎体力の向上が不可欠のようだ。とは言っても期間が少ない。

そんな事を考えてる時も、まだちよつと動きたくないといった様

子でぐったりしている凧。

そんな様子を見たルリが何かの詠唱を始めた。言い終わるとほぼ同時にそよ風が吹いてくる。

程好い風が吹いてきて、凧が気持ちよさそうに風を受けていた。

まだ動くのには早い様子の凧を見て、俺も隣で一緒に風を受けていた。これは気持ちいい。まるで天然の扇風機だ。

ただ、視線をルリの方に向けると、ルリは少しムツとしたような顔をしている。お前は風に当たるな、と言いたげだ。

でも今は隣に凧もいるからと諦めたようで、そのまま風を起こし続けていた。

「じゃあとりあえず構えから行くか」

そう言うと、はい、といい返事をする凧。もう大丈夫のようだ。

今俺の持っている棒の先には、危ないので丸めた布でガードしている。こうしておけば思いっきり突かない限り傷つける事はないだろう。

今は間に合わせだけど、そのうちちゃんとしたのを使うつもりだ。でもこの辺だとすぐに用意できなかつた。やっぱりマイナーなだけあって、取り扱っている店なんかほとんどない。しかもやつこの思いで取り扱っている店を見つけた所でも、道具が入荷するのには何日か掛かる、と言われてしまったのだ。今はこの間に合わせで我慢してもらおうしかない。

俺がまず棒を両手で体一つ分くらい離して持ち、足を肩幅ぐらいに広げ、凧に向かって半身にしながら棒の先を向ける。この時の体の位置は、棒を凧の方に倒した状態で左右どちらかに位置する。

「こうやって自然に持ってみて。俺を鏡と思って構えていいから」

「い、いっ？」

凜は俺の言葉どおり俺の構えと鏡のように見て構えた。俺と凜はお互い半身になりながら向かい合う。

剣術だと相手を正面に見据えて構える。そしてその時に刀や竹刀を持つときに、柄つかと呼ばれる部分を握るのだけど、縁ふちの方を右手、頭かしらの方を左手で持たなくてはならない。

それに対して薙刀は剣道とは異なり、相手に対して正面を向いては構えない。全て半身の状態での構えになっている。

言っておくと、薙刀の最初の構えは左半身での構えではあるが攻撃するたびに棒の左右に体を入れ替えたりする。そして相手の出方によっては、中段、下段、上段、八相、脇と呼ばれる五つの構えを臨機応変に変えていくのが肝心だ。

長くて扱いづらいというのをカバーするために、打ち込みや薙ぎ払うのがやりやすいように場面場面で持ちかえられると言う事だ。まあ剣でも刀でも、実戦では片手になったりする時もあるだろうから、さほど変わらないかもしれない。

「力はいれなくて棒を持って。そして軽く膝を曲げて、いつでも動けるような状態を作っておく事」

「は、はい」

返事をしながら構える凜。その構えに無駄に力が入ってない。

凜は気付いてないようだが、先ほどやらせた棒回しが功を奏したようだ。

「とりあえずこの状態から基本の振り方ね？」

俺は言い終わると凜から少し離れる。

凜を正面に見据えもう一度構えなおし、棒を振り上げる。そして一歩踏み出しながら棒を振り落とした。風を切るような音が鳴った。振り終えてもう一度構えなおしてから構えを解く。

「これが上下振り。前にいる相手の頭をかち割るぐらいの気持ちで振りぬけよ」

俺の言葉に、はい、と返事をした凜は、言われたとおりに俺と同じような動作をした。

力強さはないが無駄に力が入ってない分、振り落とす棒の軌道が滑らかだ。体が柔らかいのも良い方にはたらいてるのだろう。

じゃあ次と俺は言って、今度は横に振りかぶり、足を踏み込んでそのまま水平に振り切る。

「そしてこれが横振り。今度は相手の体を真つ二つに切るつもりで」

「…なんか喩えが少し……」

凜が苦笑いを浮かべ、俺自身も同じように苦笑いしてしまう。喩えがおかしいのは、自分でもどう説明したらいいのか分からないからだ。

一応基本的な動きなどは自分で言うのは変だけど、ちゃんと身につけていると思っっている。

だが「やれる」のと「教える」のは全然違う。やってみると意外に大変だ。そんな事を感じてしまうようでは、俺はまだまだなんだと痛感してしまう。

「そこはスルーしてくれよ。これでもいっばいっばいだから……」

俺がそういうと、わかった、と言つて了承してくれる凜。
それを聞いて俺もそのまま続ける。

今度は縦でも横でもなく、斜めに振り上げてその角度のまま振り下ろす。

そこまで見て早速真似しようとする凜を、ちょっと待って、と言つて制す。

「この斜め振りに関しては上の方からだけじゃない。こうやって…」

そう言つて俺は手首を返し、元来た方へ振り返す。

「下からの斜め振りもあるんだ」

へえ、と言つて感心する凜。そして早速同じように振り始めた。
やはり振りに関しては文句無い。むしろうまいと言つても良い位で、本当に運動が出来ないのだろうか、と思わせるくらいだ。

そんな初めてやる凜が、文句無しで動いているなんてちょっと悔しい。

そんな凜に俺は言った。

「じゃあ今から全部の振り方を何回も繰り返す事」

俺のその言葉に凜は、え？、と言つて固まる。

そして不安そうな顔をして俺を見てきた。

「…どのくらいやればいいの？」

そんな不安そうな凜に俺は微笑みながら言つてやった。

「そりゃあ、俺が『いい』って言つまで」

その言葉を聞いた凜は、晴れ渡った空に似つかわしくないような曇りきった表情を浮かべていた。

今私は地面に突っ伏している。
じりじりと伝わってくる地熱が熱い。それでも私の体は動かなか
った。

「じゃあここら辺で終わりにするか」

「は、はひ〜…」

やっと終わった。成瀬君の言葉が心の底から嬉しかった。
それもそのはず。あの後素振りを何十分も繰り返しやらされて、
へとへとになっている私に気付かないのか、終わったと思っていた
私に、今度は防御する成瀬君への打ち込みをやらされ、今度は逆に
打ち込んでくる成瀬君の攻撃を私が防ぐというのをやらされていた。
普段から運動していない私には、テレビで見たどこかの軍隊の訓
練に思えてしまう。

「ちゃんと運動後のストレッチしといたほうがいいぞ。次の日筋肉
痛に苦しむから」

「う、それは嫌だ…。明日から学校なのに………」

まさか連休最終日にこんな事があるなんて思いもしなかった。
私の中で休みとは、何もしないかどこか買い物に出かけるという
事しかなかった。だからこんなに疲れる事をしたのは初めてだ。
私はゆっくりとうまく動かない体を起き上がらせる。体が重力を
何倍にもかけられたように重い。

それでも筋肉痛になるのは嫌だという思いから、必死に体を動か

していく。

「うん…、痛いよ…」

ゆっくりと柔軟と同じような動作を繰り返し、痛めない程度に筋すじや筋肉をほぐしていく。

運動した時に感じる筋肉痛で普段どれだけ動いていないのかわかると聞いた事があるけれど、確かに言ったとおり。今まさにその状況に陥っている。

でも感じるのは痛みなのだけど、心地よさを感じるような痛みではない。それがなんだか私に充実感を与えてくれているようだった。

「大変だよね。もつとすごいんだろうけど、成瀬君は昔からこんな事してきたんでしょ？」

「まあ、それが当たり前だと思ってたから。家族がみんなそうしてたし」

当たり前って…。退魔士になるためとはいえ、辛い事を続けていたなんて…。

自分と同じくらいの人が、この世の中でそんな事をしていたなんて考えた事もなかった。

学校に行って勉強をしたり、友達とお喋りしたりして平穏な毎日を送っていた私の知らない所で、成瀬君や夏美さんたちのような「退魔士」という人たちが命がけて頑張っていたなんて思うと、自分がどれだけ恵まれた環境で育っていたのかが分かる。

一通り体を動かし終え、立ち上がる。

「でもなんか悲しいね。そんな大変な事をしてるのに、普通の人た

ちには知られる事がないんだよね」

ふとそんな事を思ってしまう。命がけで危険な思いをしても、それがどれだけの人の為だとしても称えられる事がない。そしてそんな事を知らずに好き勝手に生きてる人たちだっている。それを考えると成瀬君はやりきれないんじゃないか、そう思ってしまった。

でもその成瀬君は意外な事を言った。

「確かに変な事件とか起こす奴なんかにはムカついたりするけど、みんながみんな何かを思ってくれなくていいんだよ」

「え？ どうして…？」

何でそんな風にいられるのか分からない。成瀬君たちにとっては当たり前なのかもしれないけど、周りから見れば本当にすごい事をしているのに。

疑問に思っている私を見て、そうだなあ、と言って頭を掻く成瀬君。

「うーんとね、俺個人の意見だけど『退魔士』って言うのは『町工場とか中小企業で働く人』と一緒になんだよ。中には違う人もいるけど」

「????？」

成瀬君の言葉に余計に分からなくなってしまう。

すると成瀬君は何かを指差す。目で追ってみると、その方向には建設中のビルが見える。建設ラッシュに沸く街で、一際目立つほど大きい。

「ああいう建物って大きな建設会社が造ってるんだよね」

「まああれだけ大きければね。それがどうしたの？」

「でもさ、あれを造るのにはいろんな物が必要だろ？ 窓にしたって柱にしたって、ネジとか部品だっけそうだ。それを下についている中小企業なんか頼んで、出来たものを使って建てていく。

これを聞けば中小企業も頑張ってるんだなって思うけどそんな事はまずない。だから中小企業がどれだけ良い物を作ろうと、結局でかいビルを建てた会社だけが世に知れわたる。それって結構かわいそうじゃないか？」

そう言われてみればそうかもしれない。それに他の事でもそれは言える。

例えば科学者が何かすごい発見をしてノーベル賞を取ったとする。確かにそこまでやった科学者がすごい事は誰もがわかる。

でもそれを発見するために、どれだけの器具や薬品を使ったのだろう。それら一つ一つに誰かの手が掛かって造られていて、知らず知らずにその科学者を支えている事になる。

なのに称えられるのは科学者一人。だれもその科学者が使ったものを作った人なんて知られることはない。

「でもだれも文句なんて言わない。それが当たり前だって思っているから。誰かの支えになってるって思うだけで幸せなんだよ」

それが当たり前前、か……。そう言った成瀬君を見る。

命がけが当たり前前。そんな世界で生きてきたようには到底思えないような姿に見える成瀬君。今までどんな危険な目に会ったかなんて私には想像できない。

いつも意地悪な成瀬君が、今はすごい格好よく見える。

だけど…。

「やっぱり諭えが下手だよ、成瀬君って。しかもオヤジっぽい」

「う、うるさい…」

私の言葉に顔を赤くする成瀬君。

そんな成瀬君を見て、なんだかんだ言ってたって成瀬君だって歳相応の男の子なんだと気付き、私は思わず微笑んでしまった。

微笑む凜を見ながら、自分が言った言葉を思い出した。

『誰かの支えになってるって思うだけで幸せなんだよ』

自分で言っただけで笑ってしまう。本当に心の底からそう思った事がある奴がいるのかは分からないから。自分だっただけで断定できないから。

退魔士の世界では、『お金が結構貰えるから』と考へてたり、『殺された親や兄弟の仇を討ちたい』と心に決めて退魔士をやっている人だっている。理由なんて人さまざまだ。

そう考えるとそんな気はないのだが、結局さっき言った事も自分を格好よく見せるためだけの言葉に過ぎないかもしれない、と思っってしまう。

「あれ？ どうしたの、成瀬君？」

「いいや。別になんでもないよ」

ホントに？、と言って怪しいと言いたげな視線を向けてくる凜。別に難しい事を考えてたわけじゃないんだが…。

気付けば空は夕暮れに染まり始めていて、俺は急いで帰り支度をしていく。

「変な事してると、先帰るぞ」

と言いながら、俺はすでに歩き始めていた。

俺の後ろの方から、待ってよ、と凜の声がする。それでも俺は先を行った。

しばらく歩き、事務所に着いてドアに手をかける。鍵はかかっておらず、そのままドアを開いた。

「戻りました、…、って、あれ？」

「どうも。勝手にお邪魔しています」

「ヤッホー！ お久しぶりね」

何故か中には笑顔をこちらに向けている『魔術師』と『魔女』が出迎えてくれた。二人の様子としては、金髪の魔女アンナ・シュプレングルが、小さな魔術師ウィン・ウェストコットに寄り掛かっているという図。

「すみません。近くまで来たので様子を見に来たんです」

すると後ろからウインさんを見つけたルリが飛んでいく。

「あ、ウイン様！ お久しぶりです！」

すごい嬉しそうな声を上げながら飛んでいき、ウインさんの目の前で羽ばたいている。

犬が喜んで尻尾を振っているのと同じで、喜ぶと羽ばたき方が違うんだな。少しルリの事を知った気がした。

「ああ、シャルル。お久しぶり。元気そうで何よりです」

そう言いながら手を差し出してルリをその上に座らせ指でルリの頭を撫でている。ルリは気持ちよさそうに目を瞑ってされるがままだ。そしてそれを隣で羨ましそうに見ているアンナさん。

なんかこの光景…、異様だ。

眼鏡の似合う子供が金髪美女を隣に座らせ、人形を撫でている。普通の人が見ればみんな引いてしまいそうな気がする。って、普通の人には一人にしか見えないか。

「今、変な事考えてましたね？」

突然ウインさんが俺に話しかけてくる。見るとこちらに笑顔を向けているのだが、どうしても笑っているように見えない。

「い、いえ。どうして…？」

「なんだか僕の事を子供と言ったような気がして…」

口調は優しいのに怒気が非常に含まれてる。そのプレッシャーにただならぬものを感じ慌てて違う話題を振ろうとする。

どうしようと考えてる間も、ウィンさんのプレッシャーが俺を襲ってくる。

堪らず俺は夏美さんに助けを求めようとした。

でも今更だがよく見ると本来いるはずの夏美さんの姿が見えない。出てくるときにはいたはずなのに…。

どこかにいるのかと思っただけど、やっぱり中にいる様子はない。

今日は夏美さんから出かけるって聞いてなかったけど。

「あ、あの、夏美さんは…」

俺が声をかけるとウィンさんは、僕達が来た時にはいませんでしたよ、と言う。なんとか危機は回避したようだ。

それにしても急に çık かけるなんて…。どこに行ったんだらう？

「あ、もしかしたら…」

疑問に思っていた俺に聞こえた声。それはルリの声だった。

夕闇に覆われ始めている街の中を、私は一人車を降りて歩いていった。

連休最後の日とあって、賑わいも少し落ち着いている。

私はいつものスーツ姿で、両手にはアタツシユケース。さつきから道行く人が不思議そうな顔で私をチラッと見てくる。

でも今はそんな事気にならなかった。別に普段から気にしていなけれど…。

そして歩き始めて数分。私は少し道をはずれ、小さい路地へと入って行く。途中小さな喫茶店があった。やっているようだけど客が入っている様子はほとんどない。

少し横目で見てその様子に心配しながらも、私は歩いて通り過ぎていく。

またその後も歩いていくと、事前に調べておいた全階の窓にテナント募集と書かれているビルをみつける。

私は中に入ろうと後ろに回り、そこにあつた扉に手をかけた。

まさか開いてるはずが無いと思っていたのだが、無用心にも程がある。その扉には鍵が掛かっておらず、入っていいと言わんばかりで拍子抜けだ。

「無駄に壊したりしないで済むから、いいんだけどね…」

中に入り、目指すのは階段。進んでいく通路には何も無い。そして静か過ぎる通路には、私の足音が響く。

少し歩くと目的の階段を見つけ、上を目指し登っていく。

その時、私はなんとなく感じていた。この先に姉さんがいる事を。

本当にいるなんて思いはない。でもなんとなく私が選んだこの場所に、姉さんもいるような気がしてならない。

そんな変な事を考えてしまい、私は思わず苦笑してしまった。

それでも歩みを止めずに屋上目指して登っていく。一步一步と確実に…。しばらく登っていくと、屋上へと出れる扉に辿り着く。

私は一息ついてその扉に手を伸ばし、ゆっくりと開いていった。

すると目の前に建設途中のビルが建っていて、夜の闇に包まれる街を一望できるようだった。

でも私の目はそんな物よりも先に捉えたものがあった。

それを見下ろしている白い服を着た、姉さんの姿を……。

俺は走った。疲れた足を必死に動かして。

あの後、事務所でルリの話を聞いた俺は事務所を飛び出して、前にドツペルゲンガーを追った場所へ向かっていた。

「ドツペルゲンガーを追っていた時があつたじゃないですか。憶えてますよね？」

そう聞かれ、俺はあの時の事を思い出す。

あの時、確か追つていった路地裏で凧たちに会つたんだつたな。

「ああ。でもあれがどうしたんだ？」

別にもうあの案件は終わっていた。夏美さんがドツペルゲンガーを倒して。

それならどうして？

「あの案件とは別に、悪霊化した女の霊がいます。それを夏美さんにお知らせしてたんです」

「あ、そういうえばそんな事言つてたよね」

凧が言った言葉に、はい、と言つて答えるルリ。

女の霊……。それは何も知っていなければ別に気にする事なんてない。誰かが死んで悪霊になるなんて、この仕事をしていれば何度も見たことのある話だ。

でもその後ルリの言った言葉で確信する。

「確かその霊、茶色い長い髪で、白いワンピースを着た姿でしたね」

俺は手で顔を押さえた。そうであって欲しくなかったから。

でもその言葉で確信する。夏美さんはきつとそれを確かめにいったんだ。

「それなんで俺に言わなかったんだ？」

「いえ、凜の事で大変そうでしたので、夏美さんの方が良いかと思っただけ」

「ああ…、タイミングが悪すぎだな」

何も言わずに出て行った…。まさかとは思うが何か嫌な予感がする……。

そこに行っただからってリリイと戦うと言っわけではない。でも逆も言える。

そう、戦わないとも言切れない。

俺は鞭を持って事務所を飛びだした。

急いで駆けつきたい所だが、残念な事に俺には「足」がない。俺がこのまま走り続けて目的地にたどり着いたとき、二人が出会っていれば決着がついているかもしれない。

それはどちらの意味でも取れる。

夏美さんがあの姉さんと呼ぶ「リリイ」を目的どおり倒しているか、それとも、夏美さんが……。

俺の頭の中ではどうしても後者の方が現実的に思ってしまう。

リリイの方が強いというわけではない。ただ夏美さんがリリイと戦う事が出来ないんじゃないかと思ってしまうのだ。

そしてそんな夏美さんをなんとも思わずにリリイが夏美さんを殺す。幼稚な想像だがありえなくはない。

「くそ……。間に合うか……。」

いろいろ考えてしまいが、そんな事よりも今は夏美さんのもとへと急ぎたい。何も起きてなきや良いんだが……。

すると走る俺の横を何かが通り過ぎ足を止めてしまう。

はじめはバイクか何かかかと思っただが、通り過ぎた何かが少し前で止まっていて、その姿を見て違うと分かった。

「一緒に行きましょうか？ これなら一直線で行けますよ。もう空も暗いですから、夜闇に紛れられますし。」

そこには杖に乗って微笑んでいるウィンさんと一人浮いているアンナさんの姿があった。

それを見て俺はゆっくりと苦笑いを浮かべながら近づく。

「いかにも魔術師って感じですね。空を飛ぶなんて。」

「結構きついですけどね。場所は分からないので教えてもらえますか？」

俺は、はい、と言って素早くウィンさんの後ろに乗った。
乗ったのと同時に浮き上がる。こんな経験は初めてだ。
正直言うと怖い。

男二人が乗っていて足がつかない状態で、乗っている杖は車のよ
うにどっしりしていない。ぐらぐらと揺れ、その度たびに不安を掻き立
てられる。

「ちゃんと掴まっててくださいね」

俺の思ってる事が分かったのか、ウィンさんがそう言ってくる。

俺はその言葉にコクコクと無言で頷いた。

それを見るなりウィンさんは小さく、行け、と言う。

それを聞いた杖は言われたとおり動き出すのだが、何を思ったの
か、ハイスピードで動き出したので俺の恐怖心はMAXに。

「すみません。この杖少々イタズラ好きで」

申し訳なさそうに言うウィンさん。

俺は返事をする余裕もなく、ただウィンさんにしがみついていた。

私は誰もいなくなった事務所で、ルリちゃんと共にみんなの帰りを待っていた。

暗くなっていく窓の外を見つめていると、ルリちゃんが空の変化に気付く。

「あ、暗くて分からなかったですけど、雲が出てきましたね」

言われて空を見ると、確か空に雲が覆い始めていた。

「天気予報じゃ、雨は降らないって言ってたけどね」

そうですか、と言って私とルリちゃんの会話が止まる。

壁に掛かっている時計の音が響く部屋の中、何も喋らないのはキツイ。

「
…」

どうも様子が変だ。ウインさんとアンナさんが来て、いきなり出て行った成瀬君を追ってさっき出て行ったときから、ルリちゃんとの会話が単調で終わってしまう。

別にどこがどう変わったかは分からない。でもなんだかおかしい。

「ねえ、ルリちゃん」

「はい、どうしました？」

「何か考え事してるの？ どうもさっきから様子がおかしくて…」

そう言うルリちゃんは、え…、と言って固まってしまう。

「もしかして…、ウインさんとアンナさんの事？」

するとルリちゃんは何も言わず下を向いてしまった。反応からす

ると当たりのよう。

何も言わないルリちゃんに少なからず悪い気がした。あまり触れずにいた方が良かったのかな…。

そんな心配をしていると、ルリちゃんがスツと顔を上げる。その顔を見ると、笑顔なのにどこか悲しそう。なんでそんな表情をしているのか私には分からない。

「一つ聞きたいんですけど、あの二人、どう思いますか？」

「え？ ウインさんとアンナさんの事？」

「はい、そうです」

そう言われてさっきの事を思い出す。

ウインさんは出て行く成瀬君の姿を見た後、杖を持って立ち上がる。

「ちょっと僕も行ってきますか。湧樹君一人じゃ危険かもしれないです」

そう言ってさっきまでの雰囲気とまるで違うウインさんの姿があった。

笑顔が消え、そこに今の状況が大変な状態なんだという事がうかがえた。

すると一緒に座っていたアンナさんも立ち上がった。

「ウイン様、私も行きます」

さも当然のように言うアンナさんを見て、ウィンさんは苦笑いを浮かべる。

「アンナは危険ですからここで待っていてください。すぐ帰ってきますから」

「嫌です。危険なところにウィン様一人でなんて行かせません。それに危険なのにすぐ帰ってくるなんて嘘、私に通じると思ってるんですか？」

ウィンさんの言葉を聞いても、引き下がろうとしないアンナさん。見つめあいながら思案するウィンさん。アンナさんはなお視線を逸らさずに見つめていた。

やがて根負けしたのか、一つ溜息をついたウィンさん。

「分かりました。でも危険だったら僕が守りますから、アンナは無理しないでくださいね」

ウィンさんがそう言うと、アンナさんはちょっと顔を赤くしながら、はい…、と返事をした。

なんだか私達がいるのを全然気にする様子もなく、こっちが居心地の悪さを感じていた。

それでそのまま事務所を出てったんだっけ。

それにしてもあの様子を見てみると、結構見る人が見ればカップルに思うかもしれない。

「私は仲がいいな、って思うけど。それがどうかしたの？」

そうですね、と私の言葉を聞いて呟くルリちゃん。そして暗い顔をする。

その反応に私の頭には『？』が出来るだけだ。

「あの二人、お互いに相手の事が好きなんです」

「へ？」

いきなり何を言っているのかわからなかった。疑問を抱きながらルリちゃんを見ると、ルリちゃんは表情を崩さない。本人はいたって真面目なよう。

ゆっくりと頭の中で整理するため、ルリちゃんの言った単語を思い出す。

お互いに…、好き合ってる…。それじゃあ二人は……。

「愛し合ってる…、って事？」

「あ、いえ。厳密に言つとそういう訳じゃないんです」

「どつという事？」

「お互いに愛されているのを知ってるんですけど、いまいちそこから発展しないよう…。二人とも互いに自分が人間と妖精という違いを気にしてるんでしょうけど……」

それはなんとも不思議な間柄だ。二人ともあんなにいつも一緒にいるはずなのに、そういう事を気にしてるなんて…。

二人の様子を見てると、アンナさんがウィンさんを好きなのは明

らかだった。でもまさかウインさんもアンナさんの事が好きだとは思わなかった。態度に出さない所を見ると、結構奥手なんだなあ。でもちよつとそこで思い出す。

「そういえばルリちゃんは…、ウインさんが好きなんだよね？」

確か前にそんな事を聞いた事があった。最初に私の元に来た時にそんな話をされていて、その時の顔を赤くしていたルリちゃんを思い出す。あの顔は可愛かったな。

そんな事を思っていると、私の言葉を聞いたルリちゃんはコクリと頷き、そのまま下を向いていた。

そこでもう一度考えた。

少しの間だけどルリちゃんはウインさんと離れ離れだった。だからその間にそれを知ることが出来ないはず。って事はもしかしたらもう随分前ずいぶんから知っていたという事になる。

「いつから知ってたの？」

「アンナの事は初めから知ってましたけど、ウイン様には前に一度お話をした事があるんです。

『ウイン様には好きな人がいるんですか？』って…。それでその時に……」

ルリちゃんって結構度胸があるんだな。本人にそんな事を聞いてしまうなんて…。

じゃあウインさんはそこでアンナさんの事が好きと言っただろ
う。

「うくっ…。ひくっ…」

すると下を向いていたルリちゃんが嗚咽を漏らしているのに気付く。突然のことに私は慌ててしまい、どうすればいいか分からなくなってしまう。

「ルリちゃん……」

「ごめんなさい……。こんな所見せてしまって……」

涙を拭うルリちゃん。私は黙ってルリちゃんの言葉を待つ。

「二人のあんな様子見てたらなんだかつい……。きつと私の思いは通じない、ずっとそう自分に言い聞かせてました。なのに、そう分かってるのに、それでもウイン様が好きだなんて……」

私のこの思いは、どうすればいいんですかね……」

ルリちゃんはずっと考えていた事を吐き出すように言うてくる。

そして言い終えると堰を切ったように涙を流し始めた。

「なんで私の方が後なんでしょう……。なんであの人の側にいるのが私じゃないんでしょう……。なんで……」

「……」

するとこの様子に触発されたように外から雨音がしてくる。

いつも明るいルリちゃんがこんな思いを抱いてたなんて思わなかった。そんなルリちゃんの事を想像すると、とても胸が締め付けられる。

涙を流してるルリちゃんを見ながら、私はかける言葉を捜していた。私なんかそんな資格はないかもしれない。でも私はルリちゃんの友達として何かしてあげたかった。

「ルリちゃんは…、ウィンさんに会ったこと、後悔してるの？」

その問いに、え？、と言いたげな顔をするルリちゃん。

私はそのままルリちゃんを見つめながら続けた。

「好きになつた事、後悔してる？」

ルリちゃんはその問いに戸惑いながら首を横に振った。

「悔しい思いはありますけど、会えた事には後悔してません」

そう言いながらルリちゃんは私を見て涙を流しながら微笑む。

「それでも、好きですから」

私はそう言ったルリちゃんを抱きしめていた。なんでそうしたのかは分からない。

でも今はそうしたいと思った。

胸に抱いたルリちゃんから一層大きな泣き声が聞こえ、それが良かった事と思えた。

第五楽章『趣意【シュイ】』 9 (後書き)

ちよつと長すぎでしょうか？ すいません…。

一応この楽章で主要の登場人物をすべて出すつもりなんで、もう少しお付き合い願います。

ARIKAでした。

飛んでいる俺たちの下には、所狭しと一面同じような建物が建ち並んでいた。同じ高さの建物ばかりだからか、そこに地面があるようだった。

もう少しで目的地に着くだろう。前には昼に凜と共に見た建設途中のビルがある。それが前に行った場所の目印になっていた。

俺はウインさんにしがみつきながら大声で話しかける。

「もう少しで夏美さんがいるはずの場所です。少し高度を下げてください」

分かりました、とウインさんが言うと、徐々に小さく見えていた眼下の建物が近くなってきて、建物の屋上の上を低く飛んでいた。こんなに堂々と飛んでも近くの大通りを歩く人々は気付かない。意外と盲点なんだな、これが。

すると、目的地が近くなってきた所で雨が降り出してきてしまった。その雨粒は猛スピードで飛ぶ俺たちに、威力を増して容赦なく襲ってくる。

視界も悪くなり、見渡しても先の方はよく見えない。それでも俺は懸命に夏美さんの姿を探した。

「冷たいよお〜」

俺の様子とはうらはらに、一緒に飛んでいるアンナさんは急な雨に少し参っているようだ。

「だから待っていてくださいって言ったんです。今からでも戻ってもいいですよっ?」

ウインさんは厳しくも優しくアンナさんに声をかける。だけどアンナさんは首を横に振り拒否した。

俺はそんな様子を見て、本当にウインさんが好きなんだな、と感じていた。

そんなやり取りをしている最中も、雨足は一向に弱まる事はなく降り続く。

なおも探しつつづけるが、ここでふと思う。このまま見つからず、俺の勘違いで終わればいいと。

「ん？　なんででしょうか、あれ…」

ウインさんの視線を追ってその先を見てみると、ビルの合間に道路があり、先の方で何かが見えた。

雨のせいでよく見えない、俺たちはその何かに近づいていった。近づいていくと段々と姿かたちが見え始め、それが人なんだと分かる。

もしかして…。

「夏美さ…。」

その姿が探している人物と思い大声で呼びかけようとした時、その姿がこっちに気付いたように動き始め、途中で声を止めた。

どう見ても夏美さんとは思えない格好の人物だったからだ。

ライダースーツを着ていて、頭にはフルフェイスのヘルメット。それらは赤一色に統一されていて暗い路地でも異様な存在感を放っていた。

するとその人物は俺たちに向け腕を上げる。その先の手には何か握られていて、次の瞬間…。

「うわっ!?!」

それが銃であると思ったときには、こちらに向けて発砲していた。銃声が聞こえた瞬間、前にいるウインさんの体が大きく揺れて、乗っていた杖もそのままウインさんの動きに沿ってしまい大きく横の方に飛んでいく軌道がそれってしまった。

そのまま体勢を立て直す事が出来ずビルの上上に不時着する事になってしまい、杖から投げ出された俺とウインさんは屋上を転がっていき、勢いそのままに体をフェンスに叩きつける。大きく歪みながらも俺たちを受け止めてくれたフェンスを見て、衝撃がどんだけのものなのかが分かった。

俺は一瞬気を失いかけたが、なんとか気を保てた。体はあちこち痛むが…。

「つて〜! 何だよ今の」

膝に手をつけて状態を起こす。痛みは思ったほど酷いものじゃなく、体を動かすのには支障はないようだ。

それにしても今のは何だったんだ?。問答無用でこっちに銃をぶっ放すなんて普通じゃない。

アイツは何者で、何故俺たちに向けて発砲したのか…。いろいろ考えても答えは出てこなかった。

「ウイン様! 起きてください! ウイン様!」

アンナさんの声がする方を見ると、一緒に飛ばされたウインさんの姿があった。

だが無事ではないようで、頭から血を流して気を失っているようだった。アンナさんの様子からすると目を覚ます気配はないらしい。すると足音が聞こえそちらを見ると、そこには先ほどの人物が立ってこちらを見ていた。

手には先ほど俺たちに向けて撃つたと思われる銃が握られていた。その形から、『ハイスタンダード・デリンジャー』と言う物だった。それは他の人差し指でトリガーを引くタイプの銃とは違い、形状が独特なうえに銃身を人差し指で支え、中指でトリガーを引くという特徴があり、一目でそれだと分かる。

それだけじゃなくその銃は安全装置がない為に引き金を引くのにかなりの力が必要になっている。まず普通の奴じゃそんな銃を手にする事はない。

「何で俺たちを狙って撃つたんだ…」

俺はいつ銃を向けてくるとも知れないフルフェイスのヘルメットをした相手の顔を睨み問いかけた。

そのまま後ろの腰に差しておいた鞭を握ろうとした。すると突然俺の問いに答える事無くこちらに銃を向ける。

「動くな」

ヘルメットのせいでもぐもってはいるが、女性のものと思われる声で俺の事を制した。

ライダースーツを着ていて体のラインがはっきりと分かっていたのだが、やはり女性だったようだ。

「私は人を撃ち殺すほど物好きじゃない。大人しく言う事を聞いておけ」

同業者？　じゃあこいつも退魔士か？
だがその言葉を聞いてまた疑問が浮かんできた。

「質問に答える。じゃあ何で撃ったんだ？」

俺は強気で聞き返す。だが銃が向けられている以上、それ以上の行動は出来ない。

俺の問いを聞いた目の前の女性は何か考えているのか、しばらく無言になる。

「そいつには悪いがただの威嚇のつもりだった。私たち組織の計画にお前達が邪魔になると思い警告の為の発砲をした、それだけだ」

それを聞いて俺は怒りが湧いてきた。組織とかそんなのどうでもいい。

そんな言い訳が通じる訳がない。どう考えても俺たちに向けて発砲してたじゃないか。

この先へ急ぎたいという焦りと怒りが入り混じり、俺は目の前の人物に立ち向かいたい衝動に駆られていた。

だがそうしたくてもそれが出来ない。今の状況は圧倒的に俺の不利。どうすればいいか…。

と、その時。

突然ライダースーツを着た女性が目の前で吹き飛ばされる。完全に不意を突かれた女性は避けることも出来なかったようだ。

吹き飛ばしたのは今さっきまでウィンさんに声をかけていたアナさんで、すらっとスカートから伸びた足が蹴り飛ばしたと言う事を物語っていた。

女性はさっき俺とウィンさんになったようにフェンスに叩きつけ

られていた。それを見つめるアンナさんを見て俺は凍りついた。無表情。そして感情が読み取れないような死んだ眼をしている。

「何やってんの？…、あんだ……」

声もさつきままでの様子とは全然違う。そのまま見守っていると。ゆっくりと歩きながら女性へと近づくアンナさん。

「ちょ、危ないっすよ、アン……」

「黙ってて……」

俺が無防備で近づくアンナさんに声をかけるのだが、まったく聞く耳を持たない。

すると頭を押さえながら立ち上がるライダースーツの女性。そのまま銃をアンナさんに向け躊躇わずに発砲する。

だがその発砲された銃弾は当たらない。その時にはもうそこにアンナさんはいなかったから。

相手の姿を見失った女性は慣れた手つきで銃に弾丸を込めながら周りを見渡す。そこに……。

「死ね……」

女性は後ろに振り返る。そこにはアンナさんの姿が。

驚いた女性は慌てて銃を向けようとするが、アンナさんが一気に間合いをつめて蹴り落とす。蹴り落とされた銃は音を立てて転がっていく。

そしてアンナさんは死に体となっている女性に踏み込んで、そのまま蹴った勢いそのままヘルメットを無視するように頭に後ろ回し蹴りを浴びせた。

聞いた事がないような衝撃音を響かせ、女性は力なく転がっていき。それをアンナさんがゆっくりと歩いて追いかける。

女性は何か立ち上がり、アンナさんの追撃に備えようとする。だがそんな事にせず立ち向かうアンナさん。

「よくも…」

また中段蹴りを繰り出す。女性は防御しようとする。

だがアンナさんは女性の動きを読んでいたように、急激に蹴りの軌道を変化させて首の付け根へと振り落とす。女性は防御が間に合わずその蹴りを浴び、膝から崩れるように倒れてしまった。

それは『縦蹴り』と呼ばれる攻撃で、今は亡きアンディ・フグの『踵落とし』を足で止め、『一撃』という異名を持つていた空手家フランシスコ・フィリオや、『演武』とも表されるほど華麗な蹴り技で有名なグラウベ・フェイトーザの繰り出していた技だった。

踵落としと同じに思えるが、踵落としは脚・踵を振り上げてから落とすという二挙動に対し、その蹴りは変則的に軌道が変わる一挙動の為、防御などの対処が困難。だがそれよりも、それを放つ方には柔軟な筋肉や下半身の強さが必要とされるほどの技だ。それをやっつけたアンナさんを褒めるしかない。

と言うよりも魔女が肉弾戦を得意としてるなんて…。昔話が変わってしまっそうだ…。

その蹴り終えたアンナさんは倒れた女性を見つめる。

「死んで償え…」

そして倒れて動けなくなった女性の頭を蹴ろうとする『サッカーボールキック』の動作に入る。

さすがにやりすぎだと止めに入ろうとするが間に合わない。

「アンナ！」

すると突然ウィンさんの声が響く。見ると頭を押さえフラフラと立っていた。

その声に反応したアンナさんは動作を慌ててやめ、ウィン様…、と言つて立ち尽くす。

「そんな事をしてどうするんですか？　僕はそんな事をしるとは言つた覚えはないですが」

「でも……」

有無を言わさないといつた表情で見つめるウィンさんの視線に耐え切れなくなつたアンナさんは、落ち込んだように俯いてしまった。それを見たウィンさんはそのままアンナさんに近づき、持っていた杖でコツンと叩く。そして頭を押さえるアンナさんを見つめ、ウィンさんは自分の頭から滴り落ちてくる血を気にする様子もなく叱りつけていた。

俺は様子を見守りながら恐る恐る声をかける。

「あの…、ケガは大丈夫なんですか？」

すると俺の問いかけに気付いたウィンさんが俺の方に振り返る。

「ええ。僕は大丈夫です。屋上に落ちた時にちよつと頭を打つたところが悪かつただけです。銃弾は…、ほら、この通り」

そう言つて差し出した掌には、女性が撃つた物と思われる銃弾が握られていた。

「特殊な魔術加工のされた銃弾のようです。退魔士関係の人なのは分かりませんが…」

「そいつが言ってたんですけど、『組織の計画』とか何とか」

「組織…、ですか……」

ウインさんは顎に手を当てて、うん…、と唸りながら考える。そして倒れて動かない女性を見た。

すると、ん？、と言って何かに気付いたように近づく。その様子を見守っていると、視線が胸元にあるエンブレムに向けられている。その様子を見ながら俺もそのエンブレムに視線を向けた。

「それ、『^{まんじ}卍』つすか？」

ウインさんは返事をしない。何か心当たりがあるんだろうか？

一つ俺も気になる事があった。自分で『卍』と言ったのだが、何かが微妙に違う。頭を振り絞り考えるのだが何も浮かばない。するとウインさんがこちらを見る。

「ここは僕とアンナに任せて先に行ってください。急いだ方がいいでしょう？」

「あ、はい」

真剣な顔でウインさんにそう言われ俺はその場を任せ、先を急い
うとする。

だが一つ気になる事があった。

「そういえば、ウインさん」

「はい？」

「弾丸はどうやって防いだんですか？」

確かにあの女性が撃った弾丸は俺たちに向けて放たれていた。

前にいたウィンさんに当たったのは確かだった。

するとウィンさんは微笑んで、口に人差し指を当てる。

「それは秘密です。魔術で、とだけ言っておきます」

「そうですね…」

ちよつと聞けないのは悔しいが今はそれ以上聞いている時間はない。

俺は一度頬を叩き、じゃあ先を急ぎます、と言って屋上を飛び移っていった。

飛び去る成瀬の背を見送り、もう一度ウィンは視線をエンブレムへと向ける。

成瀬が言ったように、エンブレムは似ているが『卍』ではなかった。

ウィンはそれを見つめながら頭をかきちよつと困ったような顔をする。

「どう、したんですか？ ウィン様」

怒られていた手前、声を掛け辛そうにしていたアンナが恐る恐る話しかけた。

「はい？ あ、いえ、なんでも無いですよ」

アンナは、はあ、と納得いかないような声を出す。

「それより、アンナ。この人を本部に送っておいてください。色々聞きたいことがあるんで」

ウィンの言葉にますます意味が分からない様子のアンナ。それでも、はい、と返事をして言われたとおり女性を本部へと送る準備を始めていた。

それを見た後、ウィンは成瀬の向かった方を見つめ、

「面倒くさい状況かもしれないですね、これは…」

誰に話しかける訳でもない言葉は、降り続く雨の音に交じり合い、そのまま消えていった。

ぼつぼつと降ってきた雨は少しずつ雨足を強めていた。それでも私は屋上に佇む姉さんを、後ろから静かに見つめて立っている。

その屋上の縁へりに座り、鼻歌を歌っている姉さん。歌っているのは「Singin' In The Rain」。昔の映画の中で誰かが歌っていた気がする。

私はそれを黙って聞いていたのだけど、突然鼻歌が止んでしまう。

「盗み聞きなんて悪い子ね」

姉が妹を叱るような優しい口調で、それを聞いた私は懐かしさを感じていた。

昔、同じように姉さんに言われた事があった。それから何年も経っている。それでもその口調は姉さんのもので…。

でも私はその思いを振り払うように首を振り、今度はこちらから声をかける。

「気付いていたんでしょ？ 姉さん」

私がそう言うと、ふふふ、と笑う姉さん。そして立ち上がりこちらを向いた。

「そう呼ぶな、って言ってたんだけどね…。いつまでアナタは私の事を「姉さん」と呼ぶのかしら」

そう言うなり地を蹴り姉さんは私に向かって来る。それを見て私は持っていたアタッシユケースを握りなおした。

姉さんはナイフをポケットから取り出し、切りつけてくる。私は慌てずにアタツシユケースでそれを受け止めた。連続して攻撃をしてくるが、全てかわしていく。するとこれ以上攻撃しても意味がないと判断したのか、一旦私から後退し距離を取った。

「はあ。簡単にはいかないか。やるじゃない夏美」

「…」

変な気分だ。こんな風になってしまった姉さんに褒められるなんて。それが嬉しいという思いも少なからずあるのだから、そんな自分に苦笑してしまう。

思えば昔は一緒に修行でこうやって戦ったものだ。姉さんは私の目標で、いつも私は認めてもらおうと必死だった。そんな私の攻撃をいとも簡単にかわされて、気付けば私が劣勢になっていたんだっけ…。

そんな私を優しくも厳しく指導してくれたのは姉さんだった。今でも思い出せる。

「戦ってる最中に何考えてるの？」

その言葉に、はっと意識が目の前の状況に引き戻される。戦いの最中に考え事をしてしまうなんて。

気付いた時にはもう目の前に姉さんの姿があった。そして私に向かいナイフを突き出してきた。

私は慌てて横に避ける。私は転がっていき、すぐに立ち上がり追撃を警戒した。

「チャンスだったのになあ…。アナタを殺す……」

その言葉が私の胸を締め付ける。もうこの人には私を殺すという事しか考えられないのかもしれない。

…でも、私がした事を考えれば納得がいく。

するとまた姉さんが攻撃を開始してくる。私は姉さんの攻撃に備えてアタツシユケースでガードをしようとする。だけど姉さんの攻撃はナイフによる物ではなく、そのナイフでの攻撃動作はフェイクだった。

姉さんは、タンツ、と地を蹴り素早く繰り出された蹴りは、対応する間もなくアタツシユケースの横にクリーンヒットして弾き飛ばされる。

そこにまたもやナイフでの攻撃。私は慌ててもう片方の手に持っていたアタツシユケースを振るってナイフを弾き飛ばす。

だけど姉さんはそんな事お構いなしに回し蹴りを浴びせてくる。

私はアタツシユケースを振るった方に流れたままの体を元の体制に戻す事が出来ず、姉さんの蹴りをまともに浴びてしまった。

「ぐっ！」

せめて少しでも威力に対抗しようと歯を食いしばった。だけど姉さんの蹴りは、そんな事がまるで無駄に思える程の威力。

だけどその行為に少なからず意味はあったようで、意識が吹き飛ばされる寸前の所で踏みとどまる。いつそのこと意識が飛んでた方が良かったと思えるような痛みを味わう事になったけど…。

たった一撃だというのに脳が揺さぶられ、三半器官がやられてしまい、平衡感覚を麻痺させられてしまったのかうまく動く事が出来ない。そのため地面がグワングワンと揺れるような感覚に陥った私は倒れたままだった。それをみて姉さんは私の近くまでやってくる。

「ふふ。動けないみたいね」

そう言つて私に向けて姉さんは微笑む。だけどその笑顔は優しさなんて微塵も感じることが出来ない。

私はせめてもの抵抗で姉さんを睨みつける。

「なによその顔…」

私の行動が気に食わなかったのか、そう言うなり無表情でおもいつきり腹部を蹴つてきた。避ける術も、防ぐ術もなく、私はその攻撃をまともに受けてしまう。

咳き込みながら動けない私。それを見て姉さんは私の側に寄ってくる。もう一本のナイフを取り出し、姉さんはそれを逆手に持った。

「じゃあね…。夏美…」

言い終わると姉さんはナイフを上には振り上げ、あとは私に向かい振り下ろすだけの体勢になる。

私はもう動く事が出来なかった。唯一動く目で、姉さんの持っている物を見る。手には銀色に輝くナイフ。降ってくる雨がナイフを伝つて先の方から水滴が落ちてくる。

自分は殺されてしまうというのに、それがなんだか綺麗に思えてしまう。そんな自分が滑稽で仕方がなかった。

あの水滴を追つて、ナイフが落ちてくれば、私は死んでしまう。

そう思つと私はもうそれ以上何かを考えるのをやめ、じつと姉さんの持つているナイフが振り下ろされるのを待つことにした。

それで姉さんに許されるのであれば、私は死んでもいい。私はそ

う思っていた。

ただどなかなかその時は訪れず、私は姉さんの方を見る。その顔を見て私は、はっとした。

その時だった。

突然銃声が聞こえ、姉さんがその音に反応して動きが止まった。何故銃声が聞こえてきたのかは分からない。でもそのおかげで出来た隙を見て、死ぬ覚悟をしたというのに、私は咄嗟に逃してはいけないという思いに切り替わっていた。そして必死の思いで足を振り上げる。それが姉さんの手にヒットし、持っていたナイフを手放させる事に成功した。

反射的に転がっていくナイフを目で追う姉さん。それを見て私は力を振り絞って立ち上がり、姉さんから離れた。

蹴られた時に肋骨を折られたのだろうか、少し動くだけで痛みが酷く、呼吸をするのもかなりキツイ。それでも私は悟られまいと姉さんを正面に見据え、アタッシュケースを握り構える。

姉さんの方は飛ばされたナイフを追い、ゆっくりと拾う。そしてナイフの汚れを落とすように服で拭っていた。

「まだ諦めないの？ もうその体じゃうまく動けないんでしょ？」

少し苛立たしげに言う姉さんの言葉に私はドキツとしたが、何も返事をせずに姉さんの攻撃に備えていた。でも反撃は多分出来ない。今攻撃してきたら私はなす術なく本当に殺されてしまうだろう。

でも今の私はそんな事気にならなかつた。それよりも私は目の前

の姉さんの顔を見ていた。

目の前にいる姉さんは同じ表情でいる。さっき私を刺そうとしていた時の顔と…。

「姉さん…」

「だからもうそう呼ばないで……」

「なんで…、泣いてるの？」

思わず姉さんの言葉を遮ってまでそれを聞いてしまった私。するとその言葉に、え？、と言いたげな顔をした姉さんは、ナイフを鏡代わりに自分の顔を見る。その様子を私は黙って見ていた。

その顔には雨が滴っている。そこに混じり、目からも一筋の涙が流れていた。

「ん？」

夏美さんを探す俺の目に、人らしき姿を確認した。俺は全力でその姿に近づいていく。

近づくにつれてだんだんとはっきりとした姿が見えてきた。それは二人分だった。

黒い服装の人物と、白い服装が向き合って佇んでいる。

黒い服はスーツ姿の夏美さんだ。そして向かいにいる白い服の姿

は…、

「リリイ…」

俺は呟きながら足を止めず、どんどん近づいていく。

だけど様子が変だ。戦っている様子もなく二つの姿は近づく事も離れる事もせず、距離を保ったまま立っている。俺は何かあったのかと急ごうとした。

するとリリイの方が突然持っていたナイフを落とし、そしてその手を頬に添えた。その奇妙な行動に俺は近くまで来たというの思わず足を止めてしまい、そのまま二人の姿を観察できる場所で様子を見守る。

「なに…、これ…」

リリイと名乗る女性、夏美さんが姉さんと呼ぶ女性は、何かを不思議がるような口調で呟いている。

ここからではよく見えないが、手で何かを拭いているようにも見えた。夏美さんが何かしたのだろうか。

「ねえ…。なんなの、これ…」

口調がだんだんと怖がるようになっていく。あのリリイがどうしてそんな声を出しているのか。それは俺には分からなかった。

すると突然膠着していた事態は動く。

リリイは手で頭を押さえフラフラと体がふらついていた。それを見た夏美さんが近づこうとする。

「来ないで！」

夏美さんはリリイに言われ、一歩足を出して咄嗟に止まる。

制したリリイの方は鬼気迫るような表情でいる。依然として片方の手は頭を押さえていて、どこか辛そうに見える。そしていきなり走り出し、この場から去っていくリリイ。その後を夏美さんは追おうとするが、糸が切れた操り人形のように急にその場に倒れこむ。

それを見た俺は、夏美さんのもとへと急いだ。
倒れている夏美さんはこちらを見て微笑む。

「盗み見なんて悪い子ね、成瀬君……」

「……気付いてたんすか？」

「そんな余裕、なかったわよ……」

そう言った夏美さんのスーツはボロボロで、口からは血を流している。

言っている事は本当だと一目で分かるほどだった。

「ただ……タイミングが良すぎだった、からね……」

そして起き上がろうとする夏美さん。だが力がうまく入らないのか、なかなか起き上がれずにいる。

「すいません、と言いなから俺は夏美さんに肩を貸して起き上がらせ、フェンスに凭れ掛からせる。」

見た感じ外傷は無いように思える。でも夏美さんの顔色は尋常じゃない。呼吸が乱れ、胸の辺りを押さえている。

……胸？……。

俺はまた、すいません、と言いながらスーツの前を開き、俺はワイシャツの上から胸の辺りを触る。すると小さな悲鳴を上げて、少し苦しそうな素振りを見せる夏美さん。それで俺は確信し、そのワイシャツもボタンを外してはだけさせる。

そこに綺麗な女性らしい肌はなく、赤黒く変色した痕があった。とても正常な人の肌の色とは思えず、その痛々しい痕を見た俺は思わず目を逸らしたくなった。

だけど一つ深呼吸をして落ち着き、俺は霊気治療を行った。

「あは……。結構ヤバイかもね……」

「喋らないでください！」

こんな状態で話していた夏美さんが不思議でしょうがない。いろいろ聞きたい事、言いたい事はある。でも今は必死で夏美さんの治療に専念した。

暗闇の中、遠くから雨音がする。なんでこんな所にいるんだろう？…。

私は必死に体を動かそうとするのだけど、なぜか動かす事が出来ない。しかも私は自分が今立っているのか、座っているのかさえも分からなかった。

「は！」

突然目の前が暗闇から見慣れた景色へと変わった。

なんだ、寝ちゃってたんだ。それにしてもどうして寝てるって分からないんだろう。授業中でも居眠りをした時、いつもこんな感じだなあ。

私は事務所のソファに座っていた。まだ眠気が残っている状態で首を動かして壁に掛かっている時計を見ると、最後に見た時間から大分経っている。

いつの間に寝むってしまったんだろう。そう思いながら私は立ち上がろうとした。

すると自分の膝の上に何かが乗っていることに気付き動きを止める。見てみると小さい寝息を立てて縮こまっているルリちゃんの姿が。

そうだ。あの後泣いているルリちゃんを慰めていて、そのまま寝てしまったルリちゃんを撫でているうちに自分も寝ちゃったんだっけ。

私はそつと膝の上から持ち上げてクッションの上に乗せてあげる。そして自由に動けるようになった私は鞆の中から使っていない綺麗なハンカチを取り出してルリちゃんにかけてあげた。

ルリちゃんは穏やかな寝顔。それを見て私は安心した。

「さて、帰ってくるまで待ってようかな」

そう言って背伸びをしながら飲み物を貰おうと台所に入らしてもらって冷蔵庫を開けた。

「あれ？」

昼間に夏美さんに貰った麦茶がなかった。入れ物を見てないし、どれだけ入っていたか知らないけど無くなってしまったんだろうか？私は溜息をつきながら冷蔵庫の扉を閉める。するとそれと同時に事務所の扉が開く音がした。

誰か帰ってきたのかと事務所に戻ると、帰ってきたのはワインさんとアンナさんだった。

「すみません。またお邪魔します」

「あ〜ん。もうずぶ濡れ〜」

アンナさんが文句を言うとお二人は服が張り付くほどずぶ濡れ状態だった。

外はいまだに雨が降り止まず、それどころか勢いが増すばかり。

二人がそうなつても仕方がないだろう。

と言うより…、

「ワインさん！ 頭！ 血！」

驚きで単語を続けるだけになってしまう。

頭ですか？、と頭をかきあげるワインさん。見ると止血をしたように布のようなものを巻きつけてある。もう大分たった後のように

血が吸い取れない状態まで滲んでいる。

「ああ、これですか。ちょっと杖から落ちてしまつて頭を打つちやつたんで……」

「いえ、そんな普通に説明しなくてもいいですよ」

何事もないように説明しだそうとするウインさんの言葉を遮つて、持ってきたタオルを二人に差し出す。勝手な事をしてしまうけど、さすがにそのままにしておくことなんて出来ない。

そして私は応急処置のためのガーゼや包帯でもないか探す。いつもお邪魔してるとはいえ、勝手知らずの事務所でそういうものを探すのは一苦労だ。しばらく探していると救急箱を見つけ、中から滅菌ガーゼと包帯を取り出した。

巻いてあげようと思つただけで、側にいるアンナさんがジーッと見て自分がやるとアピールしている。苦笑いしながらアンナさんにそれを手渡すと、嬉しそうに頭や顔を拭き終わったウインさんに巻きつけていく。

それを見て私は台所に向かった。

「暖かいお茶になつちゃうんですけどいいですか？」

「さすがにこれじゃあ風邪引いちゃいそうですね。いただきませす」

「私も」

分かりました、と返事をしてカップを二つ取り出し、作っていた紅茶を中に注ぐ。

そしてカップを持ってまた事務所のほうへ戻った。見るとウイン

さんの頭の包帯が綺麗に巻かれている。結構なれているようで頭にぴったりと巻かれてあった。

「着替えなんかは持つてるんですか？」

「あ、はい。ええつと…」

そう言って立ち上がり、ウィンさんが杖で床に何かを書き始めた。するとウィンさんが杖を走らせていくのを追うように光の筋が出る。いつか見た屋上でアンナさんが書いていた魔法円のようなものだ。

「Don」

何をするのかと思っていたら急にウィンさんが何かを言った。

響くようなウィンさんの声があった次の瞬間突然魔法円が発光し、何かが中央から現れる。それは見た感じ古い瓶のようなもので、見たこともないような模様をしていた。

見ていた私は少し不安になっていたけど、ウィンさんは何の躊躇もなくその瓶に手を突っ込む。

そして引き出されたのは黒い何か。コンと杖で床を突くと、一瞬で瓶や魔法円が消えてしまった。

呆気にとられている私をよそに、ウィンさんはそれを広げて見せる。

「ほら。この通り」

それは今ウィンさんが着ている物と同一の服だった。あまりの事に驚くより呆れてしまう。

「すごいですね。旅行カバンいらすですか…」

「能力の無駄遣い、とみんなには呆れられますけどね。どう使おうが自分に有益じゃなければ意味がないですからね」

あはは、と笑いながら着替えに行くウインさん。

私にはそう言っているみんなの気持ちが届きほど分かります。着替えに行くウインさんを見ながら私はそう心の中でつぶやいた。と、ふとアンナさんを見て今更ながら気付く。

「あれ？ アンナさん」

「え、何？」

「それ…、スカートの丈が短くないですか？」

今日最初に会ったときに別に注意して見てた訳じゃないけど、あきらかに裾が短い。

足下をほとんど隠すほど長かったスカートが、今は膝の上の辺りまでの丈になっていた。

その為アンナさんの綺麗なすらっと長い足が露あらわになっている。

「ああ、これね。ウイン様の止血の為に破いちゃった」

あれ、アンナさんのスカートだったんだ。好きな人の為にそこまでしてあげるなんてすごいなあ。

感心していると私が置いたお茶を優雅に飲むアンナさん。

足を組んで普通のカップで飲んでいるのに、それでもどこか気品があるように見えた。

「って、アンナさんも着替えた方がいいですよ」

「あ、そうね。忘れてた」

あははって笑ってるけど…、そんなびしょ濡れで忘れないでください。

着替える為に席を外したアンナさん。今ここに居るのはソファ―に座っている私とルリちゃん、そして向かいに着替えを済ませ終わったウインさんだけになってしまった。

私は寝ているルリちゃんを撫でていた。それを黙って向かいで見ているウインさん。

何か話すべきだろうか…。気まずい状況に耐えられそうにない。

「そんなに硬くならないでください。僕は何もしませんよ」

そういつて笑いながらお茶を飲むウインさん。相手に気を遣わせちゃうなんて…。ちよつと恥ずかしい。

「そうですね。ウインさんはアンナさんが好きなんですし、私なんかには何かするなんて……」

そこまで言っただけで今この事務所の中の空気が張り詰めたものになっているのに気付く。まずい事を聞いてしまったのだろうか。

恐る恐る見てみるとウインさんは笑顔はそのまま。だけどカップを持つ手が震えている。分かりやすいくらいに動揺していた。

すると私の視線に気付いたのか、あ、という顔をしたあと、平静を装うようにカップをテーブルに置く。

「シャルルに、聞いたんですか？」

「あ、いえ、その、…はい」

そのまま、すいません、と言う私に首を横に振る。

「聞いてしまったんなら、もう僕が何を言おうが意味がないですから」

ひとまず許してもらえた、と思ったのだけど、なんだか遠まわしに許してもらえてない気が…。

今度は私の方が手を震わせながらお茶を飲むことになった。

「恥ずかしながらその通りです。僕はアンナが好きですよ」

ウィンさんは頭を掻きながら恥ずかしそうに答える。私のほうもはっきりとそう答えられると恥ずかしい。

でも本当でよかった。もし違ったりしたらかなり失礼だ。

そうになると、私の中に一つ疑問が残る。

「なら何でその気持ちをアンナさんに伝えないんですか？」

私の問いに、そんな事まで話していたんですか、と言って困ったような顔をする。

アンナさんがウィンさんを好きなのはどう考えても間違いない。それなら二人は相思相愛。じゃあなんで気持ちを伝えずに一緒にいるんだろう。

私なんかは男性と付き合った事なんてないから、そんな風に言える立場じゃないかもしれない。でもお互いに好きなら伝え合う事が普通じゃないだろうか。

「なんと言ったらいいんでしょうね、自分が相手と同じじゃないから、でしょうか」

「『人間』と『妖精』って事ですか？」

私がそう言うと、ウインさんはコクツと頷く。

「聞こえは良いかもしれませんが、『身分違いの恋』というものは難しい事ばかりです。あ、この場合は『種族』と言った方が正しいでしょうけど…。」

妖精であるアンナは、ほとんど歳をとらずにこれから僕よりずっと長く生きていくでしょう。その時僕は一人歳をとっていき、いつか先に死を迎えてしまう…。」

「…。」

私はウインさんの言葉に何も言えなかった。

ウインさんはアンナさんに「好きだ」と言わないのではなく、言えない(……)のだと分かったから。

私が思うよりもずっと先の事をウインさんは考えているのだ。それなのに私は…。」

「なんだかすいません。僕はこんなこと言える立場じゃないのに…。」

そう言って頭を下げるウインさん。私の方がそれを言うべきなのに、先に言われてしまいうろたえてしまう。

「着替え終わりました、ウイン様」

ちょうど話が終わった時、アンナさんが事務所へ戻ってきた。

「まあこの話はこの辺で。お茶も冷めちゃいますしね」

「あ、はい…」

私たちの様子を不思議そうに見ているアンナさん。

何話してたんですか？、とウィンさんに聞いている。ウィンさんは、内緒です、と言ってはぐらかしていた。

その態度に腑に落ちない顔をして、今度は私の方へと来るアンナさん。

「ねえ、何話してたの？ 教えてよ」

私は答えに困ったけど何か言っておこうと考えた。

「えつとですね、アンナさんの良い所をウィンさんに教えてもらってたんです。

そしたらウィンさんなんて言っておくと思います？」

「え？ ええ!?!」

うるたえ始めるアンナさん。私はそれを見ながら続ける。

「とても優しくして、一緒にいると落ち着くんです、って」

そこまで言うのと頬に手を当てて顔を真っ赤にしながら恥ずかしがるアンナさん。ウィンさんかというと、私を見つめて苦笑いしている。

それぐらいは良いんじゃないんでしょうか、私はそんなふうに思

いながら笑みを返すと、ウィンさんは頭を掻いてしまう。

すると事務所の扉が開き、私はそっちを見た。

そこにはこの事務所の主ともう一人、夏美さんと成瀬君が立っていた。

一通りの応急処置的な霊気治療を施すと、雨を避ける為に入り口付近にある屋根の下に移動する。

時折吹き付けてくる事もあるが、思いつきり雨ざらしになるよりはマシだ。

俺と夏美さんはどちらも喋らず、ただ黙って座っていた。

夏美さんは実際危ない状態だったが、もうあとは本人の治療力でどうにかなる所までは回復していた。とは言っても、当たり前だが激しく動くのは無理だ。折れていた肋骨なんか一発でどうにかなってしまうだろう。

「ごめんね、成瀬君。迷惑かけちゃって」

胸の辺りを押さえながら突然夏美さんが口を開く。いつも綺麗に着ているスーツが所々傷ついていて痛々しく見えた。

でも俺は労いの言葉なんてかけない。

「なんで一人でいったんすか？俺が戻ってきてから一緒にじゃダメだったんですか？」

夏美さんは俺の言葉に何も返さない。ただ目の前の雨の降る光景を眺めていた。

雨は止まず、降る勢いもいまだ衰える事がない。俺の気持ちも同じように腹立たしさが治まらなかった。

「前に言いましたよね。『一人で何でも抱え込まないでくださいよ。助手の俺がいるんすから』って。全然聞いてなかったんすか？」

「ごめん…。でもやっぱりこれは私の問題だから、成瀬君には関係は無いし、迷惑かけちゃう……。」

成瀬君は私が雇って私の所にもらってるんだから、あまり無理強いはさせたくない……。」

何を言ってるんだこの人は…。

「一人で…、何でも出来ると思わないでください。一人の力は限界があるんすから。確かに俺じゃ役不足かもしれない。でも雇われたからには手助けぐらいはするつもりなんですよ。」

そこまで言うともた何も返さなくなり、黙り込んでしまう夏美さん。こんな所を見てみると、この人はなんて子供のような人なんだと思ってしまう。

まるで小学生が誰にも助けを求めず、難しい宿題に一人立ち向かっている姿のようだ。

硬くなってしまった頭ではもう解けなくなつてるというのに、それでも一人で解こうとする。なんて悪循環…。

俺が思うに夏美さんは戦いにおいての技術だけ見れば『A+』なのに疑いはない。一度手合わせをしたからそれは間違いはない。

でも夏美さんは、あのリリィと名乗る姉さんの事となると実力に見合わないようなほど短絡的な思考になる。最良の選択が出来なくなるのだ。

その結果が大怪我をするという失敗に終わったのに、それでも間違いを改めない。

そんな夏美さんを見てみると苛立たしさと悲しみが湧いてくる。

「すみませんが俺には今の夏美さんが一人で何でも出来る風にも強そうにも思えません。現にそんなふうにはボロボロになってるし」

「…」

「そうやって黙り込んでやり過ぎそうしてるのも、まるで怒られてる子供じゃないですか」

すると突然、黙り込んでいた夏美さんは立ち上がってゆっくりと俺に近づいてくる。

そして手を振り上げて俺の頬を叩いた。乾いた音が降り続く雨の音にかき消される。俺自身は頬から頭に直接響いていくような感じがした。

「なんでもかんでも知った風な事言わないで！？ アナタに私が考えてる事が分かるって言うの?!」

今にも掴みかかってきそうな声を上げる夏美さん。でも傷を負っている為か、今まで言われていた分も合わせて俺に怒声を上げてくる。

俺はただ頬を押さえながら、何事もないように夏美さんを見つめ返す。

「分かるわけじゃないじゃないっすか。夏美さんの考えてる事なんて」

俺は苛立たしげに、ただそう告げる。

本当に分かる訳が無い。別に助けも要らないようなどうでもいい事を俺に頼り、大きな問題は自分でどうにかしようとするような人の考えなんて。

俺だつてこんな事言えるほど『人』として出来てるとは思わない。でもだからって夏美さんのような人を、何にも思わないような薄情者でもない。

「俺はただ、夏美さんの助けになりたい。ただそれだけなんですけどね」

俺は夏美さんを睨むように見ながら言った。その思いに嘘は無い。偽善と言われようが俺はなんとも思わない。

それでも何も言わない夏美さん。でも聞く耳は持たないといった様子は無いようだ。

でもそこまで言っていて自分が熱くなってることに気付く。柄にもなく熱くなった自分に呆れるように俺は溜息をついた。

「…すみません。俺みたいな奴が偉そうな事言って」

俺はそう言っただけで座った。それを見た夏美さんも少し離れた所に座る。

「…こっちこそ、ごめんなさい。つい熱くなっちゃって……」

ふと夏美さんが小さな声で言った。こっちを見ていないが申し訳なさそうなのその様子から、夏美さんも少し落ち着きを取り戻したように伺える。

俺はそれを見て安心した。

そしてそのまま俺は視線を街の方へ移す。そこには灯火のように暗闇に輝く街の灯り。止む様子の無い雨がそれを消そうとするかのようになり続いていた。

雨が降り続く街を私は成瀬の隣で眺めていた。
姉さんにやられた場所は成瀬の処置のおかげか、痛みは大分引いていた。

さっきまでの事を思い出す。成瀬に言われるだけ言われて、つい成瀬の事を叩いてしまった。しかも大人気なく言い返すなんて…。思い出すと年上としてなんて恥ずかしい姿を見せてしまったのだろう。少し後悔してしまう。

そしてその後と言われた言葉。

『俺はただ、夏美さんの助けになりたい』

きつとあのままだったら、私は一人で胸の辺りの激しい痛みと格闘していただろう。

でもそうはならなかった。成瀬が来てくれたから。その事には感謝するほかない。でも…、

「でもなんで、成瀬君は事務所で待つてなかったの？」

正直助けに来てくれた事は嬉しいと思う。でも別に成瀬はここに来なくてもいいはずだ。成瀬が「少ししたら帰ってくるだろう」と考えたのなら、きつとここには来なかったから。

それが私には不思議だった。

私の言葉を聞いた成瀬君は、腕を組んで考える。

「まあいろいろ言つといて、俺だけ何も言わないってのは平等じゃないっすね」

そう言って手を顎に当てて喋り始める。

「さっき言った事に嘘は無いですけど、一つ本当の事を言うと、俺一人で待つのが苦手なんすよ。それで居ても立ってもいられなくなっただけが理由ですし」

「どうして？」

私の言葉に言うのを躊躇ためらってしまった成瀬は、表情が曇る。でもそれを振り切るように首を振った。

「俺のせいで父さんと兄貴が死んだ時の事が…、ですかね」

成瀬は雨の降る景色を見つめながら答える。その姿にいつものような強かさはなく、歳相応の弱そうな一人の男の子の姿があった。初めてかもしれない成瀬のその姿。私は何も言わず、その姿を見つめながら次の言葉を待った。

「父さんが…、襲ってきた案件対象だった悪霊から俺を助けてくれて、兄貴は俺を連れてその場から離れました…」

無理をして俺を助けた父さんが怪我を負ったのを知ってた兄貴は、俺を安全な場所まで連れてきた後、父さんを心配して戻っていったんす…」

成瀬は悲しみとも怒りとも取れるような表情をしたまま語り続ける。

「でもその時、戻る前に俺を心配させまいと笑顔で兄貴が俺に言った言葉が…、『すぐ戻る。待ってるよ』でした…」

「…」

「俺は信じて待ちました。戻ってきて俺のこと叱ってくれるんだ、どんなに厳しく怒られても良い、って…。」

でも…、俺を迎えに来たのは父さんたちじゃなかった…。」

そこまで言って成瀬は苦笑いを浮かべる。

「それからですかね。誰かを待たつてのが嫌になったのは…。もともと自分のせいなんすけど…。」

私はなんだか成瀬がとても弱弱しく見えた。そしてさっきまでの私が、まるで悲劇の主人公を気取っていたような錯覚さえしてしまふ。

そう思うと自分がとても恥ずかしく感じてしまふ。

「…ごめんね？ そんな事話させちゃって」

「…いえ、勝手にいろいろと話ただけです。気にしないでください…。」

そこで私たちの会話は途切れ、ただ目の前の景色を眺めているだけだった。

「今タオル持ってきますね」

帰ってきた俺たちを見るなり、そう言って凜は洗面所のある方向へと走っていく。

その後、夏美さんが大分回復したのを見計らって、夏美さんの車があるところまで走って行って車に乗り込んで帰ってきた。もう濡れているのは最初からだし、開き直ったのだ。

そのせいでさすがに走った後、車の中で夏美さんはまた休憩したが…。

「おかえりなさい、お二人とも」

声がした方を見ると、頭に包帯を巻いたウインさんの姿が。

「どうしたの？ ウインったら」

そりや気になるよな。知った仲とはいえ、いきなりお邪魔していて、しかも頭には包帯を巻いているのを見たら。

「ああ、これはですね…」

でもウインさんの口から出た言葉は、俺を困惑させた。

「ちょっと杖で移動していたらバランスを崩してしまって。情け無いです」

ウインさんは頬を掻きながらそう言った。

あきらかに嘘だった。俺と一緒にだっただから意味が無い。何か言おうとするが、ウインさんは俺を視線で制する。ただ見られただけなのに、俺は何も言えなかった。

するとそれを知らない夏美さんは、猿も木から落ちるって所かしら、と少し驚きながら言っている。

「シャワーでも浴びると良いですよ？ そんなに濡れていては風邪を引いてしまいますし。僕やアナの事は気にしないでください」

「じゃあ、お言葉に甘えて。失礼するわ」

ウィンさんが夏美さんにシャワーを浴びるのを進め、夏美さんは進められるがままシャワーを浴びに行く。入れ違いで凜がタオルを持って事務所に現れた。

俺は夏美さんが見えなくなるなり、ウィンさんに問い詰める。

「どうして嘘をついたんすか？」

近寄るとウィンさんはさっきまでの笑みを消して、真剣な表情で俺と向かい合った。

「これは内密でお願いします。いいですか？」

「え？ あ、はい」

ウィンさんが何を考えているのか分からない俺は、ただ言つとおりには耳を傾ける。

「どうも夏美の今受けている案件が怪しいんです。というよりそもそも今考えればおかしい事ばかりだったんです」

「どうしてっすか？」

「考えてもみてください。確かに内密に案件を処理するのに『多数の行動は出来ない』というのは納得出来ません。でも今回の案件対

象、『リリイ』の戦闘レベルに対して『一人だけ』というのはおかしくありませんか？ 普通僕だったらこの案件に最低でもAランクを二・三人は配属させますよ」

ウィンさんが言いたい事がだんだん分かってくる。

そう言われればそうだ。いくら対象が一人だとしても、それに対してあのリリイ相手に一人で処理に臨むというのは非効率的、いや、自殺行為だといえる。まして対象がその身内だった者を配属させるなんて非常識すぎる。任せるにしても誰かをパートナーとして一緒に就けなくちゃおかしい。

噂では日本のどこかで行われてると聞いた案件処理に、四人ほどAランクの退魔士を配属していると聞いた事があった。対象がどれだけの強さのレベルだかは知らないが、俺なんかに詳細が分からないようにきつとかなりのものだろう。だからこそ万全を期すため、腕の良い退魔士を揃える。

それを例に考えれば異例中の異例といえる。

「まだ断定は出来ないんで、僕はなんとも言えませんが」

そこまで言っただけでウィンさんはまたいつもの笑顔になった。

「まあまだ僕の勝手な想像です。気にせずいてください。ただ…」

「ただ？」

「夏美には内緒で。今はさすがにこれを言わない方がいいと思いますし」

俺はその提案には同意だ。

今の夏美さんでは頭の中の許容範囲を超えてしまいかもしれない。

ただでさえあのリリースのことです。いっばいっばいなのに、これを聞いたらどうなるか分からない。

「分かりました。でもそれじゃあこれからどうしますか？」

「まあ君は今までどおりで良いですよ。こっちは僕が受け持ちます。帰国ついでに退魔士協会にお邪魔しますから」

「いいんですか？」

そう言つと、はい、とウインさんは答えてくれた。もしかして俺ではさすがにもう手が出せない事なのだろうか。俺は何も出来ないように歯痒くも感じていた。

「あの…、何話してるんですか？」

そこに横から声をかけてくる凧。いたのを忘れてしまっていた。するとウインさんが答える。

「何でもありませんよ。ただの世間話です」

ウインさんに凧はそう言われると、はあ、と不思議そうな顔をす
る。

その横で俺は、面倒な事にならなきゃいいけど、と不安になって
いた。

第五楽章『趣意【シユイ】』 13 (後書き)

区切りが見つからずあせりました。

この楽章を終わらせる事で、ようやく半分に差し掛かりました。

これからが大変そうだ……。うん……。

? ?

はあ…。久しぶりに連絡があったから嫌な予感したけど、やっぱり変な事に首突っ込んでるし。

それでいつも俺が貧乏くじ引くんだよ…。まあ全部が全部嫌って訳じゃないけど…。

俺は椅子に座り机に肘をついて手に顎を乗せている。俺から少し前に離れた場所には、椅子に座っている女性がいた。その女性は拘束服を着て身動きが取れないでいる。

顔を下に向けて何もしようとはしない。抵抗もしなければ話をするでもない。こんな状態の奴から何を聞けばいいのだろうか。

「だんまりなのはこっちもキツイぜ」

こうやって呟いてみても、やはり俺の言葉に何も返してくれない。何回目だろうか…。この繰り返し…。

しかもずつと下を向いて何をしているのかと思えば、ぶつぶつと何かを呟いていた。耳を傾ければ…、

「全ては大義のため。全ては大義のため。全ては…。」

はつきり言って怖い。何かにとりつかれたようなその姿に俺はちよつと引いてしまう。

手元に置いてある資料に視線を移した。何枚も原稿資料や写真があり、その中には女性が身につけていたライダースーツの写真があった。全体を写した一枚のほかにもう一枚。

胸の辺りに付けてあったエンブレムが写真いっぱいに写されている

た。

「まあこんな風になる奴が出てくるとしたら納得だけど……。やっぱり噂どおりのところなのかな」

そう言いながら女性の事を見る。相変わらず同じ事をずっと呟いている女性。

近づいていき俺は溜息をつく。そして思わず笑ってしまっ。なんだかんだ言っ、この貧乏くじを嬉しいとも思っている俺がいた。

「さて……。これ以上口で聞いてもダメなら……」

腕の裾を捲くり、そつと女性の頭に色んな紋様が刻まれている手乗せる。女性は気にするような動作も何も無い。

今からやるのはここで俺にしか出来ない事。

「頭の中に直接聞いちゃいますか」

組織長が帰ってくるまでにどうにか情報を探れば良いけど。

そう考えながら俺は『記憶捜査』をする為に、目を瞑り手に意識を集中させていった。

「それじゃあアイツはウインさんのところに？」

「はい、信用する仲間が一番と思ひまして。退魔士協会にお願いするのも考えましたが、この案件の事を考えると、もしかしたら思ひますし。」

何も喋らなくても聞きだせる人間が僕の仲間ですから」

それもそうだ。こんな案件を協会に出させてしまふようなのが裏にいるんだ。

ここであの女性を引き渡したりしてしまつたら、無かつた事にされてしまふのは大いにありえる。

それにしても…、聞きだすことが出来る人間って……。一体どういふ人なのか気になつたが、さすがに聞くのは気が引けて、そうですか、と言うだけだった。

「すみません。私そろそろ帰りますね」

そう言つて席を立つ凜。雨が弱まってくるのをずっと待つてたようで、外を見るとやっと傘を差して歩いて大丈夫なくらいになつていた。

凜はソファーに寝せているルリちゃんをそつと起こそうとするが、気持ちよさそうな寝顔を見てか優しく掌に乗せて上からハンカチをかけてあげていた。

「よく寝入つてるみたいだな」

「うん。あれだけ泣いてたらね」

凜はそう言いながらルリの事を優しく撫でていた。

「ん？　なんで泣いてたんだ？」

「え、あ、いや、なんでもない」

俺が気になった事を聞くと、慌てて誤魔化す凜。

俺は怪しいと疑いの目を向けていると、逃げるように事務所の出入り口のほうへ。

「じゃ、じゃあまた明日。よろしくね、成瀬君」

凜はそう言い残すなりそそくさと出て行ってしまつ。俺は返事も出来ず、俺は苦笑いをうかべるだけだった。

向かいに座っていたウインさんも、なんだったんでしようね？、と笑っている。

その横でウインさんに寄り掛かりながら寝ているアンナさん。来る度によく寝てるなあ。いつもなにかしらやってくれるから、仕方ないか。

「そういえば成瀬君。聞きそびれてしまつたんですが、あの子の様子はどうですか？」

「凜の事ですか？」

ハイ、と答えるウインさんを見て思わず気まずい顔をしてしまつ。

そういえば話を聞く限り、凜の様子はあまり良いとは言えない。

いや、「あまり」ではなく「かなり」と言った方が正しいだろう。

しかもそんな様子で薙刀を教える俺…。そう考えるとちよつと言いつらい。

「その反応は分かりやすいですね」

「あ、いや…。すみません」

「いえ、謝らないでいいですよ。僕もこの短期間じゃ無理だとは分かってますから。でも少しは出来そうな様子は見られるんじゃないですか？」

その言葉にますます何も言えなくなる。

「その様子も無いとしたらちょっと考えなきゃなりませんね」

「考えると言うのは？」

うーん、と唸るウインさん。

そんなに言いづらい事なんだろうか。

「それはですね…」

そう言ってウインさんが話してくれた。それに俺は賛成も反対も出来ない。

これは凜とルリ二人で相談するべきだと思ったから。

ゆらゆらと心地良い揺れに、私は身を委ねていた。

耳に届くのは雨の音。そして伝わってくるのは温もり。心臓の音も小さく聞こえていた。

私はこの心地よさに懐かしさを感じていた。
それはいつだっただろう。

確かケガをした私を助けてくれたウィン様について行ってお世話になり始めの頃だ。

私はまだケガが治りきつてないのに近くの森に行った時だった。
薬草を摘んだり散歩をしたりしていたら、いつの間にか日が暮れていて…。

無理して上空に行ってもあまり飛べないし、気付かないうちに結構深くまで来てしまったてたようで辺りが暗くて分からなくて…。

私は不安でいっぱいになって泣いてた。もしかしたらここで一人寂しく死んじゃうんじゃないかとも思っていた。そんなはず無いのに。

でもその時、助けに来てくれたのはウィン様だった。

ヨロヨロと飛びながらウィン様に寄っていくと、泣いている私を優しく抱きしめてくれた。

そんな風に昔の事を思い出しながら私はゆっくりと目を開けていく。

なかなか目の焦点が合わず、どこを見ているのか分からない。少しずつ合っていく焦点が、今私が何を見ているのかを知らせてくれた。

それは誰かの輪郭。私は思わず、

「ウィン…、様…?」

すると丁度私の目の焦点が合い、それは違うと言っ事が分かった。私の声に気付いたのか、こちらに顔を向ける。

「あ、起きちゃった? ごめんね、眠ってたのに」

凜は私に微笑みながら申し訳なさそうにそう言った。
そこでやっと私が凜に抱えられてる事に気付く。慌てて私は起き
上がった。

「す、すみません！ 私寝ちゃって」

なんて事だろう。私は凜を守らないといけないのに、それをせず
にまして眠ってしまうなんて。

どれくらい寝てたんだろう。ほとんど憶えてない。ただ泣きすぎ
ていつの間にか寝ちゃった事は憶えていた。

思い出すと少し恥ずかしい。

「ううん、気にしないでいいよ。ルリちゃん。いつも私の方がお世
話になってるんだし」

「そう言ってくれるのは嬉しいですが、いつ危険な目に会うか分か
らないので、私がこんな風にしてたら危ないじゃないですか」

私がそう言うと、凜は、あ、それもそうだね、と言うものだから
私は苦笑いを浮かべる。

「でも、その時は私がルリちゃんを守る為に全力で逃げるよ。私だ
って何もしないで死んじゃうのなんて嫌だしね」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

どういたしまして、と凜は言っただけ前を見て歩いていく。

私は凜に抱えられたまま凜の顔を見つめていた。

こうやって暮らしていると、凜がどれだけ優しい人なのかが分か

る。

いつでも自分よりも相手の事を気にかけて、誰にでも普通に接していて、自然と周りを明るくするような温かい人。

私がかつちに来て最初の頃は寂しいって思った事もあった。でもそんな私を勇気付けてくれたのは凜だった。

私は妖精で、ウイン様のような人以外にこれだけ普通に接してくれたのは初めてだった。しかも凜は魔術師でもなければ退魔士でもない。私のような存在と関わる事なんてほとんどありえない一般人。凜のそんな優しさが私には嬉しかった。こんな風にウイン様のような人以外の人とふれ合えるなんて考えた事もなかったから。

そんな凜に私は…。

「ルリちゃん、どうしたの？」

「え？ あ！ いや、なんでもありません」

いつの間にか私の視線に気付いていた凜が私に声をかけてくるものだから、思わず口ごもってしまう。

そんな私の様子に不思議そうな顔をしながら、変なルリちゃん、と凜は微笑みながら言う。それを見て顔を赤くする私。自分でもすごく赤くなってるのが分かるぐらい顔が熱い。

降り続く雨が冷やしてるか、空気が火照った私の顔に心地よい。

凜に抱えられ、共に帰る雨の中。私はさっき自分が思った事を何度か思い返していた。

く 間奏曲 2 く

「はあ…」

これで今日溜息をついたのは何回目だろう。帰ってきてからこれの繰り返しだ。

そんな私の頭に浮かぶのは、お姉ちゃんを追っていったときの帰り道で起きた出来事だった。

路地裏を走り続け、もうすぐ通りに出してしまう。

「やっぱりもう無理か…。見事に逃げられちゃった」

お姉ちゃんの事を追って路地裏に入っていく、絶対に逃げられないと思っていたのだけど不覚をとってしまい逃げられてしまった。

悔しい。まさか私がお姉ちゃんに撒かれてしまつとは考えていなかった。運動神経では絶対に私の方が良いと思っていたから。

……自惚れだろうか。

でも今考えると不思議だ。何であの時後ろから追って行った私と会わなかったんだろう。

だって通り道はあの一つ。それなら追っていた私と鉢合わせなければおかしい。

ただ、一つだけ私と会わずにUターンしてくる方法はある。

「上…、から…?」

という事は飛んでいったって事になる、って自分で考えてお
かしくなってしまう。子供の発想じゃないか。

自分の発想に苦笑いを浮かべてしまう。

「はあ…、もうお姉ちゃんどこ行っただか分からないし、帰るしかな
いか」

お姉ちゃんに追いつけないのなら、もう帰るだけだ。私は通りに
出ると家の方向へと足を向けた。

するとあるモノに目が止まり、足も止めてしまう。

通りの反対の方に二台のバイクが止まっているのが見えた。一つ
は赤い色のバイク。もう一つは黒い色のバイク。種類とかは分から
ないけど、見た感じ高そうに見える。

その側にはバイクと同じカラーのライダースーツと言われるのを
着ている二人組が話していた。

どちらも同じぐらいの背だけど身体のラインがはっきりしている
為、赤の方が女性、黒の方が男性と分かった。

「カップルでツーリングか…。お熱いことで」

そう聞こえるはず無い冷やかしを言いながら、私は家へと向かい
また歩き出す。

まったく、ああいう人たちがいると言うのに私は何やってるんだ
か…。そんな事を考えながら歩いていると、

「きゃー！」

「うわっ！」

完璧に不注意だった。歩き出した瞬間に何かとぶつかってしまった。
尻餅をつきながら見てみると、前には荷物を持った男の人が同じ

ような体勢でいた。

「どこ見て歩いてんだ？」

口調や格好を見た限りでは不良とかの類ではないみたいだ。でもなんだか偉そうだ。

そんな事普段だったら思ってなくても、すみません、と言ってやり過ぎすのだけど、お姉ちゃんに逃げられたというのもあって不機嫌な私はカチンときてしまう。

「アンタも前見てれば私の事避けられたじゃない。私のせいだけじゃないでしょ？」

なんとなく私が言った言葉にムスツとした表情になる男。そのまま立ち上がって手を差し出してきた。納得しないながら悪いと思っただろうか。

でも私はその心がけを無視するようにすぐその手を払った。一瞬、え？、というような顔をする男。

そんな事をよそに私は立ち上がる。そしてすぐ男に体を向けて、男を見据えながら腕を少し上げて空手のときのような構えをする。

「ちょっと今機嫌悪くてね。女だからってなめてたら怪我するからね」

何をしてるんだろう私は…。私は不良か…。でも言ってしまった手前、後には引けなくなっていた。

でも男の方は微動だにしない。全然困っている様子も何も無かった。どうもなめられているようだ。

そう私が考えた瞬間、荷物を置いて男はゆっくりと私に向かってくる。

怖くないととれる表情で男が私に向かってくるものだから、カチンときた私は男に向かつて『突き』を放った。そんなつもりはなかったのにやってしまった。言い訳がましいけど。

だけどそんな事は関係なかった。

男はそれを軽く手を添えるような所作で軌道をそらされ、そのまま難く避けてしまったのだ。その反応に驚いた私は動きが止まってしまう。すると私に向かつて男は手を出してくる。

その手が私の顔の方に向かつてきたので、やられる、と覚悟して目を瞑る。

でもその手は私の顔に放たれる事はなかった。

「これ、ゴミがついてる」

男の人の声が聞こえ、私は目を開けた。目の前には男の手があつて、その手には紙くずのようなゴミが摘つままれていた。どうやら頭に付いていたものようだ。

「女だったら身だしなみはちゃんとしろよ？ その服とかも。可愛いものにもつたいないぜ？」

男がそう言つて私の体を指差してきた。言われた言葉に反応して恥ずかしさで顔が熱くなつてしまった。

恥ずかしい思いで咄嗟に下段蹴りを繰り出す。でもそれはまたも不発に終わってしまう。

避けづらい下段をいとも簡単に、しかも完璧なタイミングでバックステップでだ。今まで空手をやってきて初めての体験だ。普通なら自ら脚で受け流してダメージを軽減させるのに。

私は棒立ちになってしまった。

「筋は良いけど攻撃が直線的過ぎ。手が読まれやすいから気をつけな」

そう言いながら地面に置いた荷物を拾い、通り過ぎていく。私はそれをただ見送る事しか出来なかった。

「なんなのよ、あいつ…」

私はムスツとしながら膝を抱えて座り眩く。そして何事もなく去っていったあの男を思い浮かべていた。

私の『突き』も『蹴り』も難なく避け、去っていく男は後ろで長く伸ばした髪を細長い布のような物で結んでいた。

見た感じ、私なんかよりずっと弱いように見えた。なのに私を小さい子供のようにあしらわれてしまった。それが不思議でしようがない。

「…それにしても」

一層膝を抱え顔をうずめる私。思い出すのはあの言葉…。

『女だったら身だしなみはちゃんとしろよ？ その服とかも。可愛いものにもったいないぜ？』

きっとあの男の人にとってはなんて事無い一言だったんだろう。でも私はある部分が残った。頭の中に残っていた。

「『可愛い』…、か……」

口に出してみても途端に恥ずかしくて赤くなる顔。

今まで異性からそんな事言われたことがなかった私。どうしてもそんななんて事無い一言に反応してしまふ。

って、こんな女の子っぽい私には似合わないって…。私はそう自分で自分の事を笑ってしまう。

そしてそのままソファーに横になる。

「何者だったのかな、アイツ…」

私は天井を見つめながら、またあの男の事を考えていた。

「ねえ、真理はどうしたの？」

今私はお母さんに連れてかれ物陰に隠れている。帰ってきたら急にお母さんが来て私を連れてきたのだ。

見ているのはソファーの所にいる真理。なにやらブツブツと呟いている。

妹のこんな姿を見たことが無い私はお母さんに聞いてみる。

「わからん。なんや昼間帰ってきたと思ったら、ずっとあんな感じなんよ」

どうもお母さんも訳が分からず困っているよう。

この間にも膝を抱えたり、急に笑ってみたりと意味不明で……。なんなんだろう……。

私とお母さんはただただ様子を見守るばかりだった。

? ?

黒いライダースーツを着た男は、携帯に向かい淡々と事の次第を告げるだけだった。

「ミランは残念ながら連れ去られてしまいました。応戦したようですが、どうも相手は『神童』と呼ばれたあの『ウィン・ウエストコット』だったようで……。私では相手にならないと判断し、手を出せませんでした。何故そのような者がいたのかは分かりませんが……」

口調こそ柔らかいものだが携帯を持つ手と逆の手は、その口調とは真逆の状態で拳が作られている。それによって革独特の、ギョウ、という音がしている。

しばらく話し、通話を切って携帯をポケットにしまう。

「見捨てる……。か……」

呟いたと同時に男は止めてあったバイクのシートを叩いた。

「いや、これも大義の為なんだ……」

その声には悔しさや歯痒さといった感情が伝わってくるよう。

一旦深呼吸をした男は、ヘルメットをかぶりバイクに跨る。

勢いよくスタートをきるバイクは、雨を切り裂くように夜の街へと走り去っていった。

く間奏曲 2 く（後書き）

どうもお久しぶりです。

待っていてくれた方々にはこの約1ヶ月お休みしてしまいスイマセンでした。

私事ではありましたが、ここところ深夜帰宅が続いてしまって、最初のうちは昼の1時間で書いてたりもしたんですが、何がなんだか分からなくなり…。

最終的に無理しすぎて倒れてしまっんですから何をしているんだか……。

…ああ、変な事いってしまいました。それに言い訳みたいになってスイマセン。

これから少しずつ書いていくんでよろしくお願いします。

第六楽章 『twilight【タソガレドキ】』 1

空に夕闇が覆い始め、暗闇に染まり始める教室に一人の少女がいた。

本を読むでも、予習復習をしているわけでもない。ただ窓の外を見て立っていた。

・・・私は…、この景色が大好きだ。

この窓から見える街全てがオレンジ色に染まり、少しずつ夜の暗さを帯び始めている。それを少女は窓にそっと手を触れながら見つめていた。

外の下の方に見えるのは帰りを急ぐ少女と同じくらいの女生徒たち。すると早く帰るようにと促す放送が流れ始め、教室の外が騒がしくなる。

それなのに少女は窓の外を見つめたまま動かない。

・・・なのに、この景色を私は奪われてしまう……

「おゝい、もう下校時刻だぞ。何をしてるんだ？」

ふと声がして我に返った少女はそちらを見る。そこには教師の姿が。

少女は慌ててバックを手に取り、失礼しました、と言いながら教室を出ていく。

後ろから教師が呼び止めようと声をかけているのだが、少女は早足でそこから逃げるように去っていった。

・・・なんで私からあの景色を奪うの？

私はカバンを持つ手を見ながら少し溜息をつく。
その手には痛々しいほどテーピングが巻かれていて、今までの私では絶対にならないような姿だった。

「凜、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫。…まあ結構痛いけど」

ルリちゃんに心配そうに声をかけられ笑いながら返す。でも本当の事を言うと結構体のほうが全体的に辛い状態だ。今も早朝の練習に行ってきた帰りで、体が軋むように痛い。

この状態で学校に行って大丈夫なのだろうか…、と自分で自分の事を心配してみたり。

そんな私に気付いているのか、ルリちゃんの眼差しは依然として心配しているように見えた。

「あ、リンリン〜ン！」

突然聞きなれた声が聞こえてくる。そして振り返る間もなく襲ってくる体への衝撃。

きつとそれ程強い力ではない。でも…、

「いった〜い!?!」

そう叫びながら腰が抜けたように崩れていく私。
道路にへたり込んで衝撃がした方に涙目になりながら顔を向けると、そこには雅ちゃんの姿があった。

「…あれ？ リンリン、どうしたの？」

私の様子に困惑している雅ちゃん。私はなんとかゆっくりと立ち上がり、そしてスカートに付いている汚れを払った。

やっぱり結構体が悲鳴を上げている。抱きつかれたぐらいでこんなになっちゃうなんて。

それでも、なんでもないから気にしないで、と慌てて言いながら私が汚れを払っていると、雅ちゃんがカバンを落とした。

私は不思議に思いながら顔を上げると、雅ちゃんが口に手を押さえて、信じられないといった表情で私のほうを見ていた。視線を追うと、テーピングを巻いている手に向けられている。

「あ…、えっと、雅ちゃん。どうしたの？」

まずいと思いながら手を背に隠し、雅ちゃんになんでもないように後ずさりながら尋ねた。

でもそれは通じなかったようで、近づいてきた雅ちゃんが後ずさる私の両肩を素早く掴み動くのを封じられてしまう。

こうなっては私には何も出来ない。でも変に思われたくない、無理に微笑みながら、ねえ、どうしたの？、と尋ねてみるのだけど、雅ちゃんは逃がさないといった表情だ。

「その手どうしたの?! 何かあったの?!」

興奮したような口調で言いながら、私の腕を前に引っ張り出し、

掌を掴まれる。

その掴まれた手に伝わるぐらい雅ちゃんの手が震えている。

「ああ…、私の、リンリンの透き通るように綺麗な白い手が、き、傷物に！」

この世の終わりのようにそんな事を叫ぶ雅ちゃん。…雅ちゃん、私の手は私のものです。

なおも涙目になりながら私の手を離さない雅ちゃんだったけど、突然誰かが私と雅ちゃんを引き離れた。

「雅。アンタ大概にしなさいよ？ 近所迷惑よ」

「あ、おはよう。歩美^{あゆみ}ちゃん」

私の挨拶に暴れる雅ちゃんを捕まえながら、おはようさん、と返すのは友達の「近藤 歩美」ちゃんだった。すらっと背の高い歩美ちゃんはどこか落ちて着いていて、どこかお母さんの雰囲気をかもしだしている。一度『あゆママ』なんてあだ名が付いたくらいだ。本人は「私、そんなに歳とって見えるの…」と落ち込んでいたけど…。

「放しなさいよ、あゆつち。リンリンの手があんな事になってるのよ？ 一大事だわ！ 寂しいのは分かるけどあなたの相手はもう少ししたらしてあげるから、今は待って…」

「別にそんなのいいわよ！ ていうか一大事って…。だからって凧に触らなくてもいいでしょ？」

「触診よ！ 触ってみなくちゃ分からない事もあるで…」

「あんたに何が分かるっていつのよ!」

歩美ちゃんは叫びながら雅ちゃんの頭を叩いた。叩かれた雅ちゃんは、キャン、と言いながら膝から崩れていき、地面に突っ伏してしまふ。

「ありやりや、あゆママ」。いつも思うけどやりすぎじゃないの? それ」

「きゃ! びつくりした。すみれちゃん。お、おはよう」

いつの間にいたのか私のすぐ側にいるのは、中学生、いや、それよりも幼く見えるような女の子が。

それはよく歩美ちゃんと一緒にいる「原田 すみれ」ちゃんだった。ツインテールが印象的で、それが余計に幼さを際立たせている。確かいつも二人が一緒にいるせいか、すみれちゃんが歩美ちゃんの子供なんじゃないかという噂が出回ってしまふほどだ。それを聞いて歩美ちゃんが落ち込んで、すみれちゃんが照れながら怒ってたけど。

「いいのよ、すみれ。こいつはこれぐらいやらなきゃ反省し……」

そこまで言っただけ歩美ちゃんは言葉を止め、雅ちゃんを見た。

その雅ちゃんはいつの間にかうつ伏せの状態ではなく仰向けの状態だった。そしてなんだか気味の悪い笑みを浮かべている。

「ナイスアングル! あゆっち、アンタ意外と可愛い趣味してんじゃない。そのパン……」

「いい加減しろ！」

叫びながら踏みつけようとする歩美ちゃん。それを察知して素早く起き上がり避ける雅ちゃん。

「危ないなあ。女の子がそんな事するもんじゃないでしょ？」

「うるさい。この変態」

その後もしばらく言いあいが続き、私とすみれちゃんは苦笑いを浮かべながら見つめていた。

すると胸ポケットにいたルリちゃんが顔を出す。

「いつもながら仲の良い友人方ですね？」

「そう、なのかな？」

鐘の音を聞きながら、私たち四人は教室へと駆け込む。

あのあと結構時間が経ってしまったようで、いつの間にか遅刻ぎりぎりになっていた。

私は体の痛みを我慢してなんとか三人に付いて行った。なんとか学校に着いたけど、体中が軋む感覚だ。

「もう！ あゆっちのせいで遅刻する所だったじゃない」

「私だけのせいじゃないでしょ?!」

ようやく学校に辿りついたと言うのに、まだ二人は言い合いを続

けていた。よくそれだけ言い合えるなあ。

私とすみれちゃんはそれを横目に自分達の席に着いた。私とすみれちゃんの席は隣同士でそれが縁で仲良くなったのもある。

失礼だけど二年になってクラス替えがあり、初めて隣に座ったすみれちゃんを見て、あれ？、と思った。どうみても同じ歳の子とは思えなかったから。

すると隣に座っていたすみれちゃんがこちらを見る。

「それにしても凜ちゃんの手、どしたの？」

「え？ あ、これは……」

すみれちゃんに聞かれ、なんと答えればいいのかと考えてしまう。変に勘ぐられても面倒になるかもしれないし、かと言って正直に何もかも話すと言うわけにもいかないし……。私は少し考える。

しばらくして一応考えがまとまり、私は口を開いた。

「ちょっとね、太ってきたみたいだから運動してるの。それで知り合いの人と一緒にやってるんだけど、その人が薙刀すずりでの運動を勧めてきてね。それがこの有様で……」

「へえ、薙刀ねえ。なんか古風だね。でもなんか凜ちゃんのイメージにぴったりかも」

ちょっと苦しい言い訳に聞こえるけど、一応信じてもらえたみたいだ。ホッと胸を撫で下ろす。

ダイエツトと言うのは嘘だけど、薙刀をやって手がこつなつたと言つのは本当だ。これぐらいだったら言っても大丈夫だろう。

するとそれをいつの間にか聞いていたのか、歩美ちゃんと雅ちゃんが割って入ってくる。

「あの運動音痴の凜がねえ…。でもそんなに気になるほど太ってるようには見えないけど」

「ねえ…、その知り合いの人って女の人、だよな」

ちょっと疑問に思っているような口ぶりの歩美ちゃん。やっぱり少し無茶があっただろうか。

そして雅ちゃんは何か一緒にやっってる人について聞いてくる。

「ううん、違うよ雅ちゃん。薙刀ってイメージは女の人っぽいけど、年下の男の子に教わってる……」

「リンリン！ アンタ男なんかと…」

私が言うと、言葉を切るように叫ぶ雅ちゃんは私の両肩を握り手を震えさせている。いきなりの事に何がなんだか分からない。私は助けを求めるようにすみれちゃんと歩美ちゃんに視線を向けるが、すみれちゃんはニヤニヤして、歩美ちゃんは顎に手をやって何か感心するような表情をしている。

私は二人の助けは期待できないと分かり、自分でどうにかするべく、雅ちゃんの肩を握り返す。

「み、雅ちゃん。なんか、その、何か変に考えてない？」

私は微笑みながら言うのだけど雅ちゃんは私の肩を放す様子はない。

「私のリンリン…。いつの間に男なんかと……」

「健全で何よりだ。それよりも私はお前が心配だよ。永倉」

突然入り込んできた声。それに反応する間もなく後ろ襟を掴まれてしまい、グエー！、っと変な声を出してしまう雅ちゃん。

その雅ちゃんを掴んでいるのは、眼鏡をかけスーツを着ていて、その上に白衣を纏っているボサボサ頭の女性。表情はどこか気だるそうな女性は…、

「ええっと、山川先生。おはようございます」

ああ、おはよう、と返すのは言ったとおり、私たちの担任でもある山川 翠先生^{みどり}であった。

湧「あれ？ 夏美さん」

夏「どうしたの？ 成瀬君」

湧「もしかして俺達、置いてきぼりな感じっすか？ 主人公格なのに…」

夏「うふふ。そうみたい。なんか誰かさんのリハビリも兼ねてとか…」

湧「個人的な事情ですか…」

作「すいません…。番外的なモノとして書くつもりを書いてしま
います。少しだけお許しく下さい」

朝はいろいろと騒がしかったけど、その後はいつもどおりに過ごしていき、ようやくお昼の休み時間になった。でも途中途中休憩時間になると雅ちゃんがやって来て、何度も私の事を聞いてきていた。

「リンリンをたぶらかしているのは誰?!」とか「男なんかに毒されちゃダメよ!?!」なんてずっと大声で言ってるものだから、クラス中が私の事を気にしだし、しかも噂話を始めているよう。有らぬ噂を立てられては困るんだけど…。

そう考えながら溜息をつくとき、ポケットにいるルリちゃんが苦笑いを浮かべながら顔を出す。

「大変そうですね? 凜」

「あはは、まあね。でもこのままだといけないから、話がこじれる前にどうにかしないと…」

そうは言うものの、どうすれば良いのかよく分からない。私がこれ以上何か言っても、あの様子だとどうする事も出来なそうだ。だからといって何もしないわけにもいかないし…。

私が悩んでいると歩美ちゃんたちがやって来た。見ると歩美ちゃんの前にはグツタリしている雅ちゃんが抱えられている。

「凜、あまり気にしないで大丈夫よ。こいつは一応私がこうしていたから」

そう言って手放された雅ちゃんは、崩れ落ちるように私の前の席に座る。そして机に突っ伏して『の』の字を書きながら泣いていた。

「だってだって…、リンリンに男が出来たらと思うと悲しいんだもん……」

「アンタはホントに…」

雅ちゃんの言葉を聞き、歩美ちゃんはやれやれといった様子で首を振る。

するとすみれちゃんと歩美ちゃんは近くの席から椅子を持ってきて、私の席に集まる。手にはそれぞれ昼食を持っていた。

すみれちゃんは小さい子が持つようなピンクの可愛い小さい弁当箱、歩美ちゃんは女の子では珍しいと思う二段重ねのお弁当。でもそれが二人のイメージにピッタリに思える。

いつもお昼は誰かの席に集まって食べるのが私たちのなかの決まり。とは言っても、今日はそっちで食べよう、とか何も言わずに誰かの席に集まっているのだ。

「でもさ、みやびん。これから先もしかしたら離れ離れになるかもしれないよ？ 進学して違う大学に行く事になったらどうするの？」

「それもそうだ。このままいつまでも凜と一緒に、って訳にもいかないからな？」

二人がそれぞれ言うと、それを聞いていた雅ちゃんがますます落ち込んでしまう。

悲しい事だけどそれもそうなんだろう。もう私たちは高校二年生来年になればもう進路について決断する時が来てしまう。進学するのか、それとも社会に出て働き始めるのか。はたまた難しいかもしれないけどどこかの家に嫁いで行くのか。最後のは相手がいればだけど…。

形はどうであれみんながみんなそれぞれの道を歩き始める事にな

る。そうならば二人の言うとおりいつも一緒っていうのは難しくなる。

なんかそんな事考えると、事実なんだとしても寂しいなあ。

「そんなの寂しいよ。でもいいもん！ 少しでも長くリンリンといるためにリンリンと同じ所に行くもん！」

なんて言う雅ちゃん。なんて事を言うんだらう。自分のこれからの将来だと言うのにそんな簡単に決めてしまうなんて…。

そんな事を考えながら苦笑いを浮かべていると、雅ちゃんの後ろの方から山川先生が近づいてきてるのが見えた。その顔はいつもどおりの無表情だ。そして…、

「おい。ナメたこと言ってるんじゃないよお前は」

そう言って持っていた学級日誌を振り落とす。しかも縦で。

それ程力を入れて落とさなかったけど、気持ち良いほど見事な音をさせた。叩かれた雅ちゃんは頭を押さえ、痛いよ！、とさつきまでとは別の泣き声を出す。

雅ちゃんは今日はどうやら厄日のようだ。

「お前らは仲が良いねえ。いつも一緒に」

ガガガッと椅子を私たちのいる所まで引いてきて輪の中に混じると、不意をつかれ私のお弁当から玉子焼きを摘んで取られてしまう。…ああ、最後に食べようと思ったのに。

「すまないね。美味しそうだから、つい…」

私の気持ちを察してか、食べてすぐに私に申し訳なさそうに微笑

みながら謝る。でもさすがにその理由で人のものを取るのはいけないんじゃないか。とは言ってももう玉子焼きは帰ってこないけど…。それにしても先生がお昼休みに教室に来るなんて珍しい。どうしたんだろつか？

「先生どうしたんですか？ こんな時間に」

歩美ちゃんも同じ事を思っていたようで先生に質問する。それを聞いて先生は、うん、と言いながら机に肘をついて手に顎を乗せる。

「ちょっと気になる事があってね。聞いてくれないか？」

そう言った先生に私たち四人の視線が集まった。

「椎名 香奈は知ってるな？」

「え、ハイ、それは…。知ってるも何も同じクラスの子なんですから当たり前じゃないですか。今は教室にいないですけど。でもそれで椎名さんがどうしたんですか？」

「いやあね、と言って背もたれに体を預け、腕を組む。

「昨日下校時間の時に私が見回りをしたんだが、一人でこの教室にいてね。外を見つめてジツとしていたんだ。どうも何か思いつめるような表情で、話を聞こうと声をかけたんだが無視されてしまったよ。

でも気になったら何かしなくちゃいられない性質たぢでね。それで前達に話を聞きに来たって事さ。こういう事は教師である私より、同じ生徒達に、と思ってるね」

そこまで言って、ふう、と溜息をつきながら肩を落とす。

椎名、香奈ちゃん…。確かにこの頃ずっと元気が無いのは知っていた。その子とは1年の時も同じクラスだったので面識はある。でもその時は今は違って明るい人だった。そしていつも周りに友達たちがいて笑いあって話していたのを憶えている。

それが2年生になってからは面影が無いほど無口になってしまった。そのせいかいつも一緒にいた人たちはどんどんと離れていった。私も何度か話かけたりもしたけど、言葉少なに返事するぐらいだった。

後で知った事だけど、聞いた話では仲の良かった従姉妹いとこが亡くなったと言う。どうして死んだのかは分からない。病死だったのかもしれないし、もしかしたら他の事で…。

でもそれが今の原因なのかはわからない。一因であるかもしれないけど。

「うん。すみませんけど私たちも詳しくは知らないですね。力になれなくてすみません」

歩美ちゃんがそう言つと、そうか、と言って下を向いて落ち込んだような表情をする。

ちよつと悪い気がする。なにかしら力になれば良いんだけど。

「まあ気にするな。食事時にこんな事聞ってる私のほうが悪いんだ。でも聞いてもらったついでに頼みたい事もあるんだが…」

「はい？」

「その椎名に何でもいいから話しかけてやってもらえないか？ 少しでも元気付けてやったりしてもらえれば何か変わるんじゃないか

って思うんだ」

「はい。それぐらい全然良いですよ。私たち同じクラスメイトなん
ですもん。ねえ？」

そういう歩美ちゃんの言葉に私たちは頷いて返す。
すると少し微笑んだ先生は、心強いな、と言って立ち上がる。す
ると、

「そうだ。桜井ちよつといいか？」

「え、私ですか？」

ああ、と先生は言って歩き出してしまふ。

私は訳が分からないまま先生の後を追っていった。

凜の胸ポケットにいる私は、そこから見える景色を眺めて今どの
辺りにいるのかを考えていた。

見た感じだとさっきいた建物とは別の場所のよう。凜に聞いてみ
ると、化学などの実験や調理実習などを行う場所がある所みたい。
実験って何をやるんだろ…。怖いことだろうか。

そんな事を考えているうちに目的の場所についたようで、前を歩
いていた先生と呼ばれる女性がある扉の前で立ち止まる。

「じゃあ入ってくれ。私もいるんだから許可は別にいらんだろう」

そう言って頭をポリポリと掻きながら入っていく。

中にはいろいろな物が置いてあった。何に使うのか、中に蛇やカエルが入っているビンが置いてあったり、変なマークが描かれていてコードが付いている機械などがあふれていた。

「相変わらずすごい部屋ですよな？　ここ」

「ハハハ、そうだな。私の私物なんてほんの一部ぐらいだ」

一部って…。一体どれがこの人の私物なんだろう。

そう思っていると普段使ってる机だろうか、そこに二つの箱が置かれていた。だけど女性はそれを持つことなく何故ここにそんな物があるのか、コンロの上に置いてあるヤカンに水を入れてそのまま火にかけ椅子に座った。

「あの…、それを持って行けばいいんですか？」

「ああ。でも授業開始まで時間はある。少し休んでいくといい」

凜にそう言って女性が指差したのは、壁にかけられているパイプ椅子。凜は不思議に思いながらそのパイプ椅子を手にとって広げる。そして女性の正面に座った。

すると、失礼するよ、と言ってポケットからタバコを取り出す。手慣れた手つきで一本だけ出して口にくわえると、引き出しから取り出したマッチで火を点けた。

少し息を吸い込んだような動作をし、一度口からタバコを放して息を吐くと、真っ白い煙が天井に上っていく。

何度かそのあとも同じような動作を繰り返す。部屋の中がどんど

んタバコの臭いで充滿する。

「嫌だねえ…。もう街中じゃどこもかしこも禁煙禁煙で。国が認めた物だつてのに今度はダメと言ってくる。言うならば私は被害者だ。中毒にさせておいて突き放されたんだからな。そう思わないか？」

女性の言葉を聞いて、ちょっと私には…、と言って困ったような顔をする。

それを見た女性は笑いながら、聞き流していいよ、といって立ち上がる。見るとヤカンからシューシューと湯気が吹き出していた。

「コーヒーでもどうだ。砂糖は無いが吞めるだろう？」

一瞬何を言っているんだと思ったたようで凧は少し考えたけど、じやあお言葉に甘えていただきます、と返す。

「ん。じゃあ君はどうする？ 桜井と一緒に飲むのかい？」

ふと女性はこちらを見ずにそんな事を言う。誰に言っているのだろうか。ここには凧と私以外いないと言うのに…。

「そうだ。君しかないだろう？」

カップにお湯を注ぎ終え振り返る女性は、カップを持ったまま人差し指を凧の胸元に指す。その指は私に向けられていた。

訳が分からず私はキョトンとするだけ。凧も何がなんだか分からないらしく、私と一緒の表情だ。

やがて少し冷静になると、一つの考えがまとまる。

…私が、見えてる…？

「ああ。見えているよ。妖精さん」

固まったままの凜にカップを手渡し、女性はフツと笑いながらカップに口を付けた。

呆然とする私たちをよそに先生は気にする事無くコーヒーを飲んでいる。

先生は言った。「見えているよ。妖精さん」と。妖精と言うのはもう私の胸ポケットにいるルリちゃん以外には考えられない。

私何がなんだか分からないという状況に戸惑っていると、ルリちゃんが、立つて！、と叫んだ事で反射的に私は立ちあがる。すると胸ポケットから飛び出し私の前でルリちゃんが大きく手を広げ、^{はね}翅を飛ばたかせて滞空している。周りには小さく風が舞ってルリちゃんを包み込む。

「何者ですか？ あなたは…」

そう言って威嚇するルリちゃんを見て、先生はカップを机に置いて両手を挙げる。

「ああ、やめてくれ。別にただ話がしたかっただけで何かしようって訳じゃないさ。もしこちらから何か仕掛けるのであれば、こんな所では、と思わないか？」

敵意は無いと言いたいのか、ルリちゃんの様子を見ながらその姿勢を崩さない。

言われてみればそうだ。ここがいくら人がほとんど来ない校舎だとしても、私がここに来る時に少なくとも雅ちゃんたち三人がこっちに来た事を知っている。私の身に何か起こったとしたら、まず疑われるのは先生になってしまう。

そして何より……、

「そうだ桜井。そもそも私がお前に何かする理由が無いんじゃないか？」

「え？ あ、はい。そうですね」

微笑みながら言ってくる先生。私は何か引つかかりながらとりあえず返事をした。

すると私の目の前で滞空していたルリちゃんが、私の肩に移動して先生を見据えた。まだ安心は禁物と言う事だろうか。いや、顔が紅いという所を見る限り、先走ってしまった自分が恥ずかしかったんだろうか。

「はは、敵意を全然緩めてくれないが、一応話は出来るか…」

それを知ってか知らずか、先生はようやくやく挙げていた手を下ろし、銜くわえていたタバコの灰を置いてあった灰皿に落とした。

そしてもう一度銜くわえると、まあ座らないか？、と言って椅子に腰を下ろす先生。私も同じように腰を下ろし先生を見つめた。

先生は何者なんだろう…。

「気になるか？」

そう言って私の方を見て笑う。私はつい視線を逸らし、下を向いてしまう。そしてさっきまでのちょっとした違和感が少しずつ確信へと変わっていく。

* * *

先生には噂があった。

山川先生には隠し事や秘密は通じない、と。

私が聞いた話だとある生徒が嫌がらせを受けた時、すぐにその嫌がらせをした生徒が見つかったとか。

それが噂によるとその生徒が自分から名乗り出てきた訳じゃなく、山川先生が見つけたと言う。雅ちゃんはその噂を聞いて、きつと山川先生はエスパーよ！、なんて言って興奮してたっけ。

いつも見ている感じだと先生はいつもだらしく髪が乱れていて、いつも気だるそうなんだけど、確かに眼鏡の奥の瞳が何か感じさせるような雰囲気は持っていた。

ただ授業の感じや話し方が親しみやすく、生徒達からは結構人気が高かったという評判の方が先に立っていてあまり考えた事がなかった。だって先に言った生徒も山川先生の計らいでそこまで咎められなかったと聞いていたから。

だから私は、生徒の事をよく考えてくれる良い先生だな、とだけ思っていた。

* * *

思い当たる節はある。

例えば教室で私の玉子焼きを取った時。その時私がどう思ったのかを分かっているようだった。でもそれは私の表情を見てそう感じ取ったのかと思っていた。

そして今、何も言っていないのに私がどう思っているのかを言い当てていた。私だけじゃなくルリちゃんも何も言っていないのに同じように…。

「まあ思っている通りだよ、桜井。私にとっては厄介な事だがね」

「…やっぱり、そんなんですね」

納得したように私は先生を見ながら言った。

胸ポケットから様子を見守りながらさっきまでの自分の事を考えて恥ずかしくなり、口の辺りまでポケットの中に入っていた。

いくら凜の為とはいえ、私としたことがなんて軽率な行動だったんだろう。敵意の無い相手に向けて私はなんて行動を…。

「いや、恥じる事は無いよ。桜井の事を守ろうとする者としては当然の事だろう。まして私のような変な奴なら尚だろうからね」

そう言って銜えていたタバコの火を消し、女性はカップを手にとつて口をつけた。

なんていうかこの人のペースが独特で、こっちのペースが狂わされているような気がする。こっちだけいろいろ考えているだけみたい。

それにしても凜も気付いたみたいだけど、この人は…、

「あの、間違つてたら申し訳ないんですけど…。いいでしょうか？」

「ああ、聞きたい事があれば聞いてやるのが先生じゃないか。と言つても何を聞きたいのかは分かっているがね」

女性はそう言って微笑んで凜の言葉を待った。

「先生は…、相手の考えている事が分かるんですか？」

やっぱり私と同じ事を考えていたようで、凜が彼女に対して問いかける。

彼女は何も言っていない私たちの考えていた事に対して普通に答えていた。それだけで疑いようが無い。

それを聞いた彼女は、隠す気は無いよ、と言って座ったままこちらに向かって正面を向く。

「気付けばこんな力を持っていてね。」

「じゃあ先生は…、退魔士なんですか……？」

思いがけない言葉が出てきたようで少し驚いたような顔をする女性。

「いやあ、その単語を聞くとはね。退魔士か…。そりゃあ妖精さんと一緒にいるぐらいだからいくらかは予想してたけどね」

そこまで言つて、もう一度タバコの箱を取り出す。そして一本銜えて火をつける。

「まあ私はそんな大層なモノになれるような器うつわじゃないよ。まして妖怪やら何やらと言った非科学的なモンと戦うような考えは持っていないしね。ただ丁度そういう事をしている奴に会っただけさ。それでそいつから身を守る術を教えて貰ったんだが…」

彼女はそう言いながら白衣を広げてみせる。その中には縦長の紙の束が内ポケットに入っている。

いつかウイン様に教えてもらった事がある。『東洋魔術』と呼ばれるモノにあった『符術』と言うモノだろうか。実際見るのが初めてなんでハッキリとは言えない。

「これが厄介で仕方が無い。頭にイメージをしつかり思い描かなければいけないのだからね。それにこの護符とか呪符とか呼ばれる薄っぺらい紙をそいつから買ってるんだが、これが安くはないんだ。だからいつも案件^{それっぽい}処理事をしてお金のやりくりはしてるけどね」

っと、話が逸れたな、と言って女性は笑いながら銜えていたタバコを灰皿の端の方に置いた。

「桜井が言うとおり、私は人の考えてる事、心で思った事なんかを読み取れる。望んでこうなった訳じゃないから始末が悪い。相手が私に知られたくない事、しかも私が知りたくなかった本音まで分かっってしまうんだからね。最初の頃はなんで私がこんな思いをしなくちゃいけないんだろって思ってたよ」

「それってやっぱり辛いんですか？」

「辛いなんてものじゃない。いいか桜井。例えばもしもお前が周りの奴らの心の中の声が聞こえたとする。するとどうだ。今まで自分も相手も好きで一緒にいると思ってたのに、相手は自分の事を少なからず邪魔だと思っているのが分かってしまった。それを知ったとき、今までと同じようにそいつと一緒にいられると思うか？」

それを聞いて黙り込んでしまう凜。とても悲しそうな表情をする。すると女性の方はそれを見て、例え話なんだからそんな顔するな、

と言つて凜に微笑む。

「人は相手を信頼する事によつて、周りの人間関係での自分の居場所やつながりを確立する。『絆』と言つた方が分かりやすいし格好が良いか。でも要するにそれを創る事が出来なくなつてしまつただよ、私は。相手の心を読める事によつて私が相手の事を信頼する事が出来なくなつてしまつただよ。」

皮肉だろ？ 人つて言うのは相手がどう思つているか分からないと不安だと言うのに、私は知りすぎてダメになつてしまつただよ。まったく…、厄介な事この上ない」

やれやれといった感じで首を振りながら自嘲気味に鼻で笑つ。どれだけ大変だつたらうか。そう私は目の前で何事もなくしている彼女を見ながら思つた。

すると壁にかかつている時計を確認した女性は、どれ、そろそろ行く準備でもしようか、と言つて立ち上がった。

でも凜は立ち上がらない。下から凜の顔を覗き見ると、先ほどのように悲しそうな顔をしている。それを見て頭を掻きながら懐から札を取り出し微笑む女性。

「でもね桜井、私はこれしてくれる退魔士と話して考え方が変わったんだよ。悪い事ばかりじゃない、つてね」

「え？」

「小ささままだが、人つてのは相手に言えない悩みや迷いを持つてる。それがどれだけ自分一人で考えても答えは出ないとしても打ち明ける事は無い。そうだろう？」

でもそれを私は知つてしまう。相手には悪いけどね。でも知つてしまつた以上、それならばその悩みを解決させられれば、私のこの

力も意味が見出せるんじゃないか、って考えたんだ。まあただのお節介だと言われれば何も言い返せないけどね」

「そんな事…、言わないですよ」

予想しなかった答えだったのかキョトンとしたような顔をした後、ありがとう、と微笑みながらそう言って女性は机に置いてある箱を持った。

凜もようやく立ち上がり、女性と同じように荷物を持つ。そして女性の横に並んで歩き出した。

「じゃあ先生はなんで先生になったんですか？」

「ああそれは…」

そう言うかどうか答えて良いやらといった顔をして口ごもる先生。だけど、別に隠すことでも無いか、と言って苦笑いを浮かべる。

「ホントはそういう悩みを解決するっていうのはカウンセラーとかそういうのが良いとも思ったんだが、私の経験からすると一番これが良いんじゃないかと思ってね」

経験？ 一番？ どういう事だろうか。

意味がよく分からず、私は『？』ばかり頭に浮かんでしまう。

「どうしてですか？」

「私が桜井ぐらゐの歳でこの力に悩んでいた時に、さっき言つてた退魔士に救われたつていうのと…」

「と？」

「この歳ぐらゐの子らは結構精神的に不安定なんだ。学校の成績、進学や就職などの進路、対人関係……。悩みは人それぞれだが尽きる事が無い。だから私が過ごしてきた中で、他の人たちが一番大変だと感じていたと思うこの年代の場所に行くにはって考えたんだ。そしたら何故か短絡的に先生になるのが早いと思つたんだよ。馬鹿だる？」

そう言つてケラケラと笑う先生を見て、私は首を振つた。

「そんな事無いですよ。その為に努力して本当に先生になつたんですから、私がそれを馬鹿にするなんて出来ません。むしろ尊敬しちやいます」

その言葉に偽りは無い。先生自身が相手の思つてる事が分かる事で、どれだけ辛い思いをしてきたのか私には分らない。それほど辛い思いをしながら、他人の為に自分の能力ちからの使いどころを探して、他人の為に何かしようと思つた先生を、私は素直にすごいと思える。

すると先生が無口になつたので不思議に思つて先生のほうを見ると、普通にはしているが頬を赤らめている。

あ、そっか。思つてる事が分かつちやうんだっけ。

「…桜井。私は結構そういうのは苦手なんだ。慣れてないというか、なんと云うか…」

「あ、そうなんですか。…フッフ」

何がおかしいんだ？、と言って私の事を肘で小突いてくる先生。顔はなんとなくふてくされている様だった。

第六楽章 『t w i l i g h t【タソガレドキ】』 3 (後書き)

早いものでいつの間にか1年が…。

当初の予定では題の『ホーリーナイト』に洒落こんで、丁度クリスマスあたりが終わるようにと思っていたのですが、まだ半分ぐらいとかなりの大幅遅れ。

この遅筆には私自身が驚いています。…いえ、本当ですよ。

でもここまでそんな私の作品にお付き合いしてくれている方々には本当にありがとうございますとりたいです。

読者様がいたからこそ頑張ってこれたんですから。

まだまだ続く作品ですが、これからもよろしく願います。

ようやく荷物を運び終え、自分の教室に戻ると、出て行ったときと同じように待っている三人の姿があった。

すると戻ってきた私に気付いたのは雅ちゃん。…私、後ろの方から来たのに、なんで気付けるんだらう。本能なのかな。

「あ、おかえり、リンリン」

そう言いながら私に抱きつく。うん、雅ちゃんはきっと前世は犬だったのかもしれない。なんだかそんな気がする。

私は雅ちゃんの頭を撫でながら、自分の席へと戻る。撫でられている雅ちゃんは、なんとなく満足げな表情でそのまま私に擦り寄っている。ちよつと歩きづらい。

教室の中は次の授業までそこまで時間はないのに、皆が皆、先生が来るまでの間を楽しもうと、話をするのに夢中だ。

ふと視線を窓際の方に移すと、先生と話していた子の姿が。その子は一人窓の外を見つめている。

「お、凜。おかえり」

「凜ちゃんおかえり〜」

私は二人の出迎えの声に視線を戻し、ただいま、と言って自分の席に着いた。

「凜はやっぱり優しいね。もう椎名さんの事考えてるの?」

「え? うん。まあね。今も先生の手伝いをしてた時に頼まれてた

し」

なるほどね、と言って歩美ちゃんは雅ちゃんの肩を叩く。
すると雅ちゃんは立ち上がって胸のポケットから紙を取り出す。
そしてノートを切り取ったような紙に書かれているのは、

「『椎名香奈攻略計画』?」

なんだか何かのアニメで出てきた、漢字ばかり書かれた資料名の
よう…。

「ふふん 私にかかればこの計画であの子なんてちよちよいのち
よいよ!」

そう言っ腕を組み胸を張る雅ちゃん。何気に結構な存在感を誇
る胸がその存在感をより大きなものとなって私たちに示してくる。
そこで私たち三人は揃って自分の胸を見ている。そして何も言わ
ずに溜息について雅ちゃんの事を睨んだ。∴世の中は不公平だ。

「え、どうしたの? 三人とも私の事怖い目で見てるけど」

「う、ううん。なんでもない」

「別に…」

「むっ…」

私たち三人はそれぞれの反応を示しながらなんでもないといい張
っていた。

雅ちゃんはというと、その反応を見て『?』を浮かべ、首を傾げ
不思議そうな顔をしていた。

そしてそのまま授業は過ぎていき、帰りのSHRも終わり、清掃の時間となる。

私たちはそれぞれの持ち場を終わらせて一旦教室近くで集まると、椎名さんがいるはずの教室を覗き込む。丁度掃除を終わらせたようで他の人たちが帰り支度を始めていた。

そんな中、窓際でポツンと一人席に座る椎名さんを見つける。

「とりあえず声をかけなくちゃね。これは私が適任だわ」

そう言っただけで雅ちゃんは椎名さんが一人になっている教室に入っていこうとする。でもそれをさせまいと後ろ襟を掴む歩美ちゃん。そのせいで雅ちゃんが変な声を出す。今のはかなり苦しそうだ。

すると雅ちゃんは首を押さえながら、何するのよ!？、と言って抗議する。

「アンタ、考えてもみなさいよ。急にあの子に声をかけたとして、さすがに変に思われるでしょ?」

「あゆママの言うとおりだよ。みやびん、何か策があるの?」

すみれちゃんが雅ちゃんに尋ねるけど、意外とダメージが大きかったらしく、雅ちゃんは喉に手を当てている。

確かに二人の言うとおりだ。いつも話したことがないのに、いきなり声をかけても変に思われるだけだ。

でもそうすると、どういふ風に声をかければ良いんだろう...

「だから私の計画案があるでしょ。もう、忘れないでよ」

そういう雅ちゃんは、ふっふっふ、と笑っていて、怪しい感じに
にじみ出ている。

本当に大丈夫だろうか……。

「あれー。すみれ達まだ帰ってきて無いんだー」

まずは先陣を切って一番しっかりとっている歩美ちゃんが、独り言
を言いながら教室の中へ入っていく。

見事なまでの大根役者ぶり。動きはぎこちなく、台詞も棒読み。
こっちで待っている私たち三人は苦笑いを浮かべて見守っていた。

雅ちゃんがチラリとこっちを見ている。首を小さく横に振り、も
う限界と言いたそつだ。

* * *

「無理無理！ 絶対に無理だからアンタ！ すみれもなんか言っ
てよ」

「そう？ 私はおもしろそうだし良いと思うんだけどなあ。凜ちゃ
んは？」

「うーん……」

雅ちゃんが計画したのは、とても本気で作ったとは思えない計画
だった。

その名も『劇団型に私たちが近づき、それとなく会話に香奈ちゃ
んを引き入れよう』と言うもの。ちょっと長いけどそのまんま。私
たちが椎名さんに近づいて、さりげなく会話をするだけ。

ただ近づき方が問題だった。

「何で近づくの演技しなくちゃいけないのよ！ 私無理だから！」

その問題が歩美ちゃんが言うように『演技をしながら』と言う事。

「なんでって、それは……」

キョトンとしている雅ちゃんに私たち三人の視線が集まる。

「その方がおもしろいからに決まってるじゃない」

当たり前でしょ？、なんて言いながら笑っている雅ちゃん。

なんとなく言う事は分かってはいたけど、私たちはその言葉に呆れてしまい、溜息をついてしまった。

* * *

先陣を切った歩美ちゃんに続くのは、少し乗り気だったすみれちゃん。今になって後悔したのが、足どりが重いように見える。

ギクシャクとした動きでなんとか歩美ちゃんの所へと向かった。

「ああ、あ、あぎゅ、あゆみやま〜。 お待たせ〜」

誰の名前を言っているのかよく分からないまま歩美ちゃんと合流する。ようやく助け舟が来たという表情ですみれちゃんの事を見ている。

「ここまでは一応予定通り。しばらくは二人でなんとなく話してもらう。」

そして次に行くのは私だ。胸ポケットから私を見上げ、がんばれ、

と小さな声で言っているルリちゃん。私はそれに何も言わずにコクンと頷いた。

「じゃ、凜。次よろしく」

「う、うん」

そう返事をして、私も教室の中に入っていく。先に入っていた二人は、共に疲労しきっている様子。

「おまたせ。ちょっと掃除が長引いちゃった。ごめんね?」

「あ、凜。おかえり」

私も合流すると、またしばらく私たちはお喋りを続ける。でも今度は、今までの流れのように途中で雅ちゃんが入ってくる事は無い。このままの状態から、この計画の一番の難所と言っているいい所に入っていく。

それは近くの椎名さんを、こっちの会話に引き入れる事だ。私はまず、その計画の始めの合図となる言葉を発した。

「それにしても、雅ちゃん遅いね?」

その言葉を聞いて、歩美ちゃんもすみれちゃんもピクツと反応する。

「そ、そうねえ。もしかしたら先帰っちゃったのか? アイツ」

「じゃあちよっと聞いてみる? もしかしたら見たかもしれないし」

そこで一度会話が止まり、全員が本を読んでいる椎名さんの方を見る。

その椎名さんはこちらの様子に気付かないまま本を読み続けている。

ここで声をかける担当はじゃんけんの結果、私に決定していたので、私は椎名さんに近づく。するとようやくこちらの様子に気付いたのか、椎名さんは本から私のほうに視線を移した。

「あ、あの…、椎名、さん？」

「…はい。なんでしょうか？ えっと…、桜井さんでしたっけ？」

どこか不安そうな面持ちで私を見つめる椎名さん。私はコクンと頷きながら続ける。

「その、椎名さん、ずっと教室にいた？」

「ええ。でもそれがどうしたの？」

「じゃあその時、雅ちゃん、じゃなくて永倉さんの事見た？」

私がそう言うと言っていた本にしおりを挟んでしまう。そして少し考えた後、椎名さんは首を横に振った。

「見てないかな。間違っただけならば多分ここには来てないと思う。もし間違っただらごめんなさい」

「ううん、ありがとう。こっちの方こそごめんなさい。急にそんな事聞いて」

そう言って会話が途切れてしまう。

この後の事は全然準備していなかった。どうすればいいんだろうと焦りだけが先にでて、何も考える事ができない。すると椎名さんはバッグを持って立ち上がる。

「じゃあ私、用があるから」

「え、あ、うん…。じゃ、じゃあ…」

私や歩美ちゃんたちにお辞儀をしながら、スツと私の横をすり抜けて足早に教室を出て行ってしまった。私たちだけの教室は途端に静かになり、遠くから吹奏楽部の演奏する音が聞こえてくる。

思わぬ事態に取り残された私たちはどうすれば良いか分からず、ただ顔を見合わせるばかり。でもただ一つ、私たちは同じ事を考えている事は分かっていた。

と、そこに雅ちゃんがそと教室の中へ入ってきた。

「うーん、まさかこんな事になるなんて……」

「雅……」

入ってきて喋り始めた雅ちゃんの言葉を遮るように低い声が響く。その声の主は歩美ちゃん。雅ちゃんを見ている顔は、笑っているようなのに、どうしても笑っているように見えない。

「アタシはやめようって言ったはずだよな？」

「は…、はい。あれ、どうしたの？ あゆっちの顔が怖いんだけど……」

誤魔化すような雅ちゃんの言葉を聞きながら、歩美ちゃんは少しずつ近づいていく。

「へえ…。ちゃんと分かってるじゃない」

「ね、ねえ…。あゆっち。一回落ち着こう?」

雅ちゃんは歩美ちゃんから逃れるようにじりじりと下がっていく。だけど、

「みやびん。どこ行くの?」

いつものような声、いつものような笑顔のすみれちゃんがいつの間そこにいたのか、雅ちゃんの後ろから抱きついた。

こちらも表情とは全然違った雰囲気を出していた。

驚いた雅ちゃんはそのまま身動きがとれずにいる。するともう目の前に歩美ちゃんがやって来ていて、逃げ場がなくなってしまった。

「雅…」

「……はい」

雅ちゃんの顔には滝のように流れる冷汗。それを見ながら歩美ちゃんが手を振り上げる。

「凜が声をかけるまでの私とすみれの件くだり…」

そこまで言って表情が鬼のような形相に切り替わり、そして、

「いらないだろお!」

叫び声と同時に振り落とされたチヨップは、雅ちゃんの脳天に振り落とされる。そしてそれを受けた雅ちゃんは、校舎中に響き渡るような悲鳴を上げていた。

その後、自分達も帰ろうと自分達のバッグを持ち、廊下を歩いていく。

少し後ろを歩く雅ちゃんは頭を押さえ、泣きそうな表情をしている。

「これはやりすぎよ。ああ、痛い…」

「それぐらいで済んだだけ良いと思いなさい。なんだったらもう一発…」

そう言っただけで歩美ちゃんが手を振り上げると、よほどさっきの効いているみたいで咄嗟に、すいません、と言って頭を両手で押さえ、怯える雅ちゃん。

歩美ちゃんは、よろしい、と言って手を下ろす。多分歩美ちゃんももうそこまで怒ってはいないんだろう。表情はそれほど怒ってるようには見えないし。

そしてそのまま歩いて行って、昇降口に着く。

「でもこの後どうする？ みんなでどこに行く？」

歩美ちゃんの提案にみんな思い思いに場所の候補を言い合つ中、私もどうしようかと悩む。

だけどふとあるものに目が引かれる。

「あれ？ リンリン。どうしたの？」

「え？ あ、ううん。別に」

雅ちゃんにそう言って、一緒に歩き始める。

でも私は気がかりでしょうがない。私はみんなと歩いている中、
どうしようかと考えていた。

「じゃあ私お気に入りの喫茶店でも行こうか？」

「雅のお気に入りに入り？ 少し心配…」

「え？ なんであゆママ」

「考えてもみなさい。どうせ雅が気に入った女性でもいた、とかでしょ？」

「酷っ！？ アンタ私の事どんな目で見てんのよ！」

「雅自身をそのまんま、だけど？」

「ますます酷いし！？ ねえリンリンなんか言ってやっ…、って、あれ？」

「凜の奴どこ行ったんだ？ すみれは見てなかったの？」

「うっん。私も気付かなかった。どこ行ったんだろっ」

「凜。急にどうしたんですか？ 学校に戻ってきましたけど」

私はポケットから凜に話しかける。凜は学校を出て友人達と歩いていたと思ったら、急に気付かれないように来た道に戻っていたのだ。

「うん。ちょっと気になった事があったね」

「はあ。ちょっとと言うのは？」

「ホントにちょっとした事なんだけど、さっき教室にいたときに先に帰った子がいたでしょ？」

それは『椎名』と呼んでいた子の事だろうか。一体どうしたんだらう？

ここでちょうど、靴を履き替える『昇降口』と呼ばれる場所に着き、一人一人に与えられている靴置き場の中のある場所を指差す凜。そこには誰かの靴が入っている。

「これ…、椎名さんの所なんだけどね。先に帰るって言ったのに、ここに靴があるのはおかしいと思わない？」

「そう言われればそうですね。でも私たちが帰るときには会いませんでしたね…」

と言う事は、まだこの学校から出ていないという事になる。でもどうして…。

あの子は帰ると言っていた。なのにまだこの学校にいる。

何故帰らなかったのか…、その理由が私には浮かばないけど、どこか不安にさせる。凜の顔を見ると何か考えているようで、同じよ

うな事を考えているみたいだ。

「一応探してみよう。みんなには悪いけど……。嫌われちゃうかな？」

「きっと大丈夫ですよ。あの人たちは凜の親友ですもん。こんな事で縁が切れる訳無いですよ」

「ルリちゃん……。うん……。ありがとう」

そう手短に話すと、私たちはすぐさまあの女の子の事を探し始めた。

図書室や普段は誰も寄り付かないような教室のある棟など、色々な所を探し続ける。

ただどなかかなか姿を見つけることが出来ない。気付くと外が少しずつ夕焼け色に染まりはじめた。

「もしかしたらちょうど入れ替わりで帰ってしまったんじゃないですか？」

「そうなのかな……。あ……」

すると凜は何か閃いたのか、急にどこかに向かい歩き始めた。

「どうしたんですか？ 凜」

「ルリちゃんの言う通りかもしれない」

そう言いながらどんどん歩いていく。私の言う通りとはどういう事だろう。

今日も私は一人。
昔から引つ込み思案なのも禍わざわいして、どうも一人になりがちだった。
でもそれでも寂しくなかった。今までは…。

「莢…」

私はたった一人の心を許しあっていた者の名を呼ぶ。それは「椎名 莢」という従姉妹で、家も近かったのもあって、結構な頻度で会ったりする仲になっていた。

お互い性格も似てて、あまり友達を作れていなかったのもあるけど、それでも心が許せる人がいるのは、お互いの心を支え合うには十分だった。そしてこれからもそうやって過ごしていくんだと思っていた。

だけど、それはもう出来ない…。
その名前の存在が、もうこの世にはいないから……。

* * *

別れは突然だった。それは莢の家からの電話での事。

「莢が…、莢が自殺したの……。」

その電話を取ったのは私。電話の向こうから聞こえてくるのは、

擦れるような声の莢のお母さんの声だった。

始めは何も分からなかった。私の頭ではあまりにも現実というには残酷すぎるから…。

そこからは本当に早送りのように日々が流れていった。まるで流れ作業のように…。

* * *

通夜や告別式では涙を流しながら死んでしまった事を嘆いてくれる者がいた。

私も悲しんだ。夢であってほしいと眠りについて、朝起きてその事実を知る度に泣いていたような気がする。

それが普通だと思っていた。

でもそれは違ってたみたい。

あんなに泣いていた人や悲しんでいた人たちは皆、何もなかったかのように生活を始めていた。

それはまるでこの世界に「莢」という存在がいなかったかのように自然で、私にはそれが理解できなかった。

あんなに悲しんでいたのに、それでは莢がかわいそうだ。そう思っていた。

でもいつの間にかそんな私も、ふと莢の存在が希薄になる。

それがあまりにも自分自身にショックを与え、そして落胆した。

悔しい。きつといつか私は莢の事を忘れてしまう。次第に不安だけが大きくなっていく。

「私は…、忘れたくないのに……」

眩きは夕焼けに吸い込まれていく。

そつと、昨日と同じように外を見つめる。私はこの窓から見える夕焼けの景色が好きだ。いつまでもいつまでも、見ていたいと思ったりもした。

でもそれは出来ない。この夕焼けはあとほんの少しで終わってしまう。

どんなに見ていたいと思っても、どんなに好きであろうとも、終わりには来てしまう。それはどんなものであっても言える事だ。

どんなに抗おうとも勝てやしない……。時ときというモノが奪い去ってしまうから。

ならどうすれば……。

「いつその事この景色の中で、私自身の時間を止めてしまえば……」

ただ普通に流れ出た言葉。

それが意味するのはなんなのか、私は分かっている。その為に私は今日ここにいるんだ。

私はそつと窓を開けると、静かに目を瞑った。緩やかに窓の枠に体重をかけて、少しずつ前へと重心を移動させていく。

そしてそのまま私は風を受けながら、冷たく硬い地面へ落ちていった。

特別教室棟から私のクラスの教室がある校舎へと向かう私は、一階に下りて校舎を繋ぐ中庭の通路を通っていた。夕焼けが染まり始め、もうこれでは今日の練習は間に合わないだろう。そんな事を風を受けながら考えていた。

……あ。

「っああ！？ 成瀬君に連絡するの忘れてた！」

「あの人、後で何言われるかわかりませんかからね。今のうちに連絡しておくの良いですよ」

ルリちゃんの言葉に従って、ポケットから携帯電話を取り出した。そしてメールを打ち込む。

『今日は用があるので練習はお休みます。連絡が遅くなってごめんなさい』

送信ボタンを押し、すぐにポケットへとしまい、歩き出そうとした。

でもその時、ふと視界の隅に人の姿が見えた。私はその姿が見えた校舎の上の方に顔を向ける。

その姿の主は、私が探している人物だった。

でもなんだか様子がおかしい。ただ静かに窓の前で佇んでいるだけで、何もする様子が無い。

「あ、あの人。凜の言うとおり、入れ替わりで教室にいたんですね」

「うん……。そうだね……」

私はルリちゃんの言葉に答えるのだけど、視線は椎名さんの方を外せなかった。

その椎名さんが、窓に手をかけて開いた。

「どうしたんで……」

ルリちゃんに返事をする事も出来ないほど、それは突然だった。窓枠に手で乗り上げ、身を乗り出していく。そしてそのまま……。

「危ない!!」

私の叫び声とほぼ同時に落ちていく姿。私は走り出していた。でも私ではどうにもならない。なら……、

「ルリちゃんお願い!!」

「はい!!」

返事を返すなり、ルリちゃんは手を落ちていく椎名さんの方に向け、そして巻き起こる風。その風は落ちる椎名さんを包み込み、ゆっくりとしたスピードで椎名さんの体を下ろしていく。

そして何事もなく地面へとたどり着く。そこでちょうど私が駆けつけ椎名さんの様子を見た。

気を失ってしまったようで、目を瞑って動かない。でも見た限りケガをした様子もなく大丈夫なようで一安心した。

「リンリン?」

突然安心した私にかけられる声。私は心臓が飛び出るんじゃないかと思うほどのドクンと鳴った。

そのままだんだんと早く鼓動を打つていく心臓。それを落ち着ける余裕もなく、ゆっくりと私は振り返る。

そこには見慣れた三人の姿が…。

「あれ…？、みんな先に行ったんじゃない…。」

「急にアンタがいなくなったから戻ってきたのよ。置いていくなんて悪いし…」

自分がやった事を後悔した。みんななら戻ってくる事を考えておけばよかった。

もつとも「忘れ物があるから戻る」と言っても付いて来てくれるみんなだ。何を言っても一人でなんて無理だったかもしれない。

でも今はそんな事を考えている場合じゃない。

「それより凜ちゃん…」

すみれちゃんが話しかけてくる。

私は何も出来ずにただ次の言葉を待つだけ。

「さっきの…、何だったの？」

他の二人も私を見つめてくる。私は答える事も出来ずにうつろたえるばかり。胸ポケットにいるルリちゃんも私の事を心配そうに見つめている。

すると雅ちゃんたちの後ろからやって来た誰かが、三人の背中に何か素早く貼り付けた。

貼り付けられるなり三人は倒れこむ。何が起こったのか私には分からず、私はやって来た誰かを確認する。

「一応何かあったらと思って見守ってたんだがね。すまなかった」

それはボサボサの髪を掻いている山川先生だった。

なかなか目を覚まさない椎名さんを先生に抱えてもらい、私たちは保健室に向かっていた。

『たち』と言うのは雅ちゃんたちもいるから。

私はそつと隣を歩く三人を見る。三人は黙々と一緒に歩いている。ただ、前を見つめる視線は虚ろで、まるで人形のような。

それもそのはず。三人に意識はなく、先生に貼られた札のようなもので操られているから。

これを今一緒に歩いている先生がやったんだと思うと、なんだか怖くなってくる。

「それはちよつと傷つくな。私は別に悪い事はしてないし、今までこれで悪い事なんてしてないし…」

「あ、すみません。失礼でしたよね…」

私がそう言っつてしよんぼりすると、気にして無いよ、と先生が微笑みながら言っつてくれる。

その後あまり誰にも会わないように保健室に向かい、なんとかたどり着くんだけど、担当の先生どころか中には誰もいなかった。

どうしようと考えている私を横目に椎名さんを背負う先生は、ちよつとよかった、と言いながら椎名さんをベットへ寝かせる。小さく寝息を立てているのを確認すると、カーテンを閉めた。

そして振り返り、一緒に来ていた雅ちゃんたちを椅子に座らせると、三人の背中に貼られている札を剥がしていく。先生は、散財だ…、と言いながら少し涙目になっていた。

札を剥がされると今まで意識が無いような目をしていた三人が、徐々に意識を取り戻した。

「あ…、あれ？」

「アタシたち…」

「何してたんだっけ…？」

今の状況が飲み込めないのか、三人は呟きながら視線を漂わす。

「なんだ、お前達。寝てたのか？」

「…あれ？、山川先生………」

「『あれ』とはなんだ。倒れてた椎名の事を一緒に保健室に連れてきたんだろ？ どうした永倉、お前もどこか具合が悪いのか？」

そう言われた雅ちゃんはどこか腑に落ちない表情になる。他の二人も同じよう。

それもそう。さっきまで意識がなかったんだし。みんなは札を貼られる直前までの意識があつて、いつの間にかこの保健室にいる。それまでの『間』の記憶に『空白』があるのだから納得がいかないはずだ。

「そっだ、リンリン！ さっきのはなんなの?!」

「え、え？」

雅ちゃんは私の両肩を掴みながら聞いてくる。

そっだった。貼られる直前までの記憶はあるんだから、さっきの出来事は憶えていても不思議じゃない。

見られてしまったのだから言い逃れは出来ない。私は困惑した。すると横から先生が間に入る。

「くらくら、どうしたんだ？」

「先生！ ついさつきなんですけど、リンリンが落ちてくる椎名さんを竜巻みたいなものを起こして助けたんです！」

やっぱり憶えていたようだ。どうすれば良いんだろう。

でもそんな私の不安とは裏腹に、先生はキョトンとした顔で聞いている。

「おい、ちょっと待て永倉。何を言ってるんだ？」

先生がそう言うと、みんなが喋るのをやめて先生を見つめた。

「私たちは『教室で』椎名の事を見つけたんじゃないか。外には行って無いよ」

「え……。でも、そんな……」

「フフフ。桜井の事を好きなのは良いんだが、まさか脳内で魔法少女に仕立ててしまうとはね。」

夢と現実を入り混じらせたりするのは面白いことは面白いが、それはどうなんだ？ 一種の禁断症状か？」

そこまで言われて、雅ちゃんは顔を真っ赤にしてしまう。

「まあいい。意地悪言ってすまなかったね。それがお前の良いところだと言うのに」

「ど、どういう意味ですか、それ！」

そのままだよ、と言いながらケラケラと笑う先生。雅ちゃんは少し唸りながら拗ねたように顔を逸らした。

「とにかく結局の所はそんな話ありえないだろう？ そんな事が現実なら科学や物理というものを根本から否定されてしまうからね。私の立場が無くなってしまおうよ」

はい…、と雅ちゃんは少し釈然としないような顔をしながらも頷く。歩美ちゃんたちも同じようだった。

私はなんとか誤魔化せた事で安堵していた。それにしても、よくそれだけ強引になかったことにしたなあ。

するとベットを囲っていたカーテンが、シャーッと音を立てる。先生を含め、みんなの視線が集まる。その視線を集めた主は、少し怯えたようにカーテンに隠れていた。

私はどうなったんだろう…。

きっともう血だらけで、手を施す事も意味が無いほどになっていくかもしれない。

お母さんやお父さんたちには申し訳ない事をしたかもしれない。

死んでしまったのに、どうしてもそんな事を考えてしまう。
すると私の耳に何か聞こえてくる。それが気になり、私は^{まぶた}瞼をあ
げようと試みた。私は死んでしまったのだから到底そんな事出来な
いと思っていたのだけど、その考えは間違えだったかのように簡単
に開かれた。

目の前には白い天井。周りを白いカーテンのようなもので囲まれ
ていて、私はベットで寝ているんだと言う事に気がつく。
ここは…、何処だろう……。

「ど、どういう意味ですか、それ！」

突然カーテンの向こうから聞こえてくる声。

私はビクツとなって布団を顔まで持つてきて身構えた。

でもだんだん聞こえてくる声に聞き覚えがあることに気が付き、私
はベットをおりてカーテンを開いてみた。自分ではそっと開こうと
思っていたのに、思いのほか勢いよく開いてしまう。

そのせいで開いた先にいる人たちの視線が私に集まった。

「お、起きたのか椎名。心配したぞ？」

「せん…、せい？」

私の言葉に先生は、じゃあ他に誰に見える？、微笑みながら返し
てくる。

私は訳が分からなかった。私はなんで死んでないんだろう…。
確かに窓から飛び降りた時の浮遊感や、落ちていくのを感じた風
を憶えている。なのに私はここにいる…。

「私、何で…」

「ビックリしたよ。桜井たちに言われて駆けつけたら、椎名、お前が倒れているんだからね。」

見た所頭をぶつけたとかはなさそうだったから保健室に連れてきたんだ」

「嘘です！ 私は教室の窓から飛び降りたはずです！」

私は説明する先生の言葉が信じられなかった。

思わず出してしまった大きな声に、桜井さんたちを黙らせてしま

う。

私はハツとして、すみません、と言いながら頭を下げる。

「大丈夫だよ椎名。そんな夢を見るぐらいだ。きっと気分が優すくれなかつたんだ。気にする事じゃないよ」

「夢……」

本当に夢だったんだろうか。私が感じたあの感じは嘘なんだろうか。

私が悩んでいると、先生が近づいてきて私の頭を撫でた。

「何か悩み事でもあるのか？ そんな夢を見るなんて普通じゃないだろ。まあ早とちりだったら申し訳ないがね」

先生の言葉に私の心臓が大きく鳴った。別に悪い事を隠してるわけじゃないのに胸が締め付けられるような感覚に襲われ、息がうまく出来ない。

するとそれを察してくれた先生は、私の背中を擦りながら、まあ落ち着こうか、と言ってくれて、私は落ち着こうと出来る限りの深呼吸をする。

最初はうまく息が吸えなかったけど、何回か繰り返すうちに徐々に徐々に息が吸える範囲が広がっていく。そうしてようやく落ち着く事が出来た私は先生のほうを向いた。

「あ、ありがとうございます。もう、大丈夫です」

「よかったよ。私のほうもすまないね。その様子じゃ立ったままは良くないな。座ろうか」

そう言って椅子を私に差し出してくれて、私は素直にそこに座った。

すると一緒にいた桜井さんたちの視線が集まる。

「あ、みなさん。ありがとうございます。遅くまでごめんなさい……。私なんかの為に……」

私はお辞儀をした。どんな形であれ、迷惑をかけてしまったのは申し訳なかった。

すると丁度、校内放送が入る。

『山川先生、山川翠先生。至急職員室にお戻りください。もう一度繰り返します……』

その放送を聞いた先生は顔を両手で押さえ、忘れていた、と言う。顔面蒼白だ。

「今日は職員会議の日だった。私はここで失礼するよ。君たちももう少しゆっくりしていくといい」

言い終わるなり先生は血相を変え急いで出て行ってしまい、廊下

を駆けていく音が聞こえてくる。

その音を聞きながら、静かになった保健室に、私と桜井さんたちは取り残されてしまった。

「もう、大丈夫なの？ 椎名さん」

私は気まずいこの雰囲気には耐えられず、椎名さんに話しかけた。椎名さんはただ頷くだけで、またさっきと同じように静かになってしまう。

うっっ……、どうしよう……。

「椎名さん。ちょっといいかな？」

その時、今まで黙っていた雅ちゃんが口を開いた。

「あ、はい。なんでしょうが」

「さっき言った事。どうなのかな」

「さっきといつのは…」

すると雅ちゃんは椎名さんに近づき、少ししゃがんで椎名さんの目線に合わせる。

身構える椎名さん。そして気にすることなく椎名さんを見つめる

雅ちゃん。

「何か悩んでる事があるなら、私たちなんかで良ければ相談に乗るよ？」

「…」

雅ちゃんの言葉に椎名さんは少し困ったような顔をする。それを見ていた歩美ちゃんが後ろから雅ちゃんの両頬を引っ張った。

目の前で急にそんな事をやられ、椎名さんはキョトンとしてしまふ。

「アンタ急に真面目な事言っちゃって。私たちまで困るわよ」

「はひほ〜！ わらひらっれ、ほんなほひもあるわほ〜！」

思いつきり引っ張られているせいで何を言っているのか分からない。

何とかしようとジタバタする雅ちゃんだけど、それでも放そうとしない歩美ちゃん。雅ちゃんは、はらひへ〜、と訴える。

するとそれを見ていた椎名さんは、口元を押さえながらクスクスと笑っている。それに気付いた歩美ちゃんが手を止めて放した。雅ちゃんは頬を擦りながら痛そうにしている。

「ふふ。笑ってくれた。雅、良い仕事したじゃない」

「…なんか複雑だけど、よしとするわ」

二人はそんな事を言いながら満足げにしている。

その様子に気付いた椎名さんは、途端に恥ずかしそうにしていた。

「じゃあその茨さんって人が亡くなって元気がなかったんだ。そりゃあ仲が良くて身近な人が死んじゃったら落ち込むよね」

私たちはあの後雅ちゃんが、じゃあ改めて話でもしない？、と言って、椅子を輪のようにして話していた。

椎名さんは最初、少しおどおどとしていたけど、しばらく喋っていると、それが解けていき、しっかりと話せるようになっていた。

「はい…。でも多分、それだけじゃなかったんだと思います……」

「え？ どういう事？」

「それは……」

椎名さんは少し戸惑う。しばらく考える素振りを見せ、ようやく答えてくれた。

「…私、教室にいるのが好きなんです。『あの時間の教室が』、なんですけど」

あの時間と言つのはさっきまで教室にいたのを考えると、みんなの帰る放課後の事だろう。でもそれがどう関係あるのか分からず、私や雅ちゃんたちはその後の言葉を待った。

「疲れた〜、って思った放課後に教室にいと、みんなが帰った後、夕焼けが教室をオレンジに染めるんです。そんな時私一人がこの教室に残って、窓から外を見ると、そこから見える景色も教室と同じ

ように染まっついていて綺麗なんです」

椎名さんを見ると表情がすごく柔らかで、それがどんなに好きなのかが見える。

でもふいに表情が強張ってしまった。

「でも…、人ってどんなに好きなモノでも、いつか忘れてしまう…。それが私には許せなかった。

だってそうだとしたら、今まで愛していたモノの存在意義が無くなってしまふんですよ？ それじゃあ忘れられたモノたちがあまりにかわいそうじゃないですか…」

本当に悲しそうに言う椎名さん。そんな様子にみんながみんな、言葉を失ったようになってしまった。私たちは物事をそこまで考えた事も無い。そんな私たちにはかけられそうな言葉があるはずもないから…。

「でもそれは自分自身にも言えて、私だって忘れちゃうかもしれない…。茨の事やあの景色を……」

椎名さんは次第に涙声になってきてしまい、目には涙を浮かべていた。側に座っていた私は、小さくなっている椎名さんの背中を擦る。でも逆にそれがいけなかったのか、ますます小さくなってしまふ。

私は思った。

きっと辛い事があって、いろんな事を考えすぎてしまって、訳が分からなくなってしまうたのかもしれない。ただでさえ気苦労の耐えない学校生活。それに合わさって大切な人の死によって考えが余計にまとまらなくなってしまった。

一人で抱え込んでしまったから…。

そんな時、誰かがそつと手を差し伸べてあげられたら、何もこ
まで考え込むなんてなかったかもしれない。

すると、そんな風に私が考えている私の隣にいた雅ちゃんが突然
立ち上がった。

「私に考えがあるわ。みんな」

人差し指を立ててニツと笑っている雅ちゃん。

「その考えってなんなの？ みやびん」

すみれちゃんが頭に『？』を浮かべながらたずねる。私と歩美ち
ゃんも同じ思いだ。すると雅ちゃんは、えつとね、と言ってその案
を話し始める。

私たちはそれぞれ反応を示す。

でもそれは反応の仕方であって、みんなの返事は同じだった。

久しぶりに訪れたこの場所は、やっぱり暗く静かで一人で寄り付
くには怖い。

でも確か場所はもっと先の方のはずだ。少しずつ少しずつ、目的
の場所へと近づいていく。もうほとんど空は暗闇に染まっていて、
余計に今歩いている通りは暗く感じさせる。

ようやく着いたその場所には花が置かれていて、その中には小さ

な写真立てが置かれている。

「茨…」

小さく呟きながら近づいていき、私は持っていた花を置く。

すると私の後ろからスツと誰かが前に出てくる。それは一緒にやって来た桜井さんだった。手には線香が握られていた。

それを缶の上の所を切り取ったものに挿した。そして手を合わせる。後ろで見ていた私と永倉さんたちも同じように手を合わせた。

これは永倉さんが言った案だった。

『忘れてしまう人がいるなら、覚えてくれる人を創れば良いんだわ』

それならプライマイゼロだわ、とも付け足している永倉さんの表情は誇らしげだ。

『でも…、どうやって……？』

『それはこれからいろいろと頑張らなきゃいけないわ。けど…』

『…けど？』

そう私が訪ねると永倉さんが、そうね、と言って他の三人の事を見る。すると三人は永倉さんの所に集まり私の前に立った。

『少なくとも私たちは今すぐにも力になってあげられるわよ。いろいろとね』

『え?』

『アタシ等で良かったらさ、その莪って子の事、どんな子だったのかもつと聞かせてほしい。椎名さんがそれだけ思う人なんだし、きつと良い人に違いない』

近藤さんがそう言うのと、他の二人も同じ思いのようで、その言葉に頷いている。

『でも、何でここまで…? 私なんかの為に…』

私にはそれがよく分からなかった。私と桜井さんたちに関わりなんてほとんどなかった。それなのになんで……。

でもそんな事を考えている私のおでこを永倉さんは、何言ってるの、と言いなから人差し指で小突いてきた。

『私たちは好きでそうしてるの。確かに莪さんのようにはいかないかもしれないけどね。椎名さんは私たちと友達になるのは嫌?』

『嫌なんてそんな…。って、とも、だち?』

『なら良かった。じゃあね、椎名さんの呼び方はね』

私の疑問が聞こえていないように話を進める原田さんと永倉さん。その様子をやれやれといった感じで見守っている近藤さん。私はどうすれば良いか分からず、オロオロしていると、桜井さんが肩を叩いて微笑みかけてきた。

『あはは、いつも通りだから気にしないで。悪くはしないから』

『悪くはしないって…』

その言葉に一抹の不安を感じてしまう。

『あ、でもね。雅ちゃんたちは本当に良い人たちなんだよ。私が保証する』

『いえ、それは分かります。けど私なんかがいても迷惑じゃ…』

『それで良いんだよ。私たちなんかいつもみんなで色々な迷惑かけあっちゃったりしてるんだもん。それをみんなで助け合ったりするんだから大丈夫』

桜井さんはそう言って三人の方を見る。私も同じように見た。三人の話す姿は、本当に仲のよさそうな光景だった。

すると突然、その視線に気付いた永倉さんが寄ってくる。

『もう！ 二人だけで何しめじめしちゃってんのよ』

『あ、うん。ごめんごめん』

『ほら、しいちゃんも。遅くなっちゃうから行きましょ？』

『え？、あの、何処に』

その後向かったのがこの場所。途中お花や線香を買い、今こつやつて手を合わせている。

ここまで来るまでいろいろ話したりしていたけど、みんなこの時だけは静かに手を合わせて目を瞑っていた。

そして私は莢に心の中で話しかけた。

莢、私寂しいよ。何で急にいなくなっちゃったの？ 莢がいなくなったら、私どうすればいいか分からなくなってた…。

時間が経てば経つほどその思いが大きくなっていったって、どうすれば良いか分からなかった。

いつだったか一緒に話してたよね？ 私が放課後の教室が好きだった。莢がいなくなると寂しかった時、そこで一人でいつも泣いていたの。そうすると、なんだか少し気が楽になったから。

でもいつまでもその景色であることは出来ない。少し経てばすぐに空を暗く染められちゃうから。

時間が好きなものを無かったものにしてしまう。いつか好きだった莢といた記憶も、もしかしたらその空と同じように黒く塗りつぶされちゃうって思ったの。

だから私、いつその事死んでしまったら、自分の時間を止めてしまえたらなんて考えちゃって…。あ、でもそれは夢で済んだから心配しないでね。

ただ、ほとんど本気だった。そんな事…、莢が悲しむだけだった分かってるのに。

心配させたかもしれないから、ごめんなさい……。

すると突然、少し強い風が吹いた。

頬を撫でるその風は、この季節にしてはとても心地よかった。

「じゃあ暗くなる前に行こっか？」

確かに。これ以上暗くなったら親が心配してしまう。

私たちはその場所から離れようとした。でも一人、桜井さんがその場から動かない。

「どうしたんですか？ 桜井さん」

声をかけられた桜井さんは大げさなほどビクツとする。そんなに驚くほどだったろうか。

「う、ううん。大丈夫。今行くね」

そう言つと急ぎ足でこちらに来た桜井さん。少し胸のポケットのあたりを気にしているみたいだけど…。

「ごめんね。雅ちゃんたち待ってるし、行こうか？」

「あ、はい。行きましようか」

先に行く三人に追いつこうと、少し小走りになる私たち。ふと後ろに振り返ると、さっきいた場所がもう遠い。

でも今までのような寂しさや悲しさはそこまではなくなっていた。今は桜井さんたちが側にいるから。

だからって茨の事を忘れるつもりはない。茨と一緒にいた時間は大切なものだから。

「ほら二人とも。暗くなっちゃうよ」

永倉さんがこちらに声をかけてくる。桜井さんは私のほうを見た。なんとなくその視線の意味が分かった私は頷いた。

「今行くよ」

私たちは声をそろえて返した。

手を合わせている私たちに風が吹くと、私の胸ポケットにいたルリちゃんが顔を出す。

「あの椎名って子、愛されていますね」

「どうして？」

中から出てきて、吹いてくる風に目を細めて全身で受けるルリちゃん。

「この風に茨さんの思いが乗せられています。椎名さんに向けて、頑張つて、つて。死んだ自分より生きてる人を思うなんてすごいと思います」

「へえ。ルリちゃんそんな事も分かるんだ」

風の妖精ですからね、と言って胸を張るルリちゃん。風でそんな事が分かるなんて本当にすごい。

すると、そうだと、と言ってルリちゃんが何かを思い出した。

「私は人間もその事を知ってるのかと思った詩がありましたよ。凜

はメアリー・エリザベス・フライが作った『Do not stand at my grave and weep』って詩を知ってますか？」

「うん。ちょっと分からないかな。その人がどうしたの？」

「同居していた友人マーガレット・シュワーツコップの母が死んでしまった時、悲しむ彼女の為に作った詩だそうです。確か最初の方が、

『Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.
I am in a thousand winds that blow.』
だったでしょうか」

ルリちゃんは分かりますよねって感じで言うけど、やっぱり分からない。

それを感じ取ったのかルリちゃんは、英語の勉強をしつかりしましょうね、と言ってきた。まったくもって返す言葉がありません…。

「日本語で、

『わたしのお墓に佇み泣かないでください

わたしはそこにはいません、眠ってなんかいません

わたしはふきわたる千の風』

ですよ。勉強になりましたか？」

あれ？、それってもしかして…。

「『千の風になって』?」

日本ではそう言われてるんですか?、と言うルリちゃん。すると
「うん、」

「どうしたんですか? 桜井さん」

と、椎名さんの声がして、私とルリちゃんはビクッとする。
ルリちゃんは慌てて胸ポケットに飛び込んだ。

「う、ううん。大丈夫。今行くね」

ポケットの中で変な体勢になってしまったのか、もぞもぞと動く
ルリちゃん。

そのくすぐったさに耐えながら、私はみんなの元へと急いだ。

第五楽章 『趣意【シュイ】』 了

第六楽章 『t w i l i g h t【タソガレドキ】』 7 (後書き)

作中の中に出てた詩の作者は、あくまで有力説です。
断定的な感じで書いてしまってスイマセン。

〈間奏曲〉

数日が経ったある日、私は先生に呼び出されて前に行った教員室にいる。先生は用意していたコーヒーを私に差し出すと、自分の席に着いてコーヒーに口を付ける。

ルリちゃんはどうと、教員室にある道具に興味を示し、難しい顔をしながら眺めている。

「こんなもの…、何に使うんでしょうか？」

さつきから同じような事を呟きながら、いろんな物を触っているルリちゃん。あんまり見たことが無いそんなルリちゃんの姿に、思わずクスクスと笑ってしまう。

「ふふ。気に入ってくれてうれしいよ」

先生も同じように笑いながら、ポケットからタバコを取り出して一本啜え、それに火をつける。本当によくタバコを吸う人だなあ。

机にある灰皿を見ると、それを物語るような吸殻の山が…。少し吸い込んだ後、口からタバコを離して白い息を吐いた。

「椎名のことだけどね、やっぱり君や永倉たちに頼んでよかったよ。前とは全然様子が違うし、何か悩んでるっていうのもなさそうだからね。無理なお願いをしてしまった私なんだが、本当に礼を言うくらいしか出来ないのが…」

「いえ、そんな。でも椎名さんの力になれたならよかったです。それに今、こうやってコーヒーを貰えることですし」

それはよかった、そう言っただけ微笑む先生。

さっき言ったとおり、私たちは別に特別な事はしたとは思ってない。だから私にはそう言われてもピンと来なかった。

今では椎名さんは私たちと一緒に行動する事が多い。時々雅ちゃんのパースについていけない時があつてオロオロする事もあるけど…。

でも、一緒になつてお喋りなんかをしていると、本当に良かったと思う。

「あ、そういえば聞きたいことがあつたんです」

「ん？ なんだ？」

「どうして私たちに椎名さんの事を頼んだんですか？」

他に人はいるのに、なんで私たちだったんだろう。それが疑問だった。

私が疑問を投げかけると、簡単な理由だよ、と返して微笑む先生。

「ステンドグラスと言うのは知っているな？ 桜井」

「あ、はい。いろんな色の小さなガラスが集まって、一つのガラスになつてるものですよ。教会とかにあるようなイメージですけど。何かの絵になつてたりして綺麗ですよ」

「うん。でもそのステンドグラスというのは造る時に結構手間がかかるんだよ。まあ手間がかかった分、いろいろな色が使われて綺麗なんだけどね」

「はあ…」

一体何が言いたいのか……。私は分からなかった。

「それと一緒になんだよ、お前達は」

「？」

「違う考えを持っている事で対立してしまうならと、みんなが同じような考えを持つ奴らだけで集まって集団を作ると言うのに、お前からきたら一人一人違う考えを持っている。なのにお前らはどの集団よりも綺麗にまとまっているように見えるんだ。そう、まるでステンドグラスで出来た一枚の絵のようにね。だからかな。」

説明がつかないというのは私には不思議でしょうがない。でもそんなお前達なら椎名を受け入れてくれるだろうと思っただんだ」

面と向かってそんな風に言われると、ちょっと照れくさくて恥ずかしさから俯いてしまう私。それでも私たちの事をそんな風に気にかけてくれていたんだと思うと、先生に対して感謝したい。

すると先生もその私の思いが分かってしまったようで、同じように恥ずかしそうに頭をポリポリとかいている。

そしてどちらからともなく笑いがこみ上げてきてしまい、先生と私は二人してクスクスと笑い合った。

もうそろそろ休み時間が終わってしまうので、私は帰ろうと席を立った。

すると、

「時に桜井」

「はい？　なんででしょうか？」

「お前はどうか？　なんだかここ最近いろいろと何かやっているようだ。今まで真面目に授業を受けてたお前が、授業中に寝たりしている。他の先生から報告がある。別にそれは構わないが、何か面倒ごとか？」

構わないって…。先生としてその言葉はどうかだろうか。

「まあ、面倒ごとといえば面倒ごとなんですけどね…」

そう言って思い出すのは椎名さんの一件があった日のことだ。私は一つ溜息をついた。

あの日、雅ちゃんや椎名さんたちと別れた帰り道。もうそろそろ家に着くところで携帯メールの着信があった。

誰だろうと携帯を開いてみると、その送り主は成瀬君だった。もしかして今日休んだのを怒ってるんだろうか。

恐る恐るメールを全文表示してみると、

『かわいがり決定』

とそれだけが書き込まれている。

…かわいがりってどういう意味だろう。でもなんとなく成瀬君が言うのだから良い意味ではないと感じ取れる。

「…どういう意味なんだろうね」

「きつと良いことではないのは確かだよ。成瀬君が言っただし、
そうでしょうね、と言って私の顔を見て心配そうな顔をする。
私は苦笑いで返す事しか出来なかった。」

カンツカンツと乾いた木と木がぶつかるような音を聞きながら、
身動きの取れない私はその様子を見守るだけだった。

メールがあつた次の日は休みで、早速あのメールにあつた『かわ
いがり』というものが行われている。

と、早速凜がついていけずに膝をついてしまったよう。息も上が
っついて動けそうも無い。だけど、

「ほら。立て。あと30分は打ち込みと受けの繰り返しをするんだ
から」

「で、でも…」

なかなか立ち上がらない凜に、じゃあそのままが良い、と言いな
がら雑刀を振り上げる。そしてそれをそのまま凜に向けて振り下ろ
した。

「!?!?」

その行動に凜は驚きながらも何とか持っていた自分の薙刀を両手を広げて持つて防ぐ。そして後ろに少し下がった湧樹を見て、凜はヨロヨロと立ち上がる。

「なんだ。やっぱり動けるじゃな……」

「ちょっと本気なの！？ 怪我する所だったよ！？」

声を張り上げて言う凜を見ながら一つ息を吐く湧樹。そしてその刹那、持っていた薙刀の切っ先の部分を凜の顔の目前に突き出されていた。

もともと本物の刃ではないので切れることは無い。でも湧樹の威圧感と突然のことでの混乱からか、まるで本物の刃を向けられているようにビクツとしながら動けない凜。

「今この時、対峙してたのが俺じゃなくてお前が襲われた時のような相手だったら、凜、お前のその言葉を素直に聞いてくれると思うか？」

「……」

そう言われて何も言い返すことが出来ない凜。

湧樹の言う事は悔しいけど本当だ。退魔士なんかが相手にするのは、人の世に災いをもたらすような存在。凜もそういうものを相手にしなくてはならない。これから先、魔術を身につけようとそれは変わらない。

だからこそ厳しくして湧樹は凜に気構えをしつかりするようにと言っているのだろう。なんと言うか、わかりづらい人だなあ……。不器用と言うんだろうか？

「ごめん…、なさい……」

しばらくして凧は小さく泣きそうな声で謝る。目には決壊寸前という感じで涙が溜まっている。

それを見た湧樹はギョツとしながらめんどくさいといった感じで頭を掻く。

「泣くな。お前が頑張ってるのは分かってる。それにやる気の無いような奴に付き合うほど俺はお人よしじゃない。だから自身を持ってい……」

あゝあ、そんな事言ったら逆効果だというのに……。

案の定、私の思ったとおり凧の目からは涙が零れていく。そのまま口を『へ』の字のようにして我慢をしようとするんだけど、いくらも経たないうちにヒクヒクと泣いてしまう。突然泣き出してしまった凧に湧樹はオロオロとしてしまう。

一体何をしてるんだろうか……。

私は何もしないようにとクルクルと体を紐で巻きつけられていて、何も出来ないで見守っていた。

「あつはっは！ それはなんだ。コントなのか？」

ああ……。私のほうの考えてた事を読まれてしまったんですか。本当にこの人には嘘とか隠し事が通じなそうです。

ああ、すまないね、と言いながらまだ笑っている。

凧はというと顔を真っ赤にして怒ったようなと恥ずかしそうなとが交じり合ったような表情となっている。

ひとしきり笑うと、女性はようやく落ち着きを取り戻す。

「でもそれでどうするんだ？」

「まあ今のところは今度の休みに成瀬君の家に行つて、今現在の実力判断に向けて頑張るしか……」

「いやいや。違うよ桜井。私が聞いているのはこの先お前は どうしたいんだ？ 退魔士になるつもりなのか？ そんなに必死だからそう考えているんだと思つてただけだね」

そう言い終わらすと、もう一本タバコを吸い始める女性。その様子に本当にここまで来ると依存症の類たぐいなんじゃないかと思いつつ、苦笑いを浮かべてふと凜の顔を見ると、難しい表情をして考え事をしているようだった。

何か話しかけようと思つただけで、話しかけられるような雰囲気じゃないと思ひ、ただただ凜の事を見守るだけとなつてしまつた。

とても静かな夜。私は部屋で一人机に向かって座っていた。私の手には一通の手紙が握られている。今日届いた封筒の中に入っていた物で、私ではなく湧樹宛の手紙。

自分では読めないので、代わりに美央さんに読んでもらうと、差出人は退魔機関が置かれている「外務省」と記されているよう。

私はその手紙に顔を近づける。ただただ紙とインクの匂いが鼻の中を通っていくだけ。いくらエコーロケーションを使っても、平面の物の違いは分からない。

「…」

内容は湧樹に対しての通告。穏やかなものではないようだった。私は手紙をギュツと握り締めて考え事をしてしまう。

すると誰かが部屋に近づいてくる気配がした。間もなく襖を叩く音が。

「巴様。失礼いたします」

「どござ」

返事をするスーツと開かれた襖の向こうには、和服をしっかりと着こなす美央さんが立っていた。

湧樹がいなくなってからここに来て、私と共に生活をしている女の子で、私の代わりにお料理をもらったり、身の回りのお世話を何から何までしてもらっている。

幼さの残る顔つきだけど、物腰が柔らかかで本当によく出来た子。とても中学生に思えなかった。

「もう美央さんたら、いつまでもそんなに硬くならなくて良いのよ？ 巴さんって呼んでくれて良いんだから」

「はあ…。でも……」

「もう。なんだったら『お母さん』でも許しちゃうわよ？ 美央さんはもう家族みたいなものなんだから」

「そんな、『おかあさま』なんて……」

「冗談のつもりで言ったのだけど、美央さんは恥ずかしそうに口ごもってしまっている。そんな様子がとてもいとおしく見え、つい口元を押さえて笑ってしまう。

女の子がいたらこんな感じだったのかしら…。私の家族は男の人しかいなかったから、こうやって同性の人とお話をするのは新鮮に感じる。

「お、お食事の用意が出来ましたので、お越しになってください。失礼します」

「そう言い残して足早に部屋を後にしようとする美央さんを、私は呼び止めた。

「もうすぐね。湧樹が面倒を見ている子と戦うの。大丈夫？」

私がそう言った瞬間、美央さんは足を止める。そして美央さんが発している雰囲気途端に変わったのが肌で感じ取れた。

「大丈夫です。私…、負けるつもりありませんので」

そう言っている美央さんの声のトーンも香りも、優しさが感じられなくなってしまう。そんな雰囲気に押されて、私は何も言えなくなってしまうた。

すると、では失礼します、と言い残して美央さんは何事もなかったように部屋から出て行った。

息が詰まるようなほどの雰囲気に吞まれていて、私の耳に足音が聞こえなくなると、そこでようやく大きく息を吐けた。

こっちに帰ってきて、あちらでの様子を話した時もこんな感じだった。どうも湧樹が面倒を見ている子が気にかかるらしい。

「若いわねえ。フッフ」

そう言いながら静かに立ち上がり、部屋を出た。

六月も半分を過ぎて梅雨も中休みなのか、日差しがキツく、もうすぐやってくる夏を告げているようだった。

そんな暑さを避けながら俺の実家に向かう為、電車で何駅かの所にある秋葉原に向かい、そこから出ている新しい路線に乗っていた。まず最初の目的地は終点のつくば駅。乗り換えもなくまっすぐに向かっていくだけの電車旅。

俺たちはボックス席に座り、向かいの席には夏美さん、俺の隣には凜が座っている。

夏美さんはいつもどおりのスーツ姿。足を組んで手を膝の上に置

いて握り締め、さつきからずつと外を見つめて黙っているだけだ。きつとあの街を離れるのが嫌なんだろう。夏美さんの追っているリイがいつ現れるか分からないのだから。

一応ウインさんが、ここであちらからの報告を待ちたい、と言ってきたので、代わりにあの事務所にいてくれることになってくれたけど、その事を考えると気が気じゃないんだろう。

…対して横にいる凜だが、

「ん〜…」

よく緊張感もなく眠れるものだ。今日俺の家に行く目的に自分の事も含まれているというのに。

そんな俺の思いを知らないであろう凜は起きる気配を全く見せない。膝の上でルリまで一緒に眠っている。確かに朝は早かったけど…、まさかこんな簡単に寝てしまうなんて思わなかった。

すると頭が俺の方に傾いたと思ったら、そのまま俺の方へもたれかかってくる凜。しょうがなく俺はそのままもたれかからせた。あまりの緊張感のなさに溜息が出てしまう。

そこを夏美さんに見られてしまう。

「ふふふ。逆に良いんじゃない？　ずっと頑張ってたから疲れもあるだろうし」

「そうっすね。でも寝られてられるほど余裕はないと思うんですけど…。まあやれるだけの事はやりきりましたから、結果はどうであれ、俺は後悔は無いです」

「あら？　じゃあ明日でお別れなの？　契約解除の書類忘れちゃったわ」

そう意地悪そうに笑いながら言う夏美さん。

さっきまでの雰囲気はなんだったんだ。心配してそんな気分だ。俺は少しムスツとしながら腕を組む。その様子を見ていた夏美さんは口を手で押さえまた笑う。

横を見ると一切関係ないといった様子で眠り続ける凜。それに意味なくムカツとした俺は軽く頬つぺたをつねる。凜は、痛い、と小さく言いながらも眠るのをやめない。それどころかルリが、やめろ、と凜と同じように眠りながら言うおまけ付きだ。

なんだかその様子に自分が惨めになる。俺はすぐに手を離れた。

「それにしても私に用があるって…。巴さん、どうしたのかしら。成瀬君は何か聞いてるの？」

「いや、何も。俺だけじゃダメか？、って聞いたんですけど、夏美さんにも来てほしいって聞かなくて。

本当にスイマセン。俺の親が無理言って」

大丈夫よ、と夏美さんは優しく言ってくれるけど、やっぱり悪いって思いは消えない。

本当になんだと言うんだろう。急にそんな事を言うなんて…。

「やっぱり成瀬君を即刻帰ってくるようにしたいのかな？ 『こちらが勝ったから湧樹を返してもらいます』って感じで」

…無いとは思う。けど、なんかありえなくもない気がする。

イマイチ今回の母さんの考えてる事が分からない。でも俺だけじゃなくて夏美さんにも用があるとは、結構穏やかな事ではないのではないか。そう考えてしまう。

「それで、成瀬君の家ってどこにあるの？」

「あれ？ 最初に出した俺の資料に書いてあったと思うんですけど」

「そうだったけ？、ととぼけた事を言う夏美さん。何のための資料だったんだあれは…。」

俺は一つ溜息をして夏美さんの問いに答えた。

今日何回俺は溜息しているんだ…。」

つくば駅に着いてバスに乗り換え、バスに揺られること数十分。私たちが乗っているバスの前に大きな鳥居が見えてきた。

「ホントに成瀬君の家ってここなの？」

「今更嘘ついてどうするんだよ。ここまで来て、ドッキリでした、なんて時間の無駄だろ」

「いまだに信じられずにいる凜に、もう聞き飽きたといった感じで返す成瀬。」

凜がそう言うのも分かる。私もここまで来たのに同じ思いだ。

「嘘じゃない証明に、もうバス降りますよ？」

そう言ってバスの下車ボタンを押す成瀬。しばらくしてバスが止

まり私たちは降りる。そこには参拝客の人たちなのか、休日なので結構な人で溢れていた。確かこの山って登山でも有名って聞いた事がある。そういう人たちもいるんだろう。

すると、こっちつすよ、と言いなから先に行く成瀬。私たちは付いて行くと目の前に階段が現れた。

「疲れるかもしれませんが、この上なんです」

凜は露骨に嫌そうな顔つきになる。

それでも私たちはまた同じように成瀬の後に続き、その階段を上っていく。上りきった先にはとても清らかな空気に包まれた境内があり、拝殿がどっしりと構えていた。

見るとそこに誰かが立ってこちらを見ているのに気付いた。

「…お待ち、してました。…お客様、ですね？」

「あ、はい。えっと…」

私たちが客人と分かっているようだけど、私は面識がなかった。戸惑っている私を見てか、成瀬が割って入ってきた。

「ただいま。美央」

成瀬の言葉にぺこりとお辞儀をする美央と呼ばれた女の子。

おかつぱ頭で幼いように見えるけど、藍色の着物を着こなし、どこか落ち着きのある姿は大人っぽさも併せ持っているようで、そのアンバランスさが絶妙だ。女である私でも見惚れてしまう。凜とルリも同じように感じているのか、黙ってその子のことを見つめていた。

その視線に気付いたのか美央という子は、凜に近づいていきじっ

と見つめ返す。凜は固まって動けなくなっている。

「…あなたが、凜さんですか？」

「え？ はい、そうですけど…」

すると左手で着物の袖を掴みながら右手を前に差し出してきて笑顔を見せる。

「…今日は、よろしくお願ひします」

「あ、すみません。えっと…」

凜は慌てて持っていた薙刀の入ったバッグを置いて右手を出し握り返す。こちらこそよろしくお願ひします、と凜が言ってお互いに手を放した。

とても穏やかな雰囲気であわされた握手だった。

「…」

でもなんだろう…。あの子、なんだか……。

「あらあら。みなさん遠い所お疲れ様です」

と、ここで丁度成瀬の母、巴さんがやって来た。こちらも美央さんと同じように着物姿だ。

杖を突きながら風で流れる髪を押さえる姿というだけなのに綺麗に見える。本当に所作に無駄が無い。

「立ち話もなんですから、お部屋の方に上がってください。お茶の

準備をいたしますので」

「…あ、私、用意してきますね」

そう言って美央さんはそそくさと建物の中に入っていく。

「さあ、どうぞこちらに」

促されるまま歩き出そうとした時、後ろを見ると立ち止まってキヨキヨ口としている凜が。

何をしているのかと見てみると、私の視線に気付いた凜が話しかけてくる。

「あの、なんでここ人がいないんですか？ さっき下にいた時は結構人がいましたよね」

「ああ、そういえば…。でも多分これは……」

私はそう言つて上つてきた階段の方に行つてみる。階段の最上段の両端を見てみると、思ったとおりそれらしき物があつた。

後から付いて来た凜に指をさしてそれを見せる。

「これは？」

「多分札による人払いね。東洋のそういう術は専門外だけど、似たようなのを見たことはあるわ。」

分かりやすく言つと、『簡易的な結界』、つて所かしら」

そうは言つてもなかなか簡単なことではない。ここに来ようとす
る人たちを、ここを無意識に来させないようにするのだから。それ

をこれだけ簡単に行つてあるのだから、あの巴さんという人がどれだけすごいのが分かる。

…でも、個人的なことでもこんな事していいのかしら？

私はそんな事を考えながら、先を行つた巴さんたちを凜と共に追いかけた。

シンと静まり返って独特の雰囲気をかもし出している屋敷の中を進んでいき、ここでお待ちになつてください、と巴さんに言われ客間に通された私たち。さつき見た神社の造りと同じように、歴史が感じられるような木の造りの家だ。

大きく息を吸うと、見た目どりの木の良い香りが鼻を通っていく。よく観察してみると、剥き出しになつていて見えている柱の木々には痛んでいるような様子が無い。歴史ある建築物だと思われるのに今尚現役で住まいとして使われている所を見ると、どれだけ手入れなどが行き届いてるのが窺える。いや、もしかしたら昔の建築技術がそういう面で優れていたと言う所だろうか。

「なんだか緊張しちゃいますね。凜」

「うん。こんな雰囲気だとんだかかしこまっちゃうね」

ルリはテーブルの上に、凜は敷かれていた座布団の上に同じように正座をしている。キョロキョロするのも一緒。まるで小さな女の子の姉妹みたいだ。

私はその様子を見て思わず笑つてしまう。いきなり向かいの私がそんな事をするものだから、私の事を不思議そうな目で見ている二人。

「なんでもないわ。ごめんなさいね」

「いや、別に大丈夫です。…あ、そういえば成瀬君はどうしたんですか？」

「確か先に手を合わせたって」

俺は線香に火をつけて手を合わせる。煙が昇る向こう、中に置かれてる写真には二人の男の姿。俺の父さんと兄さんだ。

写真に収められてる姿は昔と変わることは無い。ただこちらに微笑んでいるだけ。

その誰にでも平等に向けられる微笑みを見ると、確かに『仏になった』という言葉が当てはまるかもしれない。

…ん。ちよつと不謹慎だった。何を考えているんだろうか。俺は自分の頭を自分の手で小突いた。

「あの、どうしたんですか？」

丁度そこに美央がやって来て、話しかけてきた。

「あ、ああ。ちよつと、変な事考えちゃってな…」

俺は立ち上がり美央の頭に手をやる。

「改めてただいま、美央。どう？、ここでの生活は」

「…おかえりなさい、ゆうにい。…お母さまにはいつも良くして頂いています。…稽古は辛いですけど」

撫でられたままもじもじと呟くように喋る美央。昔から恥ずかしがりで、あまりいろんな人と話をするような奴じゃない。さっきも夏美さんや凜を見てちよっと警戒しているようだった。

俺がこの家を出て行くときに入れ替わりに入る形で来た美央だったけど、母さんがとても気に入っているようだ。家事のほとんどをやってくれ、母さんがやる事が無いとも言っている。

なんだか申し訳ない気もしてしまう。俺はここを出てって自分のしたいようにしていると言うのに、代わりに家の事を押し付け、やってもらっているようであ…。

「…ゆう、にい？」

「ん？ いや今更だけどさ、母さんの面倒見てもらってるようで悪い気がして…」

「ううん、そんな事…。だって、私の方がお世話になってるんですもん。当然の事です」

胸にそつと手を添えながら言う美央。そういう所作や振る舞いなどを見ていると、もしかしたら俺より歳が上じゃないかと思ってしまう。…いや、俺のほうがガキなのか？

「あ、お茶、用意したんで…。行きましようか？」

「そうだな。みんなも待ってるだろうし」

そう言って美央に背を向けて歩き出そうとすると、後ろから突然俺の袖を？まれる。

どうした？、と言いながら顔を見ると、さっきまでとは違い真剣な表情をしている。

「…私、頑張りますね」

その言葉を物語るような雰囲気を出している美央。俺はただ、ああ、としか言わないと、美央が少し不満そうな顔をする。

どうすればいいのかと思案して、とりあえず美央の頭に手を置いてまた撫でると、満足そうな顔をする美央。

「がんばれよ。美央」

「…はい」

美央は頷いたまま下を見てされるがまま頭を撫でられていた。

そこで俺はふと気付く。

美央に勝たれると不味いんだっけか…。でも昔から可愛がってきた美央にも頑張ってたほしい。

そう考えるとなんだか複雑な心境になっていた。

? ?

神社へと続く階段をほぼ上り終えるというところで、立ち止まって考え込んでいる人の姿があった。

「うーん。行けそうに無いわね。しっかり結界貼られちゃってるし。姉さんたら本当に見事ね」

「巴さん、僕らが来る事忘れてるのかな？」

「うん、多分。結構おつちよこちよいな所あるからね、姉さんて…」

帽子をかぶっている女性の方は、赤を基調としたチェック柄のフ
ランネルシャツをTシャツの上から着て、ボーイズデニムを穿いて
いる。帽子の下の長髪を除けば、格好は男性と思われてもいいくら
いだ。

対して少し大きめの荷物を持つ男性は、無地で紺色のポロシャツ
にダメージも何も無い普通のジーンズを穿いていて、頭がボサボサ
なのを除けばとても大人しそうな印象を与える。むしろ平凡さを自
分から押し出そうとしているようだ。

「…」

その後ろにバッグを持った男の子もいる。その男の子はどちらに
も似ているような顔つきをしていて、二人の息子なんだということが
分かる。

もうここに来てから結構な時間が経っているのか、うんざりとし
た表情を見せてしゃがみこんでいる男の子。

その姿を見た女性は一つ息を吐く。

「…しようがない。あれやっちゃって良いんじゃない？」

「巴さんが美央が来る様子も無いし…。『試し斬り』って事で」

そう言って荷物を置いて周りを気にする男性。人がいないのを確
認するとその荷物の中からスツと布に包まれた細長い物を出す。布

を取り外すと、中から現れたのは鞘に収められている刀。鞘から引き抜かれた梵字のようなものが刻まれた刀身は1メートルはある。ただその長さに対し刀身の幅は大きくても3センチほどで非常に細く、ちよつとした衝撃で折れてしまいそうに感じてしまう。だが、その刀は弱弱しさを感じさせないような独特の存在感を放っている。それを男性は右手で柄を持ち、目を閉じながら振り上げ、そのまま目の前の空間を切るように振り下ろした。

不意にキーンと耳鳴りのような音を感じる。それは木霊こだまするよう響き渡っていき、山から聞こえていた生き物の声が聞こえなくなり、聞こえてくるのはその木霊する音と木々の葉が揺れる音だけ。

しばらくして音が止み、男性は目を開いた。

「じゃ、おじやましましたっけ？」

そう言いながら慣れた手つきで刀を鞘に納めて素早く布で包むと、先ほどまで進めなかった境内へと入っていく。だけど数歩歩いた所で立ち止まる。

目の前には少女と妖精が立っていた。

誰だろうか…。

私たちはちよつと神社の方を見てこようと外に出ていた。ここは本当に空気が澄んでいて心地が良く、そんな場所を満喫しないのは

もつたいないと思った私は凜と共に敷地内を散策していた。

すると不意に私と凜が同時に耳鳴りがして…。そして現れたのは三人の間。

確か今日は巴さんという湧樹のお母さんがここに人が寄り付かないようにしているはず。さつき凜と共に夏美さんに説明されてそうされているのを見たから確かだ。

でも実際目の前には三人の姿がある。帽子をかぶった女性、大荷物を持った男性、その二人の子供と思われる男の子。一体どうやってこの敷地に入ったのか…。

「…あなた、誰？」

女性の方が先にこちらに話しかけてくる。

「えっと、あの、その…」

凜はオロオロとろたえてしまう。するとそこへ巴さんが戻ってきた。

「あら。いらっしやい。美琴さんに義雄さん」

「いらっしやいじゃないわよ！ 姉さんたら私たちの事忘れてたの？ 全然ここに入れなくて困っちゃったんだから」

「あら、ごめんなさい。客人もいたから間違えちゃったわ。…でもここに入れたって事は頼んであったのはしっかりしてくれたいわね」

そう笑いながら言う巴さんを見て、当たり前でしょ、と言いながら呆れたように肩を落としていた女性は、男性の持っていた荷物か

ら紫色の布に包まれた細長い物を取り出して巴さんに手渡した。私はそれを見ているだけなのに、それに吸い寄せられるような気がした。

しばしその細長い物を握りしめる巴さん。

「やっぱり良い仕事してるわね、あなたの所は。本当は手入れとかは自分でやりたいんだけど、私苦手なのよ」

「…もしかして、あれわざとだったの？」

女性が巴さんに聞くのだけど、ただ微笑むだけで答えてくれない。それを見て溜息をつきながら頭を掻く。

「まあいいわ。それで…」

そう言って視線をこちら、というより凜のほうに向ける女性。

「この子が今日美央と戦う子？」

「ええ。そうよ」

そう言われて美琴という女性は凜に近づいてきて、下からまじまじと見つめてくる。

凜の方はどうすれば分からず、ただ黙って動かずにいる。

しばらくして女性は、うん、と言いながら腕組をして離れた。

「中途半端な人だったら私が張り倒してた所よ」

それを笑いながら言う美琴さん。その言葉を聞いて凜は少し顔色が悪くなっていた。

さすがに何も準備をしていないようなら、ここまで来るはずが無いと思うんだけど…。まあ確かにそんな相手ならきつと願い下げだろう。

すると後ろにいた男の子が急に前に出てくる。

「一つ聞きたいことがあるのですが、いいでしょうか？」

「え？ あ、はい。なんですか？」

「あなたは湧にいと付き合ってるんですか？」

突然の質問にキョトンとしてしまう凧。私まで同じようになってしまう。

何を言っているんだろうか。『湧にい』って言うのは湧樹のことで間違いない。

その湧樹と…、付き合っている？

何の脈絡もなく何故その考えに至ったのか分からない。いや、直接確かめた事は無いけど、どう考えてもそれはありえないと思う。現に凧が苦笑いを浮かべているのだし。

「あ、いや、何を勘違いしてるのかな？ 私と成瀬君はそんなんじゃない…」

「そうですか…」

何故か凧の言葉にがっかりする男の子。意味が分からない私たちをよそにトボトボと両親の元に戻っていく。…本当になんだったんだろうか。

私は一人部屋で皆を待ちながら、ポケットから携帯を取り出す。画面を見てみると、電波の強度を表示する所が『圏外』と表示されている。やっぱりここまで来ると携帯は使えないか…。

もう一度ポケットにしまうと、腕を組んで遠くの方を見つめる。見えるのは一面木々の緑色。私は本当にこんな所においていいのか…。見える景色とは反対に気分が良いものではなかった。

「あれ、夏美さん一人ですか？」

そこに成瀬が帰ってくる。その後ろには先ほど見た美央という女の子が付いて来ていた。

おかつぱ頭に着物姿と言う純和風の姿。これぞ日本人、と外国人が声を揃えそうな気がしてしまう。いや、もしかしたら長髪の方が外国人には受けが良いかもしれない。

「…あ、あの。…なんででしょうか？」

思ってるよりずっと長く見つめてしまったみたいだ。

「うっん、なんでもないわ。可愛い子だなって思って見とれてただけよ」

私がそう言うと、頬を紅くして恥ずかしそうにする美央さん。そ

して小動物のように成瀬の後ろに隠れてしまう。

その様子を見て成瀬は、大丈夫だよ、と言いながら美央さんの頭を撫でる。…大丈夫って、それはどういう意味だろうか。逆に失礼にも取れる気がするんだが。私は一言言おうとも思っただけで、後ろで満足そうに撫でられている美央さんの事を見るとそんな気は薄れてしまう。

だが突然、

「お、久しぶりだね、湧樹」

もうその言葉が聞こえた時には、バシィッ！、という音と共に成瀬は悶絶しながらゆっくりと崩れ落ちていく。その側にはビツクリして動けない美央さんと、やり過ぎたわ、と言いながら手を振って痛がっている知らない女性が。

すると私が見ていることに気付いたのか、コホンと咳払いをして仕切りなおすように美央さんの方を見た。

「美央、久しぶり。元気？」

「え、お、お母さま…」

啞然としている美央さんをよそに、お母さまと呼ばれた女性は美央さんを見てニコツと笑った。

第七楽章 『Aufgeben』【ミキリ】 2 (後書き)

お待ちになっていた方々にはお待たせしてしまっただけで本当にスイマセンでした。

今回はやっぱり大変でした。色々です…。

ただ、この先も少しずつとなってしまうので、執筆活動が遅くなってしまうと思います。ご了承ください。

「それで、…うん、…そうですね」

窓の外を眺めながら僕は電話の向こうの言葉に受け答える。一通り聞き終えると、じゃあまた、と言って電話を切った。

大きく溜息を漏らしながら椅子に腰を下ろす。椅子はギュッと皮独特の音をさせて僕を包むように受け入れた。普段こんなものに座りながら何をしているんだと思ってしまう。これだけ座り心地が良いと何もしたくなくなるのではないか？

そんな事を考えている自分に苦笑しながらさっきまでの会話を思い出していた。

あのエンブレムを見てからなんとなく予想していた。でもどうか違つてほしいとも思っていた。

自分自身、この件にはなんら関わりが無いと思っていたのが本音だ。それが結果として遠からず関係があるなんて…。

僕は手で顔を覆い、もう一度溜息をついてしまう。

「でも、悲観しても仕方が無いですね。起こってしまった事を変えられることは、僕にも出来ない…」

そんな夢みたいなきごとが出来るのは神様が過去を変えられるような力を持ったものだ。この世界中探したつて見つからない。

気分を変えたいという思いからか、ふと窓の外に見える空を見上げる。澄み切った青が広がっていて雲なんて一つも無い。最近までずっと雨ばかりだったのが嘘のようだ。

そういえばアンナはどうしたのだろう。僕が、お腹が空きましたね、と言ったら、アンナがキッチンへと向かっていったのを見てから姿を見ない。どうしたんでしょうか？

「…ん？」

なんだか変な匂いがしてくる。ただただ焦げ臭い匂いに驚き、キッチンにいたのである。アンナの元へと向かう。

そこには立ち尽くすアンナの姿が。その見つめる先を見てみると匂いのもとと思われる黒い煙が立ち上るフライパンがあった。

「アンナ？」

僕の声にビクツと大きく反応するアンナ。ゆっくりと振り返ると目には涙を浮かべていた。

「ご主人様…」

注意した呼び方に戻ってしまった。アンナは僕の姿を確認すると、耐え切れなくなったのか手で顔を覆ってその場に座り込んでしまふ。そして声を出して泣き出してしまった。

とりあえず強火で燃え続けるコンロの火を消す。フライパンの上で黒く炭のようになっていた物体がある。一体元はなんだったのか分からなくなっていた。視線を隣へと移すとそれが何だったのかがようやく分かった。

「ぐす…、目玉焼き……」

「え？」

「目玉焼き作ろうと思ったら…、黄身が潰れちゃって…、そのままスクランブルエッグにしちゃって思ったんですけど…、バターを使おうと冷蔵庫の中を探したら……」

それでいつの間にか黒く焦げてたつて……。どれだけバターを探していたんでしょうか……。もしかしたらなかったんじゃないかと僕が見てみると、扉のポケットの所に置いてあるのを見て苦笑いを浮かべてしまう。

考えてみればアンナはそんなに料理をしていたという記憶がない家ではいつも他の誰かが作ってくれていますし、気にした事がなかった。そういう点では僕にも責任はあるかもしれない。

僕は冷蔵庫の扉を閉め、泣いているアンナに近づき、そつと手を頭の上に置いて撫でる

「うん、大丈夫ですよ。慣れない事をさせてしまった僕にも責任はあります。だから泣かないで」

「でも……」

落ち込んでいるアンナから離れ、僕は焦げ付いたフライパンに水をかけ洗い始める。

「あ、やめてください！ 私がやります！」

そう言って僕からフライパンを取ろうとするのだけど僕は、やらせてください、と言ってアンナを制してフライパンにこびり付いている焦げを落としていく。

「これぐらい僕にもやらせてください。それと、次からは一緒に作らしましょうね？」

そう言ってアンナを励ましながら粗方汚れを落としてしつかりと水気をきったフライパンを火にかけて乾かしていく。最後の仕上げ

に一度キッチンペーパーで汚れを拭きとってほとんど元の状態に戻す。

偉そうな事を言ったのはいいけど、さすがにこれ以上ここにあるものを使うのは気が引ける。あるものは好きに使っていいとは言われてはいるけど、好き勝手に使って迷惑を掛けていい訳ではないですし。

大体片付いたところで手を洗いながらアンナに声をかける。

「じゃあどこか食べに行きますか？ アンナ」

「…申し訳、ありません……」

ガツクリと肩を落とすアンナは立ち上がり、力なく歩いていく。本当に、気持ちだけはしっかりといただきませよ。僕は頭を撫でようとした。

…ピンポーン

すると僕の行動を止めるかのようにタイミングよく来訪者を告げるチャイムが鳴る。

…僕としてはタイミングが悪いと言った方が良いんだろうか。

そんな考えをしてみると、客人だぞと主張するように鳴り続けるチャイム。さすがに待たしては悪いと思い、少し急いでドアの方に向かった。

そして、お待たせしました、と言いながらドアを開けた。

待ち人を見る間もなく目に入ったのは振り落とされる何か。ほん

のわずか鼻先を掠めるも、何とかそれを避けながら近くに立て掛けておいた杖を持ち、先を相手に向けながら構える。

もしかしたら僕が関わったのを知った相手が居場所を調べ手を打ってきたのかと思った。落ち込んでいたアンナもさっきまでの雰囲気はなくなり、僕の側で相手の方を睨むように見つめて臨戦態勢だった。

だが、ゆっくりと開かれたドアの先にあるその姿を見て違う事に気がつく。

「あなたは…」

家や神社とは少し離れた所に位置している広々とした道場に私たちは移動していた。

小さな防具や竹刀などがいくつか置いてあり、普段から使われているのが見てとれる。近くに住んでいる子供たちが来ているのだろう。それらしき写真も入り口付近に貼ってあった。賞状とかもある辺り、それなりに強い子供たちがいるんだろう。

「子供さんたちは巴さんがご指導を？」

「初めていらした方は驚きますけどね」

それはそうだろう。普通だったら目が見えない人がどう指導をしているのか考えられないはず。

「最初はずつと半信半疑でうちにいて、でも大会で良い成績をあげるとそんな心配どっかにいっっちゃうみたいですけど」

そう言っつてこちらの方に顔を向けながら微笑む巴さん。その顔を見て私も小さく笑っつてしまふ。

自分の所に来た子供達を文句が言えなくなるほどしつかりと育てる…。だとしたらこの人の指導力というのは並外れているのは間違いないが無い。

例えばスポーツの世界でも言える事だが、周りと比べ能力が格段に高かった者ほど、指導する立場になると自分より能力が下の者を育てる事に長けていないことが大体だ。それは能力が高い故に、自分では感覚で分かつてしまい、言葉にして伝える事が出来ないからだろう。

でも巴さんは違うようだ。そう聞くと巴さんのような人が指導した子と戦う事になった凜や指導をしていた成瀬に、私がこんな風になるように仕向けてしまった事が申し訳ないと思っつてしまふ。

「夏美さん。失礼な事考えてませんか？ 相手の立場である私が言う事じゃないですけど、うちの子の事を過小評価してませんか？」

「え、あ、いえ…、そんなことは……」

ムツとしたような表情の巴さんの言葉に私が苦笑いを浮かべながら答えると、その巴さんはふうつと溜息をついてしまふ。

「あの子はですね、所謂『曲者』なんですよ」

「曲者？」

「相手と自分を比べて自分が劣っていると判断したら、策を練ってその差を無くそうとするんです。今回だって何も考えなしに来るわけがありませんから、我が子ながら油断出来ないんですよ」

そう説明する巴さんの表情や様子に私は微笑んでしまう。本人はいたって平静を装っているようだけど、やっぱりなんだかんだ言っても出来る息子は嬉しいのだろう、なんだか雰囲気が違う。

そう言われてみればそうだ。最初の頃に実力を判断する為に、事務所の屋上で私と相對した時もそれなりにやっていた。

自分が優位に立つために策を練る。ただでさえ成瀬の能力は状況次第で後手後手に回らなくてはならなくなってしまふ事が多い。だからそれを補う為に見つけた一つのスタイルなのだろう。…もしかしたらサッカーが好きなのはそういう所からくるのかもしれない。今回はそれがどれだけ活かせるか、そしてそれを凛に伝えることが出来ているかというところが鍵となってくるのだろう。

「それにしても二人ともなかなか来ませんが、何かしてるんですか？」

「ええ。大事な試合ですからね。こっちで準備しておきましたの」

…準備？ その言葉を聞いて頭に『？』を浮かべて不思議に思っている、丁度待っていた二人がやって来た。そして二人の姿を見て準備と言った意味が分かった。

白い着物に黒い袴姿。一人は恥ずかしそうに、もう一人はなんともないといった表情。恥ずかしそうにしているのは言うまでもなく凛である。初めて着る服に違和感を感じるのか、裾の辺りを気にしている。

それに比べ美央という女の子は堂々としている。

「それじゃあ二人とも揃ったみたいだし、始めましょうか？」

私は促されるまま床の大きく四角い線が書かれている中に入った。立ち位置と思われる短い線の所で立ち止まり、美央ちゃんと向き合っている。見て見るとその両の手には見たことが無い小さな竹刀が。そして美央ちゃんの眼は私を見つめて視線を外さない。

そのプレッシャーに耐え切れず、視線を外し自分の手に持っている薙刀を見る。少し真新しさが残る自分の薙刀に対し、美央ちゃんの持つ竹刀は、熟練者のように汚れている。どれだけやってきたのかが伺える。

それでも今の自分がやれるだけの事はやったはずだった。確かに何でこんな事になったんだろうと思っただけ、ルリちゃんのためにも、私自身の為にも頑張ろうと思っただけだ。ただそれなのに…、不安が押し寄せてくる……。

「どうしたんですか？ 凜」

余程顔に出してしまったのか、肩に乗っていたルリちゃんが心配そうに声をかけてくる。

だけど私は余裕がなく表情も硬いまま、大丈夫、と小さく答えるだけ。そんな反応をすればルリちゃんが安心する訳がないって分かっているのに…。

すると翅を羽ばたかせて私の顔の前に飛んできたルリちゃんは目いっぱい両手を広げて私の両の頬を挟んできた。

「凜。無理はしないで、なんて言いましたけど、頑張ってる凜を見て本当に胸が打たれました。手が痛そうなほど肉刺だらけになっても薙刀を振ってるのを見て感心していました。それだけに今は凜に頑張ってもらいたい。勝って欲しいです！」

「ルリちゃん……」

ルリちゃんの強くとても気持ちのこもった言葉。それは私の心に響きさつきまでの弱弱い気持ち晴れたような気分だった。

手にしていた薙刀をギュッと握り直し、うん、と力強く頷く。それを見たルリちゃんが微笑みながら夏美さんの方へと離れていく。

きっと私が勝つなんて無理かもしれない。

『かもしれない』なんて言ってもらえないほどかもしれない。けどやれるだけの事をしたのに何もしないのは絶対にダメだ。

他の誰でもない、自分の為に。

私は向き直り、正面の美央ちゃんを見つめ返した。

俺は義雄さんたちと神社に残り、今は境内にいた。

神社とはいえ、勝手の知っている自分の家だ。特別見るところも何もする事も無くてどうしようかと考えていた。すると義雄さんが家の物置に置いてあった昔使っていた木刀を持って俺のところに来ると、暇つぶしでもするかい？、との申し出に俺は快く承諾する。

義雄さんは本来退魔士の商売道具である武器をメンテナンスしたり修理したりするのが仕事だ。でも、武器の事やその使い方を知らなければ手を加えることなんてできないよ、なんて微笑みながら言っていたっけ。

その言葉どおり、義雄さんはいろんな武術に精通している。中でも剣術は相当なもの。小さい頃は父さんや兄さんがいなくなっただけから、内緒で俺の面倒を見てもらっていたほどだ。実力はそれなりと言っより普通の人から見ればかなりのモノだろう。

義太の奴はどうするのだろうと思っていると、ただ見ているだけだよ。男のクセに…。

あいつは良いんだ、と言いながら俺の肩を叩いて微笑む義雄さん。まあそう言うのなら俺は義雄さんから離れて向かい合って立つ。人除けの札によって誰も邪魔の入らない境内ならではの雰囲気がある。こういう事をするのに合っている気がする。多分不謹慎だけど…。

開始の合図も無いまま義雄さんは微笑を絶やさずに正眼の構えをして俺を見る。ピクリとも動かずに俺を見据えるその姿は、いつでもこちらから攻撃を仕掛けられるはずなのに隙が見つからない。

俺の方も一つ息を吐くと木刀を顔の右側の方に寄せ、左足を前に出して構える八双の構えをする。簡単に説明すると左足のつま先を若干相手に向けているというのを抜きにすれば、野球の右打者が構えているのに近い。

俺はそのままの構えで摺り足をしながらじりじりと間合いを詰め

る。その動きを見ながらも動こうとしない義雄さん。
ここで安易には動けない。今動けばきつと駄目なのは明白だ。
…
と黙っていたのだが、

「湧樹はあの子の事、心配じゃないのかい？」

「へ？」

突然何を言い出すのかと思えば、なんて考えた瞬間、一気に間合
いを詰めてきて俺の頭部を狙っていきなり木刀を振り落とし襲い掛
かってくる。俺は慌てて木刀を横にし、ガンつと木と木がぶつかる
音を響かせながら防ぐ。八双の構えなら防ぎきれると踏んでの攻撃
だろう。義雄さんらしくて物言いをする気はない。

ならばと俺は近づいてきてくれたのをチャンスと見て、木刀を右
に大きく払いながら左肩を義雄さんの体に当てていく。
体が後ろに下がったところで、俺はそのまま右手だけで木刀を持
って回転し、足を狙って横薙ぎに木刀を振るう。

だがそこに足は無く、義雄さんは飛び上がってバク宙を決めてい
た。着地するやいなや、すぐさま俺に突きを放ってくる。顔めがけ
で飛んでくるそれを、俺は慌てずに木刀をあてて軌道を逸らして距
離を置いた。

「ははは、なかなかやるようになったね。小さいときは最初の一撃
でやられてたのに」

「そんな事言っ…。ホントに義雄さんって無茶苦茶だよ。そんな
の鍛冶屋が出来るような動きじゃないし」

「万能鍛冶屋だからね。コレぐらいは出来なくちゃ」

答えになつて無い。まあ何をされても驚かないけど。

「それで、さつき聞いた事なんだけど、ホントの所、あの子とはどうなんだい？」

「どうつて…」

なんとなく聞きたい事は分かるけど、残念ながら期待に副えるような答えは出来ないだろう。

「義雄さんが思つてるような間柄ではないよ。言うならばただの師弟関係。だって俺を男性として見たことなんて無いと思うから、アイツ」

「そつか。それは残念だ」

「残念つて、どういう意味？」

それは、と言つて一つ息を吐き、真面目な顔で俺を見る義雄さん。そして力任せに振り下ろしてくる木刀。ガンと音を立てながら、鏝迫り合いのような形となつて義雄さんは俺を見てくる。

「…美央は絶対やらないからな」

こわ…。感情をすごく込めた言葉を放つ義雄さんの眼は、その言葉どおり本気だった。

仕事も出来て夫婦仲もよくて言う事なしのこの人には、残念な一つの大きな問題があつた。

それはあまりにも娘を大事にし過ぎていることだ。

義太に聞いた話だと、美央が小さい頃に自分の家に何人かの友達

を連れてきたとき、その中には男の子もいたのだが、その子だけ義雄さんが家にかかるのを止めようとしたとの事だ。その時は間に入った美琴さんが怒って渋々了承したらしいが…。

「…いい加減、子離れしないと逆に嫌われますよ？ 美央だっていい歳なんだし」

「それでも自分の子供なんだ。可愛がっても良いじゃないか」

そう言つてすぐに後ろに離れ、コツコツと木刀で地面を叩いている。

その可愛がり方が問題だと言うのに、分かってないのだろうか。美央だつていろいろ自分で自分の事を決めていく時期だ。親がどうこう言つて干渉するのもやめていく方が良いと俺は思う。道を正してやるのは確かに親の役目だと思うが、生き方を決めるのは自分。たとえ自分の子だとしても、将来や色恋事だつて他人が干渉する権利は無い。

まあ、そう家族でもない俺が言うのもなんだが…。

「というかこつちの事はどうだつていい。今僕が聞いているのは、あの凜つて子の事。今度は別に変な意味あいは無いんだが、君から見えてあの子はどう思う？ それなりに出来る子なのか？」

そう言われて俺は凜の事を考えた。確かにこの短い期間で思ったよりも成果はあった。ただ考えなきゃいけないのは相手は母さんが指導した美央だ。美央は昔から同い年の子達よりもずば抜けて運動神経は良いほうだと聞いていた。そんな美央が相手では、かなり分が悪いと言つていい。今の実力が未知数なだけあつて余計に分が悪い。

「どうだろうね。言った事はすぐに出来ちゃうけど、元々の運動神経が悪い分、動きにスピードが無い。それがどれだけ流れの中で上手く動いて補えるか、そこがポイントだと思う」

「運動神経が悪いのに言われた事はすぐに出来る…。なんかひどく矛盾してるようにも思えるけど、それにしても変な子だね。運動神経が悪ければそれなりの道があると言うのに、自分から危ない橋を渡ろうとしているようなものだ。面白いね」

本当に義雄さんの言うとおりだ。なにもアイツはこんな事しないでいいんだ。今までどおり普通にしておいて平和に暮らしていれば、妖精と共に少しの間過ごす事を抜きにすれば今までどおりの生活が出来るんだ。本来だったら退魔士機関の置かれてある外務省に届出して無理矢理にでも退魔士として登録されるかもしれないというのに。

俺たちの措置は寛大すぎるほどのものだ。感謝されてもいいくらいかもしれない。

それも夏美さんのおかげだ。俺は仕方が無いけど本来の手筈でいこうとした。だがそこで夏美さんが待ったをかけたのだ。

『わざわざ届出なんて出さなくていいわ。この子が望む未来を尊重した方が、私はいいと思う』

何を思っただかは分からなかったが、今考えれば思う所があったんだろう。

凜には普通の生活があつて、そして家族がいる。そんな環境にいる凜の事を考えて、夏美さんがした措置だろう。どうなんだろうと思っただが夏美さんらしいと言えば夏美さんらしい。

「そこん所は後々言い聞かせたりしないとヤバイかな。夏美さんの思いを酌んであげたいし」

「ははは。いい奴だな、お前は」

義雄さんはそう言いながら笑っている。その顔を見ながら俺も笑っていた。

心の中ではどうしようかと考えているのだが…。

私は成瀬君とやっていた通り、右半身を前に縦に横にと薙刀を振るっていく。

「はっ！」

成瀬君に言われた事の一つ、『やられる前にやれ』。相手に攻撃させる隙を与えないのが目的だ。

だけど何度も私から攻撃を仕掛けていくのだが、美央さんは両の手に持つ小太刀ぐらいの大きさの竹刀を使い、簡単に私の攻撃を往なしていく。まるで私の攻撃が美央さんに届く気配が無い。美央さんの周りに球体があるように一定の距離で私の攻撃が防がれてしまふ。

ただ美央さんは攻撃を仕掛けてくる様子は無く、私の事をずっと観察しているようで、冷汗が頬を伝っていく。

長い事ずっと攻撃をしていたので、薙刀を振るう事がきつくなつた。私は一旦距離を置く。

肩で息をしながら目の前に立っている美央さんを見る。美央さん

の方はほとんど疲れていないように見える。

「…それで終わりですか？ 凜さん」

そう言っただけで怪しく微笑む美央さん。その顔を見て私はビクツとしてしまう。

すると美央さんは左手の竹刀を私のほうに向け腰を少し落として構え、キツと表情が切り替わった。

「…それなら、こちらから行かせてもらいます」

言い終わるやいなや、私に向かって迫ってくる美央さん。私はギョツと薙刀を握り直して構える。

後ろになつていた右の手の竹刀を振り上げてきた。横にして振り下ろしてきた竹刀を受け止めるのだけど、

「…まだまだ」

今度は横から振るってくる竹刀。飛び退いて避けるのだけど、次から次にどんどん攻撃を仕掛けてくる。小さな武器、しかも両手持ちと言う事で連続した攻撃が速くて防ぐのは難しい。いろんな事を想定していた成瀬君が言うには、手数が多い敵に対しては攻撃を受けて防ぐより避けた方が得策との事だった。

教え通りに私は後ろに飛んで、何とか美央さんの攻撃を避けていく。

避ける、避ける、受ける、避ける！

まったく言っていないほどこちらの攻撃の機会が訪れず、私は防戦一方。どんどん後ろに下がっていく。

「…それで大丈夫と思っていますか？」

突然美央さんに話しかけられ、何の事なんだろうと思っていると、その言葉の意味がすぐに分かった。

私の背中に、トン、と軽い衝撃を受ける。そして動く事が出来なくなつた。

…えっ？

何が起つたのか分からず頭が混乱したけど、すぐにその理由が分かった。背中に感じる硬い感触はこの道場の壁だった。いつも屋外で練習していた為に、道場の動ける範囲に限りがある事を考えていなかった。屋内で動くと言つのはこんなにも違うなんて思わなかつたから。

でも考えている時間は無かつた。もう目の前には襲い掛かつてくる美央さんがいるから。

振り下ろす、そして突く。選択肢はあるけど私の攻撃速度と美央さんの攻撃速度では絶対私が負けるに決まつてる。

なら被害を最小限にするためにどうすればいいか。だけど何故か私は考える間もなく体が行動に移っていた。

意を決して、両手で縦に持ちながら美央さんの方に飛び込んでいく。一瞬美央さんが、え？、という顔をした。でも振るう竹刀を止める気配は無い。

私の頭に浮かんだのは、私と稽古をしていた時に見た成瀬君の動き。

薙刀を持つ左手を下から持ち上げるように動かし、石突側の素扱部で美央さんの攻撃を防ぐ。意表を突いたのか、動きが止まった美央さんにそのまま上から力いっぱい薙刀を振り下ろした。

でも私の動きが遅かつたのか、その攻撃は美央さんに当たること

なく空を切り、道場の床を力いっぱい叩いただけとなる。

「…見くびっていたようですね。あなたの事を」

私は声のする方に反応する間もなく、右の脇腹に衝撃を受けた。

境内に響き渡るのは木刀同士のとぶつかる音。もうどれだけの時間続けているだろうか。有効打はお互いにまだ無いが、内容としては一方的だ。

「ほら、もういっちょっ!」

「ッ!？」

またもかすめてくる義雄さんの攻撃。俺はなんとかその攻撃を避けていく。

今までの流れとしては俺の攻撃はことごとく防がれてしまうが、義雄さんの攻撃は腕や太腿、首の辺りに切先が当たっていた。

すでに間合いを制されてしまっているのが原因だ。最初の方で見せていた構えとは違い、片手で持って木刀を振るいながらあらゆる角度から攻撃を仕掛けてくる。片手だと言うのに繰り出してくるその義雄さんの攻撃は、一撃一撃がしつかりとした威力を持っている。しかもその攻撃に決まった間合いなど無い。迂闊に近づけば餌食にされてしまうし、十分離れていると勘ぐって油断すればいつの間にかその間合いを詰められて攻撃されてしまう。そして対応でき始めたかと思えば持つ手をスイッチして流れを変えてくる。

「ホント、仕事間違ってるんじゃない？ 義雄、さんっ」

とはいえ、やはり片手で持てば長い得物は持っているのが難しい。振るってきた木刀を目掛け、俺も叫びながら木刀を振るう。

その木刀同士がぶつかり合うと、義雄さんが持っていた木刀は宙へと弾かれた。両手で持ったものと片手で持ったものの戦いだ。当

然と言えば当然だろう。そして素手になった義雄さんを見ると、それでも尚俺に組みかかろうとしてきたので、木刀の先を義雄さんの顔面に向けて突き出す。そこでようやく義雄さんは力を抜き脱力する。

抜かりが無いことだ。と言うよりも、俺に対して心構えが出来ているかを試したのかもしれない。

「やられたね、こりゃ」

「これで義雄さんの木刀弾けてなかったら、俺この仕事続け」

言い終わる前に、ゴンツ、と鈍い音が響く。俺と義雄さんはそっちの方をすぐに見た。

そこには倒れている義太の姿と転がっている木刀があった。

美緒さんの前で蹲る凜。脇腹を手で押さえ痛そうにしている。痛みは結構なものらしく、なかなか立てないでいる。

するとそれを見ながらゆっくりと凜に近づいていき、目の前で見下ろす美央さん。それを見て、凜はなんとか転がっていた雑刀を握りなおして美緒さんを見上げる。

不思議な事に美緒さんはいくらだって攻撃は出来たはずだったが、攻撃はせず、今も雑刀を向けられていると言うのに凜を見つめている。

しばらくそうして膠着して、ようやく切っ先を向けた凜に何をす

るでもなく美緒さんはただ喋りかける。

「…いいですか？ 凜さん」

凜はその言葉に返事をする事も、頷くことさえせずにただ美緒さんの顔を見つめる。

「…私が手を緩めずに攻撃をしていたら、凜さんは今、どうなっていましたか？」

美緒さんの言葉に凜は息を飲むような仕草をして、小さな声で返す。

「何も出来ずに…、ここで倒れてた……」

「…それだけじゃありません。…守る者がいたならば、あなたのそばでその者が同じ事になっていた。…あなたが足枷になって、それは確実なものになってです」

言い終わるやいなや美緒さんは、薙刀を持った手首のあたりを素早く隙を突くように叩いてきた。痛っ、と言いながら凜は持っていた手を放し、薙刀は凜の手から落ちていった。

「…今も構えようとするだけで、注意が私の話の方についてしまい、敵である私の動きを見ようとしていなかった。…私が不意を付いたとは言え、戦いにおいてそれはあるまじき行為です」

そこまで言われ凜は手首を押さえながら涙目になっていく。それを見てしゃがんで片方の手の竹刀を置く美緒さん。

「…だめです。…泣いている暇は無いですよ。…そんな事で悪霊や
そういった類たぐいのモノが手を緩める事は無いんですから」

美緒さんはそう言いながら、床に転がる薙刀を拾って凧の手に渡す。そして立ち上がり、始めに向き合ったあたりまで戻っていく。

凧は痛そうにしながらも手渡された薙刀を握り直してゆっくりと立ち上がった。そしてもう一度仕切りなおしのようにさっきまでと同じように打ち合いが始まる。

何度となく美緒さんのほうに凧を倒すチャンスはあった。今のだって何も言わずに両の手に持つ竹刀で凧の事を叩けば良いだけで…
もしかして……、

「凧の事を、試してるんですか？」

目を瞑って試合の状況を音で判断していたのであるうづ巴さんは、
私の言葉を聞いて微笑んだ。

「夏美さん、私はこの戦いにおいて勝ち負けは必要ないと思っています。技術云々を身につける事は努力すれば出来ます。でもそれよりもこれから先、あの子は自分が選んだ生き方で、ちゃんと生きていけるかを判断してあげたいんです」

だから湧樹を連れて来ないでこうやって凧を戦わせたんだろうか。多分湧樹に文句を言われないうちに。湧樹のことだからそんな事を知ればどうなるのか、巴さんは分かっているんだろう。

でも疑問はある。それは巴さんが言った言葉の判断基準だ。

「その判断基準は強さで、ではないんですか？」

「強くなる事、確かにそれは大切です。ですがそれだけじゃ…。な

ら夏美さん、一つ問題を出します。『競技者』と『武道家』の大きな違いはなんだか分かりますか？」

「違い、ですか……」

突然不思議な質問をされ、私は戸惑ってしまふ。

改めて『競技者』と『武道家』の違いを考えてみる。けどよく分からない。人によつての呼び方の違いじゃないんだらうか。

「同じ武道をやるにしても、強くなるだけでは『競技者』と呼ばれる者になってしまいます。私の考えではそれではこの先生きていけない。生きる為には『武道家』のような『心』を持つのが大切なんだと思っています。あなたや退魔士が相手と戦った時に持つ心とほとんど一緒に、難しい事じゃないですが、簡単ではないかもしれませんけどね」

そういつてまた微笑む巴さん。私は目の前の戦況を見ながら思案する。

『競技者』と『武道家』の違いである『心』。それは一体なんなのか。自分自身こういう仕事をしているのだというのに、それが判らないのは少し不思議だ。こんな立派な神社の方からの問答だ。とんちでも出されているのだらうかとも思つてしまふ。

そんな事をしている間も凜と美緒さんの試合は進んでいく。やはり今までとそれ程戦況に変わりはないが、美緒さんはさっきまでの余裕過ぎるぐらいに戦っていたスタイルをやめていて、実力差そのままに試合を有利に進めていつている。防戦一方、と言うよりは何も出来ないでいる凜。なんとか美緒さんの攻撃を防いでいるものの、一瞬の隙を見つけられてはガラ空きになつている体の箇所へ攻撃されてしまつていた。今もガラ空きになつた脛すねに打ち込まれてしまふ凜。眉間にしわを寄せて痛そうにする。そのまままた薙刀を落

とすのかと思った。

「だけど凧はそうしなかった。」

凧は薙刀を、痛みを堪えるように歯を食いしばって握る。そして必死の思いで薙刀を振っていく。脛の痛みで上手く踏ん張れないのか、振るっていき力ないその攻撃は美緒さんには当たらず、ただ空を切るばかり。竹刀で受けずに大きな動きもなく避けていく美緒さんは、さながら『煙』のようだ。

「斬っても斬っても斬れない煙のような相手と戦うのは辛いでしょうね……」

思っていた事を言い当てられたのかと思い、ビククリしてしまう。

「あの…、まだ続けるんですか？ その『心』というのを見極めるまでは」

「ええ。その為のこの場ですから。…とは言っても、凧さんの体力が続く限りです。今も何とか立ってはいるようですが、長くは続きそうも無いですね。元々の体力の無さだけじゃなくてダメージもあります。凧さんの息遣いからして限界は近いです」

巴さんの言うとおり、私から見ても凧の状態は限界に近い。この様子だと巴さんの言う『心』というのを見極められずに終わってしまういそうだ。

実力差からして当然の結果だったんだ。凧には悲観しないでほしい。短い間でも少しだけでも戦える事は証明出来たのだ。これから先、凧にその気があればいくらだって強くなる事は出来る。

だがその時、凧の敗戦を予想をしながら眺めていると、突然大きな声が響き渡る。

「リーン！ 頑張ってくださいー！！」

声の主は、その大きな声とは不釣り合いな小さな体のルリだった。

もう限界だった。腕も脚も体中全てに鉛でも着けているように重く感じた。

その時、大きく響いた声は道場を響き渡る。私の疲れきった頭にもよく通る声だった。見ると必死に叫んでいるルリちゃんの姿が。

「負けないでください！ 凜なら出来ます！」

誰がどう見てもそれは無理だと思う。自分が今の状況を客観的に見ればそれが無理な事だって分かっている。

でもそんな事お構いなしにルリちゃんは私の事を信じて叫び続け見守っている。

思わず笑ってしまった。体は辛いのにそんな事どうでも良いくらいにルリちゃんの思いが嬉しかった。雑刀を握り締め直し、目の前に立っている美緒さんを見つめる。

すると私の顔を見てニコリと笑った。

「…良いお友達ですね？」

「うん…、ホントに」

それなら私はそのルリちゃんの思いに応えなくちゃいけない。勝ち負けじゃなく、私の全ての力を使って出来る限りの結果でだ。

握り締める手に力を込めて、薙刀を振っていく。正直に言えば腕に力なんてほとんど入らなくなってる足だってもう重くて重くて動きたくない。自分でも今こうして動いているのが不思議なくらいだ。でもルリちゃんが見てるんだ。頼りない姿は見せられない。頑張らなくちゃいけないんだ。

でもそんな思いも虚しく、薙刀はただ空を切るだけ。まるで美緒さんまで空気になったかのように私の攻撃は当たらない。

挫けそう…。でも頑張る。

もうやめたい…。いや、頑張る。

ブンブンと無我夢中で私は薙刀を振るい続けた。当たらなくても知るもんか。

何の考えもなく薙刀を振っていた私。しばらく続けていた時、ふと成瀬君が言っていた事を思い出す。そして私は薙刀を振るうのをやめ、一旦距離を置いて深呼吸をして落ち着いた。美緒さんは不思議にもそんな私に攻撃をしてくる事はせず、私に時間をくれた。

思い出すのは成瀬君に試合形式の練習をしていた時だ。こっちの攻撃を全部防がれて、ヤケ気味に攻撃している私を見て、溜息をつきながら薙刀で私は足を払われ倒されてしまった。そしてその時私を見て言ってきた。

『おい、落ち着け。何も考えずに飛び込めば結局負ける。どんな相手だって隙や弱点はあるし、何かで潰け込めるクセだってある。それがなんなのかを見つける事に集中しろ。そうすれば活路は見出せる』

活路…。成瀬君を相手にしていた時もそうだけど、とても美緒さん相手に見つけられる気がしない。…いやでも、とにかく考えなしはダメだと言っていた。考えるだけ考えよう。

まずは私にあつて美緒さんに無いもの。中々見つけられないでいると、私の前に構えて持つている薙刀と美緒さんが持つている両の手の竹刀が目に入る。それを見て有利な点になるかは分からないけど、一つだけ挙げられるモノがあつた。

それは『間合い』が持てる事。成瀬君もそれが薙刀の長所の一つだと言つていた。

ただ問題はその『間合い』を制する事が出来ないのだ。私が仕掛けると狙つたように私の攻撃を避けながら一気に間合いを詰められてやられてしまう。美緒さんが持つてる武器からしての戦術であるスピードを活かしてのカウンターを仕掛けてくる戦い方には薙刀を使つての戦い方には不利なんだろうか。

いや、それならそれなりの戦い方を考えれば良いんだ。きっとあるはずだ。例えば美緒さんに仕掛けさせる間もあげずに一撃で倒せるような…。

『間合い』、『カウンター』、そして『一撃』。その3つの単語を頭に入れて考える。

その時、

「…あつ」

自分でも間抜けだと思つうほどアホみたいな声を出してしまつた。

巴さんや夏美さん、ルリちゃんだけじゃなく向き合つてた美緒さんにまでキョトンとした顔をされてしまう。

私は、失礼しました、と苦笑いして言いながら薙刀を握りなおす。握る位置を元の位置から石突の方に少しずらし、刀のような持ち方にする。

ただ持つ場所から先端までの距離が長くなつた分、先の方に重心がかかり持ちにくくなつた。私はそれを補う為に頭の上に持ち上げるように構える。もはや薙刀の構えではない。成瀬君が見れば怒つていたかもしれない。

でもこれで私の策の準備が整った。通用するかは分からないけど唯一の活路を見つけたんだ。体力ももう限界だ。これに賭けるしかない。

大きく息を吸う。そして、

「桜井凜、行きます……」

第七章 『Aufgeben』【三キロ】 6 (前書き)

Her name is . . .
She was a ordinary love , marr
iage was a very common .
But only a money was different , sh
e was a magician is .

「…その構えは」

呟きながら私は目の前の相手である凧さんを見つめた。長い薙刀を頭上に振り上げた状態で構えている。普通に持っていても長い薙刀を刀のような持ち方になっているので余計に長く見える。ただ構える凧さんは息が荒い。もう立っているのも限界なんでしょう。

今こちらから攻撃を仕掛ければ、凧さんの状態ならきつと勝てるはず。だけど心配な事が一つある。

それは今の凧さんの構えから繰り出されるであろう攻撃。不用意に近づけば、きつと体の限界関係なく振り下ろしてくる。

凧さんが取ったその構えを見て、ただの上段の構えと侮る事は出来ない。あの長さだ。こつちが近づく前にあつちが攻撃を仕掛けてくれば間合いの長さだけでなく、遠心力と重みを生かしてかなりの速さで振り落とされる。例えば一つ例に挙げるなら『雷刀』と呼ばれる技がある。柳生新陰流における一撃必殺の奥義、その振り下ろす威力は、甲冑をも一緒に斬ってしまうほどだと巴様に聞いた事がある。

凧さんがそれ程の力で攻撃してくるわけではないけど間合いを制することの出来る技。この凧さんの構えも偶然なんだろうがそんな雰囲気を感じ取れた。

でもそれさえ掻い潜ればこちらのものと言ってもいいはず。しっかりとその攻撃を避ける事だけを前提に攻撃を仕掛ければ私の勝ちだ。

「…参ります、凧さん」

「はい」

私の言葉に素直に返事をしてくる凜さん。なんだか力が抜けてしまふ。私は気を取り直す為、一度深呼吸をした。

勝負はこの一連の流れで決まる。凜さんの攻撃が私に届くか、私
がそれを避けて凜さんに攻撃をして決まるかの2択。こんな事で変
に気は抜けない。どんな相手に対してもそれは失礼に値する。

私は3回ほど深呼吸をして静かに息を止める。そして姿勢を低く
し、その刹那、私大きく床を蹴って凜さんへ向かっていった。

私にはたった一度のチャンスしかない。この一撃に全てが懸かっ
ている。

心臓は今まで感じたことが無いほど早い鼓動を打っている。呼吸
がし辛い。それでも何とか大きく息を吸ってゆつくりと吐いてい
く。集中しているのかどうなのかは分からないけど、気味が悪いぐ
らいに目の前の美緒さんの動きに集中している。

「…参ります、凜さん」

「はい…」

どうやって動いてくるのだろう。私が返事をする、美緒さんは
大きく一度息を吸い、吐き出していく。

深呼吸を始めた美緒さんを見つめる私は薙刀を持つ手に力が入っ
ている。攻撃を仕掛けてくるのは目に見えて分かり、私は美緒さん

の動き一つ一つ集中して見ていた。

美緒さんの標的、それは私だ。攻撃は私にしか向かっては来ない。それだけは確かな事。それ以外のことはまず考えなくて良い。

そして私がすべき事、それは美緒さんに私の攻撃を当てる事。当たらなくちゃ倒す事なんて出来ない。兎に角『一撃』、それだけでも美緒さんに当てるんだ。

私は美緒さんに合わせるように深呼吸をする。その時、

・・・次の呼吸が終わった時に…、来る……。

そんな直感が頭を過ぎった。

私は攻撃に備えて左足をゆっくりと前に出す。その動作を見ていたのか、美緒さんも同じような動作で右足を出してくる。

持っている武器はまるで違うものなのに、まるで鏡を見ているかのような錯覚をするほど同じタイミングでその動作をする。その事が何よりも直感を裏付けている気がした。

2回目の深呼吸も終わり、そして間もなく大きく息を吸う美緒さん。そして息を吐き終わると小さく息を吸ってすぐに止める。

・・・来る！

そう思うやいなや、体勢を低くした美緒さんが地を蹴る。私は渾身の力と重力に任せ、大きく薙刀を振り落とした。

振り落とされた薙刀は、今までで1番の速さと正確さに思えた。だけどその一撃は届かなかった。

それを象徴するように響く床を叩く音。その直後、私の眼は右方向に美緒さんの姿を捉えていた。

僕の目の前には竹で出来た箒を持って女性は仁王立ちをしていた。

「モイナさん、お久しぶりです。お元気でしたか？」

僕は何事もなかったように話しかけた。でもそれは逆効果を生んだようで思い切り持つ床を突いて怒りを表した。

「もうそんな名前忘れてただけ……。もうその名は捨てただけから二度と叫ばない事ね」

そう言っただけで箒の掃く部分を向けながら近づいてくるモイナ。その顔は怒りが現れていた。それを見て一緒にいたアンナは怒りを露わにする。

「な、ウィン様に何するのよ！」

「あ、アンナ！」

僕は制しようとしたが時すでに遅かった。叫びながらアンナから繰り出される不意打ちのような前蹴りを、いとも容易く箒で受け流すモイナ。そしてクルリと回しながらアンナの喉元に触れるか触れないかの場所に箒の柄の先が向けられていた。

えっ、といった感じでアンナが動くのを止めた所を見逃さず、モイナはアンナのおでこにもう一方の手でデコピンを当てる。当てると言っ言葉が合っているのか分からないほどの音がしましたが……。

「ワイン、躰はちゃんとしておきなさい。これで許してあげるけど、いくらあなたのパートナーでも次は無いからね」

床に転がって痛みを体全体で表現しているアンナを無視するように僕の方を見てそう言い放ったモイナは、一つ溜息をつく。

「そつえばワイン、なんで彼方がこんな所にいるの？」

「旅の途中で暇でしたからここの者に留守番を申し出ましてね。この主は明日には帰ってくると思いますよ」

すると僕の返事を聞くと、わかってるわ、と言いながら事務所のソファーに腰を下ろした。

こつちに来てから知り合いに会うなんて思っていなかった。しかもこれほどの有名人とは…。

「どうですか、今の生活は？ あの有名な『黄金の夜明け』から辞めた方でしたからね。あなたのその後を気にかけている者が僕の所にも何人もいましたよ」

「そんな事憶えていないわ。私はもう関係ないの。どう辞めてようがあなたには関係ないでしょ」

それもそうですね、と言いながら、僕は倒れているアンナを抱き起こした。アンナは、すみません、と言いながらおでこを押さえている。余程痛かったようだ。

でもこのモイナの辞め方は、そんな言葉で終わらせられるほど軽いものじゃない。

それまで対立した魔術師たちを薙ぎ倒してきた最強の魔術師だった。ある者は大量の黒猫が家に侵入されてボロボロになるまで爪で

裂かれ、モイナの拠点を急襲した者はトラより大きなネコに襲われ、大勢の部下の前で丸飲みにされたのだとか。

どちらも殺すには至らないが、魔術師としてはその2人の魔術師は死んだも同然だ。魔術師としての力量を圧倒的なまでに見せ付けられ、その者たちのプライドさえも噛み砕いてしまったのだから。

当の本人は「うるさかった」とか「睡眠を妨害された」と言っただけで片手間程度にやっているのだから余計だろう。

そんなモイナが『黄金の夜明け』を脱退すると宣言した時は、そのモイナが所属する『黄金の夜明け』内部だけでなく、ヨーロッパの方々（ほうぼう）にいる魔術師たちに衝撃を与えた。内部の者達は必死にモイナを説得したのだが聞き入れてもらえず最終手段として実力行使に出たらしい。けどその思いも虚しく、モイナを止めようとした者たちは皆倒されていったと聞く。

『Non riesco a smettere di amare!』

モイナは最後にそう高々と叫び、極東の地へと旅立ってしまったのだ。

その後は魔術師としての活動を行っておらず、脱退した目的どおりに幸せに暮らしているらしいというのを風の噂では聞いていた。

今実際に目の前にいるモイナはあちらにいた頃とは違い、ボサボサだった髪は絹のようにサラサラと伸びていて、洒落っ気の無かったモイナがしっかりと化粧をし、しかもエプロンまで着ている。僕の記憶にあるあの頃の魔術師としてのモイナの面影はまるで無い。

「しっかりと主婦をしているようですね。あなたに憧れていた人たちにその姿を見せたらどう思いますかね」

「そんな人たちにどう思われようと構わないわ。私にとって今の幸

せに変えられるものなんて、過去にはありはしないのだから。ううん、この先だつて現れるとは思えない。だからこそ私は今の幸せを壊したくないから話をしに来たのよ。『全能なる魔術師』と言われるあなたとこんな所で会う事になるなんて思ってたわ。まあ今日はあなたに話を聞きに来ただけだね」

これを見るまではね、と付け加え、エプロンのポケットから何かを取り出す。

それは夏美が凜さんと言う子に渡した僕の石、『ラピスラズリ』だつた。

「こんな純度の高い守り石なんて、あんたの造つてた物以外見た事が無いもの」

「僕の尊敬する魔術師であるモイナさんからそんな言葉を頂けるなんて光栄ですよ」

「心にも無い事を。あの頃からあなたは『神童』だのと呼ばれた逸材じゃない。気分屋の私なんかよりずっと将来を有望視されてたあなたが言つと、嫌味にしか聞こえないわ」

モイナは言い終わると石を置いて僕を睨みつけた。

「そないな事はどうでもええ。うちはその子の母親として、凜が今何をしてはるんかちゃんと知りたいから今日ここに来たんや。お世話になつとる人からちゃんと凜について話を聞こう思つて。今更この子を凜に身に付けられなくなつてしまつたし」

日本の京都の方で聞いた事があるような口調に変わっている。『方言』というやつだろうか。

そんな事を思っていると、モイナはもう一度ポケットに手を入れて何かを取り出す。それは黒一色と言つていいほどの猫のキーホルダーだった。するとそれをテーブルに置き、

「Amy^{アミー}」

するとモイナの声に反応するように座った格好をした猫の人形が突然立ち上がる。そしてその猫の人形が飛び上がると体が大きくなり普通の黒猫になった。そしてテーブルから座っているモイナの膝上に飛び移り、そこで体を丸くして寝転がる。

「この子をつけたら凜が気付かなくても他の人たちに気付かれてまう。うちは過去をほかす為に経歴まで全部修整したんや。そやしうちはこれからも凜だけじゃなく誰から見ても普通の主婦であり続けよ思とる」

「何ですか？」

「そりゃあうちはただの主婦で2人の娘の母親。それ以上でもそれ以外でもないんや。あの子が厄介な事なつとる言つても、影から助けるいうだけや」

そう言いながらモイナは猫を撫でる。猫は満足げにしながら撫でられ続けていた。

「そうそう。言つておくけど今のうちの名前は『モイナ』じゃなくて『美奈』、『桜井美奈』や」

「そうですか。良い名前ですね」

そやる、と言って笑う顔は、今の生活がどれだけ幸せなものか聞かなくてもわかるものだった。

第七楽章 『Aufgeben』【ミキリ】 6 (後書き)

彼女の名前は美奈。

彼女はごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。

でも唯一つ違っていたのは、彼女は『魔術師』だったのです。

読み上げ方は『奥さまは魔女』風でよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1454j/>

HOLY QNIGHT

2011年10月30日03時08分発行